

奈良文化財研究所研究報告 第3冊

古代東アジアの造瓦技術

2010

独立行政法人国立文化財機構

奈良文化財研究所

古代東アジアの造瓦技術

目 次

- 1 平瓦製作技法からみた
古代東アジア造瓦技術の流れ …………… 山崎 信二 …… 3
- 2 北朝の造瓦技術 …………… 朱 岩 石 …… 16
- 3 南朝瓦総論 …………… 賀 雲 翱 …… 41
- 4 中国における造瓦技術の変遷 …………… 佐川 正敏 …… 77
- 5 五～六世紀の新羅と周辺諸国の瓦 …………… 金 有 植 …… 96
- 6 飛鳥の瓦と百済の瓦 …………… 花谷 浩 ……121
- 7 朝鮮半島における造瓦技術の変遷 …………… 亀田 修一 ……134
- 8 総合討議 ……………169

附載	四～十世紀の中国の造瓦技術	191
1	北魏平城出土瓦の基礎的研究	劉俊喜 193
2	北魏洛陽城出土瓦の考古学的觀察	錢国祥 208 郭曉濤 肖淮雁
3	鄴城出土の北朝瓦の製作技法	朱岩石 228 何利群
4	揚州城における近年の出土瓦	李久海 245 劉 濤 王小迎
5	唐大明宮太液池出土瓦磚の基礎的研究	何歲利 270 龔国強 李春林
6	隋唐洛陽城出土瓦の製作技法	石自社 300 韓建華
7	六朝建康城の主要発掘調査成果	王志高 327
8	晋陽古城における近年の調査成果	常一民 336

例 言

- 1 本書は、独立行政法人国立文化財機構（2006年度までは独立行政法人文化財研究所）奈良文化財研究所が、2005年度から2008年度の4ヵ年にわたり、独立行政法人日本学術振興会から科学研究費補助金（基盤研究A）の交付を受けて実施した「古代東アジアにおける造瓦技術の変遷と伝播に関する研究」（課題番号 17202022、研究代表者：毛利光俊彦・山崎信二）の成果報告書である。
- 2 本書には、2009年3月14日（土）と15日（日）の両日、奈良文化財研究所平城宮跡資料館で開催した国際シンポジウム「古代東アジアにおける造瓦技術の変遷と伝播」の研究報告と総合討議を収録した。また、2008年3月26日（水）と27日（木）に中国社会科学院考古研究所と奈良文化財研究所が北京市で共同開催した国際学術検討会「四～十世紀の中国の造瓦技術（中国語原題：四至十世紀東亜制瓦技術研究）」の報告資料を翻訳し、附載として収録している。
- 3 本研究における研究組織は以下のとおりである（所属は当該時点）。

研究代表者	毛利光俊彦	（奈良文化財研究所）2005年度
	山崎 信二	（奈良文化財研究所）2006～2008年度
研究分担者または連携研究者		
	亀田 修一	（岡山理科大学）
	佐川 正敏	（東北学院大学）
	花谷 浩	（奈良文化財研究所）
	小澤 毅	（奈良文化財研究所）
	今井 晃樹	（奈良文化財研究所）
	林 正憲	（奈良文化財研究所）
	中川 あや	（奈良文化財研究所）
	高田 貫太	（奈良文化財研究所）
研究協力者	安 家 瑤	（中国社会科学院考古研究所）
	朱 岩 石	（中国社会科学院考古研究所）
	金 誠 龜	（韓国国立中央博物館）
	金 有 植	（韓国国立扶餘博物館）
	石田由紀子	（奈良文化財研究所）
- 4 拓影・実測図は、1/4の縮尺を原則とし、これと異なる場合は縮尺を明示した。
- 5 本書の編集は、小澤 毅と今井晃樹が担当し、中国語の翻訳は今井がおこなった。韓国語の翻訳は梁淙鉉氏（帝塚山大学大学院生）に依頼し、高田貫太が監修した。

6 本書の作成とシンポジウムの開催、また資料調査にさいしては、執筆者・報告者の方々をはじめ、下記の関係者や関係機関の多大なご協力を得た。篤く感謝の意を表したい。

王 巍氏 (中国社会科学院考古研究所)	瀋麗華氏 (中国社会科学院考古研究所)
王書敏氏 (鎮江博物館)	曹臣明氏 (大同市博物館)
王碧順氏 (南京大学)	ソウル大学校博物館 (韓国)
汪 勃氏 (中国社会科学院考古研究所)	大同市考古研究所 (中国)
大脇 潔氏	大同市博物館 (中国)
華国栄氏 (南京市博物館)	大明宮遺址保管所 (中国)
韓神大学校 (韓国)	田福 涼氏
姜元杓氏 (国立清州博物館)	中国社会科学院考古研究所 (中国)
金鍾萬氏 (国立扶餘博物館)	張学鋒氏 (南京大学)
金哲主氏 (国立扶餘文化財研究所)	鎮江博物館 (中国)
金容民氏 (国立扶餘文化財研究所)	田庸昊氏 (国立扶餘文化財研究所)
權五榮氏 (韓神大学校)	南京市博物館 (中国)
權相烈氏 (国立扶餘博物館)	南京大学文化与自然遺産研究所 (中国)
国立慶州博物館 (韓国)	南京博物院 (中国)
国立慶州文化財研究所 (韓国)	濱口典子氏
国立公州博物館 (韓国)	比嘉えりか氏
国立清州博物館 (韓国)	白雲翔氏 (中国社会科学院考古研究所)
国立中央博物館 (韓国)	閔丙勳氏 (国立清州博物館)
国立扶餘博物館 (韓国)	弥勒寺址遺物展示館 (韓国)
国立扶餘文化財研究所 (韓国)	向井佑介氏
国立文化財研究所 (韓国)	揚州市文物考古研究所 (中国)
崔聖愛氏 (国立公州博物館)	李圭勳氏 (国立扶餘文化財研究所)
佐々木聖子氏	李鮮馥氏 (ソウル大学校博物館)
志賀 崇氏	李南珪氏 (韓神大学校)
清水昭博氏	李炳鎬氏 (国立扶餘博物館)
申鍾國氏 (国立文化財研究所)	路 侃氏 (南京大学)
申昌秀氏 (国立公州博物館)	盧基煥氏 (弥勒寺址遺物展示館)

(五十音順、所属は当該時点)

古代東アジアの造瓦技術

1 平瓦製作技法からみた 古代東アジア造瓦技術の流れ

山崎 信二
(奈良文化財研究所)

A はじめに

平瓦の製作法については、1972年の佐原真の論考「平瓦桶巻作り⁽¹⁾」が最も基本的な論文であり、観察点を39項目あげている。古代東アジアにおける平瓦製作法の流れを概観してみると、「桶巻作り」以前の段階と以後の段階を区分することが必要であり、さらに佐原があげた項目のうち、桶が「無柄非開閉式桶」か「有柄開閉式桶」か（佐原1972）の視点、また粘土素材が「粘土板桶巻作り」か「粘土紐桶巻作り」か（佐原1972）の視点が重要である。

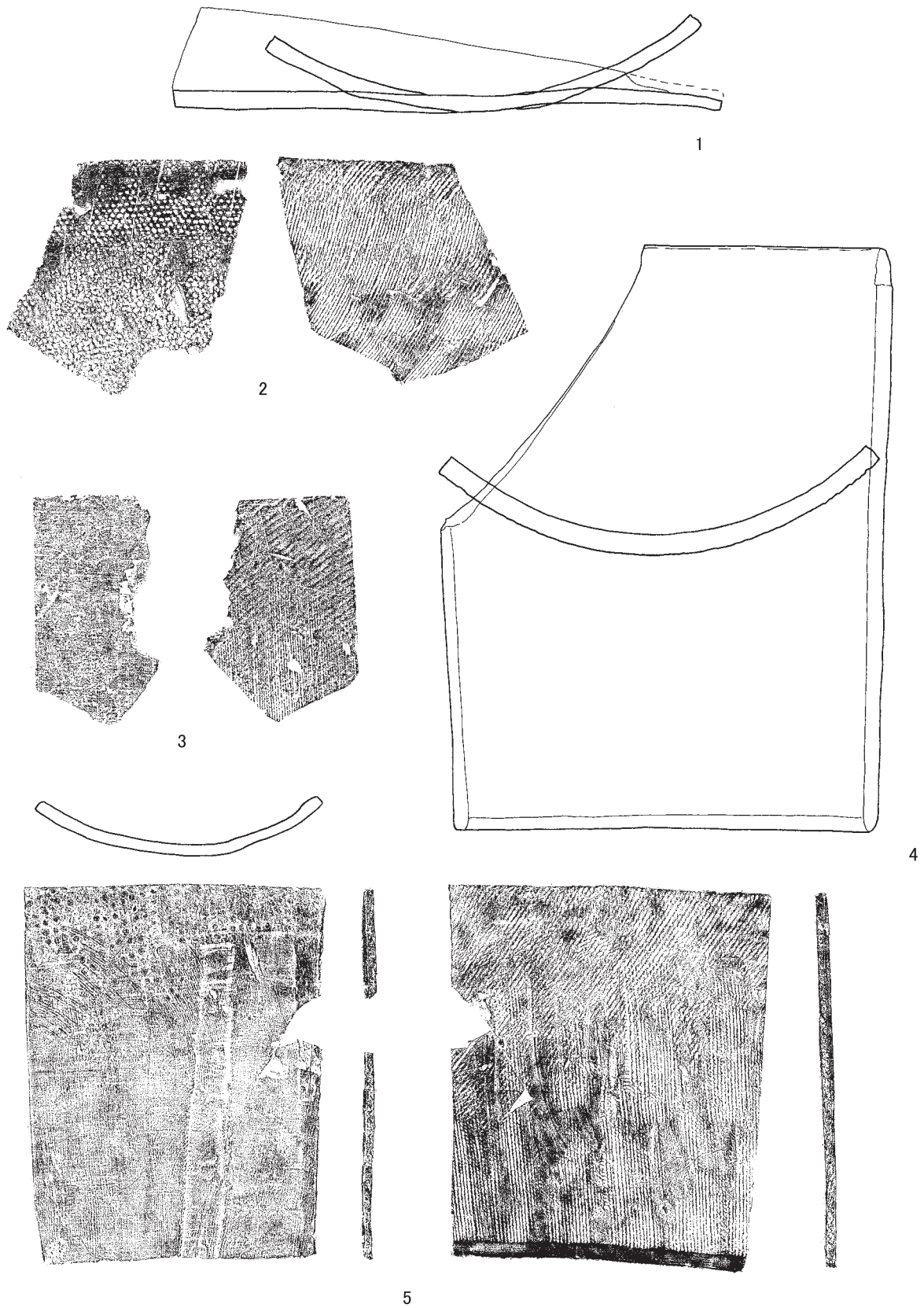
朝鮮半島の平瓦製作法について重要な指摘をした論考は、1993年の崔允先の「平瓦製作法の変遷に対する研究」であり⁽²⁾、彼はそこで、「模骨桶」（崔1993）＝「有柄開閉式桶」と「円筒桶」（崔1993）＝「無柄非開閉式桶」に分類し、三国時代の高句麗・百済地域は「模骨桶」であり、統一新羅時代以降は「円筒桶」を用いるようになること、新羅地域では初期の段階から「円筒桶」を用いていたと思われることを指摘した。

一方、佐川正敏は、中国の軒平瓦について、「粘土紐桶巻作り主体の可能性」をはやくから指摘していた⁽³⁾。

中国・朝鮮・日本の平瓦製作技法の相互関係を検討するには、「桶巻作り」以前の段階の平瓦（A型）、円筒桶で粘土紐桶巻作り平瓦（B型）、円筒桶で粘土板桶巻作り平瓦（C型）、模骨桶で粘土紐桶巻作り平瓦（D型）、模骨桶で粘土板桶巻作り平瓦（E型）の5分類が最も有効であると考えられる。

B 「桶巻作り」以前の段階の平瓦

中国の瓦は西周初期（前11世紀中葉～前10世紀中葉）に遡るが、その製作技法は泥状盤築技法による粘土円筒を縦に4分割⁽⁴⁾したものである。この泥状盤築技法（A型）から、「桶巻作り」平瓦へと変化した年代は、厳密には不明だが、櫟陽城出土の丸瓦部に布目痕を有する軒丸瓦の年代が漢王の櫟陽宮時代（前205～200）と推定される⁽⁵⁾ことから考えて、桶巻作り平瓦の出現も前漢初頭に遡るものとみられる。



第1図 秦・漢の平瓦 (1/6)

1~3 棧陽城 4 皇后陵東門跡

5 中国社会科学院考古研究所 洛陽工作隊展示瓦(後漢)

C 前漢と後漢の平瓦

第1図3は、漢王の櫟陽宮時代と考えられる櫟陽城出土⁽⁶⁾の平瓦であり、平瓦部の凹面に模骨痕はなく、円筒桶で粘土紐の合わせ目が認められる(B型)。第1図4は、漢杜陵園遺跡出土⁽⁷⁾の平瓦であるが、凸面は縄叩き、凹面は軽いナデ調整で布目をすり消す。凹面の状態をみると、模骨痕はないようである(B型かC型)。年代は、元康元年(紀元前65年)頃に位置づけられる。

第1図5は、中国社会科学院考古研究所洛陽工作隊の附属展示室に現在展示されている、後漢時代の平瓦(06SFX④:3の注記があるもの)である。平瓦部凹面に布目痕および糸切り痕が明瞭に残るが、杵板痕はない。すなわち、この平瓦は円筒桶で粘土板桶巻作り平瓦(C型)であることを明瞭に示している。ちなみに、これには、平瓦部広端側凹面に磨点紋の当て具痕が残り、平瓦部広端側凸面に縄叩きによる補足の叩き締めをおこなったことがわかる。

漢代の平瓦については、報告書の図面で平瓦凹面を表示したものがないので、自分の実見した範囲で言うしかないが、陝西省考古研究所調査の西安西渭水橋では、現地に散布する瓦に杵板痕のあるものはみられなかった⁽⁸⁾(1991年実見)。また、洛陽永寧寺下層と説明された後漢代の平瓦の破片では、杵板痕のあるものはみられなかったが、糸切り痕のあるものが認められた⁽⁹⁾(1995年実見)。

以上からすると、前漢初頭には「桶巻作り」の平瓦が出現しているが、前漢・後漢を通じて円筒桶(非開閉式)のようである。前漢代は円筒桶で粘土紐桶巻作り平瓦(B型)が主体、後漢代は円筒桶で粘土板桶巻作り平瓦(C型)が主体で、B型が混在するのではないかと思う。

D 五胡十六国時代併行期段階の平瓦

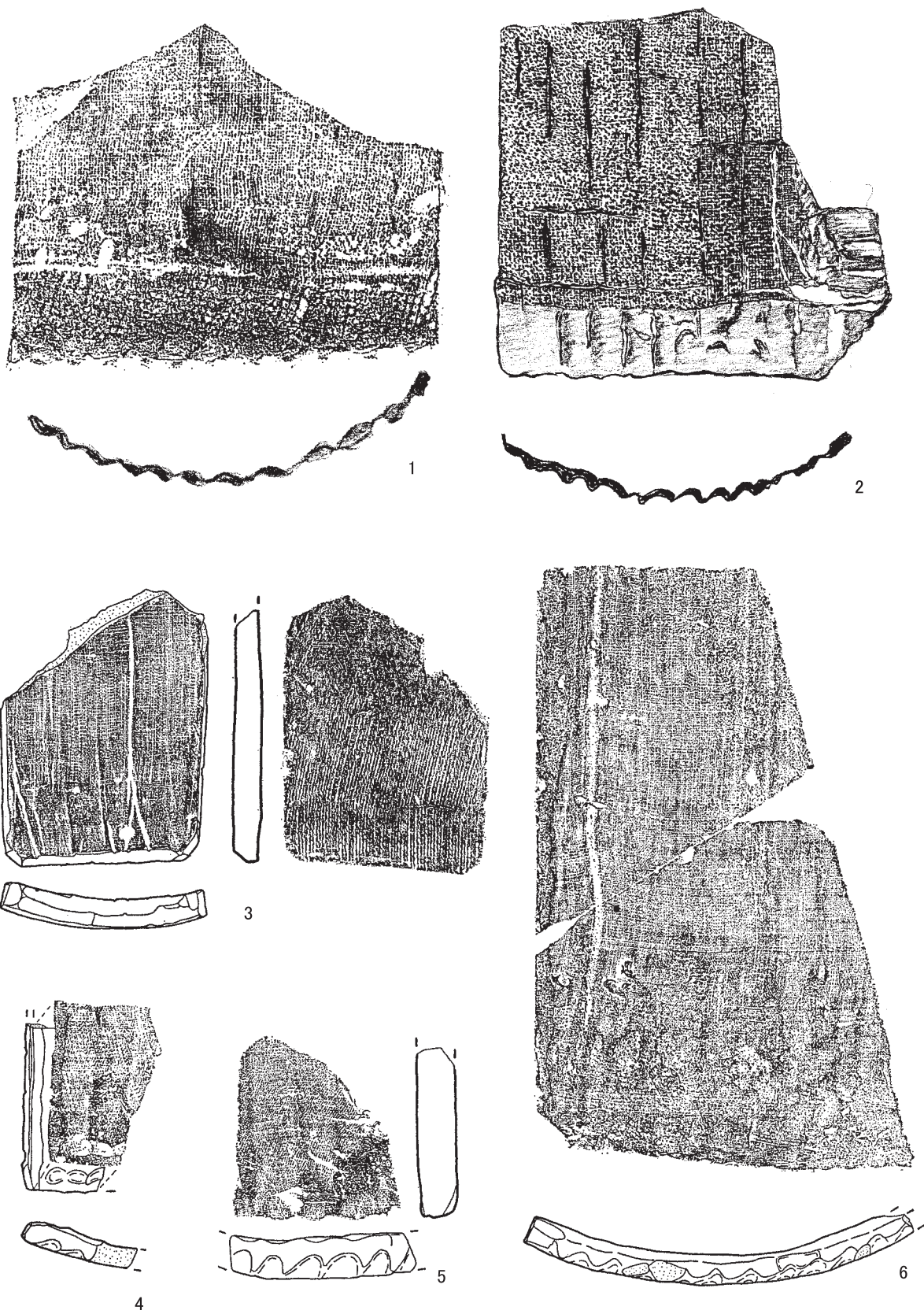
4世紀初めから5世紀中頃にかけての中国北部は、最大10にも及ぶ政権が並立する「五胡十六国時代」となるが、これと併行する時期は中国南部の東晋(318~420)前後であり、最近、この時代の瓦が、ほんの少しだが知られるようになってきた。また、朝鮮半島では高句麗初期の瓦や百濟漢城時代前半の瓦が、これと年代的に重複する時期にあたる。

(i) 五胡十六国時代の瓦

邯鄲の鄴北城の瓦には草花文軒丸瓦とでも言うべき瓦があつて、これと組む軒平瓦⁽¹⁰⁾は、一重の波状文で、凹面に杵板痕と粘土紐の接合痕を残す(第2図1・2)。模骨桶で粘土紐桶巻作り平瓦(D型)が、中国北部においては4世紀代に出現していることを示している。

(ii) 中国南朝初期の瓦

中国北部の「五胡十六国時代」に併行するのは、中国南朝の東晋(318~420)であるが、この時期の平瓦はまだよくわからない。



第2図 鄴北城と高句麗初期の平瓦 (1/4)

1・2 鄴北城 3 太王陵
 4・5 千秋塚 6 將軍塚 (1・2はスケッチ)

(iii) 高句麗初期の瓦

高句麗では、4世紀後半から5世紀初頭頃にかけて、集安地区に太王陵・將軍塚などの王陵級の大型積石塚が築造され、これらの墳墓に瓦が用いられた。谷豊信の「四、五世紀の高句麗の瓦に関する若干の考察」⁽¹¹⁾を参考にすると、太王陵は4世紀中頃から後半中葉、千秋塚は4世紀後半から末、將軍塚は5世紀初頭とされ、これらの墳墓で出土する平瓦は、模骨桶で粘土紐桶巻作り平瓦(D型)であることが明らかである(第2図3～6)。

(iv) 百濟漢城時代前半の瓦

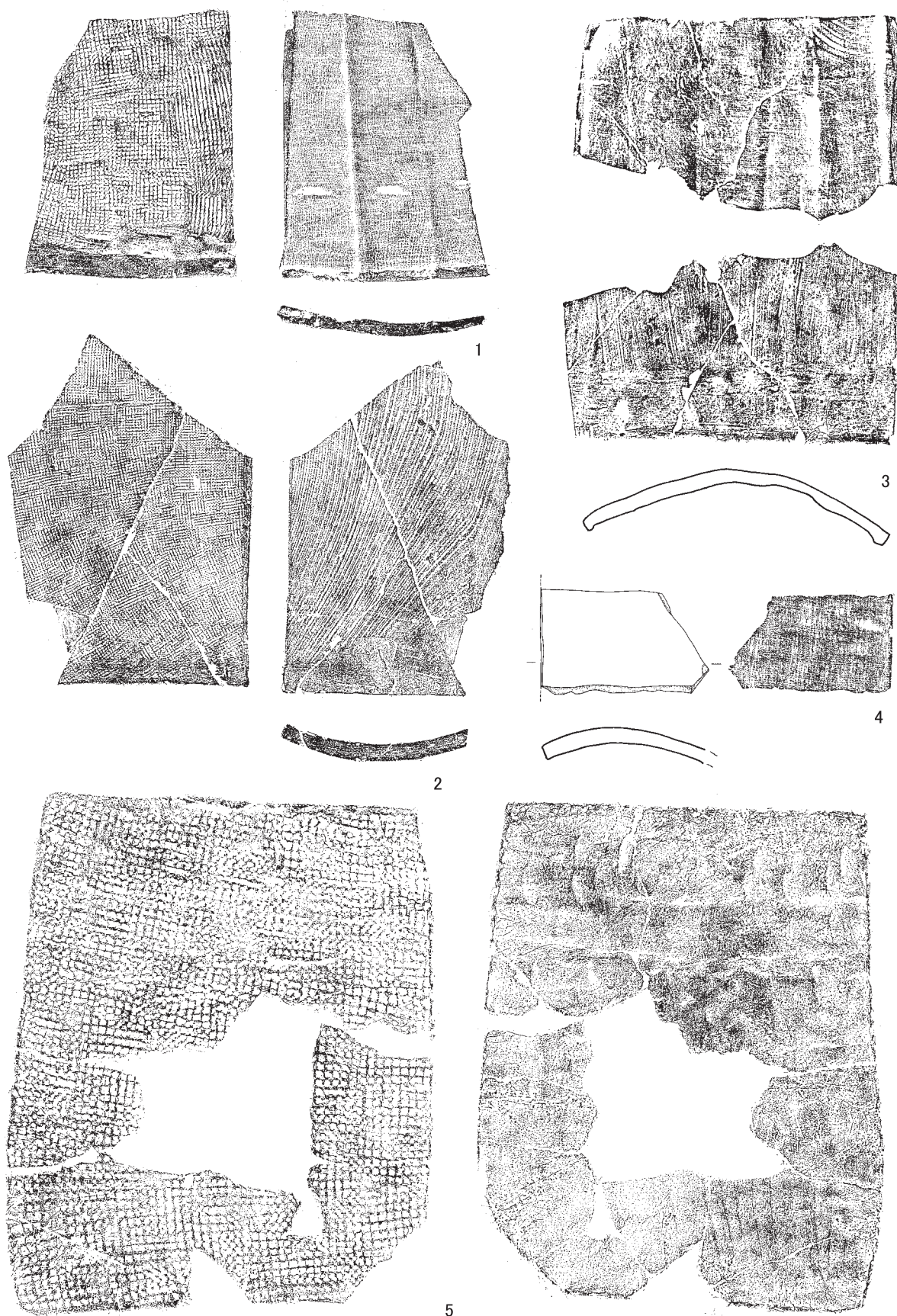
百濟の「漢城」は、近肖古王26年(371)に都を漢山に移すとあるから、これ以降を百濟漢城時代と考える。475年には高句麗により「漢城」が落とされ、百濟は熊津へ遷都するので、この間の百余年を半分に割って、371年から420年までを漢城時代前半、420年代から475年までを後半とすると、これまで知られている漢城時代の瓦は、ほとんどが前半代に属すると考えられている。

その実例として、石村洞四号墳の瓦、夢村土城の瓦、そして『風納土城報告I』の瓦について述べよう。亀田修一は、石村洞四号墳の瓦は「四世紀後半～五世紀初めごろ」、夢村土城の瓦は「四世紀末ごろから五世紀前半代」と把握しており⁽¹²⁾、これらは大きくは百濟漢城時代前半期の瓦となる。

まず石村洞四号墳の平瓦は、すべて模骨桶で粘土紐桶巻作り(D型)であり、夢村土城の瓦では模骨桶で粘土紐桶巻作り(D型)が多いが、平瓦部凹面に無文当て具痕を有し、平瓦部凸面に格子叩目痕を残す泥条盤築による平瓦(A型)も若干存在する。

一方、『風納土城報告I』⁽¹³⁾での平瓦は、模骨桶で粘土紐桶巻作り(D型)の瓦が最も多く、泥条盤築による平瓦(A型)も若干存在するが(p.194、p.424)、数は少ない。ソウル・中部圏文化遺産調査団での風納土城発掘品(韓神大学校保管例)では、平瓦部凸面に格子叩き文や平行叩き文を有するものなど、泥条盤築平瓦(A型)の種類と数が比較的多い。そして、『風納土城報告I』では、円筒桶で粘土紐桶巻作り平瓦(B型、凸面タテナデ)が1例図示されており(p.336)、同様の資料には韓神大学校保管例、古成里土城出土の平瓦がある。また円筒桶で粘土板桶巻作り平瓦(C型)は、ソウル・中部圏文化遺産調査団報告『風納土城』⁽¹⁴⁾に図示されており、D型が風納土城で多いのは先述した通りである。模骨桶で粘土板桶巻作り平瓦(E型)は『風納土城報告I』で3点図示されており(p.173の2点、p.430の1点)、韓神大学校保管例にも存在する(以上、第3図1～5参照)。

以上、百濟漢城時代の平瓦をまとめると、模骨桶で粘土紐桶巻作り(D型)の瓦が最も多く、泥条盤築による平瓦(A型)も比較的多く存在する。これらは百濟漢城時代前半の平瓦と考えられる。一方、風納土城全体の瓦としては、B型・C型・E型の瓦もあり、百濟扶余時代の平瓦(E型)、新羅の平瓦(C型)の祖型がすでに存在することは注目してよい。これらが、どのような年代的位置を占めるのか、検討が必要である。



第3図 風納土城の平瓦 (1/5)

1・3・4 国立文化財研究所(註13) 2・5 韓神大学校博物館(註14)
 1:D型、2:C型、3:E型、4:B型、5:A型

E 中国南北朝および朝鮮三国時代さらに隋・唐の平瓦

(i) 中国北朝の瓦

大同市の平城明堂（491年造営）や操場城、そして方山思遠寺などの平瓦は、凹面および側面をミガキ調整するため、第1次成形技法が不明なものが多いが、方山思遠寺の波状文軒平瓦⁽¹⁵⁾では、凹面にミガキがかかるものの、枳板痕や粘土紐の痕跡が残っており（第4図1）、D型の平瓦であることがわかる。ただし、この時代の北朝の瓦は丹念なミガキ調整をするのが一般的で、東魏・北齊の鄴城の瓦、洛陽永寧寺の瓦など、凹面の調整はきわめて入念であり、模骨桶で粘土紐桶巻作り平瓦（D型）の痕跡を残すものはほとんどない。しかし、この時代の中国北朝の平瓦がD型の平瓦であることは、ほぼ間違いないと言ってよいだろう。

(ii) 中国南朝の瓦

南京で実見できた平瓦の数はきわめて少ない。南京中山陵園管理局の祭壇跡の平瓦⁽¹⁶⁾を図示したが、それは枳板痕と糸切り痕を残す、模骨桶で粘土板桶巻作り平瓦（E型）である（第4図2）。伴出した軒丸瓦からみて、おそらく梁（502～557）の瓦であろう。

一方、劉宋（420～479）および南齊（479～502）の平瓦がどのようなものかは不明である。しかし、南京大学所蔵の平瓦の中に、桶板痕のない糸切り痕と思われる平瓦（C型か?）があり、郵便局の発掘現場では、粘土紐を巻きつけた桶板痕と思われる平瓦（D型か?）を実見したので、南朝前半から中頃にかけては多様な平瓦が存在し、最終的にはE型に統一されていくのではないかと思う。

(iii) 高句麗の瓦

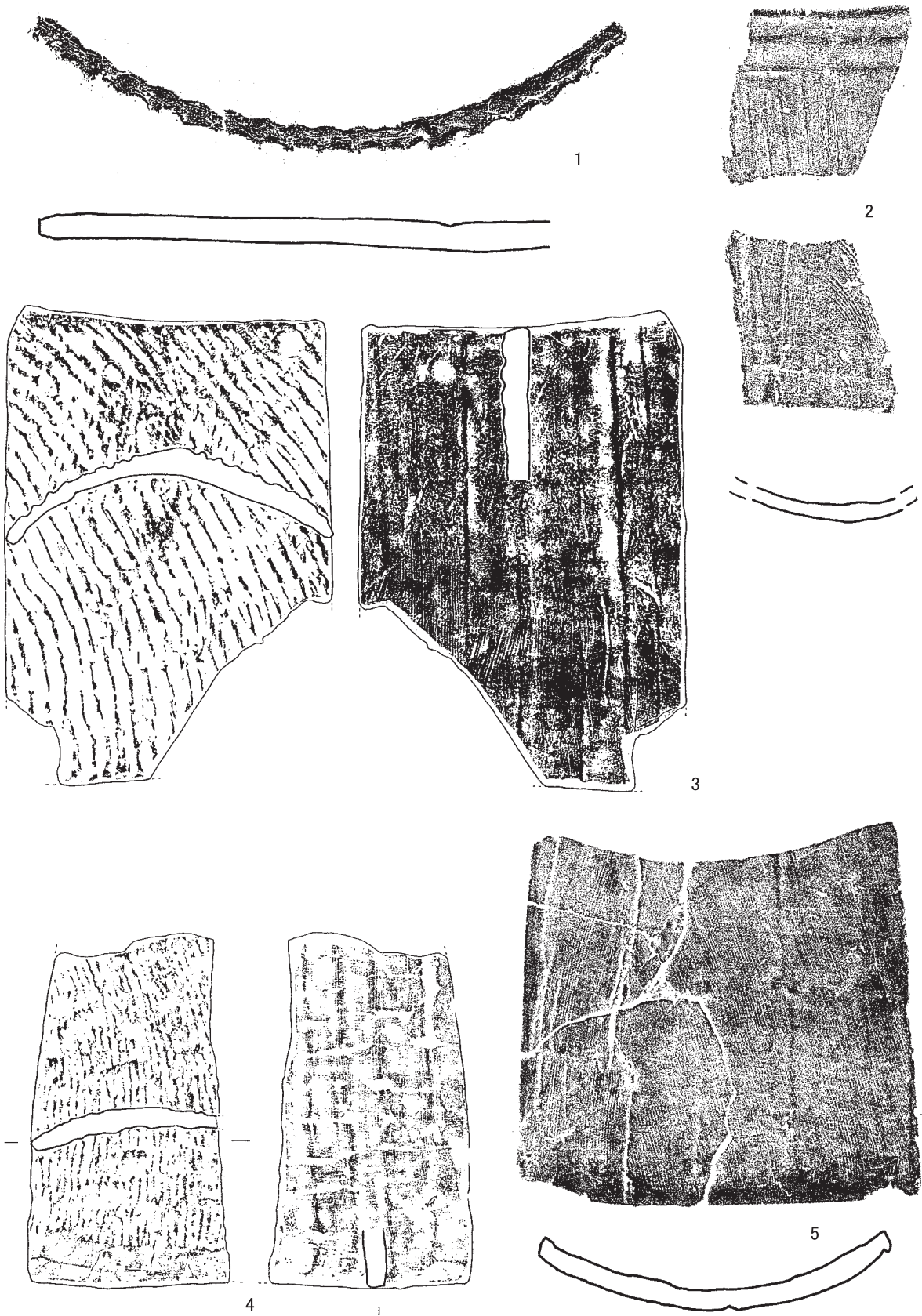
高句麗は長寿王の15年（427）に平壤に遷都し、勢力を拡大して全盛期を迎えたが、668年に唐・新羅連合軍に滅ぼされた。

この平壤における高句麗時代の平瓦は不明と言わざるをえないが、『昭和十三年度古蹟調査報告』の平壤清岩里廢寺⁽¹⁷⁾や、『昭和十二年度古蹟調査報告』の平安南道平原郡徳山面の元五里廢寺⁽¹⁸⁾では、5世紀末から6世紀代の軒丸瓦と高麗時代の軒丸瓦が出土している。前者の時代に伴うと考えられる平瓦は、小さな格子叩きを有するものであり、類似の資料を『朝鮮瓦磚図譜 II 高句麗』⁽¹⁹⁾で捜すと、PL.70、PL.71の平瓦であり、この2例は模骨桶で粘土紐桶巻作り平瓦（D型）である。高句麗初期と同様に、平壤においてもD型の平瓦が盛行したものと考えられる。

(iv) 百済の瓦

475年の漢城陥落後の百済の王都は熊津（475～538）であり、その後さらに南の泗泚（扶余）に遷都した。

熊津時代60余年の公州地方の平瓦については、ほとんどわかっていないのが現状である。平瓦の詳しい報告があるのは、公州の南東25kmに位置する大田月坪洞遺跡⁽²⁰⁾であり、凹面



第4図 中国北朝・南朝と百済の平瓦 (1/5)

- 1 方山思遠寺 2 南京中山陵园祭壇跡
 3・4 大田月坪洞遺跡 5 益山王宮里

に簾状圧痕をもつ平瓦がよく知られている。この遺跡では、凹面に布目のある通常の平瓦も出土しており、糸切り痕と粘土紐の痕跡のあるものとの両者があるが、枠板の痕跡はすべてに認められる（第4図3・4）。すなわち、大田月坪洞遺跡では、模骨桶で粘土紐桶巻作り平瓦（D型）と、模骨桶で粘土板桶巻作り平瓦（E型）の両者が併存している。泗泚時代の百済の平瓦がほとんどすべてE型であることを勘案して、公州地方の平瓦を推測してみると、E型を主体とし、若干のD型が存在するのではないかと思う。

一方、扶余地方の泗泚時代の平瓦は、亭岩里瓦窯⁽²¹⁾・弥勒寺・王宮里遺跡（第4図5）など、いずれも模骨桶で粘土板桶巻作り平瓦（E型）である。

（v）新羅の瓦

新羅地方の平瓦について多くを検討したのは崔兌先⁽²²⁾であり、多慶瓦窯跡・望星里瓦窯跡・皇龍寺・雁鴨池など、いずれも非開閉式の円筒桶が、古新羅時代にも統一新羅時代にも使用されていたことを明らかにした。崔兌先は、粘土素材では粘土板について説明しているが、私が新羅での皇龍寺などの平瓦を観察した限りでは、やはり布目痕があるものは、すべて糸切りによる粘土素材と考えてよいと思う。すなわち、慶州地域では古新羅時代も統一新羅時代も、円筒桶で粘土板桶巻作り平瓦（C型）が圧倒的多数を占めていた（第5図5）。

ただし、新羅王京内に位置する慶州仁旺洞 556・566番地遺跡⁽²³⁾では、模骨桶で粘土板桶巻作り平瓦（E型）が出土しており、その年代は、伴出の軒丸瓦からみて7世紀初頭頃と考えている⁽²⁴⁾。このような例外も、慶州では若干存在した。

（vi）隋・唐の瓦

唐長安城の平瓦は、円筒桶で粘土紐桶巻作り平瓦⁽²⁵⁾（B型）のようであり（第5図2）、隋唐洛陽城の東城内瓦窯での平瓦は、模骨桶で粘土紐桶巻作り平瓦（D型）である（第5図1）。

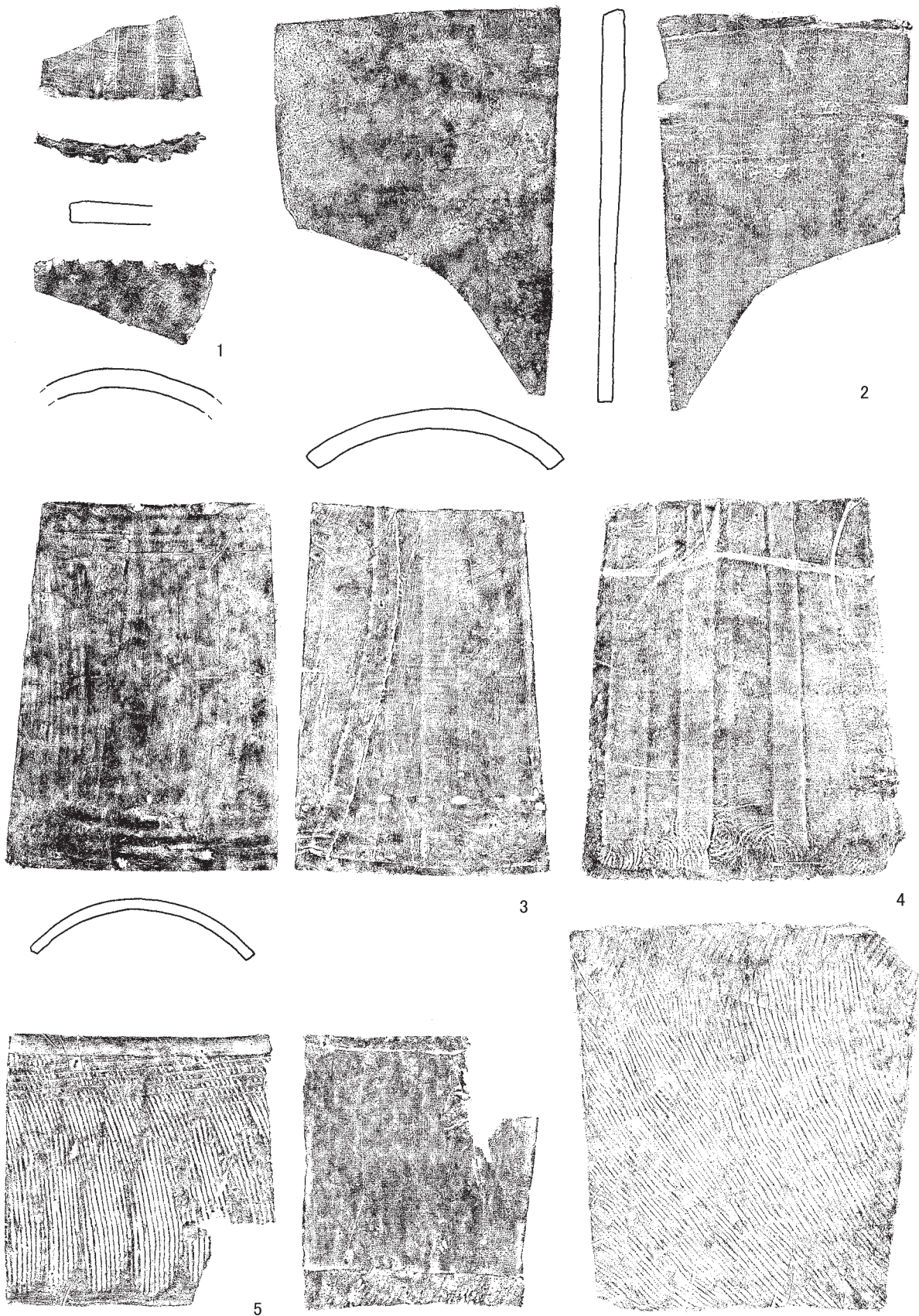
（vii）揚州の瓦

揚州市文物考古研究所で実見した隋唐代揚州城出土の平瓦は、模骨桶で粘土板桶巻作り（E型）であった⁽²⁶⁾（第5図3）。これは、南京と揚州との近接した位置関係によるのだろう。

（viii）日本の瓦

588年、百済から瓦博士が渡来して以来、日本の平瓦の製作法は、模骨桶で粘土板桶巻作り（E型）であった（第5図4）。丸瓦を粘土紐で巻き上げる例がごくわずか出現するところがあるが、平瓦を粘土紐で巻き上げる例は、藤原宮段階（7世紀末）まで待たなければ大量に出現しない。それ以前に遡るものとしては、高句麗・北朝の影響を受けた滋賀県の湖東式軒瓦⁽²⁷⁾に、模骨桶で粘土紐桶巻作り平瓦（D型）が出現するのみである。

新羅タイプの円筒桶で粘土板桶巻作り平瓦（C型）は、栗原和彦が指摘するように⁽²⁸⁾、8世紀末から9世紀前半にかけて九州にあらわれ、10世紀までは確実に存続する。このC型の平瓦が7世紀代の日本において全く製作されていないのかどうかは、むづかしい問題を含んでおり、紀伊の上野廃寺にもその可能性がある平瓦が存在するが、側面を調整しているため、一枚



第5図 隋・唐・新羅・日本の平瓦 (1/6)

- 1 隋唐洛陽城東城内瓦窯 2 唐長安城西明寺
3 揚州城 4 飛鳥寺 5 新羅王京

作り平瓦との判別が困難である。また、九州の大野城でも C 型の平瓦が存在する可能性はまだ残っている。

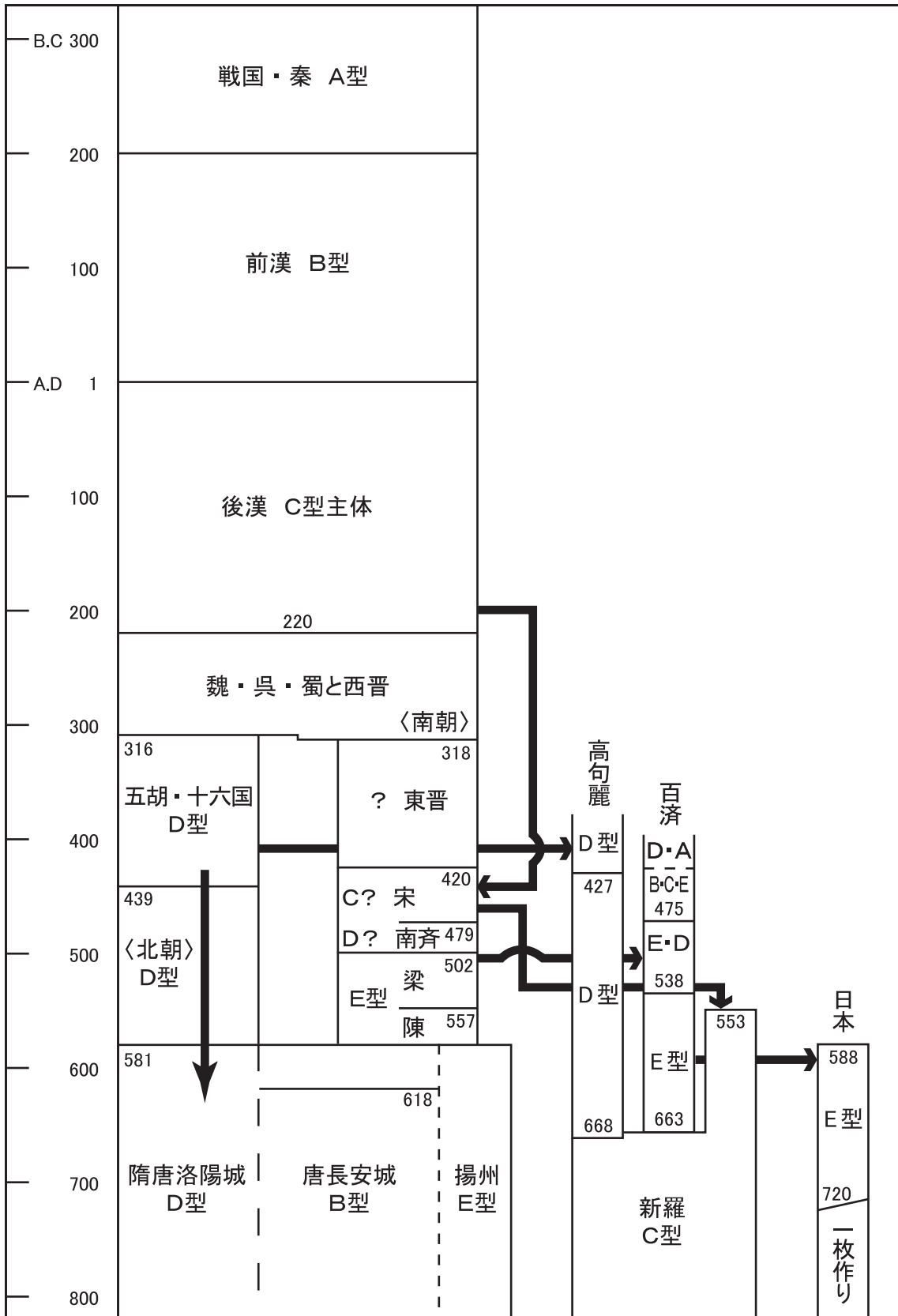
F まとめ

以上をまとめると、平瓦の製作技法の流れは次のようになる。

- 1 黄河中流域に出現した瓦製作技法は、はじめ泥状盤築技法（A 型）で作られたが、前漢初頭には桶に粘土を巻きつける手法に変わった。
- 2 前漢・後漢を通じて非開閉式の桶である円筒桶が用いられたようで、粘土板を巻きつけるもの（C 型）は、後漢には確実に出現している。
- 3 五胡十六国時代およびその併行期には、さまざまな瓦が出現し、交錯したようである。まず、中国北部に模骨桶で粘土紐桶巻作り平瓦（D 型）が 4 世紀代に出現し、洛陽では C 型の平瓦を駆逐してしまった。この D 型平瓦は、その後、北朝を通じて用いられる技法であり、それは隋唐代にも継続される。
- 4 中国北朝の D 型の平瓦は、高句麗の D 型平瓦と同じであり、両者の関係は、大きくみると兄弟関係のようなものであったと考えられる。両者の始源相互関係の追究は、今後の課題である。
- 5 新羅の平瓦は、円筒桶で粘土板桶巻作り平瓦（C 型）であり、公州や扶余の百濟瓦とも異なり、D 型の高句麗瓦とも異なる。新羅の C 型平瓦は、百濟や高句麗とは全く異なる地域から波及したと考えざるをえない。この C 型の瓦は後漢代の洛陽にあったが、その後、5 世紀前半頃の風納土城に若干あらわれる。おそらく、5 世紀代の南朝の東晋（～420）・宋（420～479）・南齊（479～502）にはこの技法が出現し、梁（502～557）にも若干残存した。この南朝 C 型瓦が新羅瓦の祖型であったと考えられる。
さらに、南朝での C 型瓦の出現は、五胡十六国時代におこった漢民族の大量の流民の発生に原因があり、華北から江南へ逃れた者数百万⁽²⁹⁾であったという事情が背景にあるのだろう。
- 6 日本の平瓦は、模骨桶で粘土板桶巻作り平瓦（E 型）であり、百濟の扶余地域からの波及であることは、これまで明らかにされている通りである。中国南朝でも、梁（502～557）・陳（557～590）の平瓦製作法は、E 型が主体をなすものと考えられる。この影響は、南京に近接する揚州でもあらわれ、揚州での隋・唐代の平瓦が E 型であることと関連するものだろう。

註

- (1) 佐原 真「平瓦桶巻作り」『考古学雑誌』58 卷 2 号、1972 年。
- (2) 崔兌先「平瓦製作法の 變遷에 대한 研究」『慶北大学校文学碩士学位論文』1993 年。



第6図 古代東アジアの平瓦製作技法の流れ

- (3) 佐川正敏「東アジアの軒平瓦の比較研究 1—日・中を中心に—」『日本中国考古学会第2回総・大会』資料、1991年。
- (4) 大脇 潔「西周と春秋の瓦」『藤澤一夫先生卒寿記念論文集』2002年。
- (5) 山崎信二「西安における秦から前漢までの軒丸瓦の変遷」2000年脱稿（奈良文化財研究所『漢長安城桂宮』2011年刊行予定）。
- (6) 中国社会科学院考古研究所櫟陽発掘隊「秦漢櫟陽城遺址の勘探和試掘」『考古学報』1985年第3期。
- (7) 中国社会科学院考古研究所『漢杜陵園遺址』1993年。
- (8) 奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所年報 1992』1993年、p.76。
- (9) 奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所年報 1995』1996年、p.7。
- (10) 朱岩石・何利群「鄴城遺址出土北朝陶瓦製作工藝研究」『四至十世紀東亜制瓦技術研究』中国社会科学院考古研究所・日本奈良文化財研究所、2008年。
- (11) 谷 豊信「四、五世紀の高句麗の瓦に関する若干の考察—墳墓発見の瓦を中心として—」『東洋文化研究所紀要』第108冊、東京大学東洋文化研究所、1989年。
- (12) 亀田修一『日韓古代瓦の研究』2006年。
- (13) 국립문화재연구소『風納土城 I』2001年。
- (14) 서울・中部圏文化遺産調査団『風納土城』2006年。
- (15) 劉俊喜「北魏平城遺址陶瓦的初歩研究」『四至十世紀東亜制瓦技術研究』中国社会科学院考古研究所・日本奈良文化財研究所、2008年。
- (16) 賀雲翱・王碧順・路侃「南京出土部分南朝磚瓦資料的初歩研究」『四至十世紀東亜制瓦技術研究』中国社会科学院考古研究所・日本奈良文化財研究所、2008年。
- (17) 朝鮮古蹟研究会『昭和十三年度古蹟調査報告』1940年。
- (18) 朝鮮古蹟研究会『昭和十二年度古蹟調査報告』1938年。
- (19) 井内古文化研究室『朝鮮瓦磚図譜 II 高句麗』1976年。
- (20) 국립공주박물관・충남대학교박물관・대전광역시 상수도사업본부『大田月坪洞遺跡』1999年。
- (21) 国立扶余博物館『扶餘亭岩里가마터 (I)』1988年。国立扶余博物館・扶餘郡『부여정암리가마터 (II)』1992年。
- (22) 崔兌先「平瓦製作法の 變遷에 대한 研究」前掲註2。
- (23) 国立慶州文化財研究所『慶州仁旺洞 556・566番地遺蹟發掘調査報告書』2003年。
- (24) 山崎信二「七世紀後半の瓦からみた朝鮮三国と日本との関係」『日韓文化財論集 I』奈良文化財研究所・大韓民国国立文化財研究所、2008年。
- (25) 佐川正敏「中国の軒平瓦の成形・施文技法を考える—東アジアの造瓦技術の比較研究 I—」『日本中国考古学会会報』第2号、1992年。
- (26) 李久海・劉涛・王小迎「揚州城遺址新出土瓦当概述」『四至十世紀東亜制瓦技術研究』中国社会科学院考古研究所・日本奈良文化財研究所、2008年。
- (27) 山崎信二「七世紀後半の瓦からみた朝鮮三国と日本との関係」前掲註24。
- (28) 栗原和彦「太宰府史跡出土の軒平瓦」『九州歴史資料館研究論集』25、2000年。
- (29) 三崎良章『五胡十六国』東方選書36、2002年。

2 北朝の造瓦技術 (原題：北朝制瓦技術的考古学研究)

朱 岩 石

(中国社会科学院考古研究所)

A はじめに

北朝は、登国元年(386)に道武帝拓跋珪が牛川(内モンゴ^{フフ}呼^{ホト}和浩特市付近)で代王に即位してから、開皇元年(581)に楊堅が隋を建国するまでの約2世紀にわたる。天興元年(398)には平城(現在の山西省大同市)に都を定め、約100年つづく北魏平城時代の幕開けとなった。孝文帝拓跋宏は太和18年(494)に洛陽に遷都し、大規模な城壁、宮殿、官衙を造営した。534年に孝武帝、元修は高歓との対立を深め、洛陽をすてて関中に入り、宇文泰のところに身を寄せたため、北魏は東西に分裂した。高歓は元善見を孝静帝とし、洛陽から鄴城へ遷都した。鄴城は東魏、北齊の都となり、長安は西魏、北周の首都となった。

北朝時代の城址には建物遺構や遺物があり、北朝時代を研究する上で重要な資料となっている。遺物では瓦磚類が圧倒的多数を占めるが、その多さのため、これまで十分に検討されていない部分もあった。本稿では、北朝瓦の観察をとおして、当時の造瓦技術を総括してみたい。これは漢代から唐代にかけての建築技術に関する基礎研究の一つである。

B 北朝瓦の出土遺跡

北朝瓦が出土する遺跡は、北朝時代の城址やその周辺に集中しており、北魏平城、内モンゴ^{フフ}南^{ホト}部、北魏洛陽城、東魏北齊鄴城、晋陽古城、西魏北周長安城などがある。

(i) 北魏平城

北朝前期の平城は現在の山西省大同市区の地下にあり、城内の明堂辟雍遺跡、操場城1号建物遺跡、城外の方山永固陵思遠仏寺遺跡、雲崗石窟遺跡、西冊田窯跡などでは、北朝前期の丸瓦、平瓦などが出土している。

北魏の明堂辟雍遺跡は、大同市柳航里住宅小区付近に位置し、1995年と1996年に大同市博物館などが発掘調査した⁽¹⁾。明堂は、北魏の太和15年(491)に建立された礼制建築である。遺跡の中央には1辺42mの方形の版築基壇があり、基壇の外周には円形の溝がめぐる。溝の外周の直径は289~294m、溝の幅は18~23mある。発掘では建物の西側部分を検出し、ここから大量の丸瓦、平瓦が出土した。

操場城1号建物遺跡は北魏時代の宮殿遺跡で、大同市内の操場城街東側に位置し、山西省考古研究所などが2003年に調査した⁽²⁾。南を正面とする東西44.4m、南北31.5mの長方形

の版築基壇が全面検出されている。方向は南で西に7度振れる。基壇の東側と南側には瓦が堆積しており、1万点をこえる丸瓦、平瓦が出土した。

永固陵思遠仏寺遺跡は、大同市の北約25kmのところにある方山の南麓に位置し、『魏書』高祖紀上によれば、北魏太和3年(479)に「方山に行幸し、思遠寺を造営する」とある。1981年に大同市博物館がこの遺跡を発掘調査した⁽³⁾。寺院は長方形の高台上にあり、高台は東西57.4m、南北87.8mあり、周囲を塼で囲んでいる。院内には、一辺12mをはかる平面正方形の塔基壇が残存する。北魏時代の塑像の仏像や菩薩像の破片や丸瓦、平瓦などが出土した。

雲崗石窟とその包含層からは、北朝時代の丸瓦、平瓦が出土しており、「傳祚無窮」銘の瓦当などがある。

西冊田窯跡は、大同市から西約45kmの桑干河の南岸に位置する。この窯跡からは、大量の瓦が出土したほか、焼成時の廃棄物なども採集されている。出土瓦の特徴が平城から出土する瓦と一致するため、平城時代の都城造営にともなう窯場と考えられる⁽⁴⁾。

(ii) 内蒙古中南部の北魏時代城址

拓跋鮮卑は魏晉時代に陰山一帯で勢力を拡大し、東晋太元11年(386)に鮮卑の首領、拓跋珪が代王に即位して、盛楽に遷都した。北魏建国後、黙川地区の盛楽を中心として、陰山以北の地には沃野、懷朔、武川、撫冥、柔玄などの六鎮が設置された(『魏書』卷160地形志)。北魏の都城と軍鎮を並立する方法は、拓跋鮮卑の領域統治を強固にした。この結果、内蒙古中南部では北朝時代の遺跡や遺物が発見されている。

北朝瓦が出土する重要な城址は、和林格爾県の土城子古城である。内蒙古自治区文物考古研究所が何度か発掘調査を実施し、大量の北朝瓦が出土している⁽⁵⁾。土城子古城は呼和浩特市の南約40kmに位置し、その北側には土黙川平原、南側は摩天嶺山脈が広がる。ここは漠北と中原を守備する要衝地帯である。土城子古城はその地理的位置の重要性から、戦国時代から元明時代まで使用されつづけた。北魏時代には城壁を拡張して盛楽と称した。土城子古城の平面形は不規則で、北城、中城、南城が相互に重複して連結するが、それぞれの城壁の造営年代は未確定である⁽⁶⁾。これまでの調査で北魏時代の瓦当が出土している。

このほか、托克托県雲中古城⁽⁷⁾、四子王旗烏蘭花土城子古城⁽⁸⁾、准格爾旗石子湾古城⁽⁹⁾などがある。

(iii) 北魏洛陽城

1960年代初頭から現在にいたるまで、中国社会科学院考古研究所は北魏洛陽城において継続的に発掘調査を実施してきた。これまでに発掘した遺構には、内城南部に位置する1号房址、永寧寺、明堂辟雍遺跡、内城東門の建春門遺跡、西郭城内の大市遺跡、宮城正門であるしょうこうもん闔闔門遺跡がある。

1号房址は内城南部のやや西側、銅駝街の東側に位置し、1963年に正式なボーリング調査と発掘を実施した⁽¹⁰⁾。この建物基壇はすでに破壊されており、残存している形状は方形に近

く、東西 16m 以上、南北約 17m。方向は北で東に 5 度振れている。房址を囲う塀の内外面は白色と朱色であった。出土品はおもに瓦磚類で、丸瓦、平瓦、軒丸瓦、瓦釘や獸面文磚などの破片がある。瓦は研磨されているので、北魏時代の建物遺構であろう。発掘担当者は、文献史料から、この建物遺構は北魏時代の宗正寺か太廟の建物の一部であると推測している。

永寧寺は洛陽城内最大の仏教寺院で、胡太后が出資して孝明帝の熙平元年（516）に建てられた。文献史料によると、宮城西南部の太尉府の西に位置したが、孝武帝永熙 3 年（534）に塔が落雷で焼失し、寺院もその後廃絶した。1979 年から 2003 年にかけて数回にわたる発掘調査を実施している⁽¹¹⁾。寺院の平面形は長方形で、周囲は塀で囲まれ、南北 301m、東西 212m を測る。院の中央には塔の基壇があり、塀がとりつく南門と西門がある。院の中央にある塔の基壇は正方形で、基壇は 1 辺 38.2m ある。塔の基壇と門址の発掘調査では、大量の瓦類が出土した。丸瓦、平瓦、軒丸瓦、獸面磚や鴟尾などがある。永寧寺は創建と廃絶の年代がはっきりしており、これらの出土遺物は北魏時代の瓦研究の重要な資料となる。

礼制建物群は後漢時代に創建され、明堂辟雍は北魏時代にも修復されたが、霊台は廃棄され、その基壇上には磚塔が築かれた⁽¹²⁾。1970 年代に、霊台などの北魏時代の包含層から瓦磚が出土している⁽¹³⁾。

内城東門である建春門は 1985 年に発掘された。これは、北魏洛陽城の東城壁で確認された 3 基の城門のうち、最も北に位置する⁽¹⁴⁾。城門の基壇は長方形を呈し、南北 30m、東西 12.5m をはかる。城門は 3 条の通路をもつ形式で、この調査の包含層からは大量の瓦が出土した。

宮城正門の閭闔門遺跡は、2001 年～2002 年に全面発掘した⁽¹⁵⁾。城門の左右に双闕をそなえ、門前に広場を形成する。城門基壇は東西 44.5m、南北 24.4m で、3 条の通路がある。

（iv）東魏・北齊鄴城

鄴城は河北省臨漳県の西南 20 km に位置し、南北にならぶ二つの城址からなる。鄴北城は三国魏の時代に造営され、五胡十六国時代の後趙、前燕、冉燕の都となった。534 年に東魏が鄴城に遷都したのち、鄴北城の南側に鄴南城を建設した。

1983 年以来、鄴城考古隊はボーリング調査と発掘調査を継続し、鄴南城朱明門遺跡、趙彭城東魏北齊寺院、鄴城三台遺跡と城壁、道路遺構などを検出している。発掘調査では大量の瓦磚類が出土した。これらは北朝瓦の造瓦技法や編年研究の重要な資料である。

鄴南城朱明門遺跡は 1996 年に調査し、双闕をもつ城門であることが明らかになった。門の基壇は東西 84m、南北 20.3m である。城門の東西両側には、対称的に渡り廊下や闕楼を配置している。基壇の長さは 34m 以上、渡り廊下の南側の基壇は約 15m とみている。2 基の闕楼間の距離は 56.5m ある。朱明門の前面には闕楼と城門にかこまれた空間があり、面積は 2800 m² ある。朱明門遺跡からは大量の瓦磚類が出土した⁽¹⁶⁾。

趙彭城東魏北齊寺院は、平面方形の木塔を中心とし、周囲を壕に囲まれた正方形のプランである。2002 年に塔の基壇を発掘調査し、2003 年から 2005 年にかけて正方形のプラン内の

その他の遺構を発掘した⁽¹⁷⁾。塔基壇は、塔本体の建つ地上部分と掘込地業の部分からなる。これらは、版築と磚や石で構築されている。掘込地業は平面正方形で、一辺が 45m ある。基壇の地上部分は南辺の状態が良好で、正方形をなし、一辺 30m と推測している。ここからも大量の瓦が出土した。

銅雀三台遺跡は、三国魏の鄴城のなかで地上に残存している唯一の遺構である。金虎台は三台の一番南に位置し、西城門である金明門の北の西城壁上にある。版築基壇は比較的良好に残り、基壇の規模は南北 120m、東西 71m、高さ 12m ある。銅雀台は三台の中央に位置し、金虎台から 83m の距離にあるが、損傷が激しく、基壇の東南部分が残るのみである。現存する基壇の大きさは南北 50m、東西 43m、高さは 4～6 m である。北側の冰井台は、漳河の洪水で破壊されているため、具体的な位置を確認することができない。そこで、三台の正確な位置を明らかにするため、この遺跡の周縁部において小規模な発掘を実施した。北朝の包含層から、大量の黒光りした丸瓦、平瓦などが出土している⁽¹⁸⁾。

(v) 東魏北齊晋陽城

晋陽城は太原市西南部に位置し、面積は二十数平方kmある。東魏、北齊時期は副都として存在し、隋唐時代にも使用された。城壁は確認しているけれども、その時期については未確定の部分がある。西城壁の試掘の結果、城壁の年代はかなり複雑で、北朝時代の城壁部分の版築も確認されている。西城壁は南北長 3750m、幅 18～20m、方向は北で東に 18 度振れている。西城壁の北半部分は地上に残存している。少量の丸瓦と平瓦が出土しており、北朝時代のものである。

(vi) 十六国北朝長安城宮城

2003 年～2007 年にかけて、前漢長安城の東北部でボーリング調査と発掘を実施した⁽¹⁹⁾。その位置は、漢長安城東北部の宣平門大街、洛城門大街と北城壁、東城壁の間の長方形の範囲内で、東西二つの小城からなる。発掘地点は西小城の南壁で、出土遺物には十六国時代、北朝時代の瓦磚類がある。

C 北朝瓦の時期的特徴と分類

北朝瓦には大別して、丸瓦と平瓦の 2 種類がある。現在、瓦当の研究は比較的進展しているが、それは瓦当の紋様や形が研究者や収集家の目を引くからであろう。しかし、周知のとおり、瓦当は決して独立したものではなく、軒先に葺く丸瓦の付属部分でしかない。瓦当を単独で研究することがよくないわけではないが、丸瓦の製作技術を研究するのであれば、丸瓦と瓦当を一体で研究する必要がある。北朝瓦の出土地点は、上述の遺跡に集中しており、丸瓦と平瓦の種類は単純で、軒丸瓦に多少の変化がある以外は、それほど大きな変化はみられない。以上のような状況にもとづき、北朝城址の前期、後期の変遷を加味して、丸瓦と平瓦の分類をおこない、時代的特徴を明らかにしていきたい。

都城の構造と変遷からみると、北朝を前期と後期に分けることができる。北朝前期は大同平城の時期である。北朝後期は洛陽遷都後の時期にあたり、洛陽・鄴城時期としたい。北朝前期の瓦は平城や内蒙古中南部の城址、北朝後期の瓦は北魏洛陽城、東魏北齊鄴城、晋陽古城、西魏北周長安城からそれぞれ出土している。

以下では、上記の分期にしたがい、各時期の代表的な瓦の分類について述べる。

(i) 北朝前期の平瓦

無文で灰色の平瓦とミガキをかけた黒灰色の平瓦とがある。また、用途から平瓦と軒平瓦の区別がある。

A類 無文灰色平瓦 凹面は布目で凸面は無文、大小の区別がある。西冊田窯址の資料は胎土に砂粒を含み、焼成温度は比較的高い。凸面はナデ調整しており、無文である。広端縁には指ひねりの波状文がある。操場城1号遺跡出土の T201③ : 3 は、長さ 45.6 cm、狭端縁幅 35.3 cm、広端幅 31 cm、厚さ 1.5~2.0 cm。広端縁に押圧波状文がある。

B類 黒色磨研平瓦 胎土はきめ細かく、凹面はミガキをかけて黒色を呈する。凸面は無文で、黒色か灰色を呈する。大小の区別がある。操場城1号遺跡出土の T510③ : 13 は、長さ 81 cm、狭端幅 60 cm、広端幅 50 cm、厚さ 2.8 cm。凸面は黒色で、広端縁に波状文がある。操場城倉儲遺跡の M204 出土品は、長さ 55.5 cm、広端幅 37 cm、狭端幅 31.2 cm、厚さ 2.8 cm。凸面は無文で黒灰色を呈し、広端縁には波状文がある。平城明堂遺跡出土の T102 : 1 は、長さ 51 cm、幅 42 cm、厚さ 2~2.5 cm。

(ii) 北朝前期の丸瓦

A類 無文灰色丸瓦と瓦当 灰色を呈し、凸面は無文で、凹面には布目がある。操場城倉儲遺跡 T613③ : 2 は、残存長 19 cm、径 14.5 cm、厚さ 1.5~2.2 cm。全体に火をうけた痕跡がある。この丸瓦の広端には蓮華文瓦当がつく。瓦当裏面には細いキザミがみられ、丸瓦と瓦当の接合部には円弧状のナデつけ痕跡がある。

大同平城出土の A 類丸瓦と蓮華文瓦当は接合している。内蒙古出土の北魏時代の瓦当の多くは平城時期の遺物である⁽²⁰⁾。蓮華文瓦当と獸面文瓦当、「傳祚無窮」銘瓦当、「萬歳富貴」銘瓦当などがある。瓦当面はミガキをかけていないため、これに接合する丸瓦もミガキをかけない A 類丸瓦の可能性が高い。

B類 黒色磨研丸瓦と瓦当 現在確認できる北魏前期の丸瓦のほとんどは、黒色磨研瓦に属する。その特徴は凸面を研磨し、黒光りした状態にすることで、凹面には布目がある。大小の区別がある。操場城1号遺跡出土の T410③ : 3 は、長さ 75.5 cm、直径 23.0 cm、玉縁長 7.0 cm、厚さ 2~3 cm。胎土はきめ細かく、全体に整っている。凹面には明瞭な布目がある。操場城倉儲遺跡出土の T517L204③は、凸面が黒色を呈し、胎土は精良でミガキをかけ、凹面には模骨痕をとまなう布目がある。玉縁上には「白」字が刻まれている。長さ 57.0 cm、直径 18~18.3 cm、厚さ 1.7~2.5 cm、玉縁長 5.8 cm。

平城出土品でB類丸瓦と接合する瓦当には、蓮華文、獣面文、「萬歳富貴」銘の瓦当があり、これらは丸瓦とともに磨かれている。

文字瓦当である操場城1号遺跡出土のT610③:5は、直径17.8cm、外縁幅1.5cm。瓦当面は井字形に区画され、隸書の文字が配される。上下左右の順に「萬歳富貴」とある。凸面はミガキをかけており、黒色を呈する。同類の瓦当T510③:8は、直径13.3cm、外縁幅1.0cm。灰黒色で瓦当面もミガキをかけている。この瓦当の文字は完全に残っており、作りもよい。瓦当と丸瓦の接合角度は102度である。

獣面文瓦当の瓦当面はミガキをかけており、外縁の幅はやや広く、良質である。瓦当には浮き彫りの獣面があり、大きな目と短い鼻、大きく開いた口には歯が見えている。獣面文瓦当は直径25.0cm、ただし、完形品はない。やや小さい獣面文瓦当の図案は前者とほぼ一致する。明堂遺跡出土の96MN:3は瓦当径17.0cm、厚さ2.5cm。操場城1号遺跡出土のT610②:11は瓦当径16.3cm、外縁幅2.5cm。

(iii) 北朝後期の平瓦

A類 無文灰色平瓦 鄴南城外郭城内の建物遺跡から出土したA類平瓦は灰色を呈する。凸面は平らでなく、比較的粗い縄叩きを磨り消して調整している。凹面には、布目かナデ消した細かい縄叩きの痕跡がある。94JYT554-559②:7は、欠けているが幅は完存しており、長さ23.8cm以上、幅29.8cm、厚さ1.7~2.0cm。広端縁には押圧波状文がある。94JYT554-559②:8は、残存長15.0cm、残存幅14.2cm、厚み1.6~2.4cm。

B類 黒色磨研平瓦 格が高く規模の大きな北魏洛陽城1号房址、北魏永寧寺、鄴城三台遺跡には、この種の平瓦が多い。

北魏洛陽城1号房址から出土した完形平瓦は、長さ49.5cm、幅33.0cm、厚さ2.5cm。平瓦の数量は非常に多い。形状は梯形に近く、狭端と広端の区別がある。平瓦はおもに濃い褐色を呈し、硬く焼き締まってつくりもよい。平瓦の凹面は研磨され、平滑である。凸面は、凹面にくらべて粗雑だが、ナデ調整している。平瓦の両側縁はケズリ調整する。永寧寺出土のB類平瓦は、規格や質、色調や製作技法が1号房址出土のB類平瓦と基本的に一致する。これは北魏後期の平瓦の基準資料である。また、1号房址とくらべて種類がさらに増加し、1段(単層)の波状文軒平瓦だけではなく、2段(重層)の波状文をもつ軒平瓦も出現した。

鄴城出土の東魏北齊時期の平瓦は、多くが黒色か灰黒色を呈し、胎土は緻密で硬く焼きしまる。完形品は長さ41.5cm、幅31.0cm、厚さ2~3.5cm。凹凸両面とも光沢がある。広端縁には押圧の1段あるいは2段の波状文がある。また、へら書きの文字がある。

88JYT19③:1は、胎土が緻密で、灰黒色を呈する。長さ31.4cm、幅22~25cm、厚さ5.5~7.4cm。凸面の広端寄りにはミガキをかけ、それ以外の部分には轆轤の回転痕跡がある。凹面は光沢があり、黒色の物質を塗っている。広端縁は先にキザミをいれ、つぎに押圧して2段の波状文を施す。狭端縁の断面は半円形を呈する。両側縁には、内側から切り込みをいれて

分割した痕跡がある。

鄴南城朱明門遺跡出土の T141② : 39 は、胎土が緻密で、灰色を呈する。残存長 9.8 cm、幅 26.4 cm、厚さ 2.8 cm。凹面凸面ともに研磨され、灰黒色を呈する。広端縁に近い部分には轆轤の回転痕跡がみられる。凹凸両面に黒色の物質を塗っている。広端縁には比較的深い切り込みをいれて上下に分割し、指で押圧して 2 段の波状文を施文する。

86JYT154 西拡張区⑤ : 8 は、胎土が緻密で、濃灰色を呈する。完形に近く、長さ 50.7 cm、幅 29.7~34.5 cm、厚さ 2.8 cm。凹面と凸面の広端部近くは研磨し、凸面の残りの部分には轆轤の回転痕跡がみられる。広端縁には、工具で刻む方法で、2 段の波状文を施文している。狭端縁は丸くおさめている。

(iv) 北朝後期の丸瓦

A 類 無文灰色丸瓦と瓦当 鄴南城西外郭城内の建物遺跡から出土した丸瓦は、灰色で形も整っている。凸面は無文で、凹面には明瞭な布目がある。同時に、凹面には縦方向の溝の痕が観察でき、一部の資料には凹面に横方向の粘土紐の痕跡がみえる。94JYT554② : 2 は、長さ 31.6 cm、直径 14.1 cm、厚さ 1.3~1.6 cm、玉縁長 5.2 cm。94JYT555② : 2 は、長さ 35 cm、直径 14.8 cm、厚さ 1.5~1.9 cm、玉縁長 4.5 cm。

B 類 黒色磨研丸瓦と瓦当 この種の丸瓦は、B 類平瓦と同様に、格が高く規模の大きい遺跡から出土する。

北魏洛陽城 1 号房址出土の丸瓦は、長さ 49.5 cm、直径 13.0 cm、厚さ 2.3 cm。灰黒色を呈し、胎土は緻密で堅く焼きしまる。この類の丸瓦は、すべて研磨されて光沢があり、つやのある黒色か灰色を呈する。この技術は平瓦凹面の調整法と一致する。丸瓦凹面には明瞭な布目があり、布の皺の痕がみられる例もある。玉縁は円弧形で、やや斜め下向きになる。一部の玉縁上には刻印やへら書きの文字がある。丸瓦の両側縁はケズリ調整されるが、一部に内側から工具で切り込みをいれた分割の痕跡がみられる。また、一部の側縁にもへら書きの文字がある。永寧寺出土の B 類丸瓦は、1 号房址出土の丸瓦と基本的に一致し、直径は 15.0 cm、厚さ約 2.3 cm。永寧寺の丸瓦の玉縁は比較的長く、長さ 3.5~6.0 cm ある。

鄴城出土の丸瓦は、多くが灰黒色を呈し、胎土は緻密で堅く焼きしまり、重厚である。完形品は長さ 41~48 cm、直径 15.5~18 cm、厚さ 1.8~2.5 cm。凸面は研磨され、光沢がある。凹面は布目である。92JYT29⑦ : 04 は、長さ 40.5 cm、直径 14.8 cm、厚さ 1.7 cm。玉縁の凸面には文字の刻印がある。筒部中央には瓦釘を差し込む孔があり、広端に蓮華文瓦当を接合している。90JYT26⑤ : 09 は凸面を研磨し、黒光りしているが、一部剥離する。筒部中央に直径 1.2 cm の瓦釘孔がある。凹面は布目で、皺の痕も明瞭である。瓦当の蓮華文は複弁八弁である。鄴城朱明門遺跡出土の 86JYT116 西隔梁北訓④ : 46 は、胎土が緻密で濃い灰色を呈し、堅く焼きしまる。筒部長 36.7 cm、直径 14.8 cm、厚さ 1.5~2.8 cm、瓦当径 14.2 cm。筒部凸面は研磨され、凹面は布目。布目には縦方向の皺の痕がある。瓦当は単弁の蓮華文である。

北魏洛陽城や東魏北齊鄴城などにはB類丸瓦と接合する瓦当があり、種類も多い。このうち、永寧寺の瓦当は種類が豊富である。しかし、北朝後期のB類瓦当は、一般に蓮華文、獸面文の2種類である。北魏洛陽城1号房址、永寧寺出土の蓮華文瓦当と獸面文瓦当は、焼成温度が高く、質もよい。表面は黒色でつやがあり、形も整っている。洛陽城1号房址の六弁宝相華文瓦当は、瓦当径15.6cm、厚さ1.6cm。外縁は幅広く、平らである。獸面文瓦当は径15.6cm、厚さ1.6cm。半肉彫りの獸面が飾られ、外縁は幅広く平らである。

永寧寺出土の蓮華化生文瓦当、忍冬文瓦当、変形忍冬文瓦当などはこの寺院でのみみられ、寺院のために特別につくられた瓦当であろう。

鄴城から出土した北朝後期の瓦当は、基本的に蓮華文である。

D 北朝瓦の製作技術

上述の瓦は、北朝瓦の製作技術に関する基礎資料である。鮮卑族が北魏王朝を建国したのち、瓦の製作技術が非常に高まったのは、魏晋時代以来の技術を継承した結果であろう。

北朝時代のB類瓦は、研磨して黒光りする瓦で、製作技術のもっとも複雑な例である。これらは北朝後期にはさらに成熟し、隋唐時代にもかなり大きな影響を与えている。この種の、北朝瓦を代表する製作技術について、以下検討してみたい。

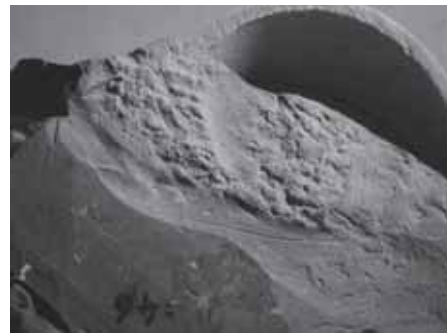
各地から出土した瓦の観察の結果、北朝瓦の製作技術の工程は、以下のように区分することができる。1. 粘土の製作、2. 模骨による粘土円筒の成形、3. 調整と施文、4. 分割と陰干し、5. 側面ケズリ調整と瓦当接合、6. 研磨と調整、7. 陶衣かけ、8. 焼成。以下、おのおのの工程ごとに概述する。

(i) 粘土の製作

北朝瓦の胎土は緻密である。破片を観察すると、粘土を捏ねたときにできる皺を観察することができる。これは、瓦成形前に粘土を沈澱させ、捏ねる工程があったことを示している。大型の平瓦では大量の粘土を使用するが、胎土中には砂礫や夾雑物が非常に少なく、水簸して一定時間粘土をねかせる工程を経ている。



1



2

瓦の破断面に見える成形時の胎土の状態
(1・2 鄴城朱明門遺跡出土の瓦)

(ii) 粘土円筒の成形

北朝時代の丸瓦、平瓦は粘土紐巻き上げで成形している。これ以外の成形方法は確認されていない。粘土紐巻き上げの痕跡は、丸瓦の凹面にもっとも明瞭に現れており、一部の平瓦の破片でもこうした状況がみられる。しかし、丸瓦と平瓦の模骨の形は異なる。



1



2



3



4

粘土紐巻き上げと模骨の痕跡

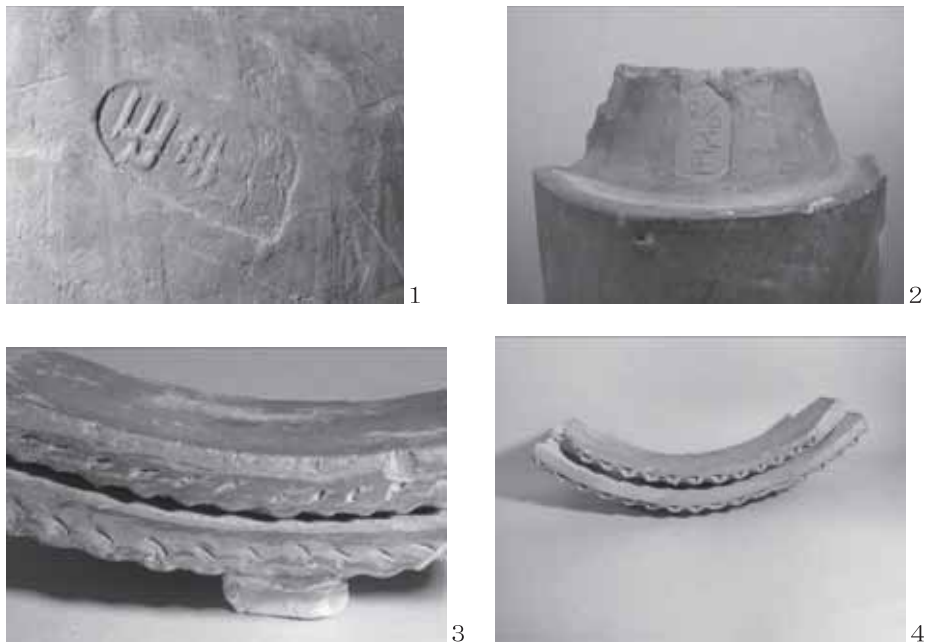
(1 大同平城出土、2 鄴城出土、3・4 北魏洛陽城出土)

(iii) 轆轤による調整と施文

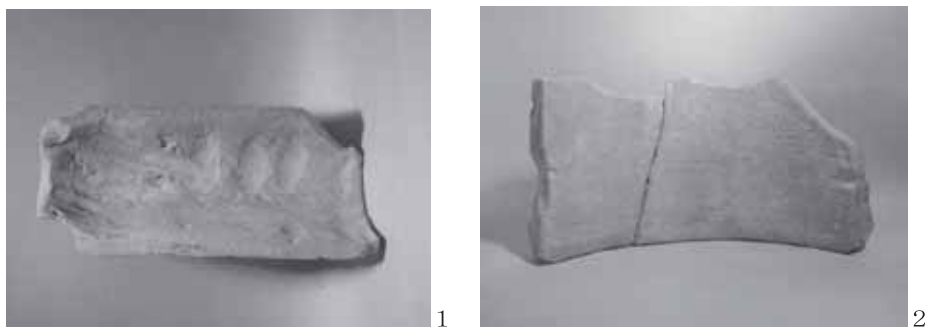
粘土円筒が完成した時点では、轆轤上で粘土円筒を調整した痕跡が瓦によく残っている。しかし、のちの研磨の工程により、このような痕跡は見落とされることもある。調整後に刻字をする例もあり、刻字と調整痕跡の重複関係は二つの工程の前後関係を明確に示している。軒平瓦の波状文は、轆轤による調整の前後に施文している。このとき、粘土円筒はまだ柔らかい状態にあり、刻字や施文が容易である。2段の波状文の間にある深い沈線や指頭による押圧波状文の指紋などは、そうした状況を示している。

(iv) 粘土円筒の分割と陰干し

粘土円筒の表面を調整したのち、円筒の内部にはまだ轆轤上の模骨がある。円筒が乾燥する前に模骨を引き出す。そして、刀類の工具で内側から縦方向の切り込み（分割截線）を入れる。切り込みの深さは一致しないが、だいたい丸瓦では厚みの2分の1、平瓦では4分の1ほどである。さらに乾燥したのち、外側から適度な力をかけて円筒を割り、丸瓦や平瓦をつくる。この段階の丸瓦や平瓦の凹面には、製作時の痕跡がよく残っている。布目や轆轤の回



轆轤による調整痕跡と刻印の関係、波状文と研磨との関係
(1・2・4 鄴城出土、3 北魏洛陽城出土)

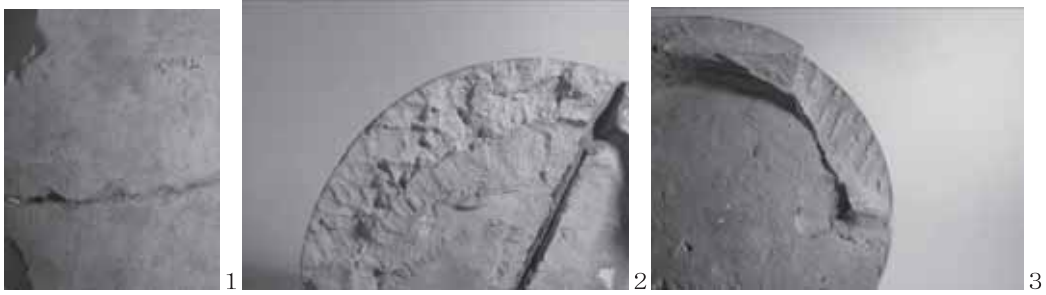


丸瓦、平瓦の研磨工程前、凹面には布目圧痕

転痕跡などは、つづく加工や調整によって次第に不明瞭になっていく。

(v) ケズリ調整と瓦当接合

分割後、ケズリ調整が必要となる。平瓦や丸瓦がきれいに重なるように、一枚一枚の瓦の広端縁と狭端縁の厚みを削って調整する。ケズリの幅は2～4cmでいくつも重なり合い、削った面はやや光沢があることから、ケズリ調整には比較的鋭利な工具を使用していることがわかる。平瓦のケズリ調整はおもに側縁にみられ、丸瓦凹面の側縁寄りにもよくみられる。A類の丸瓦、平瓦は、ケズリ調整後、ほぼ完成の状態に近づく。このとき、軒丸瓦では瓦当の接合工程がある。接合を強固にするために、瓦当裏面に放射状にキザミを入れ、摩擦を増加させる。このほか、丸瓦の内側に接合粘土を貼り、固定する方法もある。



ケズリ調整と瓦当接合部のキザミ
 (1 大同平城出土、2・3 鄴城出土)

(vi) 瓦の研磨と調整

北朝の黒色磨研瓦の表面は、施釉したような状態に見える。これは光沢を出す技術の一つであり、北朝時代の土器の暗文技術と類似している。黒光りした瓦の表面には、断面円形の棒状工具による碾圧を繰り返した痕跡がみられる。これらはすこし凹線状にくぼんでいる場合もある。こうした碾圧の繰り返しにより、瓦の表面は光沢を発するのである。

軒丸瓦の観察から、丸瓦の凸面と瓦当側面は同時に研磨をしており、瓦当接合後に研磨したことがわかる。



丸瓦、平瓦の研磨
 (1 鄴城出土、2 北魏洛陽城出土)

(vii) 陶衣かけ

北朝の黒色磨研瓦の一部には、瓦の表面に液体が流れた痕跡があり、その部分は灰黒色を呈する。瓦の光沢を増すために陶衣をかける方法をとったのか、今後の研究を期待したい。



瓦表面に見える液だれの跡

(viii) 焼成

窯入れして焼成するのが、瓦生産の最後の工程である。

上記の工程は、実際には北朝 B 類瓦の製作工程である。A 類瓦の場合は、第 6、第 7 の工程を経ずして焼成する。

E 北朝瓦の黒色磨研技術と関連問題

北朝の宮室や格の高い建物には、ミガキをかけた瓦が使用される。これは北朝以前にはほとんどみられなかった現象であるが、北朝から隋唐時代にかけてこの技術は継承されていった。黒光りする面は丸瓦凸面と平瓦凹面で、いずれも屋根に葺いたときに露出する部分であり、実用と装飾を兼ねたものである。建物の屋根がつるつるしていれば、塵が積もりにくく、雨や雪も流れやすい。また、黒光りの効果は屋根の美観にも関係してくる。北朝瓦における黒色磨研技術は、造瓦における新機軸といえる。

黒色磨研技術の工程は、洛陽城 1 号房址から大量に出土した文字瓦にも表れている。それらの瓦片の刻字は、工人の姓名、製作日時のほか、瓦の製作工程を記録している。たとえば、「卍 遺主」、「輪」、「削」、「磨」、「毘」、「匠」などがある。「磨」や「毘」は同じ工程であり、研磨を指しているという意見もある。一般には、北朝から隋唐にいたる黒光りする瓦を黒色磨研瓦と称している。

北朝瓦の製作技術について、関連の文献を参照すると、「磨」や「毘」は同じ工程ではない。「磨」は字のごとく、粘土円筒を調整して、ほぼ平らに整える工程である。「毘」は実際には「搨」で、ミガキの工程である。

李誠の『营造法式』の記載は、「磨」や「毘」の意味を理解する手がかりとなる。『营造法式』は宋代の著作ではあるが、内容は隋唐の成熟した技術にも及んでいる。巻 15 の「窯作制度」の内容は、北朝隋唐時代の造瓦技術を研究する上で参考になる。以下に引用する。

造瓦坯、用細膠土不夾砂者、前一日和泥造坯。先於輪上安定札圈、次套布筒、以水搭泥撥圈、打搭収光、取札並布筒曬曝。……凡造瓦坯之制、候曝微乾、用刀畫、每桶作四片（甌瓦作二片……）。線道條子瓦、仍以水飾露明處一辺。……青搨瓦等之制、以乾坯用瓦石磨擦（甌瓦於背、板瓦於仰面、磨去布文）。次用水湿布揩拭、候乾。次以洛河石搨研、次摻滑石末令勻（用茶土搨者、准先摻茶土、次以石搨研）。……凡燒變磚瓦之制、素白窯、前一日裝窯、次日下火燒變、又次日上水窰、更三日開、候冷透、及七日出窯。青搨窯（裝窯、燒變、出窯日分準上法）、先燒芟草（茶土搨者、止於曝露內搭帶、燒變不用柴草、羊糞、油胤）、次蒿草、松柏柴、羊糞、麻胤、濃油、蓋罨不令透烟。

（ ）は割注

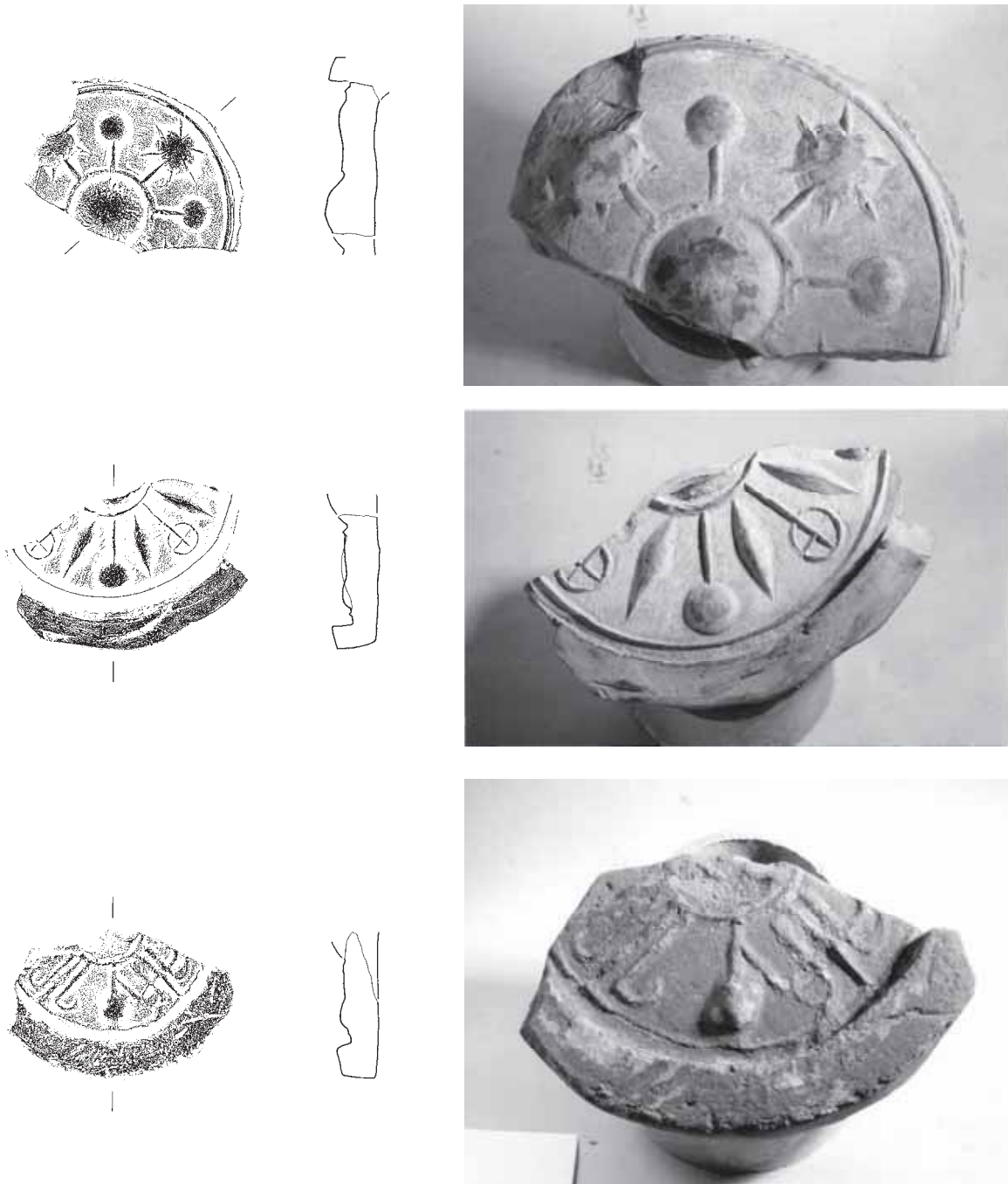
青搨瓦とは、黒色磨研瓦のことである。文献に記載された製作技術から分析すると、粘土捏ねから粘土円筒の分割まで、青搨瓦の製作は普通の瓦と異なるところがない。鍵となる工

程は、「以乾坯用瓦石磨擦」から「不令透烟」までである。

このなかで「以乾坯用瓦石磨擦」は、北魏洛陽城1号房址の瓦の文字の「磨」にあたり、「甬瓦於背（凸面）、板瓦於仰面（凹面）、磨去布文」である。瓦の凹面には布目があり、乾燥したのちに瓦石の工具で磨いて平らにする。こののち、重要なのは「次用水湿布揩拭、候乾。次以洛河石搵研」である。生瓦は乾燥すると堅くなり、研磨処理ができないため、湿った布で生瓦をこすり、生瓦を湿らせたあと、「洛河石」で表面を研磨する。これは、洛陽城1号房址の瓦文字の「昆」にあたる。研磨の工具の名称の「洛河石」も検討すべき問題で、これらは唐宋時代の青搵瓦の研磨工程が北魏洛陽城の時期にはじまるというだけでなく、北朝時代に成熟した黒色磨研技術による影響が大きいとみることができる。

註

- (1) 王銀田・曹臣明・韓生存「山西大同市北魏平城明堂遺址1995年の発掘」『考古』2001年第3期。劉俊喜・張志忠「北魏明堂辟雍遺址南門発掘簡報」『山西省考古学会論文集』3、山西古籍出版社。
- (2) 山西省考古研究所・大同市考古研究所・大同市博物館・山西大学考古系「大同操場城北魏建築遺址発掘報告」『考古学報』2005年第4期。
- (3) 大同市博物館「大同北魏方山思遠佛寺遺址発掘報告」『文物』2007年第4期。
- (4) 雲崗石窟、西冊田出土の瓦は、王雁卿の『古代東亜制瓦技術変遷与伝播国際学術検討会・北京2008』にある。筆者は資料を調査した。岡村秀典ほか「北魏方山永固陵研究」『東方学報』第80冊、2007年。
- (5) 張郁「内蒙古和林格爾土城子古城発掘報告」『考古学集刊』第6期、1989年。
- (6) 内蒙古自治区文物考古研究所『内蒙古出土瓦当』文物出版社、2003年。
- (7) 托克托県博物館館蔵の瓦当資料である。内蒙古自治区文物考古研究所、托克托県博物館「内蒙古托克托県雲中古城発掘簡報」（未発表）。
- (8) 張郁「内蒙古大青山后東漢、北魏古城遺址調査記」『考古通訊』1958年第3期。
- (9) 崔璿「石子湾北魏古城の方位、文化遺存及其他」『文物』1980年第8期。
- (10) 中国社会科学院考古研究所洛陽工作隊「漢魏洛陽城一号房址和出土瓦文」『考古』1973年第4期。
- (11) a.中国社会科学院考古研究所洛陽工作隊「北魏永寧寺塔基発掘簡報」『考古』1981年第3期。b.中国社会科学院考古研究所洛陽漢魏城隊「北魏洛陽永寧寺西門遺址発掘紀要」『考古』1995年第8期。c.中国社会科学院考古研究所『北魏洛陽永寧寺1979~1994年考古発掘報告』中国大百科全書出版社、1996年。
- (12) 楊銜之『洛陽伽藍記』。
- (13) 中国社会科学院考古研究所洛陽工作隊「漢魏洛陽城南郊の靈台遺址」『考古』1978年第1期。
- (14) 中国社会科学院考古研究所洛陽工作隊「漢魏洛陽城北魏建春門遺址的発掘」『考古』1988年第9期。
- (15) 中国社会科学院考古研究所洛陽隊「河南洛陽漢魏故城北魏宮城閭闔門遺址」『考古』2003年第7期。
- (16) 中国社会科学院考古研究所鄴城考古隊「河北臨漳県鄴南城朱明門遺址的発掘」『考古』1996年第1期。
- (17) 中国社会科学院考古研究所鄴城考古隊「河北省臨漳鄴城遺址東魏北齊仏寺塔基遺跡的発現与発掘」『考古』2003年第10期。
- (18) 中国社会科学院考古研究所鄴城考古隊「河北臨漳県鄴北城遺址勘探発掘簡報」『考古』1990年第7期。
- (19) 中国社会科学院考古研究所漢長安城工作隊「西安市十六国至北朝時期長安城宮城遺址的鑽探与試掘」『考古』2008年第9期。
- (20) 内蒙古自治区文物考古研究所『内蒙古出土瓦当』文物出版社、2003年。
- (21) 張克「北魏“瓦削文字”考」『文博』1989年第2期。



参考資料 鄴城出土の軒丸瓦（拓本・実測図は1/4）

北朝制瓦技术的考古学研究

朱 岩 石

(中国社会科学院考古研究所)

北朝的历史，上起登国元年（386）道武帝拓跋珪在牛川（今呼和浩特市附近）即代王位，下至开皇元年（581）杨坚建立隋朝，时间跨度近 2 个世纪。其间，天兴元年（398）定都平城（今大同市），开启北魏近百年的平城时代。孝文帝拓跋宏太和十八年（494）迁都洛阳，在洛阳大规模建造城垣、宫殿、官府。公元 534 年北魏孝武帝元修与高欢矛盾激化，弃洛阳入关投奔宇文泰，北魏分裂。高欢立元善见为孝静帝，自洛阳迁都邺城，邺城遂成为东魏、北齐之都。长安则成为西魏、北周的都城。

北朝时期城址迄今埋藏着当时的建筑遗迹和遗物，成为我们研究北朝社会的实物资料。北朝建筑遗址的出土遗物中，砖瓦残片的数量占据绝对优势，甚至多的让我们熟视无睹。本文期冀通过北朝陶瓦残片的研究，总结当时的制瓦工艺技术。这应当是汉唐时期建筑技术研究的基础工作之一。

一、北朝陶瓦等建筑构件的主要出土地点

目前主要出土北朝陶瓦的遗迹基本集中在北朝时期重要城址及其附近地区，这包括山西大同北魏平城遗址、内蒙古中南部地区、北魏洛阳城遗址、东魏北齐邺城遗址、晋阳古城以及西魏北周长安城遗址等地。

1、山西大同北魏平城遗址周边

北朝前期的北魏平城遗址叠压在今大同市区之下，其中平城遗址内的北魏明堂辟雍遗址、操场城一号建筑遗址，平城遗址附近的方山永固陵思远佛寺遗址、云冈石窟北朝建筑遗迹、册田窑址等地点，集中出土了北朝前期较丰富的陶筒瓦、板瓦等建筑残件。

平城北魏明堂辟雍遗址。位于大同市柳航里住宅小区附近，1995、1996 年由大同市博物馆等单位发掘⁽¹⁾。北魏平城明堂是一处建成于北魏太和十五年（491）的礼制建筑。遗址中央有一边长 42 米的方形夯土台基，方形台基外围是圆形水渠，水渠外缘直径 289-294 米，水渠宽 18~23 米。发掘仅揭露了明堂水渠的西侧一部分，出土了大量残破的筒瓦和板瓦。

大同操场城北魏一号建筑遗址。为一处重要的北魏宫殿建筑遗迹，其位于市区操场城街东侧，山西省考古研究所等单位 2003 年发掘⁽²⁾。该夯土台基被完整揭露，为长方形，坐北朝南，东西 44.4、南北 31.5 米，方向 187 度。经发掘，在台基的东侧和南侧发现集中的瓦砾堆积，出土了近万件北魏时期筒瓦、板瓦等建筑构件残片。

北魏永固陵思远佛寺遗址。位于大同市北约 25 公里的方山南麓，据《魏书·高祖纪上》记

载：北魏太和三年（479）“幸方山，起思远佛寺。”1981年大同市博物馆发掘了该遗址⁽³⁾。寺院遗址坐落在一长方形高台之上，高台东西57.4、南北长87.8米，有围墙遗迹。院内中部残存塔基，塔基正方形，边长约12米。经发掘出土了北魏时期影塑佛像和菩萨像残块遗迹筒瓦、板瓦残片等遗物

在云冈石窟窟顶建筑遗址及文化层中，也出土了一些北朝时期筒瓦、板瓦建筑材料，如“传祚无穷”瓦当等。

西册田窑址。位于大同市西约45公里的桑干河南岸，该窑址出土有大量的瓦片、瓦当等遗物，并有可以采集到烧造失败的残次制品。窑址出土瓦片的样式、特征，基本与北魏平城遗址所见同类标本一致。可以认为，这里是北魏平城时期建造都城的一处窑场⁽⁴⁾。

2、内蒙古中南部北魏城址

拓跋鲜卑魏晋时期在阴山一带逐渐强大，东晋太元十一年（386）鲜卑首领拓跋珪即代王位，并迁都盛乐。在北魏王朝建立后，以土默川地区盛乐为中心，在阴山以北地区建立沃野、怀朔、武川、抚冥、柔玄等六镇（《魏书》卷一六零《地形志》）。北魏王朝建都和设立军镇的做法，巩固了拓跋鲜卑在传统地域的统治。这也是今天在内蒙古中南部发现北朝时期遗迹、遗物的历史背景。

内蒙古中南部出土的北朝时期陶瓦最重要的城址首推和林格尔县土城子古城。内蒙古自治区文物考古研究所等曾多次调查发掘该城址，出土了大量以北朝瓦当为代表的北朝陶瓦等遗物⁽⁵⁾。土城子古城位于呼和浩特市南约40公里，其北侧是土默川平原，南侧为摩天岭山脉。这里是扼守漠北和中原的要冲地带。因其地理位置重要，土城子古城沿用时间很长，古城始建战国时期，沿用至元明时代。北魏曾扩建，号称“盛乐”。土城子古城平面形状呈不规则，由北城、中城和南城套叠、衔接而成，各个城圈时代并未完全明确认定⁽⁶⁾。在以往的调查发掘中，曾发现了北魏时期的瓦当等遗物。

此外还有，托克托县云中古城⁽⁷⁾、四子王旗乌兰花土城子古城⁽⁸⁾、准格尔旗石子湾古城⁽⁹⁾等。

3、北魏洛阳城遗址

20世纪60年代初开始至今，中国社会科学院考古研究所对北魏洛阳城持续进行考古工作，迄今发掘的北魏时期重要建筑遗址有，北魏内城南一号房址、永宁寺遗址、南郭城明堂辟雍遗址、内城东门建春门遗址、西郭城大市遗址、宫城正门阊阖门遗址等。

北魏内城南一号房址。位于北魏内城南略偏西侧、宫城正门南面的铜驼街东侧，1963年正式勘探发掘⁽¹⁰⁾。该建筑基址已受到破坏，残存形状近方形，东西残长约16米，南北近17米，方向5度。房址墙垣内外壁原为粉壁朱墙。出土的遗物种类主要以砖瓦和瓦当等建筑材料为主。其中建筑瓦件主要有板瓦、筒瓦、瓦当、瓦钉以及兽面雕塑砖残件。这批建筑瓦件的集体特征为磨光面，显然是北魏时期的建筑遗存。发掘者根据文献记载推测，一号房址应是北魏宗正寺或太庙建筑的一部分。

北魏永宁寺遗址。永宁寺是北魏洛阳城内最大的佛寺，胡太后资助建于孝明帝熙平元年（516）。据文献记载，该寺院位于宫城西南部太尉府之西。孝武帝永熙三年（534）佛塔遭雷击起

火焚毁，寺院自此毁弃。1979-2003年先后对该寺院进行多次发掘⁽¹¹⁾，寺院平面呈长方形，四面有墙垣，南北301米，东西212米。其中发掘的主要遗迹有寺院中央的佛塔塔基、寺院南门、西门等。寺院正中有方形木塔基址，残存夯土台基边长约38.2米。在对塔基和寺院门址发掘过程中，出土了许多北魏时期的建筑材料，其中主要有板瓦、筒瓦和瓦当、兽面塑雕砖和鸱尾残块等。其中永宁寺建造与毁弃时代明确，出土的遗物则成为研究北魏时期建筑瓦件的重要资料。

明堂、辟雍和灵台礼制建筑群。这些礼制建筑群始建于东汉，北魏时期曾修建明堂辟雍，灵台则废弃不用，灵台旧基之上还一度建造了砖塔⁽¹²⁾。20世纪70年代对灵台等建筑的调查发掘中，北魏文化层中也出土了砖瓦构件⁽¹³⁾。

内城东门建春门遗址。发掘于1985年，是北魏洛阳城内城东墙确认的3座城门中最北侧的一座⁽¹⁴⁾。城门基址呈长方形，南北30、东西12.5米。城门形制为一门三道。在北魏文化层中，出土量最大的是板瓦和筒瓦碎片。

宫城正门阊阖门遗址。2001-2002年全面揭露了阊阖门遗址⁽¹⁵⁾，结果显示，该宫城门由正中城门建筑、两侧阙台和门前广场组成。正中城门建筑仅存建筑台基，台基东西44.5、南北24.4米。有三门道。东西两侧对称分布有夯土阙台遗迹，阙台和正中城门围合出宫门前广场空间。

4、东魏北齐邺城遗址

邺城遗址位于河北省临漳县西南20公里处，由南北毗邻的两座城址组成。邺北城始建于曹魏，十六国时期的后赵、前燕、冉魏先后定都于此。公元534年东魏迁都邺城，在邺北城南侧营建南城。1983年以来邺城考古队对邺城遗址持续进行考古勘探和发掘。重要的发掘有北朝邺南城朱明门遗址、赵彭城东魏北齐寺院遗址、邺城三台遗址及城墙、道路遗迹等。

经过考古发掘，出土了大量建筑材料和构件，为我们探讨北朝时期陶瓦等建筑构件制作技术及演变提供了丰富的资料。

北朝邺南城朱明门遗址。1996年发掘，它是一座双阙楼式的城门。城门墩台的夯土台基东西84、南北20.3米。城门东西侧对称建造连廊和阙楼，残基长约34米，连廊南端台基约15米见方。两阙楼相距56.5米。朱明门前形成一个由阙楼和城门三面围合的空间，面积近2800平方米。从朱明门遗址出土了大量与城门建筑相关的砖瓦遗物⁽¹⁶⁾。

赵彭城东魏北齐寺院遗址。经勘探发掘，该佛寺平面布局的特点，是以方形木构佛塔为中心、以壕沟围和的正方形寺院。2002年发现并发掘了东魏北齐佛寺塔基遗迹，2003-2005年发掘了佛寺遗址中的其他遗迹⁽¹⁷⁾。邺南城佛寺塔基遗迹包括塔心实体等地上部分和佛塔基槽地下部分，两部分均为夯土和砖石构筑。塔基地下基槽为正方形，边长约45米。塔心实体的南边保存较好，推测正方形塔心实体边长约30米。发掘中出土了北朝时期的砖瓦等建筑构件。

邺城三台遗址、城墙及道路遗迹等。邺城铜雀三台遗迹是目前曹魏邺城遗址仅存于地面的遗存。金虎台居三台最南，位于西城门金明门之北、西城墙之上，其夯土台基目前保存较好，台基南北120、东西71、高12米。铜雀台位居三台中间，南距金虎台83米。铜雀台已被严重破坏，仅存台基东南角，夯土台基现存南北50、东西43、高4-6米。冰井台则完全被漳河的洪水吞噬殆

尽，具体位置迄今无法确认。为确定三台的准确位置，曾对遗迹的边缘进行过小规模发掘，在
北朝文化层中出土了大量黑光板瓦、筒瓦残片⁽¹⁸⁾。

5、东魏北齐晋阳城遗址

晋阳城遗址位于太原市西南部，面积 20 余平方公里。在东魏、北齐时期具有陪都性质，隋唐
时期沿用。目前发现了晋阳古城遗址四至的城墙，但城墙时代尚待进一步确认。近年在西城墙的
试掘工作中了解到城墙时代的复杂性，同时也发现北朝时期建城的夯土遗存。西城墙南北总长
3750 米，城墙宽 18-20 米，方向北偏东 18 度。北半部在地表尚有残存。发掘出土的少量板瓦、
筒瓦残片被确定为北朝时期。

6、十六国北朝长安城宫城遗址

2003-2007 年在西汉长安城东北部经过勘探、发掘发现⁽¹⁹⁾。其位置在汉长安城东北部宣平门
大街、洛城门大街和北城墙、东城墙之间的长方形范围内，由东西两座小城组成。发掘地点位于
西小城南墙，出土遗物中有十六国、北朝时期的砖瓦残片。

二、北朝陶瓦时代特色与主要类别

北朝陶瓦包括了筒瓦和板瓦两类，均为建筑顶部最主要的材料。目前对瓦当的研究不乏其人，
盖由于瓦当的图案、形制更吸引研究者和收藏者的目光。但众所周知，瓦当并非独立的建筑材料，
它属于建筑屋檐部位筒瓦的附属部分而已。尽管单独研究瓦当未尝不可，但研究筒瓦制作工艺时，
则必须将筒瓦与瓦当作为一个整体来考虑。北朝时期陶瓦标本出土地点相对集中，我们发现在上
述较集中的区域内，北朝板瓦和筒瓦种类比较单一，除了表现在瓦当方面的筒瓦样式有所变化外，
一般的板瓦、筒瓦形式也并没有太复杂的变化。基于上述具体情况，我们参照北朝城址前期和后
期的时代变化，对于不同时段出土的北朝板瓦、筒瓦资料，进行概要的分类，并就其时代特点进
行简要梳理。

从北朝都城的建设规划和发展角度看，北朝城址可划分为前期和后期：北朝前期是以平城为
都城的时期，或称平城时期；北朝后期是迁都洛阳之后的时期，或可称为洛阳—邺城时期。据此，
北朝前期陶瓦主要出土地点有，山西大同北魏平城遗址、内蒙古中南部地区大部分城址；北朝后
期陶瓦主要出土地点有北魏洛阳城遗址、东魏北齐邺城遗址、晋阳古城遗址、西魏北周长安城遗
址等。

下面按照不同时代遗址为先后次序，就有代表性的陶瓦分类进行叙述。

为了叙述方便，在此统一本文的叙述名称，依据板瓦、筒瓦在屋顶铺葺的正反、上下关系，
将瓦在屋顶偏高的一端称为瓦上缘，即板瓦窄头一端和筒瓦收缩的一端为瓦上缘；瓦在屋顶偏低
的一端称为瓦下缘，即板瓦宽头或装饰波纹的一端和筒瓦衔接瓦当的一端为瓦下缘。同样道理，
板瓦、筒瓦的两侧边缘，则称为侧缘。板瓦和筒瓦的凸凹两面，作为使用中的表面、背面正好相
反，为了阅读更加直感，文中依旧使用凸面和凹面的名称。筒瓦上缘的收缩部位，沿用以往通用
的瓦舌之名称。

1、北朝前期板瓦

有素面灰色板瓦和压光黑灰色板瓦两类。若依板瓦使用功能划分，又可分为普通板瓦和屋檐板瓦之别。

A类、素面灰色板瓦

凹面布纹，凸面素面，个体大小有所区别。如西册田窑址出土标本，胎质略夹砂，火候较高。凸面抹平、修整为无纹素面。瓦下缘侧面有手指按压而成的波纹装饰。又如，操场城一号遗址标本 T201③：3，长 45.6、瓦上缘宽 35.3、瓦下缘宽 31、厚 1.5-2 厘米。瓦下缘有指压波状装饰。

B类、压磨黑光板瓦

胎质细腻，凹面压光，呈黑色，凸面素面，呈黑色或灰色。个体大小有所差别。如操场城一号遗址标本 T510③：13，长 81、瓦上缘宽 60、瓦下缘宽 50、厚 2.8 厘米。凸面黑色，瓦下缘有波状花边装饰。操场城仓储遗址 M204，长 55.5、瓦下缘宽 37、瓦上缘宽 31.2、厚 2.8 厘米。凸面素面黑灰色，瓦下缘有波状花边装饰。再如北魏平城明堂遗址出土 T102:1，长 51、宽 42、厚 2-2.5 厘米。

2、北朝前期筒瓦

A类、素面灰色筒瓦及瓦当

胎质灰色，凸面素面无纹，凹里有布纹。如操场城仓储遗址 T613③：2，残长 19、径 14.5、厚 1.5-2.2 厘米。通体有火烧烟熏的痕迹。该筒瓦下缘衔接有莲花纹瓦当，在瓦当的背面可见一些细线划痕，筒瓦与瓦当粘接处被抹成圆弧状。

瓦当

大同平城出土的 A 类筒瓦与莲花瓦当衔接。内蒙古出土的北魏时期瓦当多数认为平城时期遗物⁽²⁰⁾，其中有莲花瓦当、兽面瓦当、“传祚无穷”瓦当、“富贵万岁”瓦当等，从瓦当质地观察，其表面没有压光处理，故这类瓦当衔接的筒瓦很可能属于没有压光的 A 类筒瓦。

B类、压磨黑光筒瓦及瓦当

目前能够确认的北魏前期筒瓦绝大多数属于压磨黑光筒瓦。其特点是凸面压磨光滑，呈现黑光质地，凹面有清晰的布纹。个体大小有所区别。如操场城一号遗址 T410③：3，通长 75.5、直径 23、瓦舌长 7、厚 2-3 厘米。质地细腻，制作规整。凹面留有清晰的布纹。操场城仓储遗址 T517L204③，表面呈黑色，质地细腻，打磨光滑，里面布满了内模具留下的布纹。在舌面上刻一“白”字。通长 57，直径 18-18.3、厚 1.7-2.5、舌长 5.8 厘米。

瓦当

在大同平城遗址与 B 类筒瓦衔接的瓦当有莲花瓦当、兽面瓦当、“万岁富贵”瓦当等，这些瓦当与 B 类筒瓦都被压磨光滑。

其中的文字瓦当，如操场城一号遗址 T610③：5，直径 17.8，当沿宽 1.5 厘米。当面设凸起“井”字界框，有隶书文字，按照“上、下、右、左”的顺序书“万岁富贵”。表面压光，黑色。

同类瓦当标本 T510③: 8, 直径 13.3、当沿宽 1 厘米。灰黑色, 当面磨光。此瓦当文字完整, 制作规范。瓦当与筒瓦衔接角度为 102 度。

兽面瓦当, 当面磨光, 当沿较宽, 制作十分规整。当心饰一高浮雕兽头, 大眼短鼻, 大口露齿。兽面瓦当大者直径达 25cm, 但无完整标本。略小的兽面瓦当图案与前者大体一致。如明堂遗址 96MN: 3, 当面直径 17、厚 2.5 厘米。操场城一号遗址 T610②: 11, 当面直径 16.3, 轮宽 2.5 厘米。

3、北朝后期板瓦

A 类、素面灰色板瓦

邺南城西郭城内建筑遗址出土 A 类板瓦, 灰色。凸面不平整, 原有较粗绳纹, 后经涂抹修整, 凹面残存有布纹或抹过的细绳纹痕迹。如 94JYT554-559②:7, 长度残, 宽度完整, 残长 23.8、宽 29.8、厚 1.7-2.0 厘米, 瓦下缘有指压单波状花纹。又如 94JYT554-559②:8, 四边均残, 残长 15、残宽 14.2、厚 1.6-2.4 厘米。

B 类、压磨黑光板瓦

在等级规模较高的遗址中比较常见, 如北魏洛阳城一号房址、北魏永宁寺遗址、邺城三台遗址等。

北魏洛阳城一号房址出土的完整板瓦, 长 49.5、宽 33、厚 2.5 厘米。板瓦的数量很多, 形状近梯形, 即头宽尾窄。这些板瓦主要呈深褐色, 质密坚实, 制作精致。一般板瓦的凹面被磨制光滑, 凸面相对略比凹面粗糙, 但也经过大致刮磨, 板瓦的左右两个侧缘多被刮削加工。北魏永宁寺遗址出土 B 类板瓦, 规格、质地、颜色和制作方法, 与在北魏一号房址出土的 B 类板瓦基本一致, 是北魏后期的板瓦标本。同时, 出现了比一号房址的种类更加丰富, 如不仅有单层波纹花边装饰板瓦下缘标本, 还有双层波纹花边装饰板瓦下缘的实例。

邺城遗址出土东魏北齐时期的板瓦, 多为黑色或黑灰色, 质地细密坚硬。完整的长 41.5、宽 31、厚 2-3.5 厘米。凸凹两面大多光滑。板瓦下缘由指压单波纹或双波纹装饰。有的板瓦还有文字戳记。如标本 88JYT19③: 1, 泥质, 黑灰色, 长 31.4、宽 25-22、厚 7.4-5.5 厘米。凸面前半部压光, 后半部有轮修制作痕, 凹面压光, 涂抹有一种黑色物质。瓦下缘先经切刻, 然后用手指压按出双层波纹装饰。瓦上缘呈圆唇状。板瓦两侧有自内向外的切割痕。又如邺南城朱明门遗址出土的标本 T141②:39, 泥质, 灰色。残长 9.8、宽 26.4、厚 2.8 厘米。凹面、凸面均经压磨光滑, 呈现黑灰色。接近瓦下缘部位残留轮修制作的旋痕, 板瓦凹凸面均涂抹了一种黑色物质。瓦下缘侧面深度剔刻出重沿, 然后上下沿再分别浅刻, 再其后以手指按压出波纹, 形成瓦下缘的双波纹装饰。又如标本 86JYT154 西扩方⑤:08, 泥质细密, 深灰色。基本完整, 长 50.7、宽 29.7-34.5、厚 2.8 厘米。凹面压磨光滑, 凸面靠近下缘的半部分压光, 其余半部残留轮修制作痕。瓦下缘以剔刻后按压的技法, 制作出双波形纹装饰。板瓦上缘呈圆唇状。

4、北朝后期筒瓦

A类、素面灰色筒瓦及瓦当

邺南城西郭城内建筑遗址出土筒瓦，灰色，半圆筒状，制作规整。凸面素面无纹饰，凹面有较清晰的布纹。同时凹面基本可以观察到有纵向的沟痕，少数标本还可看到横向泥条盘筑残痕。如 94JYT554②:2，长 31.6、直径 14.1、厚 1.3-1.6、瓦唇斜长 5.2 厘米。又如 94JYT555②:2，长 35、直径 14.8、厚 1.5-1.9、瓦唇斜长 4.5 厘米。

B类、压磨黑光筒瓦及瓦当

与 B 类板瓦类似，B 类筒瓦也常见于等级规模较高的遗址中。

北魏洛阳城一号房址出土的筒瓦，一般长 49.5、直径 13、厚 2.3 厘米。黑灰色，质密坚实，制作精致。此类筒瓦皆凸面压磨光滑，呈发亮的黑色或灰色，其工艺处理方法和板瓦凹面的做法是一致的。筒瓦凹面有较清晰的布纹，有的衬垫布筒的褶皱痕迹清晰可辨。瓦唇部为圆弧形，一般瓦唇部都下斜，有些筒瓦瓦唇上还有刻划文字或戳印。筒瓦的左右侧缘多被刮削平整，部分筒瓦的侧缘还可见到刀具从瓦坯内侧切割的痕迹。有些筒瓦侧缘也有刻划文字。北魏永宁寺遗址出土的 B 类筒瓦，与一号房址出土的筒瓦基本一致，一般直径约 15、厚约 2.3 厘米。永宁寺筒瓦的瓦唇较长，长 3.5-6 厘米。

邺城遗址出土筒瓦，多呈黑灰色，质地细密坚硬且厚重。完整者长 41-48、直径 15.5-18、厚 1.8-2.5 厘米。凸面经过压磨，表面光滑。凹面为布纹。如标本 92JYT29⑦:04，长 40.5、直径 14.8、厚 1.7 厘米。筒瓦上缘瓦唇凸面有文字戳印。中部有瓦钉孔，下缘衔接莲花瓦当。又如标本 90JYT26⑤:09，凸面压磨黑光的表面有局部脱落。筒瓦中部有一直径 1.2 厘米瓦钉孔。筒瓦凹面有布纹，可见清晰布褶痕迹。下缘衔接莲花纹瓦当，图案为复瓣莲花，莲花共 8 瓣。再如邺城朱明门遗址出土的标本 86JYT116 西隔梁北训④:46，泥质，深灰色，质地细腻坚硬。筒瓦长 36.7、直径 14.8、厚 1.5-2.8 厘米；瓦当直径 14.2 厘米。筒瓦凸面压光，凹面有布纹，布纹中又一纵向的褶绉痕。筒瓦下缘衔接瓦当，瓦当为单瓣莲花纹图案。

瓦当

在北魏洛阳城、东魏北齐邺城等遗址与 B 类筒瓦衔接的瓦当种类较多，其中尤以北魏永宁寺遗址出土的瓦当丰富。但大略而言，北朝后期的 B 类瓦当有莲花瓦当、兽面瓦当两大类。北魏洛阳城一号房址、北魏永宁寺遗址出土的莲花瓦当和兽面瓦当，火候较高，质量较好，表面皆抹成黑光面，制作极为规整。如北魏洛阳城一号房址出土六瓣宝装莲花瓦当，径 15.6 厘米，厚 1.6 厘米。当沿较为宽平。兽面纹瓦当，径 15.6 厘米，厚 1.6 厘米。中央为一凸起的半浮雕兽面，当沿较为宽平。

而北魏永宁寺遗址出土的莲花化生瓦当、忍冬纹瓦当、变形忍冬纹瓦当等，仅见于该寺院遗迹，显然这是为营造佛寺特意设计烧造的。

邺城遗址出土的北朝后期瓦当，基本样式为莲花瓦当。

三、北朝陶瓦制作技术考古学观察

上述出土标本是考察北朝板瓦、筒瓦制作工艺的基础资料，通过梳理这些资料，可以看出从原始部族发展来的鲜卑族建立北魏王朝后，在制造建筑材料方面并不原始，反而是起点很高，这应该是继承了魏晋以来的工艺传统的结果。

北朝时期 B 类板瓦、B 类筒瓦，即压磨黑光的板瓦和筒瓦是陶瓦中工艺最复杂的产品，至北朝后期更加成熟，这些技术应对于隋唐时期建筑工艺产生了较深远的影响。这种制作工艺是北朝陶瓦制作技术的代表，本文将重点考察、研究。

从各地出土的北朝陶瓦观察，我们将北朝陶瓦制作技术的主要步骤，做了如下的划分：1、特制陶泥；2、瓦坯圆桶成型；3、轮修坯桶与装饰；4、分割坯桶与晾干；5、刮削调整与衔接瓦当；6、瓦坯压光与修整；7、瓦坯上浆；8、入窑烧成。下面分别概述。

1、特制陶泥

出土的北朝时期板瓦、筒瓦多数质地细腻。从一些瓦片还可以观察到类似于揉制陶泥之后形成的纹理，这说明制瓦之前陶泥经过了沉淀、揉制的过程。厚重的大型板瓦使用陶土量大，但是在其碎片中很少有沙砾、杂质等，这种特制的陶泥应该是水洗沉淀，并经过一段时间放置熟腐的过程。

2、瓦坯圆桶成型

目前发现的北朝时期筒瓦和板瓦，都显示了瓦坯圆桶采用的是泥条盘筑制作的工艺，似乎还没有发现其他制做瓦坯圆桶的方式。泥条盘筑的痕迹在筒瓦的凹面显示的最为清晰，一些板瓦的碎片也支持这样的结论。但板瓦、筒瓦瓦坯圆桶内模形制不一致。

3、轮修坯桶与装饰

制作瓦坯圆桶完成后，在旋转的轮台上轮修瓦坯圆桶，轮修时的痕迹在考察陶瓦的时候经常会遇到，但是有时也由于后期压光工艺的干扰，这样的痕迹也容易被忽视掉。轮修之后有的板瓦或筒瓦按捺上戳记，从戳记和轮修的叠压关系可以明确断定两者的相互顺序。

房檐板瓦下缘的波纹装饰应该在轮修的前后完成。这时瓦坯处于便于塑型的软泥状态，易于剔刻和压印。双层波状纹之间深深的剔刻槽、用手指按压波纹的指纹痕迹，都说明了这样制作阶段。

4、分割坯桶与晾干

修整陶瓦外表时，瓦坯内部还有轮台上的内模支撑，在瓦坯没有完全干透之前，瓦坯的内膜架子撤出。这时用刀类锐器从内向外切割出一条分割板瓦或筒瓦的纵线，纵线切割深度不一致。一般情况下，筒瓦的瓦坯圆筒一分为二、板瓦的瓦坯圆筒一分为四。随后进一步干燥后，以适当的外力使瓦坯圆桶裂开，形成一块块的板瓦或筒瓦。此时的板瓦和筒瓦凹面残存大量制作时留下来的痕迹，如布纹、轮修旋纹等，这些痕迹有的在进一步的加工和修饰过程中逐渐模糊不清。

5、刮削调整与衔接瓦当

陶瓦一片一片分开后，需要进行刮削。例如为了板瓦之间或筒瓦之间上下衔接顺畅，通过刮削调整每片上下缘部位的薄厚。刮削痕宽2~4厘米，密集叠压，平面较光滑，反映了刮削工具似为较锋利的刀具。板瓦刮削痕多在两侧缘的窄面上；筒瓦凹面靠近瓦棱处也往往有纵向刮瓦痕迹。A类筒瓦、板瓦在刮削调整之后，瓦坯制作已接近完成。这时屋檐筒瓦进入到衔接瓦当步骤。为了瓦当与筒瓦衔接牢固，一般在瓦当背面划刻放射状细线，以便增加摩擦。此外，还有在筒瓦的内侧与瓦当的背侧抹泥以加固方法。

6、瓦坯压光与修整

北朝黑光陶瓦表面给人一种上了釉的感觉，这是一种压光工艺，与北朝时期陶器暗纹工艺类似。通过仔细观察这类瓦的表面，可以看出黑光陶瓦表面有类似圆棒状工具往返碾压的痕迹，这些痕迹甚至略呈凹陷。通过这样反复碾压，陶瓦表面被处理的光洁明亮。

观察衔接瓦当的筒瓦发现，筒瓦凸面和瓦当侧面一起被进行了压光的处理，这表明带瓦当的筒瓦进行压光处理在后，而衔接瓦当环节在前。

7、瓦坯上浆

在观察北朝黑光陶瓦时，我们发现了极个别的标本表面有液体流淌的滴痕，液体呈黑灰色。是否为了提高陶瓦光洁度，采取的上浆工艺，还有待大量观察研究。

8、入窑烧成

入窑烧造是生产陶瓦最后的工序。

这实际是北朝B类陶瓦经历的全部步骤，而A类陶瓦无需第6、第7步骤就可以入窑烧造了。

四、北朝时期陶瓦压磨黑光工艺的贡献与相关思考

北朝宫室、高等级建筑往往使用压光的板瓦、筒瓦。这是北朝之前罕见的现象，而北朝之后的隋唐时期则沿承了这种技术。这种黑光发亮的表面主要是筒瓦的凸面和板瓦的凹面，这都是建筑瓦顶的表面部位，这显然具有实用和装饰双重功能。一方面，可以使得建筑顶部的表面光滑，防止尘土积聚和雪雨渗漏；另一方面，黑灰发亮的建筑顶部大气美观。可以说北朝陶瓦制作工艺中压磨黑光技术最具创新意义。

压磨黑光的工艺步骤在北魏洛阳城一号房址出土大量带文字的瓦片也有体现。一号房址瓦片刻文内容记录工匠姓名、制瓦时间，也记录了一些制瓦工种，这包括有𠄎遗主、轮、削、磨、昆、匠等。有的学者认为“磨”、“昆”是同一个工序，就是把陶瓦磨光⁽²¹⁾。于是迄今一般都把北朝至隋唐时期黑光陶瓦称为“磨光黑瓦”。

根据观察北朝制瓦工艺，并参考有关文献，可以初步认为“磨”、“昆”并不是同一个工序，“磨”之工艺就是字面意思，是将瓦坯调整比较平整。“昆”之工艺实际是“搨”，即压光之工艺。

李诫《营造法式》的有关记载可以帮助我们深刻理解“磨”、“昆”的本义。《营造法式》虽为宋人著作，但其内容多涉及了隋唐时期成熟的建筑技术。其中，《营造法式》卷十五“窑作制度”

条之内容，对于研究总结北朝隋唐时期陶瓦制作亦有参考价值。引文如下：

“……造瓦坯：用细膠土不夾砂者，前一日和泥造坯。先于轮上安定札圈，次套布筒，以水搭泥撥圈，打搭收光，取札並布筒曬曝。……凡造瓦坯之制：候曝微乾，用刀畫，每桶作四片。〔甌瓦作二片……〕線道條子瓦，仍以水飾露明處一边。”“青棍瓦等之制：以乾坯用瓦石磨擦；〔甌瓦於背；板瓦於仰面，磨去布文；〕次用水濕布揩拭，候乾；次以洛河石棍研；次摻滑石末令勻。〔用茶土棍者，准先摻茶土，次以石棍研。〕”“……凡燒變磚瓦之制：素白窰，前一日裝窰，次日下火燒變，又次日上水窰，更三日開窰，候冷透，及七日出窰。青棍窰，裝窰、燒變，出窰日分準上法，先燒芟草，茶土棍者，止於曝窰內搭帶，燒變不用柴草、羊屎、油糞次蒿草、松柏柴、羊屎、麻粍、濃油，蓋窰不令透烟。”

青棍瓦就是压磨黑光的陶瓦。从文献记载的制作工艺分析，而开始的和泥到分割瓦坯圆桶，青棍瓦制作应与一般陶瓦制作无异，而关键步骤，是从“以乾坯用瓦石磨擦”到“不令透烟”为止的工艺过程。在这关键工艺步骤中“以乾坯用瓦石磨擦”就是北魏洛阳城一号房址陶文中的“磨”，在这个工艺中“筒瓦于背（即凹面），板瓦于仰面（亦为凹面），磨去布纹”，由于陶瓦凹面有布纹，瓦坯干后，即用瓦石类工具打磨平整。此后又一个关键步骤是“次用水濕布揩拭，候乾；次以洛河石棍研”。由于瓦坯干燥较硬，无法进行压光处理，于是用湿布擦拭瓦坯，瓦坯略湿之后用“洛河石”进行表面压光，这就是北魏洛阳城一号房址陶文中的“昆”。压光工具的名称“洛河石”也非常值得思考，这岂不是说明唐宋时代青棍瓦的压光工艺源于北魏洛阳城时期，可见北朝时期成熟的陶瓦压磨黑光工艺影响深远。

注 释

- （1）王银田、曹臣明、韩生存《山西大同市北魏平城明堂遗址 1995 年的发掘》，《考古》2001 年第 3 期；刘俊喜、张志忠《北魏明堂辟雍遗址南门发掘简报》，山西古籍出版社《山西省考古学会论文集三》。
- （2）山西省考古研究所、大同市考古研究所、大同市博物馆、山西大学考古系《大同操场城北魏建筑遗址发掘报告》，《考古学报》2005 年第 4 期。
- （3）大同市博物馆：《大同北魏方山思远佛寺遗址发掘报告》《文物》2007 年第 4 期。
- （4）云冈石窟、西册田出土陶瓦资料见于王雁卿提交“古代东亚制瓦技术变迁与传播国际学术研讨会·北京 2008”论文。笔者调查资料。冈村秀典等《北魏方山永固陵研究》，《东方学报》第 80 册，2007 年。
- （5）张郁《内蒙古和林格尔土城子古城发掘报告》，《考古学集刊》第 6 期，1989 年。
- （6）内蒙古自治区文物考古研究所《内蒙古出土瓦当》，文物出版社，2003 年。
- （7）见托克托县博物馆馆藏瓦当资料。内蒙古自治区文物考古研究所、托克托县博物馆：《内蒙古托克托县云中古城发掘简报》（待刊）
- （8）张郁：《内蒙古大青山后东汉、北魏古城遗址调查记》，《考古通讯》1958 年 3 期。
- （9）崔璿：《石子湾北魏古城的方位、文化遗存及其它》，《文物》1980 年 8 期。
- （10）中国科学院考古研究所洛阳工作队《汉魏洛阳城一号房址和出土的瓦文》，《考古》1973 年 4 期。
- （11）a. 中国社会科学院考古研究所洛阳工作队：《北魏永宁寺塔基发掘简报》，《考古》1981 年 3 期。b. 中国社会科学院考古研究所洛阳汉魏城队：《北魏洛阳永宁寺西门遗址发掘纪要》，《考古》1995 年 8 期。c. 中国社会科学院考古研究所：《北魏洛阳永宁寺 1979-1994 年考古发掘报告》，中国大百科全书出版社，1996 年。
- （12）杨銜之《洛阳伽蓝记》。

- (13) 中国社会科学院考古研究所洛阳工作队《汉魏洛阳城南郊的灵台遗址》，《考古》1978年1期。
- (14) 中国社会科学院考古研究所洛阳工作队《汉魏洛阳城北魏建春门遗址的发掘》，《考古》1988年9期。
- (15) 中国社会科学院考古研究所洛阳工作队《河南洛阳汉魏故城北魏宫城闾阖门遗址》，2003年《考古》7期。
- (16) 中国社会科学院考古研究所等邺城考古队《河北临漳县邺南城朱明门遗址的发掘》，《考古》1996年1期。
- (17) 中国社会科学院考古研究所等邺城考古队《河北省临漳邺城遗址东魏北齐佛寺塔基遗迹的发现与发掘》，《考古》2003年10期。
- (18) 中国社会科学院考古研究所等邺城考古队《河北临漳县邺北城遗址勘探发掘简报》，《考古》1990年7期。
- (19) 中国社会科学院考古研究所汉长安城工作队《西安市十六国至北朝时期长安城宫城遗址的钻探与试掘》，《考古》2008年9期。
- (20) 内蒙古自治区文物考古研究所《内蒙古出土瓦当》，文物出版社，2003年。
- (21) 张克：《北魏“瓦削文字”考》，《文博》1989年2期。

3 南朝瓦総論 (原題：南朝瓦的研究综述)

賀雲韜
(南京大学)

A はじめに

南朝の瓦は1949年以前に南京で発見され⁽¹⁾、1970年代には南京市内の清涼山付近、すなわち六朝時代の石頭城でも出土した⁽²⁾。そして80年代以降は、江西省の九江⁽³⁾、成都⁽⁴⁾、鎮江⁽⁵⁾、南京⁽⁶⁾、広州⁽⁷⁾、徐州⁽⁸⁾などでも出土している。しかし、これらの資料はいまだその重要性が十分に認識されていない。筆者は90年代にこの課題に注目し、1998年に南京で開催された「六朝文化についての国際学術シンポジウム」において「六朝瓦当の基礎的研究」という論文を発表した⁽⁹⁾。その後も一連の発掘資料の報告と研究論文の発表をおこない⁽¹⁰⁾、同時に、王志高先生も自身の重要な成果を発表している⁽¹¹⁾。

南朝瓦の研究については、研究者の関心を得たとはいえ、筆者もふくめて瓦の製作技術的側面についての研究は未だ不十分である。

2006年3月、筆者は南京において、光栄にも朱岩石氏を筆頭とする日中共同研究「古代東アジアの造瓦技術の変遷と伝播」の一員として、南京の梁蕭偉墓門闕遺跡、鐘山南朝祭壇遺跡、鐘山2号寺廟遺跡(南朝から唐代まで)、南朝宋代の三山街「明堂」磚出土地点、南京付近の六朝窯跡などから出土した瓦磚資料を共同で観察した。この共同組織は瓦の拓本を作成した⁽¹²⁾。これらの瓦資料の大多数はこれまで未発表であり、国内外の研究者が利用できるように、以下、本稿では資料紹介と製作技術に関する初歩的な分析をおこなう。

B 鐘山南朝祭壇遺跡の出土瓦

鐘山南朝祭壇遺跡は1999年4月に発見され、その後、2001年3月まで2年近く発掘調査をおこなった。前後して1号壇、2号壇、3号建築区を発見し、1号壇の資料についてはすでに略報を発表した⁽¹³⁾。2号壇、3号建築区の資料は現在整理中である。今回発表するのは、1号壇、2号壇、3号建物区から出土した資料の一部である。

(i) 軒丸瓦

標本1 (T901③:29) 灰色で外縁が高く、やや軟質。胎土は比較的粗い。外縁は半分欠けており、文様は八弁蓮華文。蓮弁は細身で、中央に稜線がとおる。蓮弁のあいだの間弁の頂部は3つに分かれた尖頭の蓮蕾形である。その輪郭はかなり直線的で、間弁の軸も明確である。

中房は突出し、9つの蓮子（1+8）をかざる。蓮華と外縁の間には圏線が一周する。瓦当裏面は平坦。丸瓦の接合痕跡が明瞭で、接合部両端には指頭圧痕がある。瓦当径 14.4 cm、外縁幅 1.0 cm、外縁高 0.8 cm、中房径 2.8 cm、厚さ 2.3 cm（附図 1-1）。

標本 2（T1206④：10） 青灰色の完形で、やや軟質。胎土は比較的細かい。八弁蓮華文で、蓮弁は幅があり、中央に稜線がとおる。間弁は大きなT字形で、輪郭は直線的である。中房はわずかに突出し、蓮子もはっきりしない。蓮弁と外縁の間には圏線があるが、不明瞭である。瓦当裏面は丁寧に調整し、接合痕跡も明確で、ナデつけた痕跡がある。瓦当径 13.8 cm、外縁幅 1.1 cm、外縁高 0.8 cm、中房径 2.9 cm、厚さ 1.9 cm（附図 1-2）。

標本 3（T2702③：18） 灰色。完形で外縁が高く、全体に粗雑なつくりである。やや軟質で、胎土は比較的粗い。九弁蓮華文で、蓮弁は細身。間弁は、頂部が三叉の尖頭で、輪郭は直線的で垂直に立ちあがる。間弁の軸は不明確である。中房は突出せず、周囲には圏線が一周し、蓮子は8つ（1+7）だが、すでに磨耗している。蓮華と外縁の間にも圏線が一周する。瓦当裏面は凹凸があり、接合痕跡は明確でない。瓦当径 14.0 cm、外縁幅 1.0 cm、外縁高 1.1 cm、中房径 3.0 cm、厚さ 2.3 cm（附図 1-3）。

標本 4（T2702③：31） 青灰色。高い外縁で完形。やや硬質で、胎土も比較的細かい。八弁蓮華文で、蓮弁は幅があり、稜線がとおる。間弁は太く大きなT字形で、輪郭は直線的である。中房はやや突出し、中央がくぼむ。蓮子は7つ（1+6）。蓮華と外縁の間には圏線が一周する。瓦当裏面の調整は普通で、接合痕跡が明瞭で接合部両端には指頭圧痕がある。瓦当径 13.5 cm、外縁幅 1.2 cm、外縁高 0.8 cm、中房径 2.7 cm、厚さ 1.9 cm（附図 1-4）。

標本 5（T1206④：21） 灰色で高い外縁をもつが、外縁の幅は均一ではない。やや軟質で、胎土は比較的粗い。つくりも粗雑である。九弁蓮華文。蓮弁は短く細身で、稜線が通る。間弁の軸は不明瞭で、頂部には三叉の尖頭蓮蕾形があり、その輪郭は弧形である。中房は突出せず、周囲に圏線が一周し、7つの蓮子（1+6）をかざる。蓮華文と外縁の間には圏線が一周する。瓦当裏面には丸瓦の接合痕跡が明瞭で接合部両端には指頭圧痕がある。瓦当径 13.0 cm、外縁幅 0.6~1.0 cm、中房径 2.8 cm、厚さ 2.0 cm（附図 1-5）。

標本 6（T3102③：7） 灰色で、外縁は半分残存する。やや軟質で、胎土は比較的細かい。九弁蓮華文で、蓮弁は細身。間弁は太く大きなT字形で、その輪郭は直線的である。中房はやや突出し、蓮子は磨耗しているが、7つ（1+6）ある。蓮華と外縁の間には圏線が一周する。瓦当裏面の調整は普通で、丸瓦接合痕跡や接合部両端の指頭圧痕がある。瓦当径 13.6 cm、外縁幅 1.1 cm、外縁高 0.6 cm、中房径 3.2 cm、厚さ 2.1 cm（附図 1-6）。

標本 7（T309③：1） 灰色で、外縁は高い。やや軟質で、胎土は比較的粗い。十二弁蓮華文で、蓮弁は密に配されるが、扁平で短小。蓮弁中央に稜線が通る。蓮弁の周辺には凸線の細い輪郭線があり、間弁は頂部が3つにわかれる尖頭の蓮蕾形で、三叉の輪郭は弧形を呈する。中房はやや突出し、蓮子の周囲には圏線が二重にめぐり、8つ（1+7）の蓮子をかざる。蓮

華と外縁の間には圈線が一周する。瓦当裏面は凹凸があり、丸瓦の接合痕跡や接合部両端の指頭圧痕が残る。瓦当径 14.4 cm、外縁幅 1.3 cm、外縁高 1.0 cm、中房径 3.0 cm、厚さ 2.8 cm (附図 1-7)。

標本 8 (T309③:5) 灰色で、外縁は幅広い。つくりは普通で、やや軟質。胎土は比較的粗い。九弁蓮華文。蓮弁は短小で幅がある。間弁は、頂部が三叉をなす尖頭の蓮蕾形で、輪郭は直線的で垂直に立ち上がり、軸は明確である。中房は突出し、蓮子は 8 つ (1+7) をかざる。蓮華と外縁の間には圈線がない。瓦当裏面は平坦で、接合痕跡や接合部両端の指頭圧痕がある。瓦当径 13.6 cm、外縁幅 1.5 cm、外縁高 0.5 cm、中房径 3.5 cm (附図 1-8)。

(ii) 丸瓦

標本 1 (T2701③:1) 灰色の完形品。硬質で、胎土は細かい。無文で玉縁は短く、玉縁の端部は調整して断面半円形におさめる。筒部の曲率は比較的大きい。玉縁と筒部の接合部分には、接合粘土や接合痕跡が残る。長さ 27.6 cm、幅 15.0 cm、玉縁長 3 cm、厚さ 0.8~1.2 cm (附図 2-1)。

標本 2 (T1206④:30) 灰色の破片。凸面は無文で、筒部の特徴は基本的に標本 1 と同様である。凹面には布目があり、玉縁部と筒部の接合部には接合粘土の痕跡が明瞭に残る。残存長 15.4 cm、幅 12.4 cm、玉縁長 3.4 cm、厚さ 1 cm (附図 2-2)。

(iii) 平瓦

標本 1 (T2904③:8) 灰黄色を呈する破片。比較的硬質で、胎土は細かい。凸面は無文で、広端寄りに 2 条の浅い凹線があり、凹線下端には縦方向のナデの痕跡がある。凹面には、細かい麻の布目が全体に残る。両側面には分割痕跡がある。残存長 13.9 cm、残存幅 13 cm、厚さは瓦の中ほどで 1.2 cm (附図 2-3)。

(iv) 鐘山南朝祭壇遺跡出土瓦の特徴

この遺跡から出土した瓦の特徴は以下のとおりである。

- 1 焼成は一般にやや軟質で、色調は黄色がかっている。これは、この地点から出土した瓦の明確な特徴で、建物が「郊壇」であるということと関係するものと考えられる。
- 2 瓦当の外縁はいずれも高く、瓦当面より高く突出している。これは南朝瓦の普遍的な特徴である。蓮華文は八弁か九弁で、一部十二弁がある。蓮弁の形はやや細身で、蓮華文と外縁の間には圈線が一周する。
- 3 瓦当はすべて、范型で作成したのちに外縁を取り付ける。同時に、別に作成した丸瓦と接合する。丸瓦と瓦当外縁の接合部の内側には接合粘土を使用して表面をナデつけ、その両端を指頭で押さえることで、接合を強固にしている。このため、瓦当裏面の丸瓦接合部の両端には、かなり深い指頭圧痕が残る。
- 4 丸瓦の製作技法の特徴は、凸面が無文であることである。これは、南京出土の呉や西晋時期の丸瓦凸面に、縄叩きやほかの叩き痕跡が残るのと大きく異なる。凹面には布目

があり、模骨を使用したことがわかる。布は、製作時に模骨の表面を包み、丸瓦の円筒を作成後、粘土円筒を抜き取るさいに役立つ。丸瓦両側面の凹面側には分割断面があり、円筒を作成後に模骨からはずし、刀状工具で筒の内部から切り込みをいれて2分割したことがわかる。玉縁と筒部はそれぞれ別で作って接合するため、凹面の接合部には接合粘土があり、表面にナデつけられた痕跡が明瞭に残る。

5 平瓦の特徴は、凸面が無文で、一部にナデ痕跡がある。製作の過程で凸面を工具でなでた工程があり、これはその前の叩きの工程とは別である。凹面には布目があり、両側面には分割痕跡がある。その理由は丸瓦と同様である。しかし、「古代東アジアにおける造瓦技術の変遷と伝播に関する研究」の日本人研究者は、南京において瓦を調査した際に、一部の平瓦凹面に糸切りの痕跡を発見した。最近、南



図1 丸瓦凹面の糸切り痕

京市大光路の建設工事現場の南朝時期の層から丸瓦が出土したが、このうち3点の丸瓦の凹面には明確な糸切り痕がみられる(図1)。これは、南朝の時期に粘土板で成形した丸瓦と平瓦が存在したことを示すものである⁽¹⁴⁾。

この遺跡から出土した瓦磚、磁器片などの特徴と文献史料を総合すると、この祭壇遺跡は、南朝宋の孝武帝が大明3年(459)に造営した建康城の「北郊壇」の遺跡で、その使用年代が南朝宋代をこえることはない。したがって、この遺跡から出土した瓦の製作技術は、南朝の早い時期の特徴をそなえていることになる。

C 梁南平王蕭偉墓門闕遺跡の出土資料

梁の南平王蕭偉墓門闕遺跡は2000年10月に研究課題「六朝帝王陵の考古学的調査」に従事していた際に発見され、同年12月に発掘を終了した。関連資料と研究成果はすでに発表している⁽¹⁵⁾。以下の標本資料は、文化財保護部門が2003年に遺跡を埋め戻して遺跡公園にする前にこの遺跡で採集した、未発表資料である。

(i) 軒丸瓦

標本1(XQ:7) 灰色。やや硬質で、胎土は比較的細かい。外縁は高く、八弁蓮華文。蓮弁の輪郭線は剛直で、蓮弁自体は豊満である。間弁は明確で、頂部がY字形を呈し、輪郭は直線的である。Yの中に横線を1本入れる。中房は小ぶりでやや突出し、周囲には圈線が一周して6個の蓮子(1+5)をかざる。蓮弁と外縁の間には圈線が一周する。瓦当裏面は平滑で、調整も丁寧である。丸瓦接合部には接合粘土の痕跡があり、丸瓦接合部の両端に指頭圧痕が残る。瓦当径13.5cm、外縁幅1.2cm、外縁高1.0cm、中房径1.9cm(附図3-2)。

標本 2 (XQ : 8) 灰色。やや硬質で、胎土は比較的細かい。外縁は高く、十弁蓮華文。蓮弁の輪郭線は柔和で、蓮弁自体は細いが、ボリュームがある。間弁は明確で、頂部が三叉形を呈し、その輪郭は弧形を呈する。中房はやや突出し、9 個の蓮子 (1+8) をかざる。蓮弁と外縁の間には圈線が一周する。外縁上には忍冬文をかざるが、部分的に明確でないところがある。瓦当裏面は平滑で、調整も丁寧である。丸瓦の接合部はナデつけられ、接合部の両端には指頭圧痕がある。瓦当径 12.0 cm、外縁幅 0.8~1 cm、外縁高 0.7 cm、中房径 2.4 cm (附図 3-1)。

標本 3 (XQ : 9) 灰色。やや硬質で、胎土は比較的細かい。外縁は高く、八弁蓮華文。蓮弁の輪郭線は柔和で、蓮弁自体は幅があり、豊満である。間弁は不明確で、その頂部は弧線の三角形を呈する。中房はやや突出し、7 個の蓮子 (1+6) をかざる。蓮弁と外縁の間には圈線がない。瓦当裏面は平滑で、調整も丁寧である。丸瓦接合部には接合粘土の痕跡があり、丸瓦接合部の両端には指頭圧痕が残る。時代は南朝中期。瓦当径 12.3 cm、外縁幅 0.8~1.2 cm、外縁高 0.8 cm、中房径 2.4 cm (附図 3-3)。

(ii) 丸 瓦

標本 1 (XQ : 採集 2) 広端部分が残る。青灰色を呈し、比較的硬質で、胎土は細かい。凸面は無文で、玉縁は短く、全体に丁寧に調整され、肩部と玉縁凸面のなす角度は鋭角である。凸面は柔らかな光沢があり、玉縁と筒部の接合痕跡が明瞭である。凹面は凹凸があり、細かい布目が残る。長さ 20.5 cm、幅 14.1 cm、高さ 5.6 cm、玉縁長 3 cm、筒部の厚さ 1.2 cm。

(iii) 平 瓦

標本 1 (XQ : 採集 1) 半分が残存する。青灰色を呈し、比較的硬質で、胎土は細かい。凸面は無文で、広端部には 2 条の横方向の浅い凹線がある。平瓦の凹面中央には縦方向のナデの痕跡がある。広端面は丸みをおびている。両側面には、厚みの半分をこえる切り込みがある。長さ 34 cm、残存幅 15 cm、厚さ 1.1~1.2 cm。

(iv) 梁蕭偉墓門闕遺跡出土瓦の特徴

本遺跡から出土した瓦の特徴は次のとおりである。

- 1 瓦当の焼成は比較的良好である。鐘山壇類建物址から出土した瓦よりも優れている。蓮華文は八弁か十弁。外縁は高く、一部の外縁上には簡略化した忍冬文がある。この種の忍冬文をかざる瓦当は南朝台城宮殿区でも発見されている (図 2)。製作方法は、瓦当を范型で製作し、つぎに瓦当の外縁を付け加え、最後に丸瓦を接合する。接合部の接合粘土はナデつけられ、その両端は指頭で押さえている。



図 2 瓦当外縁に忍冬文を飾る軒丸瓦

- 2 丸瓦と平瓦の製作方法は、鐘山南朝祭壇遺跡

と類似する。しかし、平瓦の凹面には明瞭な縦方向のナデの痕跡があり、これが本遺跡の平瓦の特徴となっている。

梁の南平王蕭偉墓門闕の墓主は死亡年が明確であり、この墓と瓦の年代の上限は、梁の大通4年(532)年を遡ることはない。下限は梁朝が滅亡する前である。したがって、この瓦は南朝中期を代表する特徴を有していることになる。

D 鐘山2号寺廟遺跡の出土資料

鐘山2号寺廟遺跡は1999年11月に発見され、その後4度の試掘調査をおこなった。一部の資料と研究成果はすでに発表している。この遺跡は、南朝時期の著名な寺院、鐘山定林寺である可能性が高いと考える⁽¹⁶⁾。この遺跡は、上から順に、清代、隋唐代、南朝時期の遺構が重複する。遺跡の面積はかなり大きく、出土した瓦も豊富で、とくに南朝から隋唐代の遺構の序列は、南京地区における5世紀から10世紀の蓮華文瓦当の変化を理解するうえで重要な意義を有している。

(i) 軒丸瓦

標本1(1号平台TG11:13) 灰色で、外縁は少し欠ける。比較的硬質で、胎土は細かい。八弁蓮華文。蓮弁はやや豊満である。間弁は明確で、太く大きなT字形の頂部をもち、その輪郭は直線的である。中房はやや突出し、7つ(1+6)の蓮子をかざる。蓮華と外縁の間には圈線が一周する。瓦当裏面は凹凸があり、調整も粗雑で回転渦文がある。丸瓦接合痕跡は明確で、その両端に指頭圧痕がある。時代は南朝中期。瓦当径13.0cm、外縁幅0.8~1.1cm、外縁高0.8cm、中房径2.7cm、厚さ2.0cm(附図4-1)。

標本2(I区T304③:7) 灰色で、外縁は高い。やや軟質で、胎土は比較的粗い。外縁は半分ほど残存する。九弁蓮華文で、作りはかなりよい。蓮弁は細身で、中央には稜線がとれる。間弁は頂部が三叉の蓮蕾形をなし、その輪郭は平らで軸はやや太い。中房はやや突出し、6つ(1+5)の蓮子をかざる。蓮華と外縁の間には圈線が一周する。瓦当裏面は凹凸があり、回転渦文がある。丸瓦接合痕跡は明確で、両端に指頭圧痕が残る。時代は南朝前期。瓦当径13.8cm、外縁幅1.2cm、外縁高1.2cm、中房径2.8cm、厚さ2.4cm(附図4-3)。

標本3(I区T305③:15) 青灰色で外縁は高い。硬質で胎土は比較的細かい。八弁蓮華文。蓮弁は細身で、先端は三角形に近い。間弁は、頂部が三叉の蓮蕾形で、その輪郭は直線的である。形はかなり小さく、軸は二重線である。中房はやや突出し、7つ(1+6)の蓮子をかざる。蓮華文と外縁の間には2重の圈線がめぐる。瓦当裏面は凹凸があり、粗雑な作りである。丸瓦接合痕跡は明確で、両端に指頭圧痕が残る。時代は南朝中~後期。瓦当径12.5cm、外縁幅1.2~1.4cm、外縁高0.8cm、中房径2.5cm、厚さ2.1cm(附図4-4)。

標本4(1号平台TG9:8) 灰色の破片で、外縁は高い。やや軟質で、胎土は比較的粗い。六弁蓮華文だが、三弁のみ残る。蓮弁は幅があり、大きい。蓮弁の先端は内側に入り込み、

切り込みが入る。間弁の頂部は弧線の三角文で、その両角は左右へ伸びて相互に接続する。外縁の横断面は上が狭く、下が広い。瓦当裏面と丸瓦の接合痕跡は不明瞭である。時代は南朝後期。外縁上部幅 1.2 cm、下部幅 1.6 cm、外縁高 1.2 cm (附図 5-3)。

標本 5 (I 区 T405③ : 64) 灰色で、外縁は高く、凸線で獣面を表現する。水滴形の両目は斜めに立ち上がって突出し、楕円形の輪郭がある。三角形の高い鼻は上で額に達し、鼻の両脇には斜め方向にのびる枝状の飾りがある。鼻の下部には山字形の鼻孔をもつ。口部の造形は特殊で、左、右、下部は線で縁取りし、上唇は円弧形につくる。大きく開いた口には、三角形の門歯と犬歯があらわになっている。口の両側と下部には、放射状の巻き毛がある。瓦当裏面は凹凸があり、丸瓦接合部の痕跡が明瞭に残る。時代は南朝前期。瓦当径 11.8 cm、外縁幅 1.0 cm、外縁高 0.8 cm、厚さ 2.2 cm (附図 5-5)。

標本 6 (I 区 T405③ : 47) 灰色で、外縁は高い。やや軟質。胎土は比較的粗い。十弁蓮華文で、つくりはよい。蓮弁は豊満で、一部の蓮弁中央に稜線がとおる。間弁の頂部は弧線の三叉の蓮蕾形で、その輪郭は直線的である。中房はやや突出し、周囲には圈線が一周する。圈線の外側には放射状の短く細い線がある。蓮子は 9 つ (1+8) をかざる。蓮華文の外側をめぐる圈線はない。瓦当裏面は凹凸があり、丸瓦接合痕跡は明瞭で、両端には指頭圧痕が残る。時代は南朝前期。瓦当径 13.4 cm、外縁幅 1.2 cm、外縁高 0.9 cm、瓦当径 3.3 cm、厚さ 1.6 cm (附図 5-6)。

標本 7 (I 区 T101③ : 90) 灰色の破片。やや軟質で、胎土は比較的粗い。九弁蓮華文。蓮弁は細身で扁平である。一部の蓮弁中央には稜線がとおる。間弁は、頂部が三叉の蓮蕾形で、その輪郭は弧線を呈する。中房はやや突出し、6 つ (1+5) の蓮子をかざる。蓮華と外縁の間に圈線が一周する。瓦当裏面は凹凸があり、丸瓦接合痕跡は明確で、指頭圧痕が残る。時代は南朝前期。外縁幅 1.1 cm、外縁高 0.8 cm、中房径 2.4 cm、厚さ 2.4 cm (附図 4-2)。

標本 17 (I 区 T405② : 29) 灰色で、外縁は高く、よく残っている。やや軟質で、胎土は比較的粗い。八弁蓮華文。蓮弁は細身で、蓮弁の周囲には輪郭線が一周する。間弁の軸はとぎれ気味で、頂部は弧線の三角形を呈しその輪郭は直線的である。中房は突出せず、中房の周囲には圈線がめぐり、6 つ (1+5) の蓮子をかざる。蓮華文と外縁の間には圈線が二周し、圈線の間には計 29 の珠文をかざる。瓦当裏面は凹凸があつて、中央部が突出し、回転渦文がある。丸瓦接合痕跡は明確で、両端に指頭圧痕が残る。時代は隋唐。瓦当径 15.8 cm、外縁幅 1.1 cm、外縁高 1.1 cm、中房径 3.5 cm、厚さ 2.6 cm (附図 4-5)。

標本 18 (II 区 ATG1 : 6) 青灰色で、外縁は高く、よく残っている。やや軟質で、胎土は比較的粗い。九弁蓮華文。蓮弁の配列は比較的密で、弁は短く豊満である。間弁の軸はとぎれ気味で、頂部は弧線の三角形を呈し、その輪郭は直線的である。中房は突出せず、周囲に圈線が一周して、5 つ (1+4) の蓮子があり、中心蓮子はほかのものより大きい。蓮華文と外縁の間には圈線が一周し、圈線と外縁の間には珠文が配される。瓦当裏面は凹凸があり、回転渦文が

ある。丸瓦接合痕跡は明確で、両端に指頭圧痕が残る。時代は隋唐。瓦当径 14.8 cm、外縁幅 1.3 cm、外縁高 0.8 cm、中房径 1.9 cm、厚さ 2.5 cm (附図 4-6)。

標本 19 (Ⅱ区 ATG2:8) 灰色でつくりはよく、外縁は高い。やや硬質で、胎土は比較的細かい。十一弁蓮華文で、蓮弁は細身である。蓮弁の先端は弧線の三角形となり、輪郭は直線的である。中房はやや突出し、周囲には圈線が一周して、16 個 (1+5+10) の蓮子がある。蓮華文と外縁の間には圈線がなく、外縁の内側に細かい珠文がめぐる。瓦当裏面は凹凸があり、回転渦文がある。接合痕跡は明確で、両端に指頭圧痕が残る。時代は隋唐。瓦当径 15.6 cm、外縁幅 1.6~2.0 cm、外縁高 0.9 cm、中房径 4.0 cm、厚さ 2.6 cm (附図 5-1)。

標本 20 (Ⅰ区 T303②:15) 灰黒色で、外縁は高い。やや軟質。胎土は比較的粗い。八弁蓮華文で、6 弁が残存する。蓮弁は豊満で、蓮弁の周囲には輪郭線が一周する。間弁の軸はとぎれ気味で、頂部は弧線の三角形、その輪郭は直線的である。中房は突出せず、中房の外側に圈線が一周して 7 個 (1+6) の蓮子がある。蓮華文と外縁の間には圈線が一周し、圈線の外側には珠文がめぐる。瓦当裏面は凹凸があり回転渦文がある。接合痕跡は明確で、両端に指頭圧痕が残る。時代は隋唐。外縁幅 1.3 cm、外縁高 0.8 cm、中房径 3.8 cm (附図 5-2)。

標本 21 (1 号平台 TG5:14) 灰色で外縁は高い。やや軟質。胎土は比較的粗い。八弁蓮華文で、蓮弁は細身である。蓮弁の縁には凸線の輪郭線をもつ。間弁は弧線の三角形で、その輪郭は垂直に立ち上がる。中房は突出し、蓮子 7 つ (1+6) をかざる。蓮弁と外縁の間には圈線がなく珠文が一周する。瓦当裏面は凹凸があり、中央が突出する。丸瓦接合痕跡は明瞭で、両端には指頭圧痕が残る。時代は隋唐。瓦当径 14.4 cm、外縁幅 1.2 cm、外縁高 1.2 cm、瓦当径 3.2 cm、厚さ 2.6 cm (附図 5-4)。

(ii) 丸 瓦

標本 1 (Ⅰ区 T304③:10) 灰黄色でやや硬質。胎土は細かい。大きさは比較的小さい。玉縁は短く、端部を丸く調整して断面半円形を呈する。筒部の曲率はかなり大きい。凸面は滑らかで光沢があり、凹面には布目がある。玉縁と筒部の接合部凹面は、接合粘土の痕跡が明確である。南朝前~中期。長さ 20.5 cm、幅 11.8 cm、高さ 6.6 cm、玉縁長 2.5 cm、厚さ 1.2 cm。

標本 4 (Ⅰ区 T405③:4) 玉縁がすべて欠けている。灰色で、筒部の特徴は標本 1 と同じである。時代は南朝前~中期。筒部の中央に円形に近い釘孔があり、孔の径は約 1 cm。残存長 14 cm、残存幅 12.5 cm、厚さ 1.5 cm。

標本 5 (Ⅰ区 T302③:17) 青灰色。比較的厚で狭端部、広端部は平らに整えられる。筒部の曲率はやや小さく、凸面にはナデの痕跡がある。凹面は布目が残る。玉縁と筒部の接合部はナデ調整により、滑らかである。時代は南朝前~中期。全長 35.6 cm、幅 16 cm、高さ 6.2 cm、玉縁長 5.2 cm、厚さ 2.1 cm。

(iii) 平 瓦

標本 2 (Ⅰ区 T302③:4) 青灰色で比較的硬質。胎土は細かい。凸面は無文で、広端側に

は1条の横方向の浅いくぼみがあり、中央部には縦方向のナデ痕跡がある。凹面の狭端側には2つ一組の横方向のくぼみ(10個)があり、上部にもいくつかのくぼみが残存する。全体に細かい布目がある。両側面は、瓦の厚みの半分をこえて切り込みが入る。時代は南朝前～中期。残存長30cm、残存幅15cm、厚さ1.1～1.2cm(附図6-5)。

標本4(I区T405③:10) 青灰色で比較的硬質。凸面の広端側に横方向のナデ調整があり、凹面は布目。凹面の広端側には1条の幅をもった線がある。側面には分割痕跡が残る。時代は南朝前～中期。長さ21cm、残存幅17cm、厚さ1.5～1.7cm。

(iv) 軒平瓦

標本1(I区T405②:2) 青灰色を呈し、軟質で胎土も比較的粗い。端面の中央に1条の太い凸線を持ち、その上部には太く短い斜線文がある。端面の上部と平瓦部凹面は連続し、平らである。端面の下部には、波状文を指で捻り出している。平瓦と端面の接合痕跡は明瞭である。時代は隋唐。残存幅19.4cm、高さ3.5cm(附図6-3)。

標本2(I区T203②:5) 青灰色で、基本的特徴は標本1と同様である。時代は隋唐。残存幅13.6cm、高さ4.0cm(附図6-2)。

標本3(1号平台TG11:10) 青灰色で、つくりは粗雑である。端面の中央に1条の太い凸線を持ち、その上部には太く短い斜線文がある。端面の上部と平瓦部凹面は連続し、平らである。端面の下部には、波状文を指で捻り出している。平瓦と端面の接合痕跡は明瞭である。時代は隋唐。残存幅14.5cm、高さ3.5cm(附図6-1)。

標本4(I区T505②:4) 灰色を呈し、軟質で胎土も比較的粗い。つくりは簡単である。端面の中央に1条の太い凸線を持ち、その上部と下部に太く短い斜線文がある。端面の上部は平瓦凹面よりも高く突出する。平瓦と端面の接合痕跡は明瞭である。時代は隋唐。残存幅19.4cm、高さ3.5cm(附図6-4)。

(v) 鐘山2号寺廟遺跡出土瓦の特徴

- 1 鐘山2号寺廟遺跡出土の軒丸瓦は、蓮華文と獣面文の2つに分類される。蓮華文が多数を占め、唐代の層からは未だ獣面文瓦当が出土していない。
- 2 南朝時代の蓮華文軒丸瓦の質は、一般にかなり良好である。外縁は高く、蓮華文は六弁、八弁、九弁、十弁がある。瓦当の製作技術および瓦当と丸瓦の接合方法は、鐘山壇類建物遺跡や蕭偉墓門闕遺址から出土した同類の瓦当と類似している。ただし、一部の瓦当の裏面には回転渦文があるのが特徴である。この種の回転渦文は、呉の人面文瓦当に多く見られるが、南朝時期になるとあまり見られなくなる。したがって、これらの南朝時期の瓦当は製作技法にお



図3 珠文をかざる軒丸瓦

いて一定の特徴がある。

3 隋唐時代の蓮華文軒丸瓦は、蓮弁の周囲に珠文を多くかざる。珠文をかざる蓮華文瓦当は南朝中、後期には出現している（図3）。中房は一般に突出せず、間弁の軸はとぎれ気味で、ほとんどみえないものもある。頂部の三角形の蓮蕾文だけが残る場合がある。一部の瓦当の裏面には、南朝瓦当と同様の回転渦文があり、瓦当と丸瓦の接合部の痕跡も南朝の特徴をとどめている。これらは、南京地区における南朝から隋唐時代の軒丸瓦と丸瓦の製作技術的系譜を表わすものである。

4 南朝の丸・平瓦の製作技法は、上述の2遺跡で出土した丸瓦とほぼ同じである。

5 隋唐の地層から出土した軒平瓦は、端面下部に波状文を指ひねりで作るなど、技術の時代的特徴が明らかである。軒平瓦は南朝台城宮殿区でも出土している（図4）。

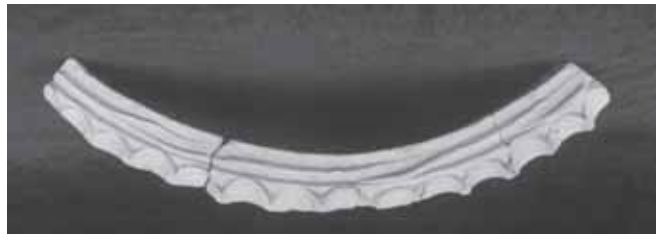


図4 波状文の軒平瓦

E 南京城区三山街「明堂」磚出土地点の資料

南京城区三山街「明堂」磚の出土地点は2006年5月に発見された⁽¹⁷⁾。これらの標本は採集品で、軒丸瓦や銘文のある磚などがある。一部の資料を紹介する。

(i) 軒丸瓦・垂木先瓦

標本1 (NSSJ: 4) 灰色で外縁は高い。やや軟質で、胎土は比較的粗い。瓦当面には複弁蓮華文をかざり、蓮弁は低く平らで、弁端のみ跳ね上がる。蓮弁中央には1条の凸線があり、この線が弁を2分している。そのなかに小蓮弁（子葉）がある。間弁は、軸はないが、蓮弁の頂部間に小さな三角形をつくり、その輪郭は直線的である。中房は欠けている。蓮華文と外縁の間はかなり空いているが、圈線はない。瓦当裏面は凹凸があり、回転渦文がある。裏面と丸瓦の接合部には接合粘土の痕跡があり、その両端には指頭圧痕が残る。時代は南朝前～中期。瓦当径13.0 cm。外縁の断面は上部が狭く、下部は広い。外縁の上幅1.0～1.2 cm（下幅1.3～1.5 cm）、高さ0.8 cm、厚さ2.5 cm（附図7-1）。

標本2 (NSSJ: 3) 灰黒色でやや硬質。胎土は比較的細かい。外縁は高く、幅広い。十弁蓮華文で、うち八弁が残る。蓮弁の縁の線はやわらかく、短いが豊満である。蓮弁の中央には稜線をもつ。間弁は明確で、頂部が三叉形をなし、その輪郭は弧線である。中房は若干突出し、径が大きく、蓮子を7つ（1+6）かざる。蓮弁と外縁の間には圈線が一周する。瓦当裏面には凹凸があり、裏面と丸瓦の接合痕跡はナデつけられており、その両端には指頭圧痕が残る。時代は南朝前期。瓦当径15.6 cm、外縁幅2 cm、外縁高1.4 cm、中房径2.5 cm（附図7-2）。

標本3 (NSSJ: 採15) 灰色で外縁が高い。やや軟質。胎土は比較的粗い。九弁蓮華文で

ある。蓮弁の輪郭が不明確だが、弁形は豊満で、中央に稜線がある。間弁の線はかなり細く、頂部は三つの尖った蓮蕾形で、輪郭は弧線である。中房はやや突出し、中心がくぼむ。中房には8個の蓮子がまわり、中央の蓮子部分は欠けて、1つの円形の孔があげられている。中房の周囲には細く短い放射状文がある。蓮弁と外縁の間に圈線はない。瓦当裏面は光沢があり、滑らかである。時代は南朝前期。瓦当径 14.7 cm、外縁幅 1.2 cm、外縁高 0.9 cm、中房径 3.4 cm (附図 7-3)。

標本 4 (NSSJ : 5) 灰色で外縁が高く、やや軟質。胎土は比較的粗い。八弁蓮華文で、蓮弁の輪郭は直線的。弁形は扁平で細身である。蓮弁中央には稜線があり、間弁の線は細く、頂部は細長い T 字形で、縁は直線的である。中房はやや突出し、蓮子は不明確だが、7つ (1+6) をかざる。蓮弁と外縁の間の圈線の有無はよくわからない。瓦当裏面には凹凸があり、回転渦文がある。裏面と丸瓦の接合部はナデつけられており、その両端の指頭圧痕は不明瞭である。時代は南朝前期。瓦当径 13.2 cm、外縁幅 1.0~1.2 cm、外縁高 0.8 cm、中房径 3.0 cm (附図 7-4)。

標本 5 (NSSJ : 2) 灰色で外縁は高い。やや軟質で、胎土は比較的粗い。八弁蓮華文。弁形は豊満で、蓮弁中央に稜線がある。間弁の線は明確で、頂部は三つの尖った蓮蕾形をなし、輪郭は弧線である。中房はやや突出して中くぼみとなり、蓮子 8つ (1+7) をかざる。蓮弁と外縁の間には圈線がめぐる。瓦当裏面は滑らかで、丸瓦接合痕跡が明瞭に残る。時代は南朝前期。瓦当径 14.2 cm、外縁幅 1.3 cm、外縁高 1.0 cm、中房径 3.6 cm (附図 8-1)。

標本 6 (NSSJ : 6) 灰色で外縁が高い。やや硬質で、胎土は比較的細かい。八弁蓮華文。蓮弁の輪郭線は直線的であり、弁形は尖り気味で豊満である。間弁の線は明確で、その頂部は太く大きな弧線の三角形をなす。蓮弁頂部と間弁頂部は外縁に近接している。中房はやや突出して中くぼみとなり、蓮子 7つ (1+6) をかざる。蓮弁と外縁の間には圈線がない。瓦当裏面は平滑である。丸瓦の接合痕跡はナデつけられており、両端の指頭圧痕は不明瞭である。時代は南朝前期。瓦当径 13.4 cm、外縁幅 1.0~1.3 cm、外縁高 0.9 cm、中房径 2.5 cm、厚さ 3 cm (附図 8-2)。

標本 7 (NSSJ : 採 13) 灰色で外縁が高い。やや硬質で、胎土は比較的細かい。八弁蓮華文。弁形は豊満で、蓮弁の頂部は鋸状の小さな三角形をなす。間弁は明確で、頂部はやはり鋸状の小さな三角形をなし、輪郭は弧線である。中房はやや突出して中くぼみとなり、蓮子は不明確だが 7つ (1+6) をかざる。蓮弁と外縁の間には圈線がない。瓦当裏面は平らで、浅いケズリ痕跡がある。丸瓦の接合痕跡は明瞭で、両端の指頭圧痕は比較的浅い。時代は南朝前期。瓦当径 11.4 cm、外縁幅 1 cm、外縁高 0.9 cm、中房径 2.1 cm (附図 8-3)。

標本 8 (NSSJ : 採 16) 灰色で外縁が高い。やや硬質で、胎土は比較的細かい。八弁蓮華文。蓮弁は短く扁平で、中央に稜線がとおる。間弁の線は不明確で、頂部は三つの尖った蓮蕾形をなし、その輪郭は弧線である。中房はやや突出して中くぼみとなり、蓮子は不明確だが 7

つ(1+6)をかざる。蓮弁と外縁の間の圏線ははっきりしない。瓦当裏面は凹凸があり、回転渦文がある。丸瓦の接合痕跡は明瞭で、その両端の指頭圧痕は比較的浅い。時代は南朝前期。瓦当径 9.2 cm、外縁幅 0.8 cm、外縁高 0.7 cm、中房径 2.0 cm (附図 8-4)。

標本 9 (南京城区採集: 2) 灰色で外縁が高い。やや軟質で胎土は比較的粗い。八弁蓮華文で、うち五弁が残存する。蓮弁は豊満で、中央に稜線がとおる。間弁の軸線はなく、頂部は三つの尖った蓮蕾形をなし、その輪郭は直線的である。中房はやや突出して中くぼみとなり、蓮子は不明確だが 7 つ(1+6)をかざる。蓮弁と外縁の間の圏線は明確でない。瓦当裏面は滑らかで、丸瓦の接合部分は接合粘土の痕跡が明確で、その両端の指頭圧痕が残る。瓦当径 13.2 cm、外縁幅 1.3 cm、外縁高さ 1.1 cm、中房径 2.6 cm。丸瓦部が完全に残り、凸面は無文で玉縁は短く、端部を丸くおさめる。玉縁と筒部の接合部のなす角度は直角に近い。凸面は光沢があり、滑らかである。筒部中央には円形の釘孔が 1 つあり(直径 1.1 cm)。筒部凸面と瓦当の接合部分は下にくぼむ。玉縁と筒部の接合痕跡は明瞭である。凹面は細かい布目で、凹凸がある。時代は南朝時期。長さ 20.5 cm、幅 12.3 cm、高さ 4.8 cm、玉縁長 2.5 cm、筒部の厚さ 1.0~1.8 cm (附図 6-6)。

(ii) 南京城区三山街「明堂」磚出土地点の瓦の特徴

- 1 この地点から出土した縄叩きをもつ磚の小口面には「大明三年明堂壁」の 6 字が押印されている(附図 8-5・6)。このことは、この一帯が『宋書』や『南史』等の史書にあらわれる南朝宋の孝武帝、大明三年(459)創建の「明堂」であることを示している。
- 2 複弁蓮華文軒丸瓦が、少数ではあるが出現している。この種の複弁蓮華文による瓦当装飾は、おもに北魏の平城や洛陽で流行したと見られていた。ただ、南朝の複弁蓮華文瓦当は、北朝の蓮華文瓦当とは一定の違いがある。たとえば外縁が高く狭く、瓦当面が外縁より低い、北朝のものは低い外縁で幅が広く、瓦当面は外縁より高い。北朝の複弁蓮華文は彫刻的要素が比較的つよい。
- 3 多くの瓦当裏面には回転渦文があり、鐘山 2 号寺廟遺址出土の一部の南朝瓦当の製作技術と類似している。
- 4 丸瓦の技術的特徴および丸瓦と瓦当の接合技術は、鐘山南朝祭壇遺跡などから出土した同類の瓦の特徴と類似している。

F 南京付近の安徽省某窯址出土の資料

六朝瓦当の研究の過程で、我々はずねにこれらの瓦当の焼成場所を探し出したいと考えていたが、1997 年に、南京南郊の某建築現場で、六朝の窯跡と一部の瓦を発見した。惜しむらくは、我々が現場に到着する前に窯跡はすでにほとんど破壊されていたが、残存していた床面から、平面がほぼ楕円形を呈する饅頭型窯であることが知られ、現場で少量の瓦当標本を採集した。2001 年に広域の踏査をへて、南京からあまり遠くない安徽省内で、ついに比較的大きい古代の

窯跡群を発見した。多くは南朝時代の窯跡遺跡で、一部の窯内にはいまだ灰や瓦当の破片、平瓦や丸瓦などが遺存していた。以下に紹介するのは、調査中に発見した窯跡の前後関係を決める4号窯と6号窯から出土した2点の瓦当である。

標本1 (ADY: W1) 灰色でやや軟質。胎土は比較的粗い。外縁は半分残存している。八弁蓮華文。蓮弁は細く小さく、かつ豊満である。間弁は太く明確で、その頂部はT字形をなし、輪郭は直線的である。T字形の間にある蓮弁の頂部には珠文をかざる。中房は突出せず、周囲には圏線が一周する。蓮子は7個(1+6)をかざる。蓮弁と外縁の間には圏線がない。瓦当裏面は平滑で、つくりもよい。丸瓦接合部分には接合粘土の痕跡があり、その両端には指頭圧痕が残る。時代は南朝中～後期。瓦当径 14.6 cm、外縁幅 1.2～1.7 cm、外縁高 0.4 cm、中房径 3.6 cm、厚さ約 1.6 cm (附図3-4)。

標本2 (ADY: W2) 灰黒色でやや軟質。胎土は比較的粗い。蓮華文だが、瓦当面には二弁の蓮弁しか残存していない。蓮弁は細長い。間弁は太く明確で、その頂部はT字形である。中房は残存せず、蓮弁と外縁の間には圏線がない。瓦当裏面は凹凸があり、つくりも悪い。時代は南朝後期。外縁幅 1.0～1.6 cm、外縁高 0.4 cm (附図3-5)。

以上、2点の瓦当の文様や製作技術などは南京市出土の南朝の瓦当と基本的に一致する。この窯跡は、南朝の都であった建康に隸属する瓦磚焼成工場である可能性が高い。

G おわりに

現在入手できる南朝瓦の資料からみて、南朝の都城の瓦の技術的特徴は、以下のように理解することができる。

- 1 南朝の瓦当はいずれも外縁が高く、瓦当面は外縁より低い。瓦当面は単独の范型で成形され、つぎに外縁を付加する。瓦当裏面と丸瓦の接合部分の内側には接合粘土を附加し、ナデつけている。接合粘土の両端には、つねに深い指頭圧痕が残る。一部の瓦当の裏面には回転渦文があり、この技術的特徴は、呉および西晋時代から受け継がれ、隋唐時代にもみられる。
- 2 南朝の丸瓦の凸面は無文で、つねに工具による縦方向のナデ調整の痕跡がある。これは呉の時代の、凸面に縄叩きをする丸瓦とは明らかに異なる。丸瓦の凹面には一般に布目があり、これは丸瓦の成形時に、布で包んだ模骨を使用していたことを示している。丸瓦側面の分割痕跡から判断すると、一般に内側から切り込みを入れており、切り込みの深さはだいたい瓦の厚みの2分の1ほどである。一部の瓦にみられる製作痕跡から、粘土板による成形法が存在していたと推測される。
- 3 南朝の平瓦における凸面と凹面の特徴および側面の分割痕跡などは、丸瓦と類似しており、製作技術もほぼ一致している。
- 4 南朝時代の瓦当と隋唐時代の瓦当には、製作技術上、明らかな継承関係がある。ただ

し、瓦当の文様には大きな違いがある。

- 5 南朝の時期には、異なる用途の建物に用いる瓦には、一定の差をつける制度があった。すなわち、宮殿、儀礼的建物、陵寢、寺廟などに瓦を用いる際には、一定程度の違いがあり、この種の差異は、細部にわたる技術的特徴をも内包しているはずであり、さらなる研究を期したい。
- 6 南朝の単弁蓮華文を特徴とする「モデル」は、北朝や百済、さらに百済をとおして古代日本などに一定程度の影響を与えていたことを指摘したことがある⁽²⁰⁾。しかし、これは瓦当面の造形的特徴から提出した観点にすぎない。事実はどうなのか、さらに細かな技術の研究により、説得力のある結論を得ることができるはずである。

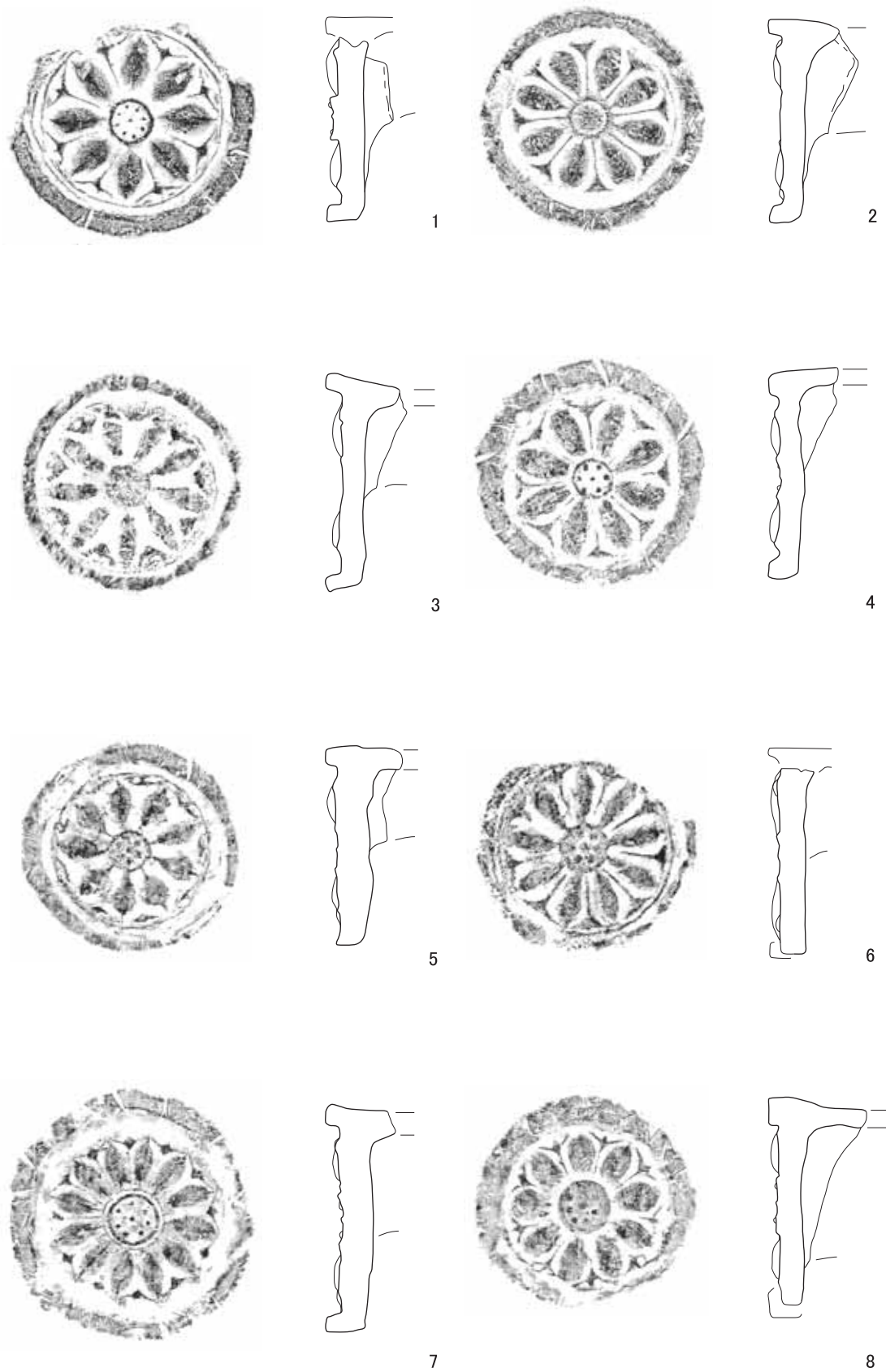
4世紀から6世紀の約300年間に、中国においては秦漢式瓦当（雲文）から隋唐式瓦当（蓮華文）へ変化した。つづいて、東アジア諸国は蓮華文瓦当の図案とその他の瓦類の技法について学ぶとともに、独自の特徴を創作することとなった。これによって、東アジア地域の伝統的な建築文化体系の形成が促進された。この時期、瓦当の使用は宮殿や礼制建築、陵墓、官衙などに限られていたが、しだいに宗教建築にもひろがり、瓦当の使用範囲は大幅に拡大した。この時期の東アジアの瓦の種類、造形、技法などの全面的な研究は、異なる地域や民族間の文化交流や人の移動などについての理解を深め、さらに多くの歴史の謎を提示するであろう。

本稿は、限られた資料から基礎的な検討をおこなったにすぎない。この場を借りて、多くの方々との交流の機会が得られることを希望するものである。異なる国家や地域の研究者が協力してはじめて、東アジア地域の広汎な意義を有する学術的課題を解決することができるものと信じる。我々が目下関心を抱いている「古代東アジアにおける造瓦技術の変遷と伝播の考古学的研究」という課題は、まさにその一つにほかならない。

註

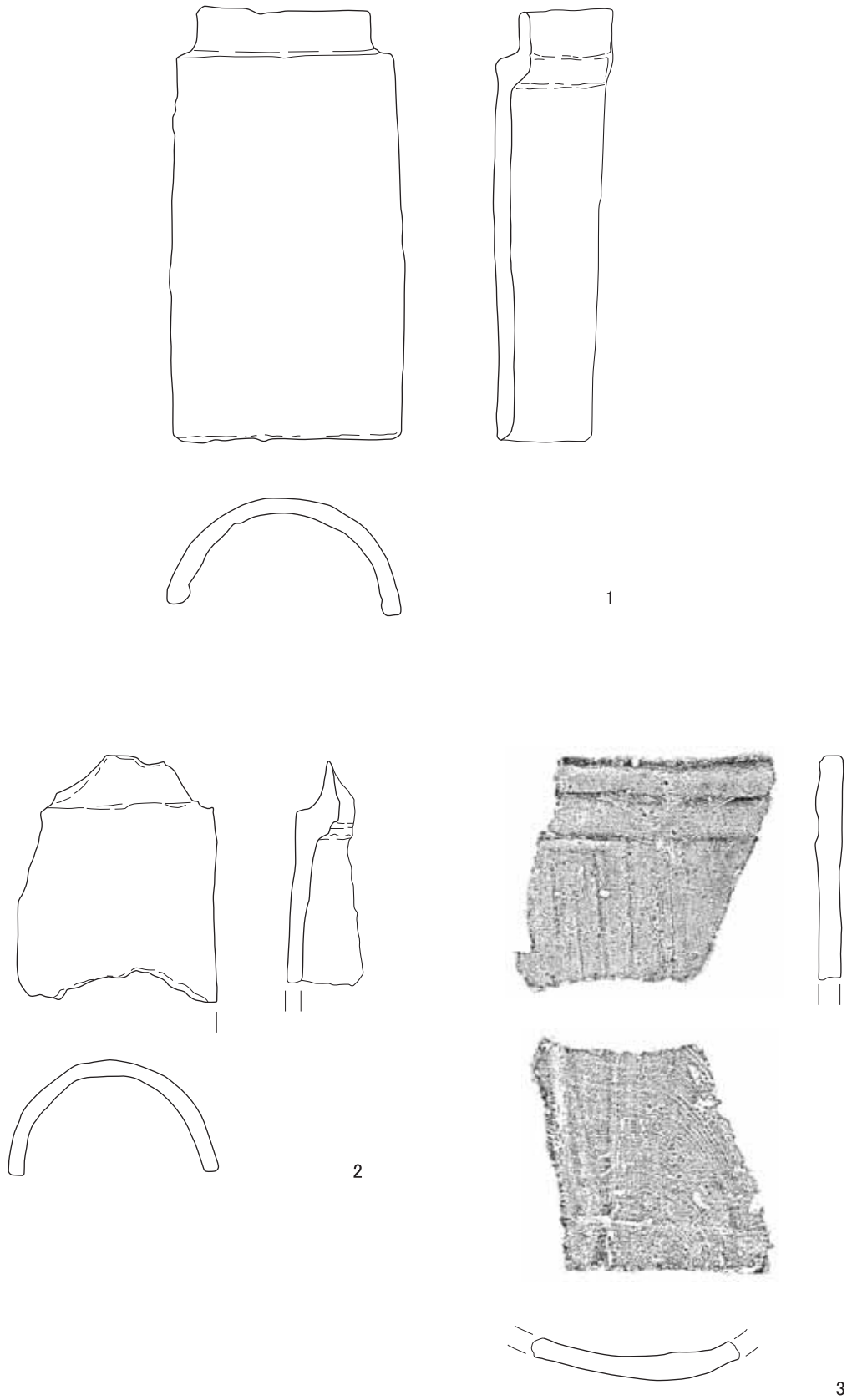
- (1) 村上和夫著、叢蒼・曉陸訳『中国古代瓦当紋様研究』三秦出版社、1996年、第4章「魏晉南北朝から唐代まで」図8に紹介する素弁蓮華文瓦当は、1949年以前に南京市の報恩寺址で出土したもので、東京大学文学部が所蔵している。
- (2) 北京大学考古系所編 講義『魏晉南北朝考古』1974年（内部発行）、38頁に南京清涼山地区出土の南朝時代の蓮華文瓦当と獸面文瓦当が紹介されている。
- (3) 李科友ほか「江西九江県発現六朝尋陽城址」『考古』1987年第7期。この遺跡から南朝の蓮華文瓦当が出土しているが、詳細な資料は未発表である。
- (4) 成都市文物考古工作隊ほか「成都市西安路南朝石刻造像清理簡報」『文物』1998年第11期には、この地点で石刻とともに出土した蓮華文瓦当が1点発表されている。また、張肖馬ほか「成都市商業街南朝石刻造像」『文物』2001年第10期には、この地点から出土した3点の南朝時代の蓮華文瓦当と植物文瓦当が発表されている。
- (5) 劉建国先生は、1990年代に鎮江市街区の調査で南朝時代の蓮華文瓦当を発見している。筆者は、1994年から1995年にかけて鎮江で調査を実施した際に、これらの瓦当を何度か観察した。この資料は、劉建国

- 先生らが整理し、発表されている。鎮江古城考古所「江蘇鎮江市出土的古代瓦当」『考古』2005年第3期、劉建国、潘美雲「論六朝瓦当」『考古』2005年第3期を参照。
- (6) 南京市博物館ほか「江蘇南京市富貴山六朝墓地発掘簡報」『考古』1998年第8期。この墓地から南朝前期の蓮華文瓦当が1点出土した。また、賀雲翱・邵磊ほか「南京首次発現六朝大型壇類建築遺存」『中国文物報』1999年9月8日1版。この文章では、発掘で出土した南朝前期の蓮華文瓦当を紹介した。
- (7) 李竈新「南越国宮署遺址2000年発掘出土瓦当研究」『華南考古』文物出版社、2004年4月。この文章では、2000年に広州で出土した東晋後期から南朝時期の蓮華文瓦当を発表した。
- (8) 劉尊志「徐州出土晋代記事碑及相關問題略考」『中原文物』2004年第2期では、徐城市区の金地商都遺跡から出土した南朝時期の蓮華文と獸面文の瓦当を紹介している。
- (9) 賀雲翱「六朝瓦当初探」『六朝文化国際学術研討会論文摘要』東南文化雜誌社編印、1998年。
- (10) 賀雲翱・邵磊「南京出土南朝椽頭裝飾瓦件」『文物』2001年第8期。南京市文物研究所等（賀雲翱、邵磊執筆）「南京梁蕭偉墓闕發掘簡報」『文物』2002年第7期。賀雲翱「南京出土六朝瓦当初探」『東南文化』2003年第1期。南京文物研究所ほか（賀雲翱執筆）「南京鐘山南朝壇類建築遺存一号壇發掘簡報」『文物』2003年第7期。賀雲翱「南京出土六朝獸面文瓦当再探」『考古与文物』2004年第4期。賀雲翱「南朝都城建康蓮華紋瓦当の変遷及相關問題研究」韓国韓神大学主編『百濟漢城期物流系統和対外交流』2004年7月。賀雲翱・邵磊「南京昆盧寺東出土的六朝時代瓷器与瓦当」『東南文化』2004年第6期。賀雲翱「南京鐘山二号寺遺址出土瓦当初探」韓国忠清文化財研究院『東亜考古論壇』創刊号、2005年。賀雲翱・路侃「南京発現南朝明堂磚及其學術意義初探」『東南文化』2006年第4期など。このほか、賀雲翱『六朝瓦当与六朝都城』文物出版社、2005年を参照。
- (11) 王志高・賈維勇「六朝瓦当的発現与初步研究」『東南文化』2004年第4期。
- (12) 本文で使用した拓本はすべて、日中の研究者からなる共同研究「古代東アジアにおける造瓦技術の変遷と伝播に関する研究」のメンバーが南京において調査した際に採拓したもので、拓本作成は日本人研究者が実施した。ここに感謝の意を表したい。
- (13) 南京文物研究所、中山陵園管理局文物処、南京大学歴史系（賀雲翱執筆）「南京鐘山南朝壇類建築遺存一号壇發掘簡報」『文物』2003年第7期。賀雲翱「発現最早的地壇遺存—南京鐘山南朝壇類建築遺存」『中国年度十大考古新発現（2000年卷）』三聯書店、2005年12月。
- (14) 2008年3月26日と27日に北京で開催された「古代東アジアにおける造瓦技術の変遷と伝播に関する国際シンポジウム」において、佐川正敏先生、山崎信二先生は、粘土板成形による製作技法について研究報告をおこなった。筆者も益するところが多く、ここに感謝の意を表したい。
- (15) 南京市文物研究所・南京栖霞区文化局（賀雲翱・邵磊執筆）「南京梁蕭偉墓闕發掘簡報」『文物』2002年第7期。朱光亜・賀雲翱・劉巍「南京梁蕭偉墓闕原状研究」『文物』2003年第5期。
- (16) 賀雲翱「南京鐘山2号寺遺址出土瓦当初探」韓国忠清文化財研究院『東亜考古論壇』創刊号、2005年。賀雲翱「南京鐘山2号寺遺址出土南朝瓦当与南朝上定林關係研究」『考古与文物』2007年第1期。
- (17) 賀雲翱・路侃「南京発現南朝明堂磚及其學術意義初探」『東南文化』2006年第4期。
- (18) 賀雲翱・邵磊「南京出土南朝椽頭裝飾瓦件」『文物』2001年第8期。
- (19) 賀雲翱「六朝椽当的初步研究」『文物』2009年発表予定。
- (20) 賀雲翱「南朝都城建康蓮華紋瓦当の変遷及相關問題研究」韓国韓神大学主編『百濟漢城期物流系統和対外交流』2004年7月。このほか、賀雲翱『六朝瓦当与六朝都城』の関連の章を参照。

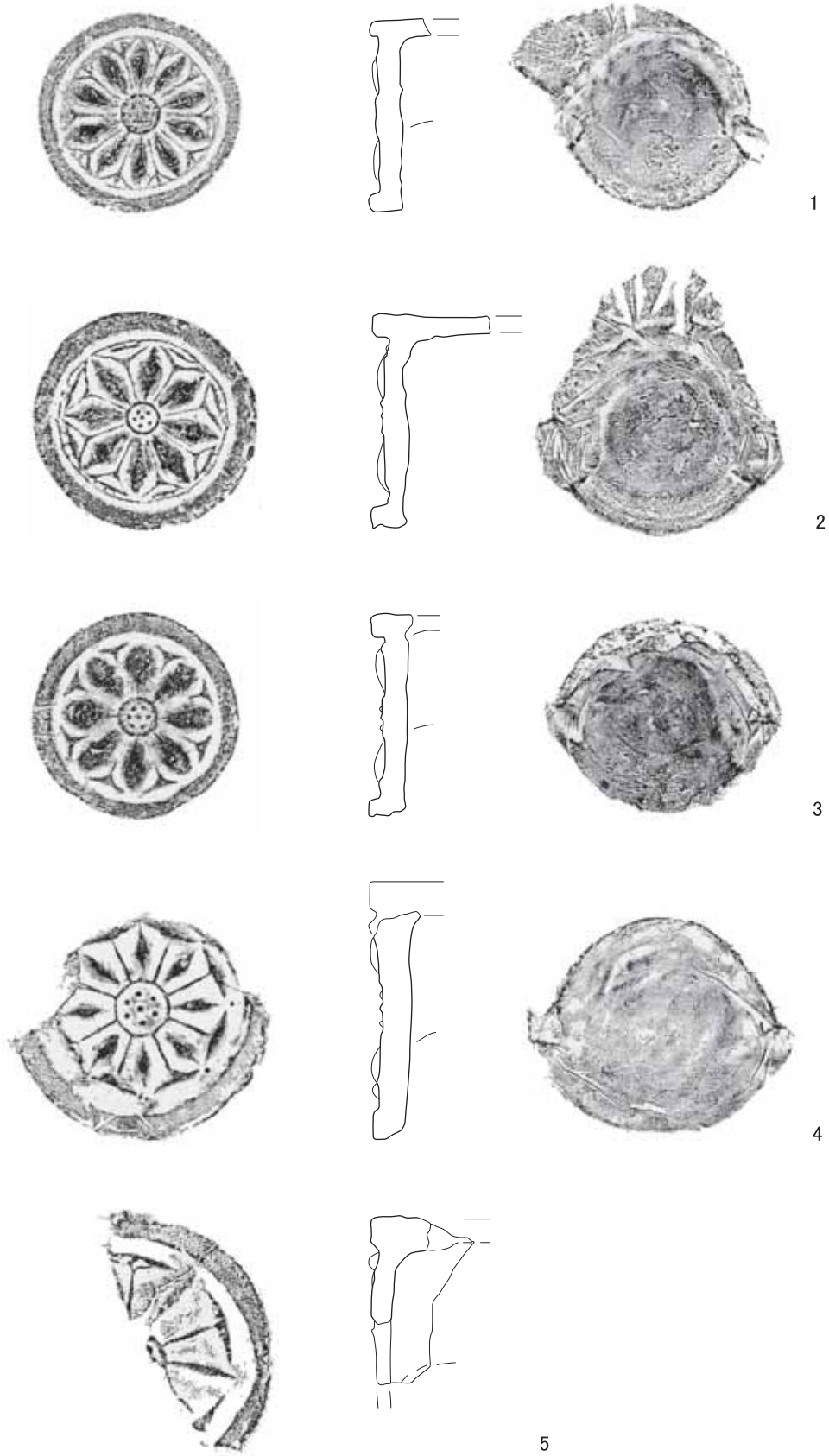


1. T901③:29 2. T1206④:10 3. T2702③:18 4. T2702③:31
5. T1206④:21 6. T3102③:7 7. T309③:1 8. T309③:5

附圖 1 南京鐘山南朝祭壇遺跡出土瓦 (1/4)

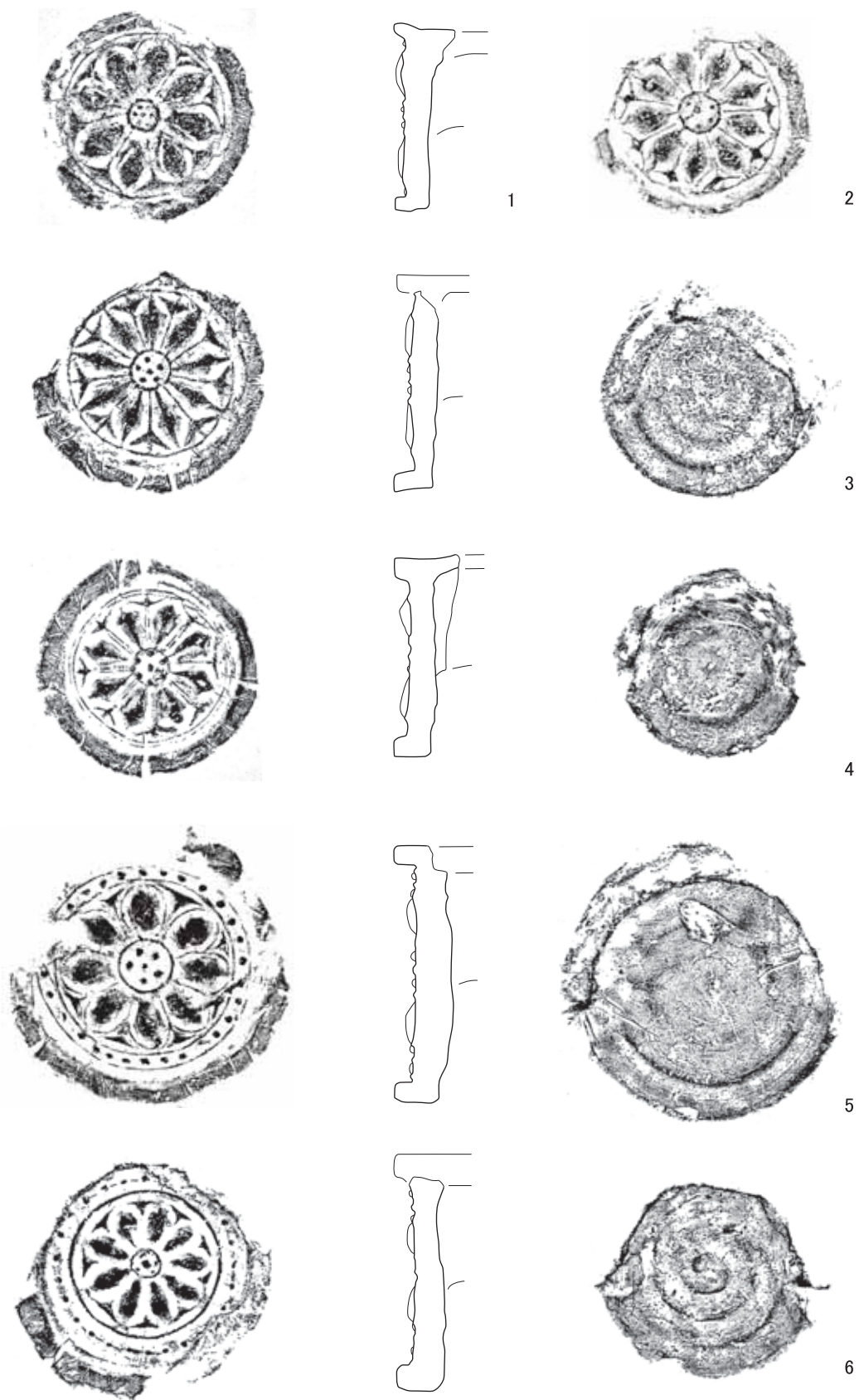


1. T2701③:1 2. T1206:30 3. T2904③:8
附圖 2 南京鐘山祭壇遺跡出土瓦 (1/4)



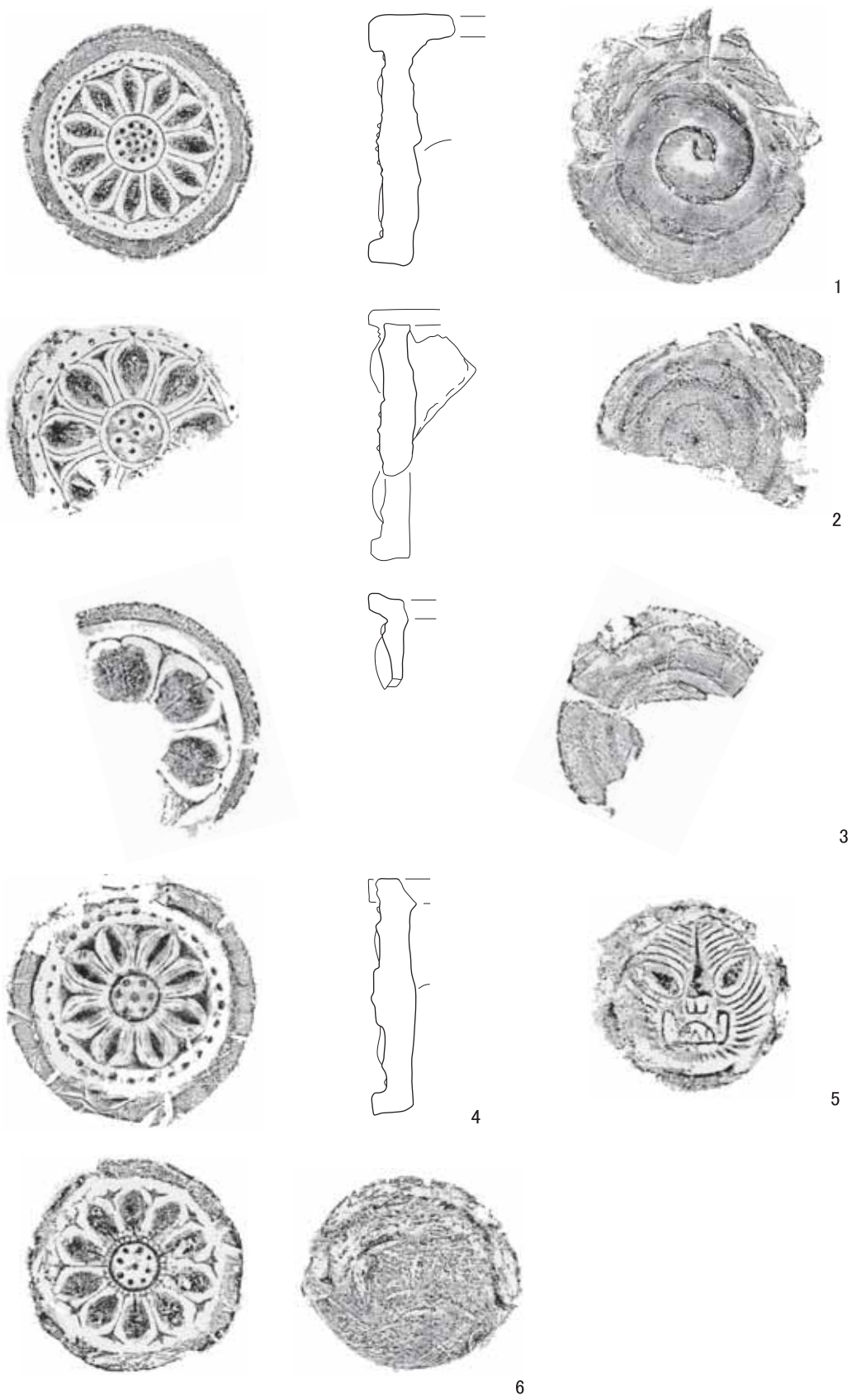
1. XQ:8 2. XQ:7 3. XQ:9 4. ADY:W1 5. ADY:W2

附圖 3 南京梁南平王蕭偉墓門闕遺跡と南京附近安徽省窯址出土瓦 (1/4)



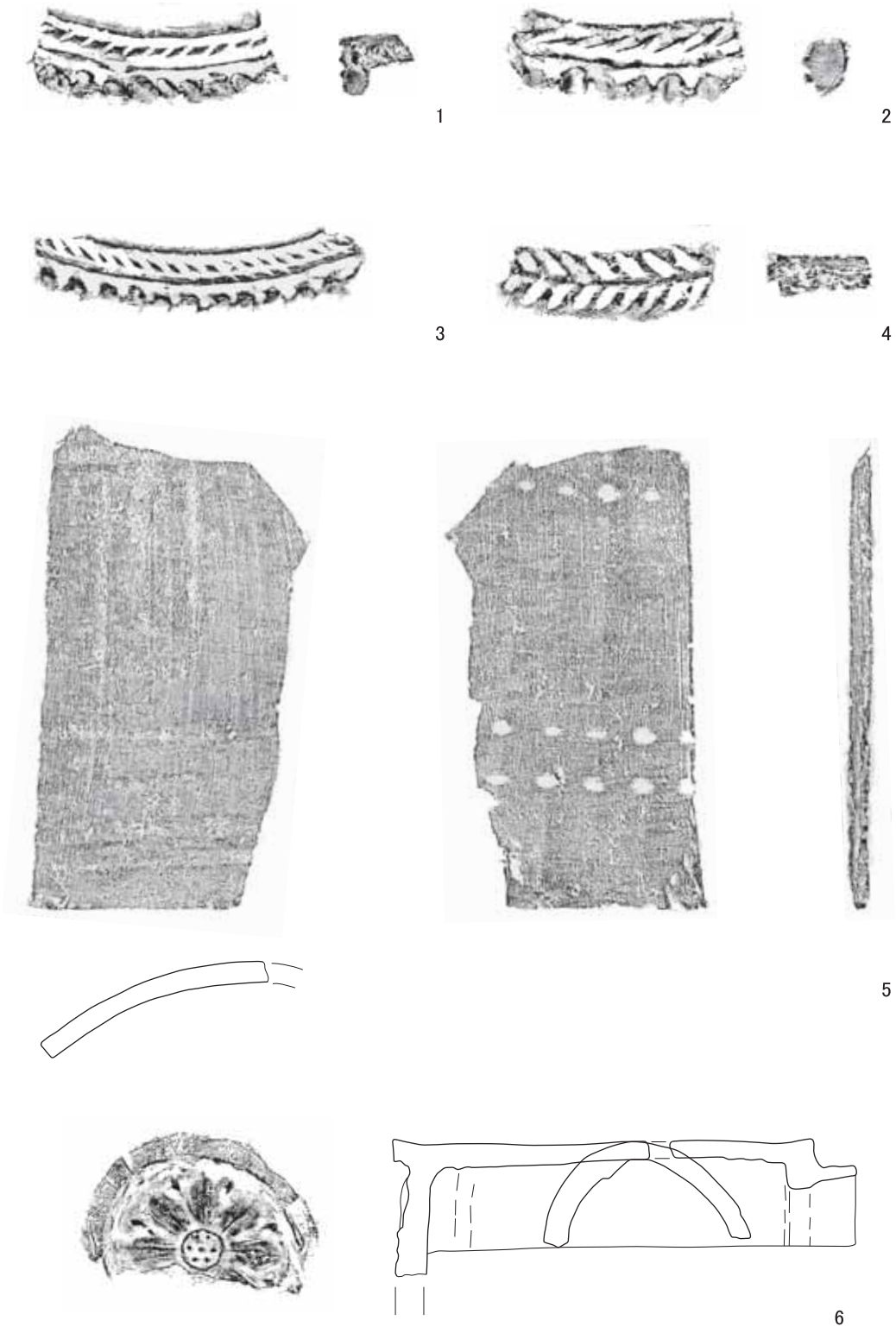
1. 1号平台 TG11:13 2. I区 T101③:90 3. I区 T304③:7
4. I区 T305③:15 5. I区 T405②:29 6. II区 ATG1:6

附圖 4 南京鐘山2号寺廟遺跡出土瓦 (1/4)



1. II区 ATG2:8 2. I区 T303②:15 3. 1号平台 TG9:8
4. 1号平台 TG5:14 5. I区 T405③:64 6. I区 T405③:47

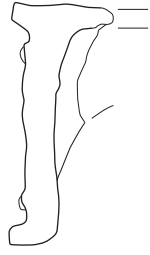
附图5 南京鐘山2号寺廟遺跡出土瓦(1/4)



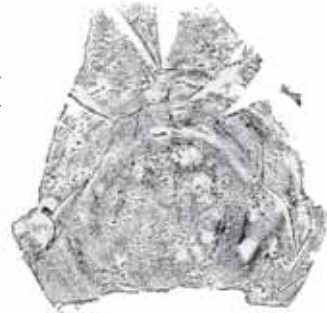
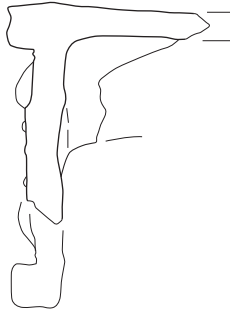
1.1号平台 TG11:10 2. I区 T203②:5 3. I区 T405②:2

4. I区 T505②:4 5. I区 T302③:4 6. 南京城区採集:2

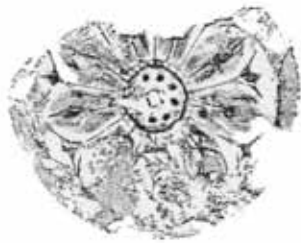
附図6 南京鐘山2号寺廟遺跡出土瓦および南京市区採集瓦(1/4)



1



2

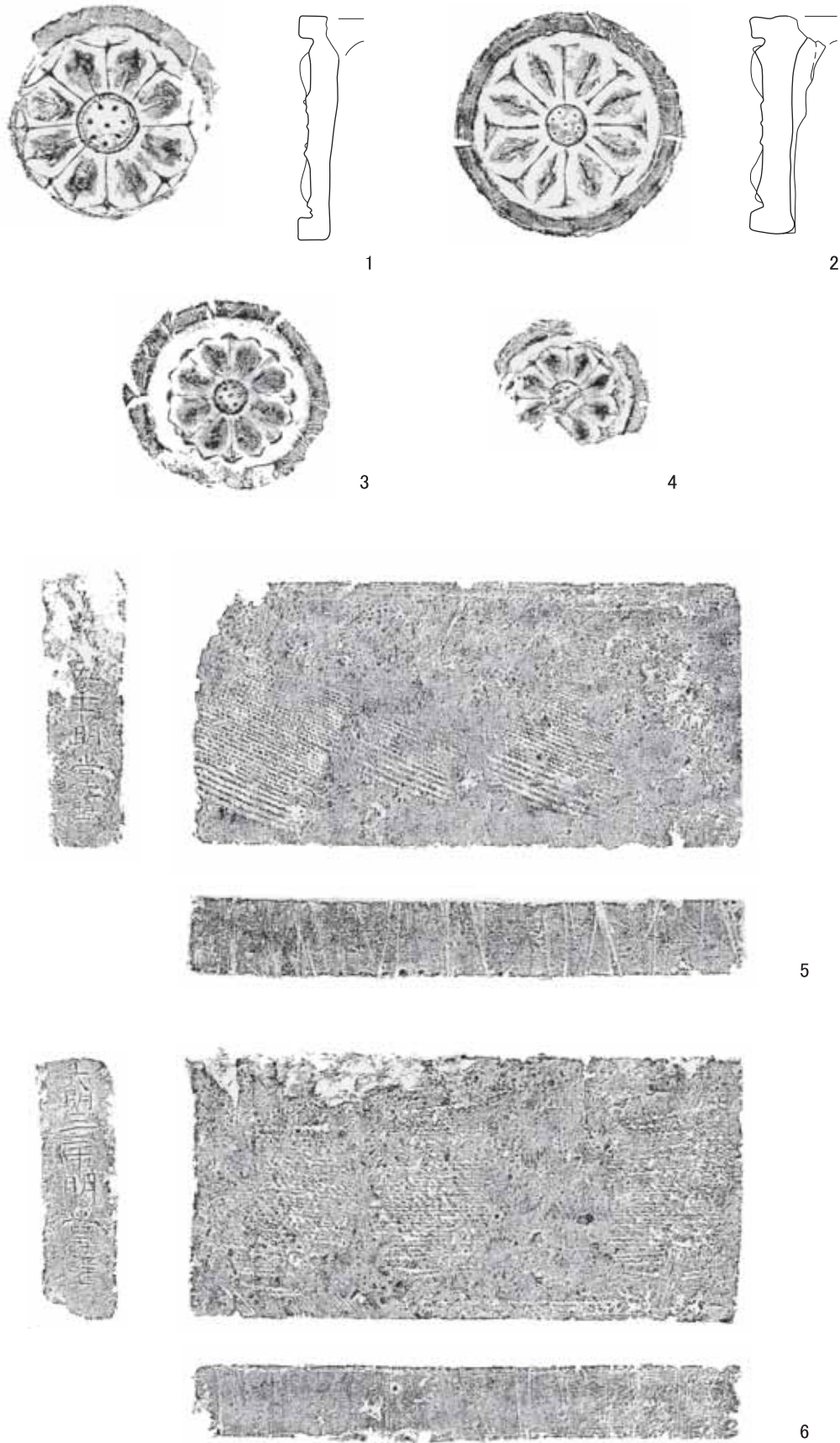


3



4

1. NNSJ:4 2. NNSJ:3 3. NNSJ: 採 15 4. NNSJ:5
附圖 7 南京三山街「明堂」磚地点出土瓦 (1/4)



1. NSSJ:2 2. NSSJ:6 3. NSSJ:採 13 4. NSSJ:採 16 5. NSSJ:1-2 6. NSSJ:1-1

附圖 8 南京三山街「明堂」磚地点出土瓦と銘文磚 (1/4)

南朝瓦的研究综述

賀雲翱

(南京大学)

南朝时期的瓦早在 1949 年之前已于南京有所发现⁽¹⁾；20 世纪 70 年代于南京市清凉山附近即六朝时期的石头城区也有出土⁽²⁾；20 世纪 80 年代以后，南朝瓦于江西九江⁽³⁾、成都⁽⁴⁾、镇江⁽⁵⁾、南京⁽⁶⁾、广州⁽⁷⁾、徐州⁽⁸⁾等地皆有出土，但均未引起人们普遍的关注。笔者于 20 世纪 90 年代初有意于这一课题，1998 年在南京召开的“六朝文化国际学术研讨会”上提交了《六朝瓦当初探》的文章⁽⁹⁾。此后陆续发表了一系列主持发掘的考古资料和研究文章⁽¹⁰⁾。与此同时，王志高等先生也发表了他们的重要成果⁽¹¹⁾。

当然，南朝瓦的研究目前虽然得到了众多学者的关心，可是，包括笔者在内，仍未能对它的“技术”问题有深入的分析。

2006 年 3 月，笔者在南京有幸接待了以朱岩石先生为首的由中日学者共同组成的“古代东亚地区造瓦技术变迁与传播”课题组成员，我们共同观摩了南京梁萧伟墓阙遗址、南京钟山南朝坛类建筑遗存、南京钟山二号寺（南朝至唐代）遗址、南京三山街南朝刘宋年间“明堂”砖出土地点、南京附近六朝窑址等出土的一批瓦、砖标本，该课题组还为这批样本做了拓片⁽¹²⁾。这批标本中的大多数过去未曾公开发表过，为了使国内外同道能够方便利用这批材料，本文特予介绍并对其中涉及的一些制作工艺问题略作分析。

一、钟山南朝坛类建筑遗存出土瓦

钟山南朝坛类建筑遗存由笔者于 1999 年 4 月调查发现，此后直到 2001 年 3 月，我们对它做了接近二年的考古发掘，先后发现一号坛、二号坛和三号建筑区，其中一号坛的资料已有简报发表⁽¹³⁾，二号坛、三号建筑区的资料正在整理中。本次公布的资料包括了一号坛、二号坛、三号建筑区的部分材料。

(一) 瓦当

1、标本一（T901③:29） 灰陶质。高边轮，质地较疏松，内部颗粒较粗；边轮残半，当面饰 8 瓣莲花，莲瓣形体瘦削，莲瓣中部有出筋现象；莲瓣之间分隔线顶端作三尖莲蕾形，其三尖边缘较平直，莲瓣间分隔线较清晰；中央莲蓬突起，莲蓬上饰 9 颗莲子（中 1 边 8）。莲花与边轮之间饰一道凸弦纹。当背较平整，当背与筒瓦连接处痕迹明显，且两端有手指的按痕。当径 14.4 厘米，边轮宽 1.0、高 0.8 厘米，当心径 2.8 厘米，厚 2.3 厘米。（图一，1）

2、标本二（T1206④:10） 青灰陶质。完好，质地较疏松，内部颗粒较细；当面饰 8 瓣莲花，莲瓣形体稍饱满，莲瓣两端中部有出筋现象；莲瓣之间分隔线顶端作粗大“T”形，其边缘平直。中央莲蓬微突起，莲蓬上莲子模糊不清。莲花与边轮之间凸弦纹若有若无。当背做工较好，

当背与筒瓦连接处痕迹明显，且两端有手指的按痕。当径 13.8 厘米，边轮宽 1.1、高 0.8 厘米，当心径 2.9 厘米，厚 1.9 厘米。（图一，2）

3、标本三（T2702③:18） 灰陶质。完好，高边轮，做工粗糙；质地较疏松，内部颗粒较粗；当面饰 9 瓣莲花，莲瓣形体瘦削；莲瓣之间分隔线顶端作三尖莲蕾形，其三尖边缘较陡直，莲瓣间分隔线若有若无；中央莲蓬不凸起，莲蓬周围有一圈凸弦纹，莲蓬上饰 8 颗莲子（中 1 边 7），但莲子已被磨平。莲花与边轮之间饰一道凸弦纹。当背凹凸不平，当背与筒瓦连接处痕迹不明显。当径 14.0 厘米，边轮宽 1.0、高 1.1 厘米，当心径 3.0 厘米，厚 2.3 厘米。（图一，3）

4、标本四（T2702③:31） 青灰陶质。高边轮，完好，质地较紧密，内部颗粒较细；当面饰 8 瓣莲花，莲瓣形体饱满，莲瓣两端中部有出筋现象；莲瓣之间分隔线顶端作粗大“T”形，其边缘平直。中央莲蓬稍突起，莲蓬中心内凹，莲蓬上饰 7 颗莲子（中 1 边 6）。莲花与边轮之间有一圈凸弦纹。当背做工一般，当背与筒瓦连接处痕迹明显，且两端有手指的按痕。当径 13.5 厘米，边轮宽 1.2、高 0.8 厘米，当心径 2.7 厘米，厚 1.9 厘米。（图一，4）

5、标本五（T1206④:21） 灰陶质。高边轮，边轮稍残，边轮宽度不一，质地较疏松，内部颗粒较粗；做工较粗糙，当面饰 9 瓣莲花，莲瓣形体短小而瘦削，莲瓣中部有出筋现象；莲瓣间分隔线不明显，仅在莲瓣之间顶端作三尖莲蕾形，其三尖边缘呈弧形；中央莲蓬不凸起，在莲蓬周围有一圈凸弦纹，莲蓬上饰 7 颗莲子（中 1 边 6）。莲花与边轮之间饰一道凸弦纹。当背凹凸不平，当背与筒瓦连接处痕迹明显，且两端有手指的按痕。当径 13.0 厘米，边轮宽 0.6-1.0、高 0.6 厘米，当心径 2.8 厘米，厚 2.0 厘米。（图一，5）

6、标本六（T3102③:7） 灰陶质。边轮残半，质地较疏松，内部颗粒较细；当面饰 9 瓣莲花，莲瓣形体瘦削；莲瓣之间分隔线顶端作粗大“T”形，其边缘平直。中央莲蓬微突起，莲蓬上莲子模糊，上饰 7 颗莲子（中 1 边 6）。莲花与边轮之间饰一圈凸弦纹。当背做工一般，当背与筒瓦连接处痕迹明显，且两端有手指的按痕。当径 13.6 厘米，边轮宽 1.1、高 0.6 厘米，当心径 3.2 厘米，厚 2.1 厘米。（图一，6）

7、标本七（T309③:1） 灰陶质。高边轮，边轮稍残，质地较疏松，内部颗粒较粗；当面饰 12 瓣莲花，莲瓣排列较紧密，莲瓣形体扁平而短小，莲瓣中部有出筋现象，莲瓣周边有一道凸起的细轮廓线；莲瓣之间分隔线顶端作三尖莲蕾形，其三尖边缘呈弧形；中央莲蓬稍突起，莲子周围有二圈凸弦纹，莲蓬上饰 8 颗莲子（中 1 边 7）。莲花与边轮之间饰一圈凸弦纹。当背凹凸不平，当背与筒瓦连接处痕迹明显，且两端有手指的按痕。当径 14.4 厘米，边轮宽 1.3、高 1.0 厘米，当心径 3.0 厘米，厚约 2.8 厘米。（图一，7）

8、标本八（T309③:5） 灰陶质。宽边轮，边轮稍残，做工一般；质地较疏松，内部颗粒较粗；当面饰 9 瓣莲花，莲瓣形体短小饱满；莲瓣之间分隔线顶端作三尖莲蕾形，其三尖边缘较陡直，莲瓣间分隔线较清晰；中央莲蓬凸起，莲蓬上饰 8 颗莲子（中 1 边 7）。莲花与边轮之间无凸弦纹。当背较平整，当背与筒瓦连接处痕迹明显，有手指的按痕。当径 13.6 厘米，边轮宽 1.5、高 0.5 厘米，当心径 3.5 厘米。（图一，8）

（二）筒瓦

1、标本一（T2701③:1） 完好。灰陶质，质地紧密，内部颗粒细小。素面，短唇，前端圆润呈半圆形，筒身拱度较大，唇部与筒身连接处（内）附加泥片及粘接痕明显。长 27.6、宽 15.0、高 5.8 厘米，唇长 3、厚 0.8-1.2（靠瓦唇处）厘米。（图二，1）

2、标本二（T1206④:30） 灰陶质。残，表面素面，筒体特征基本同上。瓦身内面印麻布纹，瓦唇与筒身拼接并有附加泥片的痕迹较为明显。残长 15.4、宽 12.4 厘米，唇长 3.4、厚 1 厘米。（图二，2）

（三）板瓦

1、标本一（T2904③:8） 残。灰黄陶质，质地较紧密，内部颗粒细小；表面素面，表面前（宽）端部有二道横向浅凹槽，凹槽下端有纵向刮压痕；瓦身内面通体印有细麻布纹。两侧面有切割痕。通体残长 13.9、残宽 13、厚（瓦身中段）1.2 厘米。（图二，3）

（四）本遗址出土瓦件的特点归纳如下：

1、质地普遍较疏松，颜色偏黄，这是本地点出土瓦当的显著特征，我们认为这与建筑本身是为“郊坛”的性质有关。

2、均为高边轮，即边轮都高于当面，这是南朝瓦当的普遍特点。当面多饰 8 瓣或 9 瓣莲花纹，也有少数为 12 瓣莲花纹。瓣形多较瘦削，莲花与边轮之间有一道凸弦纹。

3、其瓦当制作特点是：皆为先模制成当面，再附加高边轮；同时又先做成筒瓦瓦身，然后将瓦当与筒瓦端部相粘接，在筒瓦端部与边轮粘接处的内面附以泥片，泥片表面被抹平，在泥片左右两端还用手指按压，以进一步加强筒瓦端部与瓦当边轮间的粘接程度，于是在当背两侧形成较深的指压痕。

4、其筒瓦制作特点是：表面（凸面）为素面，这与南京出土东吴、西晋时期筒瓦表面存在拍打绳纹或拍印其它纹饰的风格有较大差异；内面（凹面）一般有麻布纹，说明其有内模，制作时在内模表面包有麻布，做成以后以利瓦身脱模；两侧近内面处有切痕，说明其先做成筒身，再取出内模，并用刀具从筒身内部划切，最后一分为二，成为两片筒瓦；瓦唇与筒身先分开制作，然后再粘接到一起，两者结合部的内面附加有泥片，泥片被磨平，但留有明显的粘连痕。

5、其板瓦制作特点是：表面（凸面）为素面，局部留有刮压痕，说明在制作过程中有在表面用工具加以刮压的工序，这是一种有别于“拍压”工序的工艺；内面（凹面）有麻布纹，两侧面有切割痕，其原因与筒瓦类似现象当为相同。不过，“古代东亚地区造瓦技术变迁与传播”课题组日方专家在南京考察时，发现个别板瓦内面有线切割痕迹。最近，我们在南京大光路一建筑工地南朝地层中获得一批南朝筒瓦，其中有 3 件筒瓦内面局部也有较明显的线切割痕迹（图二，4）。它可能证明在南朝时期，存在“泥板成型”的筒瓦和板瓦^{〔14〕}。

根据该遗址出土的砖、瓦、瓷片等文物特点，并结合相关文献，我们认为此处坛类建筑遗存是南朝宋孝武帝大明三年（公元 459 年）所建的建康都城“北郊坛”遗存，其延用年代不会超过刘宋年间，因此，该遗址出土的瓦件制作工艺应具备南朝偏早期的时代工艺特点。

二、南朝梁萧伟墓阙遗址出土瓦

梁南平王萧伟墓阙遗存是笔者于2000年10月在主持“六朝帝王陵考古调查”课题时发现，并于当年12月发掘完毕，相关资料和研究成果均已发表⁽¹⁵⁾。后文物保护部门于2003年将出土遗迹填埋，并于其地表建遗址保护公园，本文所述标本资料即是在2003年填埋之前再次于该地点现场采集所得，且还未公开发表。

(一) 瓦当

1、标本一(XQ:7) 灰陶质。质地较紧密，颗粒较细；高边轮，当面饰8瓣莲花，莲瓣边缘线条刚直，莲瓣形体饱满；莲瓣之间分隔线较清晰，其顶端作“Y”形，其边缘平直，在Y形内填一横线，横线上出三尖。中央莲蓬形体较小，稍凸起，莲蓬边缘为一圈凸弦纹，莲蓬上饰6颗莲子(中1边5)。莲花与边轮之间饰一道凸弦纹。当背平滑，做工较好，当背与筒瓦连接处有附加泥片痕迹，且两端有手指的按痕。当径13.5厘米，边轮宽1.2、高1.0厘米，当心径1.9厘米。

(图三，2)

2、标本二(XQ:8) 灰陶质。质地较紧密，颗粒较细；高边轮，当面饰10瓣莲花，莲瓣边缘线条柔和，莲瓣形体较瘦且饱满；莲瓣之间分隔线较为清晰，其顶端作三叉形，其边缘稍呈弧形。中央莲蓬略凸起，莲蓬上饰9颗莲子(中1边8)。莲花与边轮之间饰一道凸弦纹。边轮上饰有忍冬纹，但忍冬纹局部较为模糊。当背平滑，做工较好，当背与筒瓦连接处痕迹被抹平，且两端有手指的按痕。当径12.0厘米，边轮宽0.8-1、高0.7厘米，当心径2.4厘米。(图三，1)

3、标本三(XQ:9) 灰陶质。质地较紧密，颗粒较细；高边轮，当面饰8瓣莲花，莲瓣边缘线条柔和，莲瓣形体较为肥大饱满；莲瓣之间分隔线不明显，其顶端作倒弧边三角形。中央莲蓬稍凸起，莲蓬上饰7颗莲子(中1边6)。莲花与边轮之间无弦纹。当背平滑，做工较好，当背与筒瓦连接处有泥片附加痕迹，且两端有手指的按痕。时代为南朝中期。当径12.3厘米，边轮宽0.8-1.2、高0.8厘米，当心径2.4厘米。(图三，3)

(二) 筒瓦

1、标本一(XQ:采2) 下部残。青灰陶质，质地较紧密，内部颗粒细小。表面素面，短唇，唇部圆润，唇部与筒瓦连接处(表面)较陡直，表面圆润光滑。唇部与筒身连接处(内)粘接痕迹明显。内面凹凸不平且有细小的麻布纹。长20.5、宽14.1、高5.6厘米，唇长3，筒瓦厚1.2厘米。

(三) 板瓦

1、标本一(XQ:采1) 残半。青灰陶质，质地较紧密，内部颗粒细小；素面，表面下(宽)端部有二道横向浅凹槽，板瓦表面中部有纵向刮压痕；瓦体下端口沿稍圆润，两侧面有超过瓦体厚度一半的切割痕。通体长34、残宽约15、厚1.1-1.2厘米。

(四) 本遗址出土瓦件的特点是：

1、瓦当质地较好，明显优于钟山坛类建筑遗存出土瓦件。当面饰8瓣或10瓣莲花；高边轮，有的边轮表面饰有简化的忍冬纹，这种在边轮上装饰忍冬纹的瓦当在南朝台城宫殿区也有发现(图

三, 6)。其制作工艺为先模制当面, 再附加边轮, 最后粘接筒瓦, 瓦当与筒瓦端部粘接处附加泥片并抹平, 在附加泥片的两端有手指按压痕。

2、筒瓦及板瓦的制作工艺与钟山南朝坛类建筑遗存的特点类似, 但板瓦表面有十分明显的纵向刮压痕构成了它的特点。

梁南平王萧伟墓阙的墓主人有明确的卒年, 即该墓阙及其瓦件的年代之上限不会早于梁中大通四年(公元 532 年), 下限也不会晚于梁朝灭亡, 因此这批瓦件应代表了南朝中后期的制作工艺特点。

三、钟山二号寺庙遗址出土瓦

钟山二号寺庙遗址由笔者于 1999 年 11 月田野调查时发现, 后对其做了前后 4 次试掘, 部分资料和研究成果已经发表, 笔者认为, 它极可能就是南朝时期著名的钟山上定林寺遗址⁽¹⁶⁾。这一遗址从上到下有清代、隋唐、南朝三个时代的堆积。遗址占地面积较大, 出土瓦件材料丰富, 特别是从南朝至唐代的遗存序列, 对认识南京地区公元 5 世纪至 10 世纪的莲花纹瓦当之演变有重要意义, 现举例如下:

(一) 瓦当

1、标本一(1 号平台 TG11:13) 边轮稍残。灰陶质。质地较紧密, 颗粒较细; 当面饰 8 瓣莲花, 莲瓣形体稍饱满; 莲瓣之间分隔线顶端作粗大“T”形, 其边缘平直。中央莲蓬稍突起, 莲蓬上饰 7 颗莲子(中 1 边 6)。莲花与边轮之间饰一道凸弦纹。当背凹凸不平, 做工粗糙, 有旋坯纹, 当背与筒瓦连接处痕迹明显, 且两端有手指的按痕。时代为南朝中期。当径 13.0 厘米, 边轮宽 0.8-1.1、高 0.8 厘米, 当心径 2.7 厘米, 厚 2.0 厘米。(图四, 1)

2、标本二(I 区 T304③:7) 灰陶质。高边轮, 质地较疏松, 内部颗粒较粗; 边轮残半, 当面饰 9 瓣莲花, 做工较好, 莲瓣形体瘦削, 个别莲瓣中部有出筋现象; 莲瓣之间分隔线顶端作三尖莲蕾形, 其三尖边缘平直, 莲瓣间分隔线较粗; 中央莲蓬稍突起, 莲蓬上饰 6 颗莲子(中 1 边 5)。莲花与边轮之间饰一道凸弦纹。当背凹凸不平, 有一圈圈旋坯纹, 当背与筒瓦连接处痕迹明显, 且两端有手指的按痕。时代为南朝早期。当径 13.8 厘米, 边轮宽 1.2、高 1.2 厘米, 当心径 2.8 厘米, 厚 2.4 厘米。(图四, 3)

3、标本三(I 区 T305③:15) 青灰陶质。高边轮, 质地较细密, 内部颗粒较细; 当面饰 8 瓣莲花, 莲瓣形体瘦削, 靠边轮的一端似三角形; 莲瓣之间分隔线顶端作三尖莲蕾形, 三尖边缘平直, 其形体较小; 莲瓣间分隔线为双线; 中央莲蓬稍突起, 莲蓬上饰 7 颗莲子(中 1 边 6)。莲花与边轮之间饰二道凸弦纹。当背凹凸不平, 做工粗糙; 当背与筒瓦连接处痕迹明显, 且两端有手指的按痕。时代为南朝中、晚期。当径 12.5 厘米, 边轮宽 1.2-1.4、高 0.8 厘米, 当心径 2.5 厘米, 厚 2.1 厘米。(图四, 4)

4、标本四(1 号平台 TG9:8) 残。灰陶质。高边轮, 质地较疏松, 内部颗粒较粗; 当面原饰 6 瓣莲花, 现剩 3 瓣莲花, 莲瓣形体宽而肥大; 莲瓣尖略向内收缩作切入式, 莲瓣间分隔线顶

端作肥厚倒弧边三角形，三角形底边两角向左右延伸并互相连接；边轮横截面上窄下宽。当背与筒瓦连接处痕迹不明显。时代为南朝晚期。边轮上部宽 1.2 厘米、下部宽 1.6，高 1.2 厘米。（图五，3）

5、标本五（I 区 T405③:64） 稍残。灰陶质。高边轮。当面用凸线条表现兽面，水滴形双目斜立并凸起，有椭圆形眼眶。正三角形高鼻梁，上直达额部，鼻梁两边饰斜线如树枝状，鼻梁下有“山”字形鼻孔。口部造形奇特，左、右、下部以线条作边框，上唇作圆弧形，张口露三角形门齿和獠牙。口两侧、下部有放射状须毛。当背凹凸不平，当背与筒瓦连接处痕迹明显。时代为南朝早期。当径 11.8 厘米，边轮宽 1.0、高 0.8 厘米，厚 2.2 厘米。（图五，5）

6、标本六（I 区 T405③:47） 稍残。灰陶质。高边轮，质地较疏松，内部颗粒较粗；当面饰 10 瓣莲花，做工较好，莲瓣形体饱满，个别莲瓣中部有出筋现象；莲瓣之间分隔线顶端作三尖莲蕾形，其三尖边缘平直；中央莲蓬稍突起，莲子周围有一圈凸弦纹，弦纹外有一圈放射状的短细线；莲蓬上饰 9 颗莲子（中 1 边 8）。莲花与边轮之间无凸弦纹。当背凹凸不平，当背与筒瓦连接处痕迹明显，且两端有手指的按痕。时代为南朝早期。当径 13.4 厘米，边轮宽 1.2、高 0.9 厘米，当心径 3.3 厘米，厚约 1.6 厘米。（图五，6）

7、标本七（I 区 T101③:90） 残。灰陶质。质地较疏松，内部颗粒较粗。当面饰 9 瓣莲花，莲瓣形体瘦削而扁平，个别莲瓣中部有出筋现象；莲瓣之间分隔线顶端作三尖莲蕾形，其三尖边缘呈弧形；中央莲蓬稍突起，莲蓬上饰 6 颗莲子（中 1 边 5）。莲花与边轮之间饰一道凸弦纹。当背凹凸不平，当背与筒瓦连接处痕迹明显，且两端有手指的按痕。时代为南朝早期。边轮宽 1.1、高 0.8 厘米，当心径 2.4 厘米，厚 2.4 厘米。（图四，2）

8、标本十七（I 区 T405②:29） 灰陶质。高边轮，边轮多残；质地较疏松，内部颗粒较粗；当面饰 8 瓣莲花，莲瓣形体瘦削；莲瓣周边有一道凸起的轮廓线，莲瓣之间分隔线若有若无，顶端作倒弧边三角形图案，其边缘平直；中央莲蓬不凸起，莲蓬周围有一道凸弦纹，莲蓬上饰 6 颗莲子（中 1 边 5）。莲花与边轮之间饰二道凸弦纹，弦纹之间有一圈联珠纹，共 29 颗。当背凹凸不平，中央部位凸起；有旋坯纹，当背与筒瓦连接处痕迹明显，且两端有手指的按痕。时代为隋、唐时期。当径 15.8 厘米，边轮宽 1.1、高 1.1 厘米，当心径 3.5 厘米，厚 2.6 厘米。（图四，5）

9、标本十八（II 区 ATG1:6） 青灰陶质。高边轮，边轮残大部分；质地较疏松，内部颗粒较粗；当面饰 9 瓣莲花，排列较紧密，莲瓣形体短而饱满；莲瓣之间分隔线若有若无，顶端作倒弧边三角形图案，其边缘平直；中央莲蓬不凸起，莲蓬周围有一道凸弦纹，莲蓬上饰 5 颗莲子（中 1 边 4），中间一颗较大。莲花与边轮之间饰一道凸弦纹，弦纹与边轮之间有一圈联珠纹。当背凹凸不平，有旋坯纹，当背与筒瓦连接处痕迹明显，且两端有手指的按痕。时代为隋、唐时期。当径 14.8 厘米，边轮宽 1.3、高 0.8 厘米，当心径 1.9 厘米，厚约 2.5 厘米。（图四，6）

10、标本十九（II 区 ATG2:8） 灰陶质。做工较好，高边轮；质地较紧密，内部颗粒较细；当面饰 11 瓣莲花，莲瓣形体瘦削；莲瓣顶端作倒弧边三角形图案，其边缘平直；中央莲蓬稍凸起，莲蓬周围有一道凸弦纹，莲蓬上饰 16 颗莲子，分 3 圈布置（中 1 边 5、10）。莲花与边轮之间无

凸弦纹，莲瓣与边轮之间有一圈较细小的联珠纹。当背凹凸不平，有旋坯纹，当背与筒瓦连接处痕迹明显，且两端有手指的按痕。时代为隋、唐时期。当径 15.6 厘米，边轮宽 1.6-2.0、高 0.9 厘米，当心径 4.0 厘米，厚 2.6 厘米。（图五，1）

11、标本二十（I 区 T303②:15） 残大部分。灰黑陶质。高边轮。质地较疏松，内部颗粒较粗；当面原饰 8 瓣莲花，现剩 6 瓣莲花，莲瓣形体饱满；莲瓣周边有一道凸起的轮廓线，莲瓣之间分隔线若有若无，顶端作倒弧边三角形图案，其边缘平直；中央莲蓬不凸起，莲蓬周围有一道凹弦纹，莲蓬上饰 7 颗莲子（中 1 边 6）。莲花与边轮之间饰一道凸弦纹，弦纹之间有一圈联珠纹。当背凹凸不平，有旋坯纹，当背与筒瓦连接处痕迹明显，且两端有手指的按痕。时代为隋、唐时期。边轮宽 1.3、高 0.8 厘米，当心径 3.8 厘米。（图五，2）

12、标本二十一（1 号平台 TG5:14） 稍残。灰陶质。高边轮；质地较疏松，内部颗粒较粗；当面饰 8 瓣莲花，莲瓣形体瘦削；莲瓣周边有一道凸起的轮廓线，莲瓣顶端作倒弧边三角形图案，其边缘平直；中央莲蓬凸起，莲蓬上饰 7 颗莲子（中 1 边 6）。莲花与边轮之间无凸弦纹，莲瓣与边轮之间有一圈联珠纹。当背凹凸不平，中央凸起；当背与筒瓦连接处痕迹明显，且两端有手指的按痕。时代为隋、唐时期。当径 14.4 厘米，边轮宽 1.2、高 1.2 厘米，当心径 3.2 厘米，厚 2.6 厘米。（图五，4）

（二）筒瓦

1、标本一（I 区 T304③:10） 残。灰黄陶质，质地较紧密，内部颗粒细小。器形较小。短唇，前端圆润呈半圆形，筒身拱度较大，表面光滑；内有麻布纹，唇部与筒身连接处（内）粘连痕迹明显；时代为南朝早、中期。长 20.5、宽 11.8、高 6.6、唇长 2.5、厚 1.2 厘米。

2、标本四（I 区 T405③:4） 唇部全残。灰陶质。筒体特征基本同上。时代为南朝早、中期。唯筒身中部有近似圆形钉孔，孔直径约 1 厘米。残长 14、残宽 12.5、厚 1.5 厘米。

3、标本五（I 区 T302③:17） 稍残。青灰陶质。器形较厚重。大小头的长唇前端齐平，筒身拱度较小，表面有抹刮痕，内印麻布纹。唇部与筒身连接处（内）修抹光滑。时代为南朝早、中期。总长 35.6、宽 16、高 6.2 厘米，唇长 5.2、厚 2.1 厘米。

（三）板瓦

1、标本二（I 区 T302③:4） 残。青灰陶质，质地较细密，内部颗粒细小；表面素面，表面下（宽）端部有一道横向浅凹槽，板瓦表面中部有纵向刮压痕；内面上（窄）部有一组二道横向凹点（10 个），上部也残留几个凹点；通体有细麻布纹。两侧面有超过瓦体厚度一半的切割痕。时代为南朝早、中期。残长 30、残宽 15、厚 1.1-1.2 厘米。（图六，5）

2、标本四（I 区 T405③:10） 残。青灰陶质，质地较细密；表面下端部有横向刮压痕，通体有麻布纹，内面下端部有一道宽边线，侧面有切割痕。时代为南朝早、中期。长 21、残宽 17、厚 1.5-1.7 厘米。

（四）花头板瓦（滴水瓦）

1、标本一（I 区 T405②:2） 残。青灰陶质，质地疏松，内部颗粒较粗。端面中部有一道

粗凸弦纹，凸弦纹上部有粗短斜纹，其端面上部与板瓦表面齐平；端面下部饰波浪纹，为手工捏制而成。板瓦与端面连接处接痕明显。时代为隋、唐时期。残宽 19.4、高 3.5 厘米。（图六，3）

2、标本二（I 区 T203②:5） 残。青灰陶质，其基本特征同于标本一。时代为隋、唐时期。残宽 13.6、高 4.0 厘米。（图六，2）

3、标本三（1 号平台 TG11:10） 残。青灰陶质，做工粗糙；端面中部有一道粗凸弦饰，凸弦纹上部有粗短斜线纹，其端面上部与板瓦表面齐平；端面下部饰波浪纹，为手工捏制而成。板瓦与端面连接处接痕明显。时代为隋、唐时期。残宽 14.5、高 3.5 厘米。（图六，1）

4、标本四（I 区 T505②:4） 残。灰陶质，质地疏松，内部颗粒较粗；做工简单，端面中部有一道粗凸弦纹，凸弦纹上部有粗短斜纹，端面下部饰粗短斜纹。其端面上部高于板瓦表面；板瓦与端面连接处接痕明显。时代为隋、唐时期。残宽 19.4、高 3.5 厘米。（图六，4）

（五）钟山二号寺庙遗址出土瓦件的特点归纳如下：

1、钟山二号寺庙遗址出土南朝瓦当分莲花纹和兽面纹两类，其中又以莲花纹为主。唐朝地层中未出土兽面纹瓦当。

2、南朝时期莲花纹瓦当质地普遍较好。高边轮。当面莲花纹有 6、8、9、10 瓣之别。瓦当的制作工艺及其与筒瓦的粘接方式与钟山南朝坛类建筑遗存及萧伟墓阙遗址出土同类瓦当相似。但有部分瓦当的当背出现一种旋坯纹，我们过去在东吴时期的人面纹瓦当上发现过这种旋坯纹，而到南朝时期，这种工艺特点即较少出现，因此，这批南朝莲花纹瓦当在制作工艺上有一定的自身特点。

3、隋唐时期的莲纹瓦当在莲瓣周边多饰联珠纹，这种带联珠纹装饰的莲花纹瓦当，在南朝中后期已经出现（图六，7）。莲瓣中央的莲蓬一般不再凸起；莲瓣间的分隔线时隐时现，甚至基本不见，而仅留有瓣尖之间的倒三角形简化莲蕾纹。有的瓦当的当背与南朝瓦当一样仍有旋坯纹。瓦当与筒瓦端部粘连处的制作痕迹也保留了南朝的特点，这些都呈现出南京地区南朝至隋唐时期瓦当及筒瓦制作工艺的历史传承性。

4、本遗址南朝时期筒瓦、板瓦的制作工艺与上述两处遗址出土筒瓦制作工艺大体相同。

5、隋唐地层出现花头板瓦，即用于檐口部位的滴水瓦，花头下部作波浪纹式，为手工捏制而成，工艺的时代特征明显。这类花头板瓦在南朝台城宫殿区也有发现（图六，8）。

四、南京城区三山街南朝“明堂”砖发现地出土瓦

南京城区三山街南朝“明堂”砖出土地发现于 2006 年 5 月^{〔17〕}，这批标本系采集所得，包括瓦当和铭纹砖等，现将其中部分资料介绍如下：

（一）瓦当

1、标本一（NSSJ:4） 稍残。灰陶质。高边轮，质地较疏松，内部颗粒较粗；当面饰复瓣莲花，瓣体低平，瓣尖翘起；莲花中央有一道凸起线条，该线条把莲瓣分成两份，其中各有一小莲瓣；莲瓣之间无分隔线，顶端作一小三角形，边缘较平直；中央莲蓬已剥蚀，莲花与边轮之间

无弦纹，且莲花和边轮之间留空较大。当背凹凸不平，有旋坯纹，当背与筒瓦连接处有泥片附加痕迹，且两端有手指的按痕。时代为南朝早中期。当径 13.0 厘米，边轮上窄下宽，呈梯形，上宽 1.0-1.2（下宽 1.3-1.5）、高 0.8 厘米，厚 2.5 厘米。（图七，1）

2、标本二（NSSJ:3） 残。灰黑陶质。质地较紧密，颗粒较细；高边轮且宽大，当面原饰 10 瓣莲花，现剩 8 瓣，莲瓣边缘线条柔和，莲瓣形体短小且饱满；莲瓣中部有出筋现象，莲瓣之间分隔线较为清晰，其顶端作三叉形，其边缘稍呈弧形。中央莲蓬稍凸起，当心径大，莲蓬上饰 7 颗莲子（中 1 边 6）。莲花与边轮之间饰一道凸弦纹。当背凹凸不平，做工一般，当背与筒瓦连接处痕迹被抹平，但两端有手指的按痕。时代为南朝早期。当径 15.6 厘米，边轮宽 2、高 1.4 厘米，当心径 2.5 厘米。（图七，2）

3、标本三（NSSJ:采 15） 残。灰陶质。高边轮，质地较疏松，内部颗粒较粗；当面饰 9 瓣莲花，莲瓣模糊，莲瓣形体饱满，莲瓣中部有出筋现象；莲瓣之间分隔线较细，顶端作三尖莲蕾形，其三尖边缘呈弧形；中央莲蓬稍凸起，中心内凹，莲蓬周围饰 8 颗莲子，中间莲子已残，有一圆形的洞；莲蓬周围有细而短放射纹。莲花与边轮之间无弦纹。当背较光滑。时代为南朝早期。当径 14.7 厘米，边轮宽 1.2、高 0.9 厘米，当心径 3.4 厘米（图七，3）。

4、标本四（NSSJ:5） 稍残。灰陶质。高边轮，质地较疏松，内部颗粒较粗；当面饰 8 瓣莲花，莲瓣线条刚直，莲瓣形体扁平瘦削，莲瓣中部有出筋现象；莲瓣之间分隔线较细，顶端作细长“T”形，其边缘平直；中央莲蓬稍凸起，莲子模糊，莲蓬上饰 7 颗莲子（中 1 边 6）；莲花与边轮之间凸弦纹若有若无。当背凹凸不平，有旋坯纹，当背与筒瓦连接处的痕迹已被抹平，两端手指按痕也不明显。时代为南朝早期。当径 13.2 厘米，边轮宽 1-1.2、高 0.8 厘米，当心径 3.0 厘米。（图七，4）

5、标本五（NSSJ:2） 灰陶质。高边轮，边轮残大半，质地较疏松，内部颗粒较粗；当面饰 8 瓣莲花，莲瓣形体饱满，莲瓣中部有出筋现象；莲瓣之间分隔线较清晰，顶端作三尖莲蕾形，其三尖边缘呈弧形；中央莲蓬稍凸起，中心内凹，莲蓬上饰 8 颗莲子（中 1 边 7）。莲花与边轮之间饰一道凸弦纹。当背较光滑，当背与筒瓦连接处痕迹明显。时代为南朝早期。当径 14.2 厘米，边轮宽 1.3、高 1.0 厘米，当心径 3.6 厘米。（图八，1）

6、标本六（NSSJ:6） 灰陶质。高边轮，质地较紧密，内部颗粒较细；当面饰 8 瓣莲花，莲瓣线条刚直，莲瓣形体中部较尖且饱满；莲瓣之间分隔线较清晰，顶端作肥大的倒弧边三角形，其边缘呈弧形，莲瓣顶部与分隔线顶端紧靠边轮；中央莲蓬稍凸起，中心内凹，莲蓬上饰 7 颗莲子（中 1 边 6）；莲花与边轮之间无弦纹。当背较平整、光滑，当背与筒瓦连接处的痕迹已被抹平，两端手指按痕也不明显。时代为南朝早期。当径 13.4 厘米，边轮宽 1-1.3、高 0.9 厘米，当心径 2.5 厘米，厚 3 厘米。（图八，2）

7、标本七（NSSJ:采 13） 灰陶质。高边轮，质地较紧密，内部颗粒较细；当面饰 8 瓣莲花，莲瓣形体饱满；莲瓣的顶部都饰一箭头状小三角形纹；莲瓣之间分隔线较清晰，顶端也作箭头状小三角形，其边缘呈弧形；中央莲蓬稍凸起，中心内凹，莲蓬上饰 7 颗莲子（中 1 边 6）；莲花与

边轮之间无弦纹。当背较平整，当背有浅浅的刮削痕。当背与筒瓦连接处的痕迹较明显，两端手指按痕较浅。时代为南朝早期。当径 11.4 厘米，边轮宽 1、高 0.9 厘米，当心径 2.1 厘米。（图八，3）

8、标本八（NSSJ:采 16） 残半。灰陶质。高边轮，质地较紧密，内部颗粒较细；当面饰 8 瓣莲花，莲瓣形体短小且扁平，莲瓣中部有出筋现象；莲瓣之间分隔线若有若无，顶端作三尖莲蕾形，其边缘呈弧形；中央莲蓬稍凸起，中心内凹，莲蓬上饰 7 颗莲子（中 1 边 6）；莲花与边轮之间凸弦纹若有若无。当背凹凸不平，有旋坯纹，当背与筒瓦端部连接处的痕迹较明显，两端手指按痕较深。时代为南朝早期。当径 9.2 厘米，边轮宽 0.8、高 0.7 厘米，当心径 2.0 厘米。（图八，4）

9、标本九（南京城区采集:2） 当面稍残。灰陶质。高边轮，质地较疏松，内部颗粒较粗；当面饰 8 瓣莲花，现仅剩 5 瓣，莲瓣形体饱满，莲瓣中部有出筋现象；莲瓣之间分隔线已全无，顶端作三尖莲蕾形，其边缘较平直；中央莲蓬凸起，中心内凹，莲蓬上饰 7 颗莲子（中 1 边 6）；莲花与边轮之间凸弦纹若有若无。当背较光滑，当背与筒瓦端部连接处有附加泥片的痕迹，且两侧有手指按痕。当径 13.2 厘米，边轮宽 1.3、高 1.1 厘米，当心径 2.6 厘米。当背后所接筒瓦完好，筒瓦表面素面，短唇，唇部圆润，唇部与筒瓦连接处（表面）较陡直，表面圆润光滑，筒瓦表面中部有一近似圆形的钉洞（直径约 1.1 厘米），筒瓦表面上部与当面连接处下凹；唇部与筒瓦身粘接处（内）明显。内面有细小的麻布纹，且内面凹凸不平，时代为南朝时期。长 20.5、宽 12.3、高 4.8 厘米，唇长 2.5 厘米，筒瓦厚 1.0-1.8 厘米。（图六，6）

（二）南京城区三山街“明堂”砖地点出土瓦特点：

1、该地点出土的绳纹砖之端面模印“大明三年明堂壁”六字（图八，5、6），表明这一带曾是《宋书》、《南史》等史书明确记载的南朝刘宋孝武帝大明三年所建“明堂”的地点。

2、出现数量很少的复瓣莲花纹瓦当，用这种复瓣莲花图案装饰瓦当工艺，过去所知主要流行于北魏平城和北魏洛阳两座都城。当然，南朝复瓣莲纹瓦当与北朝的同类瓦当仍有一定的差异，如南朝为高边轮，边轮较窄，且当面低于边轮；北朝为低边轮，边轮较宽，当面一般要高于边轮；北朝的复瓣莲纹有较强的立体雕塑感等。

3、不少瓦当当背有旋坯纹，与钟山二号寺庙遗址出土的部分南朝瓦当制作工艺类似。

4、筒瓦的工艺特点及筒瓦端部与瓦当的粘接工艺和钟山南朝坛类建筑遗存等出土南朝同类瓦件特点相似。

五、南京附近安徽境内窑址出土资料

近年来，在做六朝瓦当研究的过程中，我们一直想寻找到瓦当的烧制地点。1997 年，在南京南郊某建筑工地曾有六朝窑址和部分瓦件材料的发现，可惜，待我们到现场后，窑址遗存已基本被破坏，从残留窑床可以发现，是平面略呈椭圆形的馒头窑型，在现场仅采集到少量瓦件标本。2001 年，经广泛调查，我们在距南京不远的安徽省境内终于发现了一处占地面积较大的古代窑址

群，其中有不少是南朝时代的窑室遗迹，部分窑室残基内还保留着草木灰、残瓦当、板瓦和筒瓦等。本文介绍的是我们在调查中根据发现的窑址之先后所编的4号窑与6号窑中分别出土的2件瓦当。

1、标本一（ADY:W1） 灰陶质。质地较疏松，颗粒较粗；边轮残半，当面饰8瓣莲花，莲瓣形体瘦小且饱满；莲瓣之间分隔线较粗且清晰，其顶端作“T”形，其边缘平直，在T形之间，莲瓣的顶部都饰一乳钉；中央莲蓬不凸起，莲蓬边缘为一圈凸弦纹，莲蓬上饰7颗莲子（中1边6）。莲花与边轮之间无凸弦纹。当背平滑，做工较好，当背与筒瓦连接处有附加泥片痕迹，且两端有手指的按痕。时代为南朝中、晚期。当径14.6厘米，边轮宽1.2-1.7、高0.4厘米，当心径3.6厘米，厚约1.6厘米（图三，4）。

2、标本二（ADY:W2） 残。灰黑陶质。质地较疏松，颗粒较粗；当面仅剩2瓣莲花，莲瓣形体瘦长；莲瓣之间分隔线较粗且清晰，其顶端作“T”形；中央莲蓬全残，莲花与边轮之间无凸弦纹。当背凹凸不平，做工粗糙，时代为南朝晚期。边轮宽1-1.6、高0.4厘米（图三，5）。

以上两件瓦当的当面装饰纹样、制作工艺等与南京市出土的南朝瓦当风格基本一致，为此，我们认为该窑址很可能就是南朝时期隶属于都城建康的砖瓦烧制工场的遗存。

六、小 结

总之，根据我们目前所获南朝瓦件资料，我们大体了解到有关南朝时期都城瓦件的工艺特征：

其一，南朝时期的瓦当都是高边轮，且当面都低于边轮；当面为单独模制而成，然后再附加边轮；瓦当与筒瓦端部的粘接处内部都附加泥片，并予抹平，在附加泥片的两侧常留下较深的指按痕。部分瓦当的当背有旋坯纹，这一工艺特点传承自东吴、西晋时期，并在隋唐时期仍有使用。

其二，南朝时期的筒瓦表面为素面，常有制作工具留下的纵向刮压痕，这与东吴时期的表面拍压绳纹或拍印其他纹饰的筒瓦形成明显的工艺差异。筒瓦内面一般都有细麻布纹，表明筒瓦成型过程中内有包裹麻布的模具。从筒瓦侧面的切割痕判断，一般都是从内面切割，切割深度大约是瓦身厚度的1/2左右。从部分瓦件的制作痕迹上可以推断，当时存在着泥板法制瓦工艺。

其三，南朝时期的板瓦表面和内面特征及侧面切割工艺痕迹等与筒瓦相似，表明它们的制作工艺大体一致。

其四，南朝时期的瓦当与本地区隋唐时期的瓦当在制作工艺上有明显的传承关系，但瓦当的装饰纹样呈现出明显的时代差异。

其五，南朝时期可能存在不同功能的建筑物在用瓦上有一定差别的制度，即宫殿、不同性质的礼仪性建筑、陵寝、寺庙建筑等在用瓦上或有一定的制度差异，这种用瓦制度差异的细节特别是其工艺特点等还有待于进一步的研究。

其六，我们过去提出过，南朝以单瓣莲花为特点的瓦当“模式”曾给予北朝、百济国乃至古代日本的同类莲花纹瓦当以一定的影响⁽²⁰⁾。不过，这仅是从瓦当的当面造型特点提出的观点，事实究竟如何，还要依靠技术细节的研究才能够得出更有说服力的结论。

总之，在 4—6 世纪约 300 年时间内，首先是在中国境内完成了从秦汉瓦当模式（以云纹为主）向隋唐瓦当模式（以莲花纹为主）的转型；继而实现了东亚地区各国对莲花纹瓦当模式及其他瓦类技术的普遍共享和各自又在细节上的创新，从而共同促进了东亚地区传统建筑文化体系的形成。这一时期，瓦当的使用还实现了从原先的限于宫殿、礼制建筑、陵寝、官署等向宗教建筑的推广，大大扩充了瓦当的使用范围。毫无疑问，对这一时期东亚地区瓦的类型、结构、造型、技术等问题的全面研究，有助于深入认识当时不同地区、不同民族之间的文化交流和人员互动，从而揭示出更多的鲜为人知的历史奥秘！

本文仅是我们根据有限的资料所做的初步的探讨，目的是希望借此获得与各位专家加强交流的机会。我们深信，只有不同国家和地区的学者共同合作，才能解决东亚地区许多有广泛意义的考古学学术问题，其中也包括我们目前感兴趣的“古代东亚地区造瓦技术变迁与传播的考古学研究”这样的课题。

文中不当之处，还祈诸位批评和谅解！

注 释

- (1) [日]村上和夫著，丛苍、晓陆译《中国古代瓦当纹样研究》第四章“魏晋南北朝至唐代”图 8 介绍的素瓣莲花纹瓦当，为 1949 年前出土于南京市报恩寺遗址，由日本东京大学文学部收藏。三秦出版社，1996 年出版。
- (2) 北京大学考古系所编讲义《魏晋南北朝考古》第 38 页中介绍了出土于南京清凉山地区的几件南朝时期的莲花纹瓦当和兽面纹瓦当。1974 年内部印行。
- (3) 李科友等《江西九江县发现六朝寻阳城址》，《考古》1987 年第 7 期。该地点出土了南朝莲花纹瓦当，但详细资料未予公布。
- (4) 成都市文物考古工作队等《成都市西安路南朝石刻造像清理简报》，《文物》1998 年 11 期。简报中公布了该地点与石造像共出的一件莲花纹瓦当。又张肖马等《成都市商业街南朝石刻造像》，《文物》2001 年第 10 期。简报公布了该地点出土的 3 件南朝莲花纹和花草纹瓦当。
- (5) 刘建国先生在 20 世纪 90 年代于镇江城市考古中发现一批南朝时期的莲花纹瓦当，笔者在 1994—1995 年往镇江作考古调查时得以多次观摩，这批材料后由刘建国先生等整理并陆续发表，见镇江古城考古所《江苏镇江市出土的古代瓦当》，《考古》2005 年第 3 期；刘建国、潘美云《论六朝瓦当》，《考古》2005 年第 3 期。
- (6) 南京市博物馆等《江苏南京市富贵山六朝墓地发掘简报》，《考古》1998 年第 8 期。该墓地发现了一件南朝早期的莲花纹瓦当。又贺云翱、邵磊等《南京首次发现六朝大型坛类建筑遗存》，《中国文物报》1999 年 9 月 8 日一版。该文介绍了本次发掘中发现的一批南朝早期莲花纹瓦当。
- (7) 李灶新《南越国宫署遗址 2000 年发掘出土瓦当研究》，载《华南考古》，文物出版社，2004 年 4 月。该文公布了 2000 年于广州出土的一批东晋晚期至南朝时期的莲花纹瓦当。
- (8) 刘尊志《徐州出土晋代记事碑及相关问题略考》，《中原文物》2004 年第 2 期。文中报道了徐城市区金地商都遗址出土的一批南朝时期的莲花纹及兽面纹瓦当。
- (9) 拙作《六朝瓦当初探》，载《六朝文化国际学术研讨会论文摘要》，东南文化杂志社印行，1998 年。
- (10) 贺云翱、邵磊《南京出土南朝椽头装饰瓦件》，《文物》2001 年 8 期；南京市文物研究所等（贺云翱、邵磊执笔）《南京梁南平王萧伟墓阙发掘简报》，《文物》2002 年 7 期；拙文《南京出土六朝瓦当初探》，《东南文化》2003 年 1 期；南京市文物研究所等（贺云翱执笔）《南京钟山南朝坛类建筑遗存一号坛发掘简报》，《文物》2003 年 7 期；拙文《南京出土六朝兽面纹瓦当再探》，《考古与文物》2004 年 4 期；拙文《南朝都城建康莲花纹瓦当的变迁及相关问题研究》，载《百济汉城期物流系统和对外交流》，韩国韩神大学主编，2004

年7月出版；贺云翱、邵磊《南京毗卢寺东出土的六朝时代瓷器和瓦当》，《东南文化》2004年6期；拙作《南京钟山二号寺遗址出土瓦当初探》，韩国忠清文化财研究院《东亚考古论坛》创刊号，2005年；贺云翱、路侃《南京发现南朝“明堂”砖及其学术意义初探》，《东南文化》2006年4期等。

另参见拙著《六朝瓦当与六朝都城》，文物出版社，2005年出版。

- (11) 王志高、贾维勇《六朝瓦当的发现及初步研究》，《东南文化》2004年第4期。
- (12) 本文所使用的拓片，均为中日学者组成的“古代东亚地区造瓦技术变迁与传播”课题组在宁考察时所摹拓，摹拓工作主要是由日方学者所完成，在此特予说明并表示衷心感谢！
- (13) 南京市文物研究所、中山陵园管理局文物处、南京大学历史系（贺云翱执笔）《南京钟山南朝坛类建筑遗存一号坛发掘简报》，《文物》2003年7期；贺云翱《发现最早的地坛遗存——南京钟山六朝坛类建筑遗存》，载《中国年度十大考古新发现（2000年卷）》，三联书店，2005年12月。
- (14) 2008年3月26日在北京举行的“古代东亚地区制瓦技术变迁与传播研究国际学术研讨会”上，日本学者佐川正敏先生、山崎信二先生都对“泥板成型”制瓦技术作了研究报告，本人受益良多，在此特表感谢！
- (15) 南京市文物研究所、南京栖霞区文化局（贺云翱、邵磊执笔）《南京梁南平王萧伟墓阙发掘简报》，《文物》2002年7期；朱光亚、贺云翱、刘巍《南京梁萧伟墓墓阙原状研究》，《文物》2003年5期。
- (16) 贺云翱《南京钟山二号寺遗址出土瓦当初探》，载韩国忠清文化财研究院，《东亚考古论坛》创刊号，2005年；贺云翱《南京钟山二号寺遗址出土南朝瓦当与南朝上定林关系研究》，《考古与文物》2007年1期。
- (17) 贺云翱、路侃《南京发现南朝“明堂”砖及其学术意义初探》，《东南文化》2006年4期。
- (18) 贺云翱、邵磊《南京出土南朝椽头装饰瓦件》，《文物》2001年8期。
- (19) 拙作《六朝椽当的初步研究》，《文物》2009年待刊。
- (20) 贺云翱《南朝都城建康莲花纹瓦当的变迁及相关问题研究》，载《汉城期百济物流系统和对外交流》，韩国韩神大学主编，2004年出版；另参见拙作《六朝瓦当与六朝都城》有关章节。

4 中国における造瓦技術の変遷

—「粘土紐巻き作り」から「粘土板巻き作り」への転換を中心に—

佐川 正敏

(東北学院大学)

A はじめに

中国における確実な瓦の起源は西周代である。西周代の瓦は、粘土紐を巻き上げて製作する「粘土紐巻き作り（泥条盤築法）」という技法を採用しており、内面すなわち凹面に凹凸を残すことが多い。凹面の調整が不十分な場合には、丸・平瓦の凹面に紐巻きの痕跡が残される。

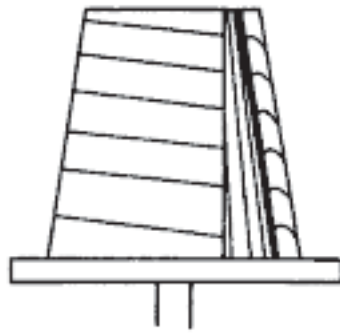
西周代以降も粘土紐巻き作りは主流であったが、前漢以後は円筒形か円錐台形の杵や杵板を連結した桶を内型（模骨）とするようになり、丸・平瓦の凹面に布目や連結模骨の凹凸が残される（図1）。土管状に仕上げたものを二つ割りにすれば丸瓦となり、井戸杵状に大きく仕上げたものを四つ割りすれば平瓦となる。

筆者は、1991年から開始した黄河流域以北における断続的な瓦調査の成果に基づき、粘土紐巻き作りが、少なくとも当該地域において、唐代はおろか、遼、金代まで主流であったという見通しを示した（図2-②～④：佐川1992、2006）。また、2005年からは、奈良文化財研究所と中国社会科学院考古研究所との間で進行中の瓦の共同研究に参加する幸運に恵まれ、北魏代から唐代までの首都であった平城（大同市）、洛陽（偃師市、洛陽市）、鄴城（邯鄲市）、長安（西安市）でも、粘土紐巻き作りが主流であったことを確認している（中国社会科学院考古研究所ほか編2008、本書附載参照）。

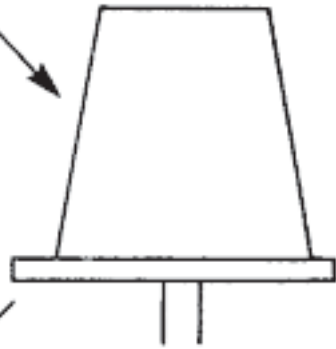
これに対して、明代末期の1637年に宋応星によって編纂された技術の百科全書『天工開物』には、平瓦を製作する際、鉄線を張った弓で粘土ブロックから粘土板を切り取り、円錐台形の桶（杵板連結模骨）に巻き付けている平瓦製作の状況が描かれている（図3：藪内訳注1969）。この技法を「粘土板桶巻き作り（泥板圍築法：佐川の造語）」という。やや大型の平瓦を製作する場合は、桶に3～4枚の粘土板を貼り付けて粘土円筒を完成させ、4分割した。

さて中国では、粘土紐巻き作りから粘土板巻き作りへの変化が、いつ、どこで、どのように発生し、普及したかについては、従来、十分検討されることはなかった。筆者はこの問題について2002年以来追究してきたが、とくに近年は、2006年1月に日本九州の福岡市博多遺跡群出土瓦（福岡市埋蔵文化財センター）、2006年2月に中国河南省鞏義市の北宋皇陵遺跡出土瓦（河南省文物考古研究所）、そして2006年10月に浙江省杭州市の雷峰塔遺跡出土瓦（浙江省文物考

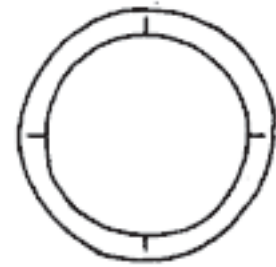
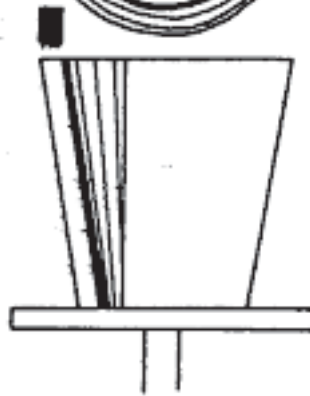
1、粘土紐桶巻き作り
Clay Cylinder by
Coiling Method
on a Turn Table.



2、円錐台形の粘土
円筒の成形と調整
Shape Formation
and Surface
Modification.



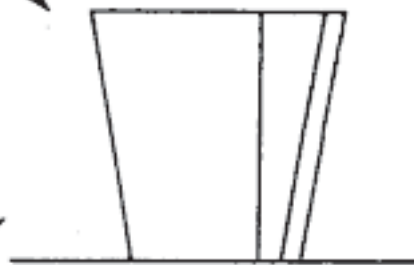
3、円錐台形の粘土円筒の
逆転と上方からの施文
Over turning of a Clay
Cylinder and Decoration
from the Upper of a Clay.



5、半乾燥後に4分割、
凹凸面を磨く
Partition and Polish.



4、分割截線を入れ、乾燥
Adding Partition Guide
Lines and Dryness.



6、焼成、黒色化
Baking and Smoke.



図1 粘土紐桶巻き作りの復元

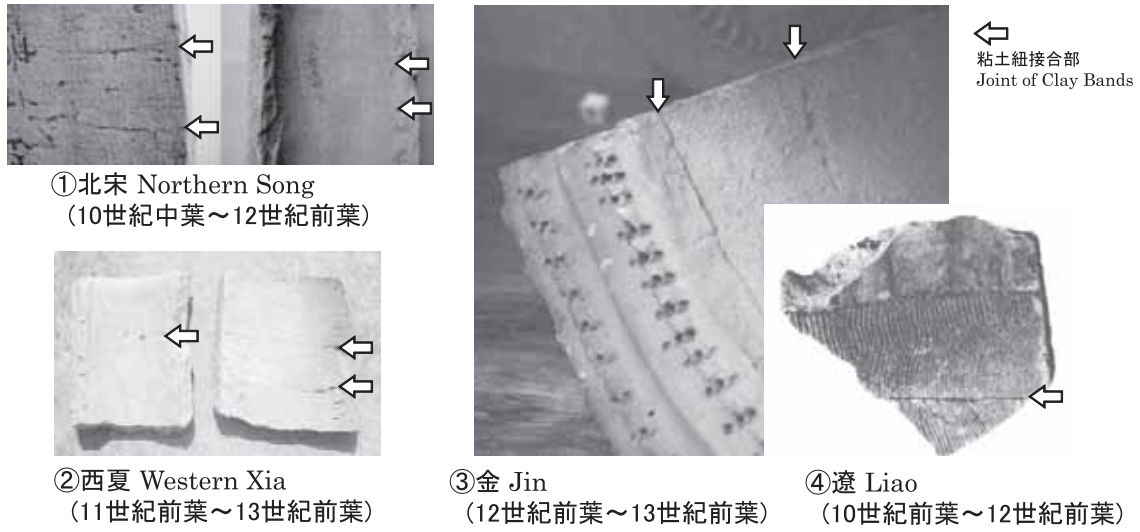


図2 北宋・遼・西夏・金代の瓦における「粘土紐桶巻き作り」の痕跡

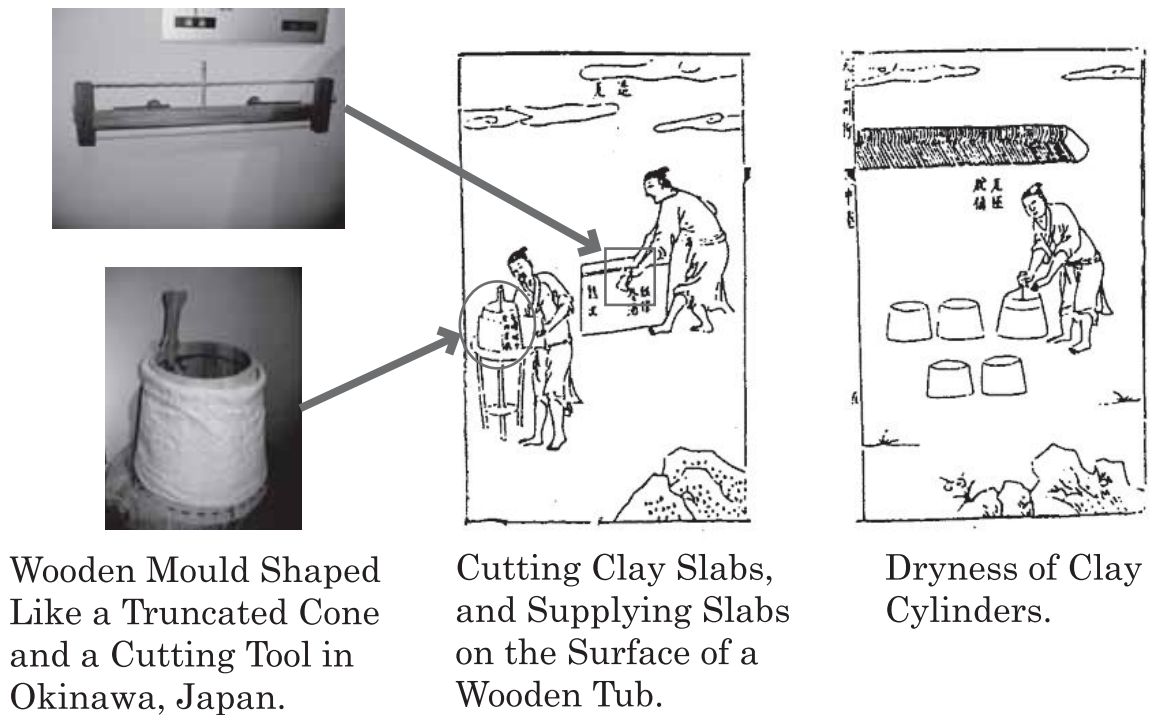


図3 『天工開物』(1637年)中に掲載された明代の「粘土板桶巻き作り」

古研究所)、2006年12月に江蘇省南京市の南朝首都・建康出土瓦(南京大学文化與自然遺産研究所)および揚州市の揚州城出土瓦(中国社会科学院考古研究所揚州隊・揚州市文物考古研究所)、さらに2008年2月に広東省広州市の南越国官署遺跡出土瓦(広州市文物考古研究所、南越王宮博物館籌建処)に対しておこなった調査の結果、この問題について一定の結論(仮説)を得ることができた。

本稿では、主として、丸・平瓦の成形技術である粘土紐巻き作りから粘土板巻き作りへの転換について知り得た成果を、調査経緯に沿って報告し、仮説を提示する。つぎに、軒丸瓦と丸瓦の南北差、軒平瓦の南北差について報告する。さらに、黒色研磨瓦(中国でいう青棍瓦)を含めた軒平瓦の多様化と等級について報告する。

B 粘土紐巻き作りから粘土板巻き作りへの転換について

1. 元代の辺境で確認された粘土板巻き作り—調査の契機—

2005年1月に、東北学院大学の榎森進氏の文部科学省科研費による調査に同行し、ウラジオストック市にあるロシア科学アカデミー極東支部・歴史学考古学民族学研究所にA.R.アルテミエフ氏を訪ねた。その目的は、同氏が発掘調査した明代ヌルカン都司に造営された永寧寺跡の出土遺物を観察することであった。

その際に、偶然にもアルテミエフ氏は、ザバイカル地方東部で発掘したモンゴル帝国の祖チンギス=ハーンの甥のエスング=ハーンが創建した都城から出土した13世紀中葉~15世紀前葉の瓦も観察する機会を与えてくれた。その中には多くの緑釉瓦があったので、これはモンゴル帝国段階のものではなく、元代にその都城を継続使用した際に生産、供給した瓦と推定される。そして、一枚の緑釉平瓦の凹面に「糸切り痕」が存在することを発見した。糸切り痕は、粘土紐巻き作りでは発生し得ない痕跡であり、粘土板巻き作りの存在を裏付ける重要な証拠の一つである。このことによって筆者は、粘土紐巻き作りから粘土板巻き作りへの転換が、少なくとも明代より古い元代までには発生していたという見通しを得た。

つぎに、明代ヌルカン都司の永寧寺跡は、河口であるオホーツク海まで約153kmのアムール川に面する断崖上に残されている。アルテミエフ氏が1995~2000年に発掘調査をおこない、明代2時期の寺院跡と元・明代の遺物を発見した(A.R.Artemiev 2001、同2005)。かつてここに立てられ、現在ウラジオストック市内に移動された2基の永寧寺碑によって、この2時期の遺構は、一つが永楽帝の段階の1413年に造営されたもので、もう一つは前者が焼亡したのち、宣徳帝の段階の1433年に別の地点に再建されたものであること、また永寧寺造営に際しては、造瓦工人を同行したことがわかる。アルテミエフ氏によれば、アムール河畔で窯跡も確認されているという。

アルテミエフ氏から観察を許された遺物には、明代2時期の永寧寺所用瓦が含まれており、そのうちの平瓦凹面には、糸切り痕と粘土板合わせ目が明瞭に残されている(図4-①)。した

がって、明国の辺境地に建設された永寧寺の瓦も、粘土板巻き作りによって製作されていたことがわかる。

アルテミエフ氏は、1433年の再建永寧寺跡の調査地から、明代の瓦とは文様や焼き質が明瞭に異なる「古風な瓦」が若干出土していることを指摘し、それを元代の1260～1320年段階に設置された征東元帥府に付属する観音寺に関連するもの、と推定している(A.R.Artemiev 2001、同2005)。しかし、筆者は、2005年1月に、この古風な瓦を観察する機会がなかった。

アルテミエフ氏は、2005年11月に北海道大学で開催された国際シンポジウム「ヌルカン永寧寺碑文と中世の東北アジア」に出席するため来日し、その時に、刊行されたばかりの永寧寺跡の発掘調査報告書『アムール川下流域における15世紀の仏教寺院』を持参された(A.R.Artemiev 2005)。その報告書には、アルテミエフ氏が元代と推定する、前述の「古風な」瓦の写真も掲載されており、その中の平瓦凹面には、やはり糸切り痕が残されている(図4-②)。筆者は、その痕跡によって、元代に粘土板巻き作りが存在した可能性が高いこと、そして北・東アジアにおけるその意義をアルテミエフ氏に説明し、理解していただいた。なお、平瓦部凹面には、桝板連結模骨桶の痕跡も残されている。

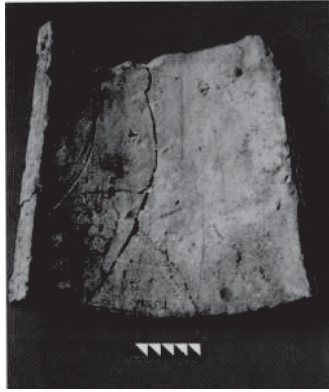
以上のロシアで確認した2遺跡の事例は、粘土板巻き作り(あるいはその技法をもった瓦工)が、少なくとも元代には、ザバイカル地方東部やアムール川河口まで伝えられ、現地で瓦生産がおこなわれていたことを示すものである。また、この新技法への転換がこうした辺境地でも確認できることは、元の上都、大都、中都のあった中国東北地方や華北地方でもすでに発生していた可能性が高いことをも示している。筆者は諸般の事情で、元の上都、大都、中都⁽¹⁾出土の瓦を実見していないが、この可能性を前提とするならば、問題解決の鍵は、北宋か南宋代の瓦が握っていると考えに至った。

2. 北宋代の瓦—皇帝陵の瓦は粘土紐巻き作り—

本問題を解決するために悉皆調査をおこなうことは理想であるが、広大な国土を有する中国では、とくに外国人の筆者にとって時間的・経費的に無理がある。そこで筆者は、当時の最先端技術を駆使して造営された皇帝の宮殿や陵墓、仏教寺院などに葺かれた瓦に着目した。これらの瓦は、官立の工房と工人が関与したものであり、各時代や広域における造瓦技術の普遍性を知る上で、重要な資料と考えたからである。

宣祖永安陵から哲宗永泰陵までの北宋の皇帝陵(いわゆる北宋皇陵)は、河南省鞏義市にある(河南省文物考古研究所1997)。河南省文物考古研究所などが陵園内の建物遺構や禅院も含めて試掘調査や発掘調査をおこない、大量の瓦を発見した。これらの大部分は、964年から金侵攻による北宋壊滅の1126年までに製作された瓦であると考えて大過ない。

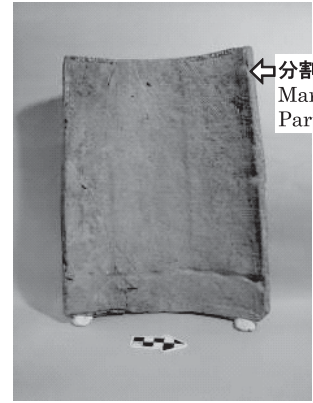
筆者は当初、北宋皇帝陵の瓦において粘土板巻き作りの痕跡が確認できると期待し、2006年2月に河南省文物考古研究所の許可を得て、瓦調査をおこなった。その結果、当初の予想に反して、北宋皇帝陵の瓦の凹面に、複数の粘土紐が積み上げられている痕跡を確認するこ



①明代：奴兒干都司・永寧寺跡出土
Ming(15C): Yongning-si Temple
Site Built by Nurgan-du-si



②元代：奴兒干都司・永寧寺跡出土
(征東元帥府付属寺院か)
Yuan(13C): Unknown Buddhist Temple
Built by the Headquarter of Eastern
Governor-general of Emperor Before
Yongning-si Temple.



③宋代：日本・博多遺跡群(南宋
客商関連の廟か)
Southern Song(12-13C): Probable
Unknown Chinese Shrine Built
by Traders from Southern Song
at Hakata Site Group, Ancient
Fukuoka, Japan.

図4 明・元・南宋代の平瓦凹面の「糸切り痕」



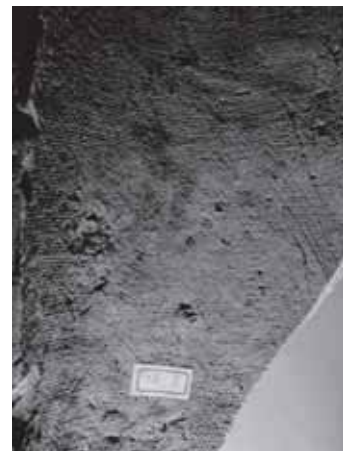
①復元された雷峰塔



②丸瓦凹面の粘土板合わせ目



③平瓦凹面の粘土板合わせ目



④平瓦凹面の糸切り痕

図5 南宋臨安府雷峰塔で確認された粘土板巻き作り

とができた(図2-①)。また、観察し得た丸瓦と平瓦の凹面では、糸切り痕がまったく確認できなかった。以上から、粘土紐巻き作りは、少なくとも北宋代まで存続していたことが判明した。しかも、皇帝陵の瓦であることから見て、それは華北地方においておそらく普遍的なことであったと予想される。筆者の瓦調査は、いよいよ南宋代の瓦へと向かうことになった。

3. 南宋代の瓦—雷峰塔の瓦は粘土板巻き作り—

筆者が照準を定めた瓦は、浙江省杭州市にある雷峰塔遺跡の出土品である。

雷峰塔は浙江省杭州市の西湖の南西岸にあり、磚を実心体とする木塔であった。五代・呉越国の段階に創建され、その年代は磚に残された紀年銘(971~973年)にかなり近いと推定されている。『淳祐臨安志輯逸』卷五『院』の宋寧宗慶元5年(1199)楊亢「慶元修創記」によれば、雷峰塔は、北宋末年の宋徽宗宣和3年(1121)に反乱に失敗し、敗走した方臘軍によって火がつけられ、焼亡した。残された磚積みの木製塔身部分の復興が発願されたのは、南宋が臨安府に遷都した後の乾道7年(1171)で、再建が落成したのは慶元元年(1195)であった。元軍が臨安府に侵攻して以降は、修理されることもなく、荒廃の一途をたどった。その後、雷峰塔は明末の16世紀中頃に、倭寇の攻撃によって再度焼亡した可能性がある指摘されている。磚積みの塔身だけになった雷峰塔は、西湖湖岸の名勝地「雷峰夕照」として歴史のよすがを偲ばせてきたが、ついに1924年に崩壊し、瓦礫の山と化した後は、長らく自然の小山と区別がつかない状態となっていた。

その後、2000年に浙江省文物考古研究所によって発掘調査がおこなわれ、地下から地宮や舍利容器が発見された。2002年には現代工法で5層の雷峰塔が復元され、第1~2層部分で検出された塔身部分を公開する遺跡博物館としての機能を兼ね備えている(図5-①)。以上の創建から再建、崩壊に至る経緯は、『雷峰遺珍』(浙江省文物考古研究所2002)と『雷峰塔遺址』(浙江省文物考古研究所2005)に詳しくまとめられている。

2006年10月、筆者は、浙江省文物考古研究所の許可を得て、雷峰塔遺跡出土の瓦を観察した。その結果、軒瓦を含む瓦の凹面で糸切り痕(図5-④)と粘土板合わせ目(図5-②・③)を確認した。発掘担当者の黎毓馨氏のご教示によれば、蓮華文軒丸瓦を含むこれらの瓦は、近年杭州市内で出土している臨安府関連施設の瓦と同文であることから、主として南宋の再建段階のものであるという。筆者は、蓮華文軒丸瓦が牡丹文軒丸瓦に先行する呉越国代のものである可能性を推定しているが、それは今後の重要課題とするとして、少なくとも12世紀末までには、南宋の首都であった臨安府一帯の造瓦技術は、すでに粘土板巻き作りに転換していた可能性が高いことが判明した。しかも、粘土板巻き作りへの転換が、宋王朝の臨安府遷都の過程で自発的に発生したとは考えがたいことから、粘土紐巻き作りが主流の華北地方と粘土板巻き作りが主流の江南地方の差、すなわち大きな地域差を反映していると考えに至った。

雷峰塔の瓦調査成果により、筆者は粘土板巻き作りが江南地方でいつまで遡るか、そしてその分布が江南地方を含めてどこまで広域なのか、という新たな課題に挑戦することになった。

4. 日本福岡市・博多遺跡群の中国系瓦—粘土板巻き作りの意味—

ところで、日本の福岡市にある博多遺跡群や太宰府市の天満宮(旧安楽寺)境内などからは、平安時代中・後期の瓦とは明らかに異なる、牡丹文などの植物文様を有する軒丸瓦や波状重弧文などを有する軒平瓦が出土し、中国系瓦と称されてきた(常松 2005)。文様については、浙江省寧波市にある国寧寺出土の宋代瓦との類似性が指摘されている。

筆者は 2006 年 1 月に福岡市埋蔵文化財センターと太宰府市文化財課でそれらを調査した。その結果、平瓦凹面に明瞭な糸切り痕と模骨の枠板痕があり、丸・平瓦凹面に粘土板合わせ目があることから、これらの瓦は粘土板巻き作りによって製作されたことが判明した(図4-③)。さらに、平瓦の両側面寄りには、上下あるいは上中下に半円形の窪みがあることから、模骨の枠板上の 90 度ごと(4ヶ所)に、半球形の分割突起が上中下あるいは上下に取り付けられていることがわかる。これは、瓦を分割するための目印である。軒平瓦の瓦当部(顎を含む)は、円錐台形の粘土円筒に薄手の瓦当粘土を貼り付ける手法によって成形されている(山崎 2000)。この瓦当成形手法は、粘土円筒の広端面に、包み込み技法のように瓦当粘土を被せる中国北方の手法とは異なるものである。

これらの技術は、全体的に見て、当時の日本在来のものとは大きく異なっている。また、牡丹文などの軒丸瓦の文様と軒平瓦の文様も、南宋臨安府のものに酷似しているといえる。したがって、博多遺跡群などの中国系瓦は、北宋代か南宋代かはともかく、宋代江南地方の瓦製作の直接的な特徴を強くもっていることから、江南地方から船で博多まで運搬されたか⁽²⁾、江南地方系瓦工人によって博多付近で製作された可能性が高い。かりに将来、博多遺跡群出土の瓦において、粘土紐巻き作りの痕跡が確認されることになれば、それは宋代の華北地方を含む北方との関係で生産されたことを示すものとなるだろう。

5. 仮説「粘土板巻き作り南朝主流説」の提示

以上、筆者は、まず粘土板巻き作りの主流化が中国南方において早く出現し、南北差が発生したことを指摘し、それは中国南方において唐～南宋代よりさらに古い時代まで遡るであろうと推定した。その傍証は、朝鮮半島の百済と倭(日本)の瓦成形技法にも見いだせる。

百済は、漢城(ソウル)、熊津(公州)、泗泚(扶餘)の順に遷都する。筆者は、2005 年の第 2 回韓国瓦学会で、韓国国立文化財研究所遺跡調査室長の崔孟植氏に対し、朝鮮半島における粘土紐巻き作り主流から粘土板巻き作り主流への変化が、いつ頃発生したかについて質問した。崔氏は初歩的な見通しと断りながら、粘土板巻き作りが百済では熊津遷都後に急速に普及し、泗泚遷都後に主流となった、と回答した。崔氏の見解については今後統計的な検証が必要であるが、筆者は妥当性が高いと考えている。

6 世紀末に飛鳥寺が造営されるにあたって、泗泚遷都後 50 年の百済から瓦製作の技術者(瓦博士)などが派遣され、日本最初の瓦生産がおこなわれた。飛鳥寺創建の瓦はすべて粘土板巻き作りであり、その後の日本の瓦生産も、粘土板巻き作りが圧倒的に主流であった。この現象

は、前述した崔氏の見解通り、熊津遷都後の百済では粘土紐巻き作りから粘土板巻き作りへ急速に転換し、そして泗泚遷都後には粘土板巻き作りが主流になっていたことを背景として、発生したと考えてよいだろう。

中国の北朝の領域では粘土紐巻き作りが普及していたので、熊津期百済で徐々に主流となる粘土板巻き作りは、自生か、北朝以外の地域との関係で導入されたことになる。

熊津期の百済王陵である公州市・宋山里古墳群の武寧王陵には、南朝系の磚室墓や高い工芸技術の導入に裏打ちされた副葬品が存在し、また同6号墳で発見された「梁官瓦為師矣」銘磚（近年、韓国では「瓦」を「品」と読むことが多い）には、南朝梁との外交・文化上の強い結びつきが示され、そして周辺の貴族墓には鶏頭壺、青磁有蓋四耳壺、両耳盤口瓶などの南朝製陶磁器が副葬されている。さらに、大通寺（南朝・梁武帝の大通・中大通年間は527～535年）などの仏教寺院の造営も、熊津期から本格的に開始された。百済は、泗泚遷都直後の541年にも、武帝が統治していた梁に対して、仏教經典や工匠、画師の派遣を求めている。こうした状況から見れば、熊津期百済の粘土板巻き作りも、中国南朝からの諸技術導入の一環として、造寺工人や瓦工人が派遣される過程で新たに導入されて次第に普及し、泗泚遷都後にその普及が一層促進され、主流となった可能性がきわめて高いといえよう。

筆者は、以上のような熊津期と泗泚期の百済、そして飛鳥時代の倭国の状況に基づいて、粘土板巻き作りが主流となる契機が、南朝のいずれかの王朝まで遡ること、そしてそれが南朝の首都・建康を含む江南地方であること、さらにその現象が華中と華南で比較的急速に普及した結果、それ以後の中国では南北二系統の瓦成形が展開したらしい、という仮説「粘土板巻き作り南朝主流説」を提示した（佐川2007）。粘土紐巻き作りから粘土板巻き作りへの転換に関する瓦調査の照準は、いよいよ南朝の首都・建康（南京市）に合わされることになった。

6. 仮説「粘土板巻き作り南朝主流説」の検証

2006年12月の奈良文化財研究所と中国社会科学院考古研究所の共同研究の調査地は、偶然にも江南地方であり、南京大学文化與自然遺産研究所（賀雲翱教授）で南朝の首都・建康出土瓦を調査する機会がめぐってきた（賀2005、中国社会科学院考古研究所ほか編2008、本書）。

その結果、南京市弓箭坊出土の凸面に銭文叩きをもつ呉・西晋～東晋代の丸瓦の凹面（図6-①）と、南朝宋「大明五（461）年明堂壁」銘磚（賀ほか2006）とともに出土した丸瓦の凹面（図6-②）では、粘土紐巻き作りの痕跡が確認された。また、南京市・鐘山の南朝祭壇遺跡は、宋の孝武帝が大明3（459）年に造営した建康城の「北郊壇」と推定されている（南京市文物研究所ほか2003）。この1号祭壇の南の附属建築区から出土した平瓦凹面では、粘土板巻き作りを示す糸切り痕が確認された（図6-③）。このことと、熊津期百済以後に推定される粘土板巻き作りの主流化を総合的に捉えるならば、南朝建康城においては粘土紐巻き作りから粘土板巻き作りへの転換が南朝の宋代までの間にはじまり、その後の斉～梁代において粘土板巻き作りが主流となっていった、と予想される（図7）。



①丸瓦凹面の粘土紐



②丸瓦凹面の粘土紐



③平瓦凹面の糸切り痕



④丸瓦凹面の粘土板合わせ目

図6 南朝建康出土瓦に見る粘土紐・板巻き作りの痕跡

しかし、上記の遺跡については、丸・平瓦の調査が不十分である。また、南京大学での瓦調査においては、梁中大通4（532）年に死去した梁南平王蕭偉の墓の門闕遺跡（南京市文物研究所ほか 2002）から出土した軒丸瓦を観察したが、大量に出土した丸・平瓦は調査していない。同様に、鐘山1号寺廟遺跡と宋代初期創建の上定林寺と推定されている鐘山2号寺廟遺跡（賀 2007）から出土した軒丸瓦を観察したが、丸・平瓦はほとんど調査していない。したがって、仮説「粘土板巻き作り南朝主流説」をより確固としたものにするためには、建康城と周辺遺跡出土の丸・平瓦の統計的な分析が不可欠であり、とくに梁南平王蕭偉墓の門闕遺跡出土瓦の分析は重要である。

南京市での調査に引き続いておこなわれた揚州城出土瓦の調査では、唐代と推定される丸瓦の凹面で粘土板合わせ目と糸切り痕を確認し、粘土板巻き作りが存在したことが判明した（図6-④）。揚州城出土の唐代瓦においては、その凹面に粘土紐巻きの痕跡を残す事例が確認できなかったことも、粘土板巻き作りが主流であったことを傍証するものであろう。

今後、江南地方におけるこうした事例をより多く確認し、仮説の信頼性を高めていくことはもちろんだが、同様の調査を華中や華南の複数の遺跡で実施し、この仮説が中国の南方でどの程度適応するのかについても、検証する必要がある。

7. 広州市・南越国宮署遺跡の瓦調査—粘土板巻き作りは唐・南漢代から主流か—

そこで、2008年2月に、広東省広州市にある南越国宮署遺跡の瓦調査をおこなった。この遺

跡は広州市街地に位置し、前漢代・南越国の都城遺跡の文化層の上に、歴代の地方官衙の文化層や五代十国時代の南漢皇宮遺跡の文化層が累々と重複する、という特徴をもつ。したがって、南越国宮署遺跡は、華南地方の遺物の編年研究をする上で、最適な条件を有している。

遺跡から出土した軒丸瓦については、南越王宮博物館籌建処の李灶新氏が文様によって分類し、出土地層などとの関係で時代比定を行っている（李 2004）。筆者は李灶新氏を訪ね、瓦成形技法の転換に関する研究の成果と意義を説明しながら、李氏が分析した南越国宮署遺跡出土の主要な軒丸瓦を足早に観察することができた。その結果、前漢代から南朝代までの軒丸瓦は粘土紐巻き作りか、それを主流として製作された可能性が高く、唐代と南漢代の軒丸瓦は若干の粘土紐巻き作りを残しつつも、主として粘土板巻き作りで製作され、宋代以後の軒丸瓦は粘土板巻き作りで製作された、という初歩的な見通しを得ることができた。

また、広州市文物考古研究所では、副所長の朱海仁氏が研究した南漢・皇宮遺跡（中山四路致美齋）の南漢瓦礫層出土の、青磁と見まがう青釉瓦などを観察した（朱 2005、広州市文物考古研究所 2005）。そして、数点の瓦で粘土板合わせ目を確認し、前述した見通しを補強することができた。朱海仁氏のご教示によれば、『南漢書』には南漢の宮殿を「玉堂珠殿」と形容する記載があり、それが青釉瓦で葺いた建物であったことはまちがいないようである。

筆者は、朱氏と李氏に南越国宮署遺跡出土瓦の悉皆調査を託して、広州市を後にした。唐～南漢代にはすでに粘土板巻き作りが主流になっていることから、江南地方も含めた華中・華南地方の粘土板巻き作り主流化の時期は、華北地方と比較して早いといえる。中国の瓦成形技法においては、華中・華南地方と華北地方との南北差（南北二系統）が南朝～唐代において発生し、南宋代まで継続した可能性が高いという見通しを得ることができた。

C 軒瓦などの南北差と軒平瓦の等級

1. 軒丸瓦の南北差

(i) 江南地方の南朝～唐代前半の軒丸瓦は外縁が高い

南朝の首都・建康城の軒丸瓦の外縁高は、北朝の外縁高と比較すると明らかに高く、内区はその高さの中に収まっており、瓦当裏面に回転台による明瞭な同心円ナデ調整が残されている（中国社会科学院考古研究所ほか編 2008、本書の賀雲翱氏論文参照）。隋～唐代前半（6世紀末～8世紀）になると、軒丸瓦の外区内縁に連珠文を巡らすようになる。この段階でも、南朝の瓦当に見られた特徴は、依然として存続する。

北朝の軒丸瓦の外縁は非常に低く、内区文様の方が高い。瓦当裏面は平坦にナデ調整しているが、江南地方のように明瞭な同心円ナデには至っていない。このような特徴は、隋～唐前半まで存続する。しかし、鄴城遺跡の五胡十六国時代の軒丸瓦は、外縁高が内区より高い。

(ii) 唐代後半には全国的に外縁の幅広化、内区突出化

唐代後半になると、揚州城遺跡の軒丸瓦では、内区が中房を中心に盛り上がり、外縁は周辺

に向かって低く傾斜して幅広になり、瓦当裏面からは同心円状のナデ調整が消える。このような特徴は、長安城遺跡や洛陽城遺跡の同時期の軒丸瓦でも確認され、全国的な現象といえる。なお、揚州城遺跡の軒丸瓦では、内区が深めの范型に瓦当粘土をしっかりと詰め込むために、瓦当裏面から指オサエした窪みが残されている。

雷峰塔遺跡の軒丸瓦のうち、筆者が呉越国（五代十国時代）創建のものと推定している蓮華文軒丸瓦は、再び外縁が幅狭くなり、内区よりやや高くなる。また、唐代後半において簡略化された蓮華文が、立体化した整ったものとなり、一種の復古現象が見られる。しかし、南宋代の牡丹文を含む植物文軒丸瓦では、瓦当面全体が低く平板化する。

（iii）鄴城遺跡五胡十六国時代の軒丸瓦と漢城期百済・風納土城の軒丸瓦の銭文の関連性

鄴城遺跡は五胡十六国時代（316～386年）の後趙、前燕、冉魏の首都でもあり、瓦調査の際に、その段階の軒丸瓦が3種類確認された（本書の2を参照）。それは大きく見るならば、魏・西晋代という前時代の軒丸瓦や隣国・高句麗の軒丸瓦との関連性があり、さらに漢城期百済の首都・風納土城で出土した揺銭樹文系軒丸瓦とも関連性があることから注目される。

鄴城例は全体的に見て、半球形の中心飾と文様の4単位構成が前時代からの伝統をとどめており、蕨手風雲気文が4単位表現されている例がある。菱形の蓮弁は、高句麗の軒丸瓦の蓮弁表現と類似する。三者に共通な文様要素には、中心飾りから発する茎と蕾を想起させる文様があり、これも高句麗の蓮蕾文軒丸瓦の中に類似要素を認めることができる。これは、鄴城例の「丸に十文字」文とも表現的に共通するが、「丸に十文字」文は銭文であり、風納土城出土の軒丸瓦で特徴的な揺銭樹文の銭文の表現と同一である。

さて、風納土城出土軒丸瓦の文様も、4単位構成を基本としており、揺銭樹文として表現されているが、揺銭樹文軒丸瓦は、南北朝時代も含めて中国にはない。風納土城例の銭文では、「丸に十文字」文と枝が45度ずれているが、鄴城遺跡例では「丸に十文字文」と枝が一致している。また、風納土城の軒丸瓦の製作技法（一本作り式、嵌め込み式）は、鄴城遺跡の軒丸瓦が接合技法によるのとは大きく異なっている。しかし、漢城期百済と呉・晋・南北朝時代には、とくに陶磁器において富貴を象徴する銭文が流行していたので、同時期の瓦にも採用されたのであろう。朱岩石氏によれば、銭文を採用した軒丸瓦は、遼寧省朝陽市北塔遺跡からも出土しているという。銭文は広く分布したが、風納土城の軒丸瓦については、中国北方との関連を今後追究する必要がある。

（iv）南朝の軒丸瓦の蓮華文と熊津期・泗泚期百済の軒丸瓦の蓮華文

この問題については、本シンポジウムにおける金誠龜氏、金有植氏、亀田修一氏の評価を尊重したいが、簡単にコメントしておく。漢城期百済・風納土城の軒丸瓦には、素弁の例はない。2008年に城内中央の慶堂地区で発見された軒丸瓦は、複弁蓮華文であり、北魏・平城の影響も指摘されている（ソウル歴史博物館ほか2008）。また、南接する夢村土城の軒丸瓦の蓮華文は、高句麗的な素弁である。したがって、漢城期百済の軒丸瓦の蓮華文が、熊津期以後の百済の軒

丸瓦の文様の源流になったとはいえない。

本節(i)でも述べたように、南北朝時代の外縁高の南北差は明瞭であるので、その点では熊津期・泗泚期百済の軒丸瓦は、外縁高が内区高より高く、南朝的である。しかし、百済との関係が密接な梁代を含む南朝の軒丸瓦の蓮華文は、熊津期・泗泚期百済のように弁央が幅広のものは少なく、弁端が尖り気味の例も多い(中国社会科学院考古研究所ほか2008を参照)。とくに、弁端点珠の遡源である、弁端が尖り気味で反り上がる例や、飛鳥寺花組のように弁端に切れ込みが入る例もまったくない。

そこで、熊津期百済の軒丸瓦の弁端点珠的な蓮華文に類似するものを探し求めると、仏像の台座や青磁尊の蓮華文に多くの例を見いだすことができる。おそらく、百済は、南朝の軒丸瓦の蓮華文を直接受容せず、他の工芸品の蓮華文を積極的に選択して、百済的な軒丸瓦を作り上げたのであろう。

2. 丸瓦の南北差

(i) 南朝の丸瓦玉縁部凹面に布目痕なし

南京大学で調査した南朝の丸瓦には、筒部と肩部が90度近い角度をもち、それらの凹面には連続する布目痕が残されているが、玉縁部凹面には布目痕がない、という特色が共通して認められる(中国社会科学院考古研究所ほか編2008、本書3の賀雲朝氏論文参照)。これは、丸瓦用模骨が一木の円筒形で、玉縁部用の突出部が作り出されていないことが原因である。布袋を被せてその一端を閉じた円筒形の模骨に、粘土紐か粘土板を巻き付け、その狭端の凹面側に肩部と玉縁部を兼ねた粘土を接合した結果、肩部凹面までは筒部凹面から連続する布目痕が残されるが、玉縁凹面には布目痕が付かないのである。

このような玉縁部の特色は、筒部凸面に銭文叩きを施した呉～東晋代の丸瓦(建康城内出土)が目下最古であり、揚州城出土の唐代丸瓦を最新として確認できる。呉以前の事例の存否については、今後の検討課題である。しかし、浙江省杭州市の雷峰塔遺跡の南宋代(あるいは呉越国代も含むか)の丸瓦では、玉縁部凹面にも布目痕があり、筒部と玉縁部を繋ぐ肩部はなで肩になっている。したがって、江南地方の丸瓦の模骨は、唐代から南宋代までの間に、玉縁部用の突出部が付くビール瓶形に変化し、粘土板巻き作りで丸瓦全体を成形し、肩部に断面三角形の粘土紐を貼り付ける手法に変化したといえる。

(ii) 北朝の丸瓦玉縁部凹面に布目痕あり

一方、北朝の北魏代や東魏・北斉代の丸瓦は、玉縁部凹面に筒部から連続する布目痕を残し、肩部凹面がなで肩をなしている(本書の3を参照)。これは、ビール瓶形の模骨に布袋を被せて、粘土紐巻き作りで丸瓦全体を成形し、肩部に断面三角形の粘土紐を貼り付ける手法を採用した結果である。この手法は、江南地方では、前述したように唐代から宋代までの間に出現した。そして西安市と洛陽市の隋・唐代の丸瓦でも存続するが、それらは北朝歴代の丸瓦と比較すると、玉縁長が短くなり、筒部凸面と肩部凸面が鋭角をなす場合が多い。

したがって、南北朝時代の丸瓦の製作手法には、明瞭な南北差があったといえる。それが南方（江南地方）でも、唐代から南宋代までの間に北方の手法を受容し、統一された。南北差とその後の統一化の背景については、今後の課題としたい。

（iii）百済と飛鳥時代の玉縁部凹面に布目痕がない丸瓦の源流

じつは、南朝の丸瓦と同様の特色をもつ丸瓦が、韓国公州市の熊津期百済と扶餘邑の泗泚期百済の丸瓦にも、また飛鳥時代の飛鳥寺や四天王寺、若草伽藍の丸瓦にも存在することは、すでによく知られたことである。しかし、漢城期百済の風納土城や夢村土城からは、この種の丸瓦は一切出土していない。したがって、円筒形模骨を使用したこの種の丸瓦の製作手法の源流は、明らかに首都・建康城を含む南朝であったといえる。これは、前述した南朝の粘土板巻き作りの熊津期百済への伝播と連動したものであり、非常に重要な発見である。

熊津期百済以後の丸瓦には、①この種の玉縁式丸瓦のほかに、②玉縁部凹面に布目痕を残す玉縁部用突出を有する模骨で製作された丸瓦と、③行基式丸瓦があった。漢城期百済の風納土城では、②と③の丸瓦と、④円筒模骨を使用し、玉縁部を削り出す丸瓦も存在した。飛鳥寺でも①（弁端点珠のいわゆる星組の丸瓦部）と③（弁端切れ込みのいわゆる花組の丸瓦部）の丸瓦が製作され、さらに飛鳥時代の他の寺院では②の丸瓦も存在したのは、そうした漢城期に遡る百済の丸瓦の多様性の伝統が反映しているのである。

一方、南朝では、①以外の②～④の丸瓦はまったく存在しなかった。北朝でも、②以外の丸瓦はまったく存在しなかった。

3. 軒平瓦の南北差

（i）南朝に軒平瓦はなかった—百済や飛鳥寺との関係—

南京大学での瓦調査では、南朝に軒平瓦が存在したという証拠はなかった。調査した波状重弧文軒平瓦は段顎をもっていることから、宋代以後の軒平瓦と見なされる。賀雲鞠氏の南朝関係の論文においても、軒平瓦はまったく提示されていない。このことから、少なくとも南朝の首都・建康では、軒平瓦が製作されていなかった可能性が高い（大脇 2005）。これは、北朝の北魏で平城首都段階から波状文・波状重弧文軒平瓦が製作されていた状況と大きく異なる。

このことから思い起こされるのが、熊津期百済には軒平瓦が皆無であり、泗泚期百済には軍守里廢寺から波状重弧文軒平瓦が数点出土し、扶蘇山城からはいわゆる土器口縁軒平瓦が若干出土している程度で、6世紀までの百済では軒平瓦はほとんど製作されていなかった（金有植 2004）という事実である。こうした状況は、古新羅の段階においても同様であった。さらに、飛鳥寺においても、瓦当文様を有する軒平瓦はまったく出土していない。これは、百済の瓦博士自身が瓦当文様を有する軒平瓦を知らなかったからにほかならない。百済では、平瓦の広端を軒先に向けて葺くことが一般的であったと推定されている（花谷 2000）。おそらく、南朝でもそうであったのであろう。

前述した粘土板巻き作りの主流化と円筒形模骨使用の玉縁式丸瓦とともに、平瓦が軒平瓦を

代用する伝統も、南朝から熊津期百済へ伝播し、さらに倭国へも伝えられたと考えると大過ないようである。熊津期百済と南朝との密接な関係を改めて強く感ずる。

2007～2008年に発掘調査が行われた韓国益山市の百済・帝釈寺の金堂跡からは、平瓦広端部凸面に瓦当粘土を貼り付け、獣面文を中心飾りとする均整忍冬唐草文を範押しした軒平瓦が、単弁軒丸瓦とともにまとまって出土した（韓国国立扶餘文化財研究所2008）。火災の痕跡も確認されたので、この軒平瓦が7世紀前半に製作されたものであることはまちがいない、百済説と統一新羅説が混沌としていた積年の課題が解決した。中国で範型を使用した軒平瓦がはじめて製作されたのは北宋代であるので、百済・帝釈寺跡の範型を使用した軒平瓦は、百済で創作されたのであろう。

(ii) 有顎軒平瓦の瓦当成形手法の南北差

北魏代に最初の軒平瓦が出現してから唐代までは、平瓦用粘土円筒を上下逆転させ、広端面を瓦当面として、上方から波状文や波状重弧文を施文していた。したがって、隋・唐代において広端面が狭端面と比べわずかに厚くなる場合はあるものの、段顎を附加して瓦当面を大きくするようなことはなかった。それが宋代、遼代になると、段顎をもった有顎軒平瓦が登場する。

顎を含めた瓦当部の成形手法にも、南北差があることがわかってきた。北方（遼～元代）では、平瓦用粘土円筒を逆転させ、広端面を帯状粘土で軽く包み込むようにしながら、瓦当を成形し、上方から波状重弧文等を施文している。北宋皇帝陵の軒平瓦では顎は明瞭に作り出されていないが、洛陽にあった北宋西京関連遺跡の軒平瓦では段顎となっており、平瓦の広端面を瓦当粘土で軽く包み込むようにしながら、成形・施文している。

これに対して、雷峰塔遺跡の南宋代の軒平瓦では、平瓦広端面の凸面側に帯状に瓦当粘土を貼り付けて、表裏をナデ調整した後に、瓦当面に上方から波状重弧文などを施文している。また、福岡市の博多遺跡群出土の宋系軒平瓦においても、雷峰塔遺跡と同様の瓦当成形がおこなわれている。これについて山崎信二氏は、瓦当裏面に回転ナデ調整を施しているので、円錐台形粘土円筒を回転台上に置いた状態で、広端凸面側に帯状に瓦当粘土を貼り付ける作業をおこない、その後粘土円筒を上下逆転させて上方から施文した、と工程復元をしている（山崎2000）。筆者も山崎氏の工程復元を支持したい。

このように、中国における有顎軒平瓦の瓦当成形は、南北で大きく異なっていたのである。

D まとめ

1. 中国江南地方における粘土板巻き作りの主流化の時期と百済・倭国への影響

中国南方の少なくとも江南地方では、南朝の斉～梁代に粘土紐巻き作りから粘土板巻き作りへの転換が急速に進展し、後者が主流となった可能性が高い（「粘土板巻き作り南朝主流化説」、図7）。その影響は、たとえば梁代には熊津期百済へ伝播し、百済の瓦製作を粘土板巻き作り主流へと徐々に転換させ、さらにはそれが泗泚期百済でいっそう促進され、ついには百済から粘

土板巻き作り主流の成形技法が6世紀末に日本へ伝播することになったのであろう。

上記の推定は、南朝（江南地方）の軒丸瓦に見られる外縁高が内区より高いことや、南朝の丸瓦玉縁部の製作手法が、熊津期百済の軒丸瓦へ強く影響していることから、妥当性が高いと考えている。

2. 粘土板巻き作りの中国北方・北アジアへの普及とその背景—瓦成形技法元統一説—

華北地方や中国北方を含む北アジア地域の瓦製作は、北宋・遼・金代まで、粘土紐巻き作りが完全に主流であった。それが元代になると、アムール川河口やザバイカル地方という最果てまで、瓦成形技法が粘土板巻き作りに転換している。筆者は、この背景について、次のように推定している。

すなわち、南宋が1279年に元によって滅ぼされる際に、元が何らかのかたちで、たとえば南宋官窯や江南地方などの瓦工人を大量に強制移住させるなどして、南宋の領域にあった粘土板巻き作りを北方へ広く導入した結果、まず中国北方で、さらに北アジアでも粘土板巻き作りへの大転換が図られた可能性が高いと考える。したがって、「瓦成形技法元統一説」を仮説として提示しておく（図7）。なお、この点については、今後、文献資料の裏付けを取ることが必要である。そして、粘土板巻き作りが元の上都、中都、大都を含めた華北地方や中国北方を含む北アジア地域に導入され、粘土紐巻き作りが衰退、消滅していく経緯についても、実地調査をおこなって検証する必要がある。

3. 統一新羅や日本で改良・創出された瓦製作・施文手法

新羅が676年に朝鮮半島を統一すると、平瓦製作用の桶に改良が加えられる。それまで枰板を紐で連結していた可動式のタイプが、次第に枰板を紐で連結しない非可動式のタイプに変化していく。このタイプの桶は8世紀末に日本の九州北部へも伝播し、11世紀頃まで使用された（図7：栗原1999）。なお、中国では現代まで枰板連結模骨が存続した。

日本では、8世紀前半に平城宮の造瓦組織で「平瓦一枚作り」が開発され、粘土板桶巻き作りに急速に取って代われ、主流となっていった。これは、日本で独自に創出された瓦成形技法である。ただし、陸奥国と出羽国のように、8世紀中葉以後、丸瓦だけは粘土紐巻き作りで、平瓦は一枚作りで製作された地域もある。

施文手法については、軒平瓦の施文に笠型を使用することが、泗泚期百済（7世紀前半の帝釈寺跡）や倭国（笠型を瓦当上方か側方から押圧）、そして統一新羅（笠型を下に置く包み込み技法）で、中国よりも早く開始された。なお、中国で笠型を使用する軒平瓦の施文を最初に試みたのは、北宋代（北宋皇帝陵）の例であり、笠型を粘土円筒の上方から押圧する手法である（佐川2006）。この施文手法は金～東夏代のアムール川流域でも確認されるが、ほとんど流行しなかった。広く流行したのは、三角形の笠型を下に置いた包み込み技法によって軒平瓦を製作する手法である。この種の瓦を中国では滴水瓦と呼んでおり、宋代の実態はなお明らかではないものの、遼や西夏で大いに発達し、元以後も主要な軒平瓦の一つとなっていった。

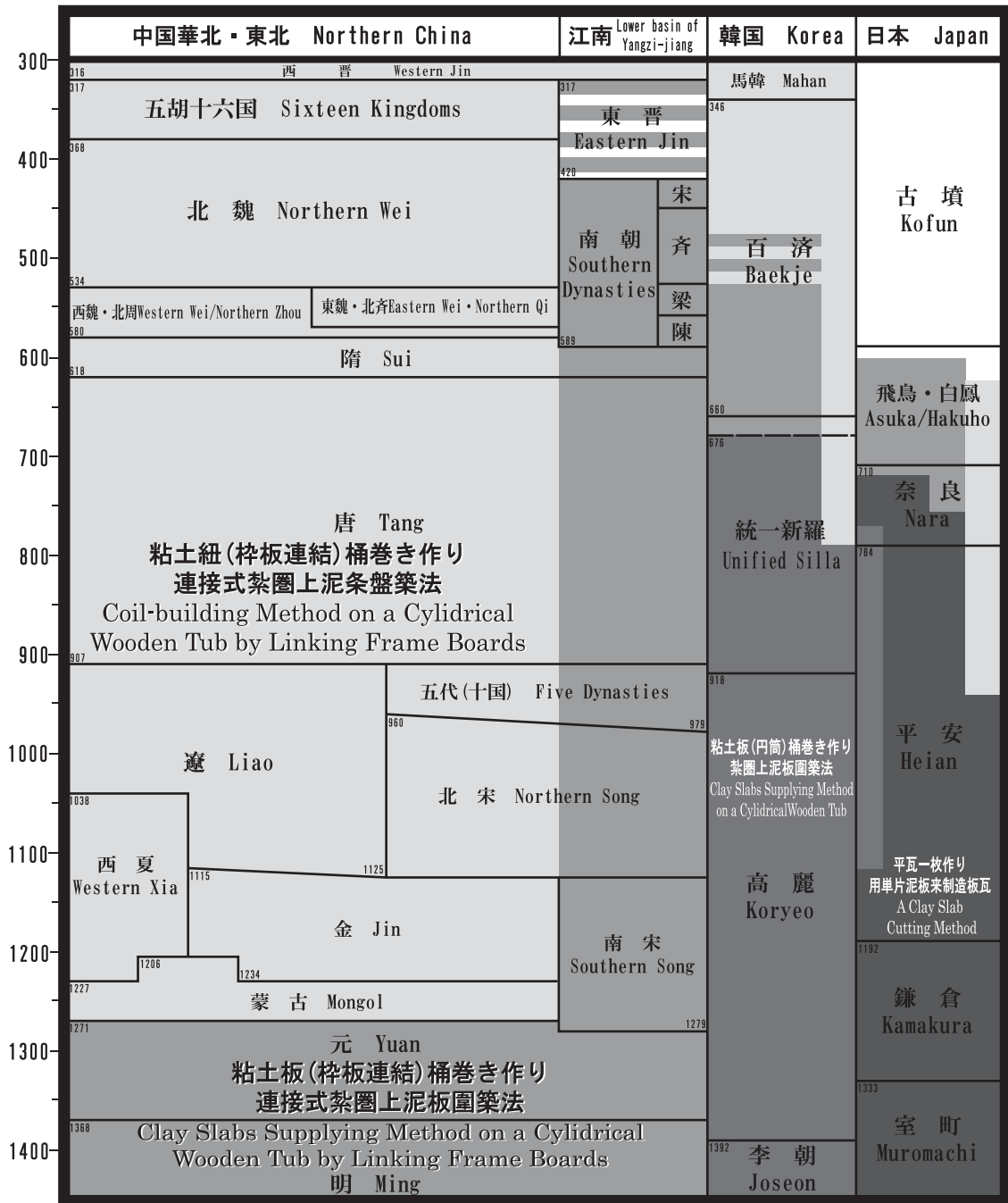


図7 中韓日瓦製作技法の変遷

謝 辞 以上のように「粘土紐巻き作り」から「粘土板巻き作り」への転換の問題を、東・北アジア的に比較検討することは、じつに重要な意義がある。最後に、2005年以來、中国での瓦調査の機会を与えていただき、本シンポジウムにおいて発表の機会を与えていただいた日本の国立文化財機構 奈良文化財研究所、中国社会科学院考古研究所、韓国国立文化財研究所、そして日本、中国、韓国、ロシアでの瓦調査でお世話になった皆様に対して、衷心より感謝申しあげる次第である。なお、共同研究「古代東アジアにおける造瓦技術の変遷と伝播」の研究代表者であった山崎信二氏が2009年3月をもって奈良文化財研究所を退任された。末筆ではあるが、長年にわたる氏のご指導とご鞭撻に深く感謝し、今後のご健勝を衷心より祈念申し上げたい。

註

- (1) 筆者は、2006年9月に河北省張家口市にある元中都遺跡を見学した際に、遺跡内に散布している瓦を仔細に観察したが、粘土紐巻き上げの痕跡を残す例は皆無であった。
- (2) 福岡市埋蔵文化財センターの常松幹雄氏によれば、瓦の胎土も日本の瓦と異なるものがあるという。

参考文献

- A.R.Artemiev 2001, Some Results of Archaeological Researches of the Buddhist Temples of the XVth Century in the lowers of the Amur River. *Ancient and Medieval History of Eastern Asia to 1300th Anniversary of Formation of Bohai State*. Edited by A.R.Artemiev, Institute of History, Archaeology and Ethnography of the Peoples of the Far East, Far Eastern Branch of the Russian Academy of Sciences. Vladivostok, Russia.
- A.R.Artemiev 2005, *Buddhist Temples of the 15th Centuries in the Lower Amur*, Institute of History, Archaeology and Ethnography of the Peoples of the Far East, Far Eastern Branch of Russian Academy of Sciences, Vladivostok, Russia.
- 大脇 潔 2005 「老北京胡同薈紀行—東アジアにおける軒平瓦の変遷—」『古代撰河泉寺院論叢集』第2集、撰河泉古代寺院研究会・撰河泉文庫
- 賀雲翹 2005 『六朝瓦当與六朝都城』文物出版社（中国）
- 賀雲翹・邵磊 2006 「南京發現南朝“明堂”磚及其學術意義初探」『東南文化』2006年第4期
- 賀雲翹 2007 「南京鐘山二号寺遺址出土南朝瓦当與南朝上定林寺關係研究」『考古與文物』2007年第1期
- 河南省文物考古研究所 1997 『北宋皇陵』中州古籍出版社（中国）
- 韓国国立扶餘文化財研究所 2008 『益山 帝釈寺—第1次調査—』（現地説明会資料）
- 金有植 2004 「三国時代軒平瓦の発生に関する小考」『奈良国立博物館研究紀要・鹿園雑集』第6号、奈良国立博物館
- 栗原和彦 1999 「大宰府の九・十世紀の平瓦」『瓦衣千年—森郁夫先生還暦記念論文集—』日本・森郁夫先生還暦記念論文集刊行会
- 広州市文物考古研究所編 2005 『鉢積寸累』（広州文物考古集4）、文物出版社（中国）
- 佐川正敏 1992 「中国の軒平瓦の成形・施文技法を考える」『日本中国考古学会会報』第2号、日本中国考古学会
- 佐川正敏 2006 「唐代から明代までの造瓦技術の変遷と変革—長江流域からアムール川流域の軒平瓦を中心に—」『国際シンポジウム・東北アジアにおける遼・金・蒙元期の都市』（資料集1・2）、文部科学省研究費補助金「中世考古学の総合研究」プロジェクト・中国吉林大学辺疆考古研究中心共催
- 佐川正敏 2006 「中国造瓦技術の一大変革：『粘土紐巻き作り』から『粘土板巻き作り』への転換について

- の研究』『アジア流域文化論』Ⅲ、東北学院大学オープンリサーチセンター
- 佐川正敏 2006 「宋・金代における『粘土円筒上方范型押圧施文』による軒平瓦の発見」『アジア文化史研究』第6号、東北学院大学大学院文学研究科
- 朱海仁 2005 「広州市中山四路致美齋南漢與宋代建築遺址」『羊城考古発現與研究（一）』（広州文物考古集5）、広州市文物考古研究所（中国）
- 浙江省文物考古研究所 2002 『雷峰遺珍』文物出版社（中国）
- 浙江省文物考古研究所 2005 『雷峰塔遺址』文物出版社（中国）
- ソウル歴史博物館・韓神大学校博物館 2008 『ソウル風納土城慶堂地区2次発掘調査現地説明会資料集』
- 中国社会科学院考古研究所・日本奈良文化財研究所共編 2008 『四至十世紀東亜制瓦技術研究』（古代東亜地区制瓦技術変遷與伝播研究国際学術研討会会議資料）
- 常松幹雄 2005 「博多出土中世瓦の産地について（予察）」『平成16（2004）年度福岡市埋蔵文化財センター年報』（第24号）、福岡市教育委員会
- 南京文物研究所・南京棲霞区文化局 2002 「南京梁南平王蕭偉墓闕発掘簡報」『文物』2007年第7期
- 南京文物研究所・中山陵园管理局文物处・南京大学歴史系 2003 「南京鐘山南朝壇類建築一号壇発掘簡報」『文物』2003年第7期
- 花谷 浩 2000 「飛鳥寺・豊浦寺の創建瓦」『古代瓦研究 I—飛鳥寺の創建から百濟大寺の成立まで—』奈良国立文化財研究所
- 山崎信二 2000 『中世瓦の研究』奈良国立文化財研究所学報第59冊
- 李灶新 2004 「南越国宮署遺址2000年発掘出土瓦当研究」『華南考古』1、中国・広東省文物考古研究所・広州市文物考古研究所ほか

5 五～六世紀の新羅と周辺諸国の瓦

(原題：5～6世紀 新羅와 周辺諸國의 기와)

金有植

(国立扶餘博物館)

A はじめに

古代国家の文化交流は、自律的な関係と他律的な関係において存続した。瓦は工人や当時の知識層によって他地域に伝播し、また受容された。筆者は、瓦の受容には、受容国の文化的な意志と嗜好が大きく作用したと考えている。とくに軒瓦は、国家や時代によって多様に変化・発展し、そして衰退していくという文様の流れを知ることができる。その様式的な特徴は、国家間交流の研究において重要な資料になるであろう。軒瓦という糸口を通して、建築と工芸など当時の社会相を研究し、文化史を復元する必要があると考える。

6世紀の新羅は、智證王と法興王の代に体制を整備することで、内在的な発展を遂げた。この時期は、新羅のみならず、韓半島の三国が政治・社会的に飛躍的な発展を遂げた時期であり、互いに適度に牽制しつつも、均衡を図った時期でもある⁽¹⁾。新羅は、百済や高句麗、そして中国を通じて先進文物を受容すると同時に、一つの政治システムとして、仏教による国論統一と理想的な社会の実現を目指す志向性がうかがえる。

当時の仏教は、宗教的な役割以外に、先進文物を輸入する窓口としての役割もあった。仏教の公認によって寺院の造営があいつぎ、仏像、塔、建築、工芸などに飛躍的な発展がみられたのである⁽²⁾。新羅が土着社会の壁を乗り越え、巨大な寺院を造営した6世紀は、新たな文物の導入期にあたる。とくに瓦は、建物の建立にさいして非常に重要な器物である。したがって、仏教の公認は、瓦の刮目すべき発展を招来する契機になり、かつ工人たちの職制を含む生活条件を向上させたであろう。

東アジアの対外交渉を理解する作業は、非常に難しく、慎重を期さねばならない。とくに交渉は、国家、民族、地域の間に対等な交流を意味し、肯定的な側面のみならず、否定的な側面も明らかにする必要がある⁽³⁾。こうした立場に立ち、5～6世紀における東アジア諸国の瓦の中心的な文様であった蓮華文様の微細な変化を通じて、国家間の流れを検討し、共通点と差異点を導き出したい。

本稿では、以上のことがらを念頭に置き、三国の軒瓦の研究結果⁽⁴⁾を整理しつつ、6世紀の新羅の軒丸瓦の製作年代を検討し、蓮弁の淵源を考えていきたい。また、6世紀の新羅の蓮華

文軒丸瓦の重要性に着目して論を進める。しかし、資料的限界と筆者の瓦に対する理解不足のために、多くの誤謬がふくまれている可能性はある。それでも、新羅における軒丸瓦の受容過程を明らかにする一助になれば、という思いで作成したものであり、ご海容願いたい。

B 5～6世紀の新羅周辺諸国の軒瓦

5～6世紀は、高句麗、百済、新羅が互いに攻防する緊迫した情勢にあった。高句麗の故国原王は百済の近肖古王に殺害され、後に百済の蓋鹵王は長壽王に殺害された。さらには、新羅が管山城で百済の聖王を殺害している。このように、非常に緊迫した情勢のなか、三国間では外交的な関係を含めた文物交流が適宜営まれていたのである⁽⁵⁾。

皮肉にも、この時期の新羅の軒丸瓦には、高句麗と百済の瓦に見られる要素が多く認められ、三国の交流を明らかにする一つの手がかりとなる⁽⁶⁾。とくに6世紀の新羅の軒丸瓦は、製作技法のみならず、文様にも高句麗や百済との親縁性が強く見られる。このことは、三国が緊張関係にある中でも、ある時期や期間は密接に交流していたことをうかがわせる。すなわち、三国の冷厳な国家関係は相互の文化的な断絶をもたらしたはしたが、時には緊張が緩和し、文化交流が行われたと仮定してみることもできよう。

6世紀の新羅の蓮華文軒丸瓦には、高句麗と百済の要素が見られることから、新羅は両国の先進文物を受容して建築物を造営したと考える。6世紀の新羅の瓦が重要な点は、高句麗と百済の文化を受容が読み取れ、後に統一新羅の瓦へと継承されていくことであろう。

(i) 高句麗、百済系蓮華文軒丸瓦の受容

6世紀は、新羅で軒瓦が初めて製作された時期である。蓮華文軒丸瓦の蓮弁の形式(型式)によって百済系、高句麗系、新羅系に区分される⁽⁷⁾。このように、新羅軒丸瓦が三つの形式に分かれることは多くの研究者が認めているが、軒丸瓦の発生時期や、蓮華文の起源を含めた高句麗系や百済系の属性についての分類は明確にされていない。また、高句麗系と百済系の軒瓦が新羅瓦の発展にどういった影響を及ぼしたのかについても、具体的な研究は進んでいない。こうした研究は、新羅瓦の機能的な側面のみならず、当時の計画された荘厳性を理解する手がかりになる。

また、高句麗系の瓦が新羅地域に波及して新羅瓦のモチーフとなり、その発展を促したという点については、以前から多くの指摘がなされた⁽⁸⁾。しかし、新羅地域に伝播した高句麗系瓦については、吉林や平壤地域の出土資料を具体的に提示せずに、文様のモチーフのみで区分する傾向がある。たとえば、新羅の蓮華文軒丸瓦の中で、蓮弁中央に凸線を有するものは少なくないが、それを高句麗の影響を受けたものと判断しきってしまう場合がある。これは日本の学界でも認められている考え方で、高句麗瓦を区分する基準にもなっている。このような状況は、新羅瓦に対する明確な概念が研究者間に共有されておらず、早急に修正すべき点があることを暗示していると考えられる。

新羅瓦に見られる高句麗系の要素は、形式と特徴を定義しにくい。そして、百済系の新羅瓦は、熊津期の瓦との類例性を根拠として、漠然と6世紀前半頃に受容したとみる説が支配的である。こうした状況は、新羅軒瓦の製作時期と対外交渉に関する研究の障害となるばかりではなく、新羅瓦の正確な編年設定の悪影響にすらなる。

(ii) 高句麗系蓮華文軒丸瓦

高句麗瓦は、吉林地域と平壤地域の瓦に大きく区分される⁽⁹⁾。ここで詳しくは説明できないが、吉林地域の軒瓦は、色調は灰褐色で、文様が蓮華文、平壤地域の軒瓦は、色調が赤色で、文様は蓮華文以外にも多様に発展した、と要約できる。また、両地域の瓦は、胎土と文様、色調、製作技法などにおいて細分が可能である。それにもかかわらず、新羅の高句麗系軒丸瓦と関係があるのはどの地域で、どのような形式であるのかという点については、いまだに明確な回答が提示されていない。

これまでに慶州付近から出土した高句麗系蓮華文軒丸瓦は、月城(図1-①・②)と皇龍寺跡(図2・3)などである。前者は、月城塚字の5～6世紀の遺物と伴って出土している。後者は、皇龍寺跡から出土したスペード形の蓮華文軒丸瓦である。そのほかに、財買井跡(図4)などから出土した軒丸瓦が高句麗系に見えるが、確証がないので、ここでは除外する。

まず、月城から出土した軒丸瓦の特徴は、次のようである。蓮弁は八弁で、量感あふれる表現である。蓮弁の先端部と稜線を三角形に鋭く仕上げている。この軒丸瓦は、表面の硬さから見ると、かなり高い温度で焼成されており、厚さも薄い。瓦の厚さは建築構造物の重さと密接な関係があると指摘されており、その製作には、高い技術を有する工人の熟練した技が必要であったろう。

ところが、図1-②の軒丸瓦は、瓦当面が狭いという理由で、1弁の蓮弁を逆に配置しており、間弁もほかに比べて小さい。蓮弁外側の溝も粗雑で、外縁の半分ほどは范から粘土がはみ出し、段になってしまっている。これは、高い技術をもたない工人が製作したか、あるいは不良品と見るよりほかない。当時の月城は最高権力の中心部であり、最高級の器物が用いられたと見るほうが合理的だが、不良品、またはきちんと仕上げられていない軒丸瓦が月城に使用された状況をどのように理解したらよいのか。

また、別の形式として、皇龍寺跡出土の高句麗系蓮華文軒丸瓦がある⁽¹⁰⁾。この軒丸瓦は、蓮弁先端の幅が急に狭くなる、いわゆるスペード形式(図2・3・20)であり、百済系の範囲におさめることはできない。この瓦は、重量感のある中房とそれ以外とを分けて瓦范に粘土を押し詰め、製作している。そのため、工程が複雑となり、大量生産には無理があると判断できる。また、軒瓦製作における複雑な工程⁽¹¹⁾は、不要な手間がかかり、製作時間が長くなる。経済的にも非効率的で、諸々の面において悪影響を及ぼすであろう。すなわち、このような形式の瓦は少量生産に適したもので、皇龍寺のような大規模寺院への供給用としては、多少不合理な製品のように見受けられる。それにもかかわらず、このような瓦が皇龍寺造営に関連しているこ



図1-① 月城出土蓮華文軒丸瓦

図1-② 月城出土蓮華文軒丸瓦



図2 皇龍寺跡出土蓮華文軒丸瓦

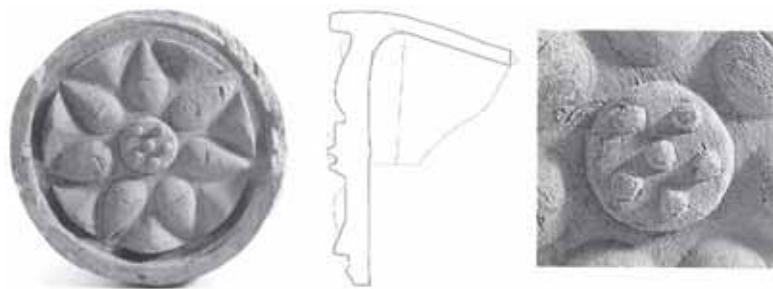


図3 皇龍寺跡出土蓮華文軒丸瓦



図4 財買井跡出土蓮華文軒丸瓦



図5 大通寺跡出土蓮華文軒丸瓦

とに、当時における皇龍寺の社会的な位置が読み取れる。

結局、このような新たな形式の蓮華文軒丸瓦の出現は、消費先の重要性和関連するものと考えられる。この蓮華文軒丸瓦は、胎土が安定しており、高い温度で製作された典型的な三国時代新羅の瓦の特徴を有する。精巧かつ安定感のある蓮弁の形状から、代表的な新羅の蓮華文軒丸瓦と評価することもできよう。そして、蓮弁と間弁が三角形状を呈すること⁽¹²⁾から、前述の月城塚字出土の蓮華文軒丸瓦との類似性を考えることができる。

(iii) 百済系蓮華文軒丸瓦

百済系蓮華文軒丸瓦は、月城塚字を含めて勿川里⁽¹³⁾、安康六通里窯跡⁽¹⁴⁾、そして慶州付近の乾川や内南面望星里（花谷里）窯跡から出土した。百済系軒丸瓦は、灰白色と灰褐色の系統であり、文様形式は百済の熊津系軒瓦と酷似する。類似する熊津期百済の瓦は、公山城をはじめ、大通寺跡、艇止山遺跡、西穴寺跡（図5～7）などから出土している⁽¹⁵⁾。

しかし、綿密に分析すると、細部形式には若干差異がある。すなわち、新羅地域出土の蓮華文軒丸瓦よりも、百済地域の蓮華文軒丸瓦は、蓮弁の先端に配置される珠文が小さく弱いことが観察できる。筆者は、新羅地域に見られる百済系蓮華文軒丸瓦は、熊津期の瓦と対応するのではなく、熊津期より先行する様式と判断する。したがって、このような形式は、熊津期前期の建物や漢城期末期の建物の瓦と関連がある可能性を提示したい。なぜなら、熊津期の軒丸瓦は、蓮弁が退化・簡略化する段階と理解でき、新羅の百済系軒丸瓦よりもむしろ後出する可能性がうかがえるのである。今後、漢城、熊津期の瓦において、より先行する形式が出土する可能性を考慮しておく必要がある。

次に、熊津期に流行した百済の蓮華文軒丸瓦が、新羅瓦の発展にどのような影響を及ぼしたのかについて注目する必要がある。実際に、慶州地域から熊津期百済の影響が見られる蓮華文軒丸瓦は各遺跡から出土しており、百済瓦が新羅瓦の発展に決定的な影響を及ぼした点については同感である。この点に関しては、最近、慶州内南面望星里窯跡から同じ形式の蓮華文軒丸瓦（図8）が出土したことで、月城への供給が明らかになり、同伴遺物から5世紀後半まで遡る可能性が指摘されている。

したがって、百済系瓦は、新羅地域に普及したのち、6世紀代には新羅の蓮華文軒丸瓦の成立に決定的な役割を担ったのみならず、徐々に発展する基盤をつくったと考えている。

三国時代新羅瓦の展開は、百済から蓮華文を受容し、これを徐々に新羅化させていく動きと推定できる。このような推定は、新羅瓦の採用された百済系瓦の弁端を丸く処理した蓮弁や、Y字形の間弁の流行からも裏づけられよう。今後の検討が求められる。

C 5～6世紀の新羅周辺諸国の軒瓦製作技法

6世紀の新羅の蓮華文軒丸瓦は、製作技法から大きく二つの形式に分類できる。それは、円筒形の丸瓦を瓦当裏側に接合し、丸瓦の半分を切る技法と、あらかじめ半截した丸瓦を接合す



図6 艇止山出土蓮華文軒丸瓦



図7 西穴寺跡出土蓮華文軒丸瓦



図8 内南面望星里窯跡出土蓮華文軒丸瓦



図9-① 月城出土蓮華文軒丸瓦



図9-② 月城出土蓮華文軒丸瓦



図10-① 勿川里競馬場敷地瓦窯跡出土蓮華文軒丸瓦

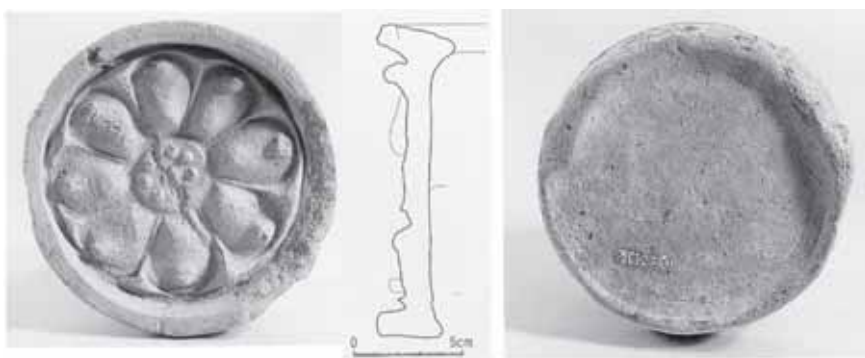


图 10—② 勿川里競馬場敷地瓦窯跡出土蓮華文軒丸瓦



图 10—③ 勿川里競馬場敷地瓦窯跡出土蓮華文軒丸瓦

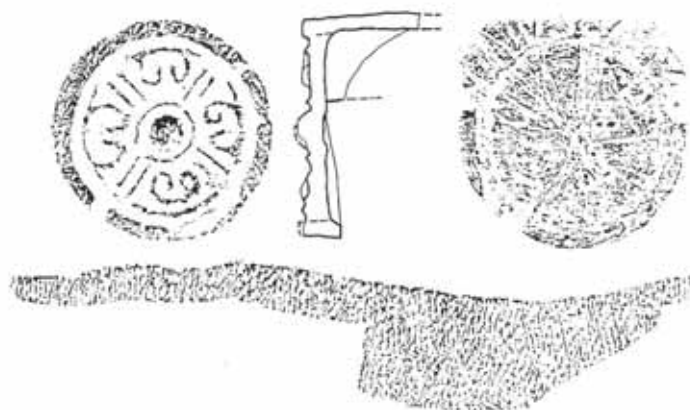


图 11 平壤土城里出土軒丸瓦

る技法である。このうち、前者は「一本作り」⁽¹⁶⁾と呼ばれ、月城塚字の軒丸瓦（図9-①・②）をはじめ、勿川里競馬場敷地出土の軒丸瓦（図10-①～③）、内南面望星里窯跡の軒丸瓦（図8）などが代表的である。一方、乾川、安康六通里窯跡から出土した蓮華文軒丸瓦は、蓮弁は百済系であるが、製作技法は後者に入る。月城から出土した蓮華文軒丸瓦には熊津期の形式が認められ、新羅軒丸瓦の製作開始年代を6世紀前半に遡らせることができる。また、勿川里をはじめとして、内南面望星里窯跡からも同じ形式の軒丸瓦が出土し、宮に供給した瓦窯の位置が明らかになった。

6世紀前半の百済系蓮華文軒丸瓦の一本作りという特殊な製作技法は、中国西晋以前に見られる技法と類似する⁽¹⁷⁾。この技法は、瓦当裏面の円筒下半部を約0.5cm残るように切り取るもので、韓半島の楽浪と漢城期の軒丸瓦においても観察できる⁽¹⁸⁾。年代的には、楽浪地域から出土する雲気文軒丸瓦（図11）が先行し、その次が漢城期である。ただ、楽浪の雲気文軒丸瓦が韓半島の瓦の発展に影響を及ぼしたのかについては、いまだ疑問である。楽浪出土瓦の文様と胎土、そして製作技法には、平壤の高句麗瓦と直接な関係を示す要素を見出すことができない、という難題が残っている。

最近、百済前期の瓦について、活発な研究が進められており⁽¹⁹⁾、粘土紐による製作、厚さの不均衡、微細な布目痕、泥条盤築技法などの特徴が見られることが指摘されている。こうした特徴は楽浪瓦との関連性がうかがえ、漢城期の瓦は楽浪の瓦とつながる可能性を示している点で注目される⁽²⁰⁾。今後の楽浪と高句麗、そして百済瓦の関連性を明らかにする資料の発見に期待したい。

漢城期百済の軒丸瓦としては、風納土城、夢村土城、石村洞、三成洞から出土した資料がある。この時期の軒丸瓦文様には、点文、幾何学文、草花文、蓮華文、銭文があり、新羅の軒丸瓦と製作技法が類似するものとしては、風納土城、夢村土城、石村洞出土の軒丸瓦を挙げることができる。

この中で風納土城から出土した軒丸瓦（図12）は、製作技法については百済系の新羅軒丸瓦と同じであるが、文様は全く異なる特徴を有する。また、夢村土城出土の蓮華文軒丸瓦（図13-①・②）には、蓮弁が菱形のもの（①）と単弁のもの（②）の二つがあり、菱形のものは瓦当裏面が湾曲している。単弁のものが製作技法において新羅の百済系軒丸瓦と類似する。さらに、石村洞から出土した銭文軒丸瓦（図14）も新羅の軒丸瓦と製作技法が同様である。

6世紀前半の百済系新羅瓦は、粘土紐を用いた成形と厚さの不均衡など、初期の瓦陶兼業段階の特徴が認められ、漢城期百済の瓦の特徴と判断できる。一方で、文様の面では熊津期の瓦と近い。結局、軒丸瓦の接合技法から見ると、新羅瓦は楽浪、漢城期と同じ範疇に含めることができると考える。この時期は、粘土紐による成形技法が特徴的であり、初期の軒瓦製作に土器工人が参与していたのかについて注目する必要がある。

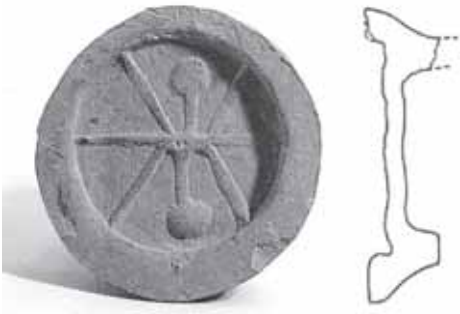


图 12 風納土城出土軒丸瓦



图 13—① 夢村土城出土軒丸瓦



图 13—② 夢村土城出土蓮華文軒丸瓦



图 14 石村洞4号墳出土蓮華文軒丸瓦

D 6世紀の新羅の軒丸瓦の起源と編年

(i) 軒瓦の起源

瓦研究者は、6世紀の新羅の軒丸瓦を百済系と高句麗系に分類しており、前者は南朝から影響を受けたという点を重要視している。筆者は、百済の蓮華文と南朝の関連性について異論はないが、それ以前の漢城期百済でも蓮華文が流行していたことに注目したい。

新羅の高句麗系軒丸瓦は、その起源については明らかになっていない。ただ、吉林あるいは平壤地域の蓮華文軒丸瓦と形式が似ていることで、高句麗と関連づけている。しかし、上原和氏は、高句麗壁画に見られる蓮華文を構造的に分析して、それら壁画の蓮華文と吉林地域から出土する高句麗の初期の蓮華文軒丸瓦を関連づけた⁽²¹⁾。すなわち、高句麗安岳1号墳の西側室被葬者主人図(図15)、舞踊塚壁画(図16)、長川1号墳(図17)、双楹塚(図18)などで見られる蓮華文は、吉林地域出土の蓮華文軒丸瓦の文様と同一であることを明らかにした。また、こうした形式は、中国山東省沂南画像石と甘肅省酒泉県丁家2号墳などの蓮華文と関係があると指摘した。さらに、天王地神塚壁画に見られる人字形の大斗は、北齊に見られ、北魏で流行した華北地方の建築様式であるとする見解⁽²²⁾が提起されており、高句麗建築と北齊、北魏との密接な関連性についても念頭に置いておく必要がある。

一方、高句麗古墳壁画と新羅瓦にみられる蓮峰形の蓮華文は、中国固原北魏墓でも確認されている⁽²³⁾。この墓からは、鏹斗、陶器、銅帽など、多量の北魏系遺物が出土した。とくに、漆棺の蓋に描かれた図像(図19)は、高句麗壁画や新羅瓦に見られるY字形蓮峰文と類似し、その関連性を類推できる資料になる。また、この墓の副葬品の中には、ササン朝ペルシアの貨幣(457～483年)が含まれている。このことから、蓮峰形蓮華文は、北魏時代から高句麗、新羅地域で流行した文様と仮定することができる。こうした推論が認められるのであれば、新羅の蓮峰形蓮華文(図4・20)は北魏の文様との関連も考えられる。このように、蓮峰形蓮華文については、高句麗吉林地域の太王陵出土の蓮華文軒丸瓦(図21)や、前述した高句麗古墳壁画および固原の北魏墓との親縁性について注目したい。

絵画とは違って、瓦については、工人集団が直接に往来して技術を伝えるという側面も考慮すべきである。ただ、新来文化の伝播経路を検討する際には、たとえ材質が異なる要素であっても、形式的な特徴を通して、その相関性を理解する手がかりとなろう。とくに蓮華文は、国家や時代によって、多様な特色を持ちつつ変化していくので、対外交渉の実相を調べる際の重要な資料になると考える。国家の文化発展は、周辺文化圏の交流による文化受容のみならず、それを独自に発展させ、継承していく文化変容の過程こそが重要であろう。

(ii) 蓮華文軒丸瓦の編年

研究者は、新羅における軒瓦の発生を、おおむね6世紀前半と考えている。『三国史記』新羅本紀祗摩王11年(122)の「風によって瓦が飛ぶ」という記事をそのまま信じる研究者は少な



図 15 安岳3号墳の蓮華文



図 16 舞踊塚の蓮華文



図 17 長川1号墳の蓮華文



図 18 双楹塚の蓮華文

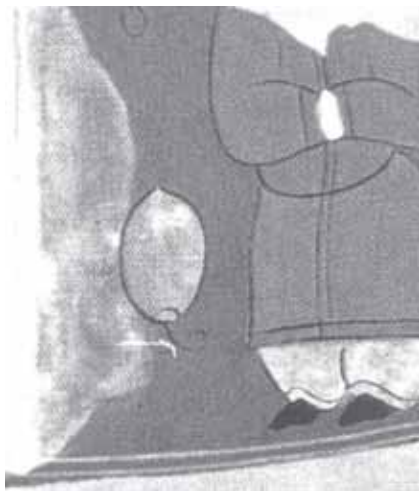


図 19 固原北魏墓漆棺画の蓮華文



図 20 皇龍寺跡出土蓮華文軒丸瓦

い。しかし、古代の韓半島では、高句麗で4世紀以前に軒瓦を製作しており⁽²⁴⁾、百済でも漢城期から本格的に瓦を使用している。また、5世紀に入って土器製作技術が飛躍的に発展することを強調しておきたい。これらの点から、新羅瓦の発生時期をより遡らせて考える方が合理的ではないかと考えている。

従来、新羅瓦の発生時期を遅く考えた理由は、『日本書紀』の仏教伝来と瓦の技術がともにもたされたという記事であると考えている。ただ、高句麗と百済で4～5世紀頃の建物に軒瓦が使用されたことは、現在までの研究成果によって認められている。それに対して、新羅のみが6世紀になってようやく瓦を用いるようになったと見るのは不合理である。新羅瓦の研究者が軒瓦の発生を6世紀と考えるのは、軒瓦の出現が仏教寺院の創建と軌を一にする、という固定観念によるものである。仏教公認の際に社会的に強い摩擦が生じた新羅が、仏教寺院よりも先行して宮や官衙に瓦や軒瓦を葺いたという筆者の仮説は、いまだゆるがない。実際、瓦の使用が寺院よりも宮の建物で先行したとみることは、それほど無理はない。瓦の研究方法に客観的で合理的な方向性があるにもかかわらず、その解釈が先入観によって縛られてしまうことは止揚すべきである。

新羅の高句麗系瓦は、月城塚字や皇龍寺跡出土例が代表的である。その中で、月城塚字出土の蓮華文軒丸瓦は、その起源がどこにあるのかについてはいまだ不明瞭であるにもかかわらず、蓮弁の形式と製作技法、そして表面の硬さから、高句麗系であると判断されている。こうした軒丸瓦は、これまで月城のみで確認されている。よって、この軒丸瓦の製作年代について、皇龍寺の創建年代である6世紀半ばを下限、上限を6世紀前半としても無理はないであろう。筆者は、月城塚字出土の高句麗系軒丸瓦を、月城から出土する蓮華文軒丸瓦の初期段階におきたい。外縁の処理が未熟であること、ほかの遺跡から出土していないこと、そして量感あふれる古式の蓮弁と三角状の間弁などが他の軒丸瓦とは異なるからである。また、その軒丸瓦が5世紀の土器と共伴して出土することも理由の一つとなる。

一方、高句麗系軒丸瓦は、皇龍寺創建を契機として大きく変化する。蓮弁が、従来の三角形のものから、先端が急に縮小する、いわゆるスぺード形に変化した。こういう形式は廢瓦堆積から出土するので、皇龍寺創建期あるいはそれ以前に製作された可能性もある⁽²⁵⁾。一方で、Y字形の凸線をもつ軒丸瓦の破片(図20)は1点のみであるので⁽²⁶⁾、その製作年代の決定には慎重を期さねばならない。この瓦については、吉林地域で流行したY字形の蓮弁と高句麗古墳の壁画の蓮弁、そして固原の北魏墓に見える蓮弁との関係に注目したい。

高句麗系の新羅軒丸瓦は、瓠蘆古壘山城⁽²⁷⁾出土の軒丸瓦(図22)のように、蓮弁と間弁が三角形状で力強い印象がある。ただ、この形式の瓦を製作した窯がどこに存在するのはいまだ不明で、研究に限界がある。瓦の工房で当時の工人が使用した土器を含めた生活容器や、窯での生産品などが、対外交流の確実な物的証拠となろう。

百済系軒丸瓦の製作技法には二つの形式が見られる。一つは一本作り、もう一つは接合式で



图 21 太王陵出土蓮華文軒丸瓦

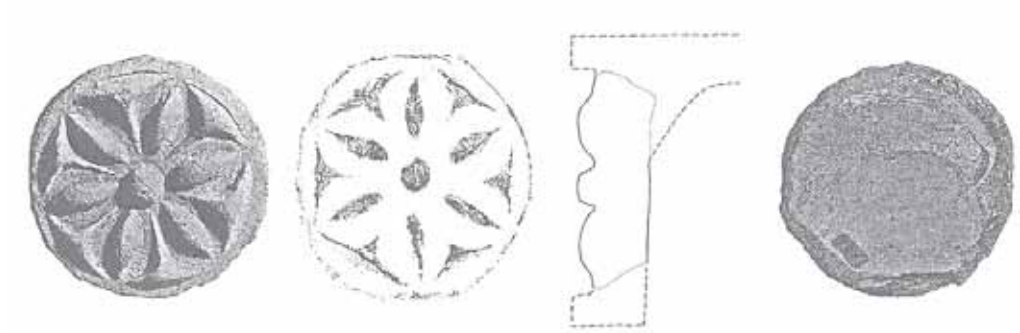


图 22 瓠蘆古壘出土蓮華文軒丸瓦



图 23 乾川西面出土蓮華文軒丸瓦

ある。二つの技法は同時期にみられる。前者は製作技法の面で漢城期と関連するが、文様は熊津期のもものと類似する。すでに指摘したように、熊津期の公山城、艇止山遺跡、西穴寺跡、大通寺跡などで出土した軒丸瓦は⁽²⁸⁾、蓮弁の先端の珠文が、新羅の百済系軒丸瓦よりも小さく弱い。その点で、新羅軒丸瓦が熊津期より先行段階である可能性が考えられる（図 23）。また、新羅瓦の製作技法は漢城期の軒丸瓦と関係があることから、製作時期が熊津期半ばに編年されている点については、修正を加える必要があると考える。今後、熊津期前期の遺跡あるいは漢城期末の遺跡から軒丸瓦が出土すれば、新羅地域軒丸瓦の発生年代についての問題はある程度解決されると期待する。

まだ推論の段階ではあるが、新羅軒丸瓦の出現時期は5世紀後半から6世紀初頭と想定しても無理はないと思う。こうした推論によるならば、新羅の軒丸瓦が、熊津期の軒丸よりも先行する百済の軒丸瓦形式の影響を受けて製作された可能性も考えられる。熊津期の瓦は文様が定型化し、製作技法のうえでも本格的な発展の段階に入っている点も強調しておきたい。

E まとめ

以上、新羅と周辺諸国の瓦について検討してきた。述べた内容に明確な裏づけがないことは自認している。ただ、新羅の宮跡から出土する軒丸瓦は、熊津期の軒丸瓦より先行する可能性が高い。従来の編年には修正を加える必要がある。また、最近の調査で、慶州の遺跡から百済のより先行した軒丸瓦が出土しており、新羅軒丸瓦の出現は従来いわれていた6世紀前半よりも遡る可能性が高いと考えている。筆者は、具体的な物証というよりは、形式的変遷を中心にして、新羅の百済系軒丸瓦が熊津期よりも先行する可能性に考えた。この推論には、今後、批判が予想されるが、百済の都であったソウルと公州地域の発掘調査を通じて、確実な証拠が得られることを期待する。

本稿で新羅と周辺諸国の瓦について検討した内容は次のとおりである。

- ① 月城垓字から出土した高句麗系、百済系の軒丸瓦の出現は、6世紀第1四半期あるいは5世紀の後半まで遡る可能性がある。
- ② 史料を信用しないとしても、新羅における瓦の使用時期を6世紀前半とみる見解は修正を要する。また今後、平瓦の発生時期についても、特定時期にあらかじめ限定せずに、考古学的な発掘調査成果に基づいて検討する必要がある。
- ③ 一本作りの技法については、中国、韓国、日本の研究者による相互の比較検討が早急に求められる。この技法が、古代韓半島において楽浪、漢城期百済、新羅初期の瓦に共通して見られることに注目すべきである。
- ④ 新羅は、6世紀初め以前に高句麗系と百済系瓦の製作技術を受容し、その変容と発展を図り、6世紀半ばには高句麗系の新形式が出現したことを明らかにした。また、新羅で流行した高句麗系の蓮華文は、北魏でも流行したモチーフである可能性を提起した。

註

- (1) 朱甫暉『金石文と新羅史』知識産業社、2002年。
- (2) 大橋一章「日本古代文化相の観点から見た百済の金属工芸」『古代東アジアの金属工芸』国立扶餘博物館国際学術大会、2008年。
- (3) 安輝濬「美術交渉史研究の諸問題」『高句麗美術對外交渉』1996年、p.11。
- (4) 崔孟植「平瓦研究の最近の動向」『百済研究』34、2001年。
- (5) 盧重国『百済政治史研究』一潮閣、1988年。
- (6) 金誠龜「雁鴨池出土古式瓦当の形式的考察」『美術資料』29、1981年。
- (7) 金誠龜「新羅瓦当の変遷とその特性」『古代東アジア三国の對外交渉』国立慶州博物館、2000年。
- (8) 金誠龜「雁鴨池出土古式瓦当の考察」『美術資料』第29号、国立慶州博物館、1981年。朴洪国「月城郡内南面望星里瓦窠跡と出土瓦に対する考察」『嶺南考古学』5、1988年。
- (9) 谷豊信「四、五世紀の高句麗の瓦に関する若干の考察」『東洋文化研究所紀要』108、1989年。
- (10) 申昌秀「皇龍寺跡の廢瓦積み出土新羅瓦当」『文化財』18、文化財管理局、1985年。
- (11) 平松良雄「烏含寺I期軒丸瓦製作技法の検討」第59回百済研究公開講座、2009年。ここでは、I期軒丸瓦についての文様表出、製作技法、接合技法などの精密な分析があった。
- (12) 筆者は、蓮弁が三角状、スペード、あるいは間弁が三角状に製作された軒丸瓦を、高句麗系の新羅瓦としたい。
- (13) 『慶州菘谷洞・勿川里遺蹟 報告書』国立慶州文化財研究所、2004年。
- (14) 金誠龜『古瓦』デウォンサ、1992年。
- (15) 金誠龜『百済の瓦埴芸術』周留城、2004年。
- (16) 韓国と日本の一本作りについてはまだ問題が残っており、次の論考が参考になる。田福 涼「造瓦組織復元のための一試論」『文化史學』20、2003年。
- (17) 谷 豊信「西晉以前の中國の造瓦技法について」『考古学雑誌』69-3、1984年。
- (18) 權五榮「百済前期の新智見」『百済研究』33、2001年。梁淙鉉「百済漢城時代の軒丸瓦」『人文科学研究科紀要』10、帝塚山大学大学院、2008年。
- (19) 崔孟植『百済平瓦研究』1999年。
- (20) 龜田修一「百済漢城時代の瓦に関する覚書」『尹武炳博士回甲紀念論叢』1984年。
- (21) 上原 和「高句麗絵画が日本に伝えた影響」『高句麗美術の對外交渉』第4回韓国美術史学会、1996年。
- (22) 金正基「高句麗建築の對日交渉」『高句麗美術の對外交渉』1996年。金東賢「高句麗 建築の對中交渉」『高句麗美術の對外交渉』1996年。
- (23) 『固原北魏墓漆棺畫』人民出版社、1988年。
- (24) 白種伍『高句麗瓦の研究』檀国大学校大学院博士学位論文、2005年。
- (25) 申昌秀「皇龍寺跡廢瓦積み出土新羅瓦当」『文化財』18、文化財管理局、1985年。
- (26) 講堂東北側の廢瓦積みからの1点の瓦は皇龍寺と関係があるが、6世紀半ば以前の可能性もある。
- (27) シムカンジュ・ジョンナイリ・イヒョンホ『漣川瓠蘆古壘 III』韓国土地博物館、2007年。
- (28) 清水昭博「瓦の伝来—百済と日本の初期瓦生産体制の比較」『百済研究』41、2005年。

5~6 世紀 新羅와 周邊諸國의 기와

金 有 植

(國立扶餘博物館)

1. 머리말

古代國家의 文化交流는 自意, 他意的 關係에서 이루어져 왔다. 기와는 匠人 혹은 當時 先進知識階層에 의해 다른 地域에 傳播되고 受容되었다. 發表者는 기와의 受容에서 受容國의 文化意志와 嗜好가 重要な 作用을 하였다고 생각한다. 특히 瓦當은 國家, 時代에 따라 多樣하게 變化, 發展, 衰退함으로써 文樣의 흐름을 把握할 수 있고, 樣式的 特徵은 國家의 交流關係를 理解하는 資料가 된다. 우리는 瓦當의 片鱗을 통해 建築, 工藝 등 當時 社會相을 穿鑿하여 文化史를 復元하는데 寄與해야 할 것이다.

6 세기 新羅는 지증왕·法興王대의 體制整備를 實施하고 內在的 發展으로 成長하였다. 이 期間은 삼국이 政治, 社會적으로 飛躍적인 發展을 하였고, 서로 適切한 牽制와 均衡을 이루었던 시기이기도 하다.¹⁾ 이 시기 신라는 백제와 고구려 그리고 中國을 通하여 先進文物을 受容하였고, 또한 하나의 정치시스템으로서 佛敎라는 宗敎를 통해 國論統一과 理想社會를 實現하고자 하는 性向을 보인다.

당시 佛敎는 宗敎的 目的 외에 先進文物을 輸入하는 窓口役割을 하였다. 佛敎公認은 寺刹의 建立을 隨伴함으로써 佛像, 塔, 建築, 工藝 등의 分野에서 飛躍的인 發展을 招來하였다.²⁾ 신라가 堅固한 土着社會의 壁을 허물고 巨大한 寺院을 建立하였던 6 世紀는 新文物의 導入期이다. 特히 기와는 建築物 建立에서 核心 物品이다. 따라서 佛敎의 公認은 기와의 刮目한 發展을 招來하는 繼起를 마련하였을 뿐만 아니라, 匠人들의 職制를 포함한 生活與件을 向上시켰을 것이다.

동아시아의 對外交渉을 理解하는 作業은 매우 어렵고 慎重을 요한다. 特히 交涉은 國家, 民族, 地域間에 이루어지는 對等한 位置에서의 交流를 意味하므로 肯定的 혹은 否定的 役割을 糾明해야 한다.³⁾ 이러한 立場에서 5~6 세기 동아시아 諸國의 기와는 蓮花文 中心이므로 文樣의 微細한 形式變化를 통하여 상호 간의 흐름을 把握하고 共通分母와 차이점을 導出해야 한다.

이 발표는 進술한 사항들을 念頭에 두고, 삼국 기와의 연구 성과를 ⁴⁾ 정리하여 6 세기 신라 수막새의 제작연대를 검토하고, 연꽃잎의 淵源을 규명해 보고자 한다. 또한 6 세기 신라 연화문수막새가 차지하는 중요성에 着眼하여 본 논고를 작성하였다. 그러나 이 글은 資料의 限界와 筆者의 初步的 기와 理解수준으로 인하여 많은 誤謬들이 생겨날 가능성도

있다. 하지만 신라 막새의 수용과정을 이해하는데 조금이나마 보탬이 되었으면 하는 작은 바람에서 작성하였기 때문에 잘못된 부분은 선학들에게 容恕를 구한다.

2. 5~6 세기 신라 주변제국의 와당

5~6 세기는 고구려, 백제, 신라가 서로 물고 물리는 긴박한 상황이 이어지는 긴장의 연속이었다. 백제의 近肖古王은 고구려의 故國原王을 전사시켜 기선을 제압하고, 뒤이어 백제의 개로왕은 長壽王에게 전사를 당하는 긴박한 시기였다. 또한 신라는 관산성에서 성왕을 전사시켜 삼국의 관계가 긴장의 연속이었다. 이러한 상황에서 삼국은 외교적 관계를 포함한 문물교류가 적절하게 이루어졌을 보인다.⁵⁾

아이러니하게도 이 시기 신라의 연화문수막새에는 고구려와 백제 기와에 보이는 요소들이 크게 나타나 삼국의 교류를 이해하는 단서가 ⁶⁾ 되기도 한다. 특히 6 세기 신라 연화문수막새는 제작기법 뿐만 아니라 문양의 형식까지도 고구려, 백제와 매우 親緣性이 강하여 전술한 긴장의 관계 속에서 일정한 기간 동안은 밀접한 교류를 하였던 사실을 증명해 준다. 즉 삼국의 냉엄한 국가관계는 문화단절을 초래하지만, 때로는 일시적 화해분위기 속에서 적절한 문화의 교류가 있었다는 假定을 해볼 수 있다. 6 세기 신라의 연화문수막새는 고구려, 백제의 요소들이 보이기 때문에 신라는 양국의 선진문물을 수용하여 건축물을 제작하였다고 생각한다. 6 세기 신라 기와가 중요하게 부각되는 이유는 고구려와 백제의 문화를 수용, 발전시켜 통일신라 기와로 계승시켰다는 점이다.

1) 고구려, 백제계 연화문수막새 수용

6 세기는 신라에서 막새기와의 처음으로 만들어지는 시기이고, 연화문수막새의 연꽃 형태에 따라 백제계, 고구려계, 신라계로 구분 ⁷⁾한다. 이러한 신라 수막새의 3 형식 분류는 모든 연구자들이 대체로 동의하지만, 다만 수막새의 발생시기, 연꽃의 기원을 포함한 고구려, 백제계 속성분류를 명확하게 하지 못하고 있다. 또한 전술한 고구려계, 백제계 와당이 신라 기와 발전에 작용하였는지에 대한 구체적 연구도 미개척분야이다. 전술한 사항에 대한 접근은 결국 신라 기와의 기능적인 측면뿐만이 아니라 당시 계획된 장엄성을 이해하는 해답이 될 것이다.

다음으로 고구려계 기와가 신라지역에 파급되어 발전의 모티브를 제공하였던 점은 일찍부터 선학들에 의해 지적 ⁸⁾되었다. 하지만 신라지역에 전파되었던 고구려계 기와에 대해서는 길림 혹은 평양지역 출토품을 구체적으로 제시하지 못한 채, 문양에서 느껴지는 외형적인 모티브만을 근거로 구분하는 경향이 있다. 또한 신라 연화문수막새의 연꽃잎 가운데 능선이 나타나는 형식을 고구려의 잔영으로 보기도 하는데, 이러한 견해는 일본에서도 통용되어 고구려계 기와를 분류하는 기준으로 작용한다. 연구자들은 신라

기와에 대한 명확한 개념이 정리되지 않아 착오가 있었음을 인정해야 하고, 시급히 수정이 필요함을 암시해 주는 메시지라고 생각한다.

정리하여 본다면, 신라 기와에 보이는 고구려계 기와의 요소는 형태와 특징을 정의하기 어렵다. 그리고 백제계 신라 기와는 웅진시기 기와들과 형태상의 유사성을 근거로 막연하게 6 세기 전반에 수용하였다는 견해가 지배적이다. 이러한 상황은 신라 와당의 제작시기와 대외교섭에 관한 연구를 가로막는 장애물일 뿐만 아니라 신라 기와의 정확한 편년을 설정하는데 악영향으로 작용한다.

2) 고구려계 연화문수막새

고구려 기와는 길림지역과 평양지역 기와로 크게 구분⁹⁾된다. 한정된 지면으로 인해 자세한 설명은 생략하지만 길림지역 와당은 회갈색과 연화문, 평양지역 와당은 적색과 연화문 이외에도 다양한 문양으로 발전했다는 것으로 요약할 수 있다. 그리고 양 지역 기와는 태토와 문양, 그리고 표면의 색조, 제작기법 등 세부적 구분이 가능하다. 그럼에도 불구하고 신라의 고구려계 수막새가 어느 지역, 어떠한 형식과 직접적인 영향관계를 맺고 있는가에 대한 질문에는 누구도 명확한 답변을 제시하지 못한다.

현재까지 경주 인근에서 출토된 고구려계 연화문수막새는 경주 월성(圖 1-①,②)과 황룡사지(圖 2, 3) 등에서 출토된 유물이 있다. 전자는 월성해자의 5~6 세기 유물들과 공반 출토되었고, 후자는 황룡사지에서 출토한 스페이드 연꽃형을 지닌 일련의 연화문수막새 등 이다. 이 밖에 재매정지(圖 4) 등에서 출토된 고구려계로 보이는 다수의 와당이 있지만 구체적 증거가 없으므로 본 발표 대상에서 제외하기로 한다.

먼저 월성해자 출토 고구려계 와당은 다음과 같은 특징을 보인다. 우선 연꽃잎은 8 엽이며 양감이 매우 강조되고 있다. 또한 연꽃은 끝단과 능선을 삼각형으로 강인하게 처리하였다. 더욱이 이 와당은 표면의 경도로 볼 때 매우 높은 온도에서 소성되었을 뿐만 아니라 두께가 얇다는 특징이 있다. 연구자들은 기와의 두께가 건축구조물의 하중과 밀접한 관련이 있었을 것으로 생각하고, 특히 두께를 얇게 만드는 고난도의 작업은 장인들의 많은 노고를 수반하였을 것이다. 이 와당은(圖 1-②) 표면 공간의 부족으로 인해 1 개의 잎을 역으로 표현하고 있을 뿐만 아니라 간잎도 다른 잎과 비교하면 확연히 다르다. 그리고 문양의 외곽 홈을 미숙하게 처리하였고, 외측의 테두리를 절반으로 나누어 단을 마련한 것처럼 보인다. 결국 이 와당은 어딘가 모르게 미숙한 정황이 보이는데, 그 원인은 기술적 수준이 일정한 단계에 도달하지 못한 장인이 제작하였거나 혹은 불량품으로 추정할 수밖에 없다. 당시 월성은 최고 권력의 심장부였고, 따라서 최고급 물품만 사용하였다는 추론이 합리적이다. 불량품 혹은 엉성하게 제작된 이 와당이 월성에 사용하였다는 사실을 어떻게 해석해야 할지에 대한 고민이 따른다.

또 다른 형식은 황룡사에서 출토한 일군의 고구려계 연화문수막새가 있다.¹⁰⁾ 이 와당은 연꽃잎의 끝단 폭이 급격히 축소하는 所謂 스페이드 형식(圖 2, 3, 20)이므로 어떠한 계보로도 백제계 문양 범주에 포함할 수 없다. 이 와당은 양감이 가장 강조되는 자방부와 중앙부에 별도의 소지를 밀어 넣고 와범으로 찍었던 것이다. 그래서 제작공정이 매우 복잡하므로 대량공급을 할 수 없었던 것으로 판단된다. 또한 와당을 제작하는데 복잡한 제작공정¹¹⁾은 장인의 불필요한 공력이 수반될 뿐만 아니라 제작시간이 소요되므로 경제적 낭비를 초래하여 제반여건에 악영향을 초래할 것이다. 즉 이러한 형식은 제품의 소량 생산에 적합하고, 황룡사와 같은 대규모 사찰 건립용으로 공급하기에는 다소 불합리한 제품으로 보인다. 그럼에도 불구하고 이러한 제품이 거대한 황룡사 건립에 관련되었다는 사실은 당시사회에서 황룡사가 차지하는 寺格의 중요성을 이해할 수 있다. 결국 이러한 新形式 연화문수막새의 출현은 사용처의 중요성과 관련이 있었던 것으로 이해할 수 있다. 이 연화문수막새는 태토가 지극히 안정되고, 고온에서 소성하여 전형적인 삼국시대 신라 기와의 특징을 보인다. 또한 이 와당은 정교한 연꽃잎들이 안정감을 보이므로 신라 연화문수막새를 대표할 만하다. 특히 이 수막새는 간잎과 꽃잎에 삼각상의 요소¹²⁾가 보이므로 전술한 월성해자 출토 연화문수막새와의 유사점을 찾을 수 있다.

3) 백제계 연화문수막새

백제계 연화문수막새는 월성해자를 비롯하여 勿川里¹³⁾, 安康 六通里 窯址¹⁴⁾ 그리고 경주 인근의 乾川, 그리고 최근 內南面 望星里 窯址에서 출토되었다. 전술한 백제계 수막새는 회백색과 회갈색 계통이고, 문양형식은 웅진계 백제 와당과 동일하다. 이 문양과 동일한 웅진시기 기와는 공산성을 비롯한 大通寺址, 艇止山 유적, 西穴寺址(圖 5, 6, 7) 등에서 출토된 것들과 비교¹⁵⁾할 수 있다.

그러나 양자를 면밀하게 분석해 본다면 세부형식에서 차이를 발견할 수 있다. 즉 웅진시기 연화문수막새는 신라지역에서 출토되는 수막새보다 꽃잎끝단에 배치하는 주문이 약화되는 현상이 관찰된다. 필자는 신라지역에서 보이는 백제계 연화문수막새가 웅진시기 연화문수막새와 비교대상이 아니라 오히려 웅진기의 선행양식으로 보는 것이 합리적인 해석이라고 판단된다. 따라서 이러한 형식은 웅진기 전기 단계 건축물과 한성시기 말기 건축물의 기와들과 관련되었을 가능성을 새롭게 제시하고자 한다. 왜냐하면 웅진시기 수막새는 연꽃잎이 신라의 것보다 퇴화하고 간략화 되는 단계로 이해되어 백제계 신라 수막새기와보다 오히려 제작시기가 늦어질 가능성도 엿보이기 때문이다. 향후 한성기의 백제기와 혹은 웅진시기의 선행형식 기와가 출토될 가능성의 여지를 남겨두어야 할 것이다.

그렇다면 웅진시기에 유행하였던 백제계 연화문수막새가 신라 수막새 발전에 어떠한 영향을 미쳤는지 주목해 볼 필요가 있다. 실제 경주지역에서 웅진계 영향이 看取되는 연화문수막새는 여러 유적에서 출토되어 백제 기와가 신라기와의 발전에 결정적 영향을 끼쳤다는 사실에는 동감한다. 이와 관련하여 최근 경주 내남면 망성리 가마터에서 동일한 형식의 연화문수막새(圖 8)가 출토되어 월성에 공급하였던 것으로 밝혀졌고, 또한 동반유물들이 5세기 후반까지 상회할 가능성도 있다는 견해가 제기되고 있다.

따라서 백제계 기와는 신라지역에 보급되어 6세기경부터 신라 연화문기와의 형성에 결정적 역할을 하였을 뿐만 아니라 점차 발전하는 토대를 마련하였다고 생각된다. 삼국시대 신라 기와의 전개는 백제로부터 연화문을 수용하고 이를 점차 발전시켜 신라화하는 단계로 변화되었다고 추정된다. 이러한 논지는 신라기와에 채용된 백제계 기와의 둥근 연꽃잎 끝단처리와 Y자형의 간잎의 유행을 통해서도 증명될 수 있다. 향후 이 부분에 대한 심도 있는 검토가 요구된다.

3. 5~6세기 신라 주변제국 와당의 제작기법

6세기 신라의 연화문수막새는 제작기법 면에서 크게 2형식으로 분류된다. 한 형식은 원통형 수키와를 접합하고 수키와의 절반을 자르는 방법과 수키와를 절반으로 자르고 막새 뒷면에 부착하는 형식이 있다. 이 가운데 전자는 소위 一本造¹⁶⁾라 불리는 것으로 월성해자(圖 9-①,②)를 비롯한 물천리 경마장부지(圖 10-①,②,③) 출토, 내남면 망성리 요지(圖 8) 출토품이 대표된다. 출토품 가운데 건천, 안강 육통리 요지 출토 연화문수막새 등은 꽃잎의 형식은 백제계이지만, 제작기법은 후자에 속한다. 특히 월성해자 출토 백제계 연화문수막새는 웅진기 형식을 보여주므로 신라의 수막새 제작 開始를 6세기 전반으로 끌어올리는 자료가 되었다. 또한 물천리를 비롯한 내남면 망성리 가마터에서도 동일한 형식이 출토되어 궁궐지에 공급하였던 제작소의 위치를 확인시켜 주었다.

6세기 전반 백제계 연화문수막새가 一本造라는 특수한 제작기법을 보이는데 이것은 중국의 서진 이전에 보이는 제작기법과 유사하다.¹⁷⁾ 이 방법은 수막새의 뒷면을 약 0.5cm 도출되게 남겨두고 자르는 수법으로서 고대 한반도의 낙랑, 한성시기의 수막새에 보이는 제작기법이다.¹⁸⁾ 그래서 낙랑지역에서 출토되는 궐수문수막새(圖 11)가 一本造 수법의 선행기법이고 뒤이어 한성시기에도 보이는 기법이다. 그러나 궐수문 낙랑기와가 고대 한반도 기와 발전에 영향을 주었는지 여전히 의문이며, 낙랑 출토 기와의 문양과 태토 그리고 제작기법 또한 평양의 고구려 기와들과 직접적 관련 요소를 구하기 어렵다는 난제가 있다.

최근 백제 전기의 기와에 대한 연구가 의욕적으로 진행¹⁹⁾되어 점토띠를 이용한 성형, 두께의 불균형, 미세한 포목흔, 泥造盤築技法의 특징을 보인다는 견해들이 제기되었다.

이러한 특징들은 낙랑 瓦와 관련이 있고, 한성시기의 기와는 樂浪瓦와 연결될 가능성을 열어 둔 견해들이 주목된다.²⁰⁾ 앞으로 새로운 자료가 보충됨으로써 낙랑, 고구려 그리고 백제 기와의 상호 관련성이 규명될 것으로 기대된다.

한성시기 백제 수막새는 풍납토성, 몽촌토성, 석촌동, 삼성동에서 출토된 수막새가 대표된다. 이 시기의 수막새 문양은 점문을 비롯하여 기하문, 초화문, 연화문, 전문이 있고, 신라 수막새와 제작기법에서 유사한 형식으로는 풍납토성, 몽촌토성, 석촌동 출토 기와들이 있다. 이 가운데 특히 풍납토성 출토품(圖 12)은 제작기법에서 백제계 신라 수막새와 동일하지만, 문양은 판이하게 다르다는 특징이 있다. 그리고 몽촌토성 출토 연화문수막새(圖 13-①,②)는 연화문이 능형과 단엽의 두 가지 형식이지만, 능형의 연화문(圖 13-①)은 막새뒷면이 문양면을 향하여 휘어져 있고, 단엽의 연화문(圖 13-②)은 제작수법이 신라의 백제계와 유사하다. 아울러 석촌동에서 출토된 錢文수막새(圖 14)도 신라 수막새와 제작기법이 동일함을 엿볼 수 있다.

6 세기 전반의 백제계 신라 기와는 점토띠를 이용한 성형과 두께의 불균형 등 초기 瓦陶兼業段階의 특징을 여실히 보여주어 한성기 백제기와의 특징이 보이지만, 문양면에서는 웅진기와 친연성이 강하다. 결국 막새의 접합기법으로 본다면 신라기와는 낙랑, 한성시기와 동일한 범주에 포함해야 할 것이다. 이 시기는 점토띠를 이용한 성형기법이 강하게 나타남으로서 초기 와당 제작에서 토기 장인의 참여가 있었는지 주목해야 할 것이다.

4. 6 세기 신라 수막새의 연원과 편년

1) 수막새의 연원

기와 연구자들은 6 세기 신라 연화문수막새를 백제계, 고구려계로 분류하고 전자는 중국의 남조로부터 영향을 받은 사실을 중요시 한다. 발표자는 백제연화문의 남조 관련성에 동의하지만, 이에 앞서 한성기에서부터 연화문이 유행하였다는 사실을 강조하고 싶다.

신라의 고구려계 연화문수막새는 그 연원을 어디에 두어야 하는지 정확히 알지 못한다. 그저 길림 혹은 평양지역 고구려 연화문수막새들과 형태가 유사하므로 고구려와 관련을 시킨다. 그러나 上原和²¹⁾는 고구려 벽화에 보이는 연화문을 구조적으로 분석하여 벽화의 연화문과 길림지역에서 출토되는 초기 고구려연화문 수막새를 관련시켰다. 즉 고구려 安岳 3 호분 西側室被葬者 主人圖(圖 15), 舞踊塚 壁畫(圖 16), 長川 1 호분 前室(圖 17), 雙楹塚(圖 18) 등에 보이는 연꽃들은 길림지역 출토 연화문수막새의 연꽃문양과 동일하다는 사실을 밝혔다. 그리고 이러한 형식은 중국의 山東省 沂南 畫像石 後漢墓과 甘肅省 酒泉縣 丁家 5 호墓 등의 연꽃과 관계가 있다는 견해를 피력하였다. 아울러

천왕지신총 벽화에 보이는 인자형 대공은 북제부터 나타나 북위시기에 유행하였던 화북지방 건축양식으로 이해하는 견해²²⁾가 제기되어 고구려 건축이 북제, 북위와 밀접한 관련성이 있다는 주장도 念頭해 두어야 할 것이다.

한편 고구려 고분벽화와 신라 기와에 보이는 연봉형 연꽃은 중국 固原의 北魏墓²³⁾에서도 보인다. 이 墓에서는 鏹斗, 陶器, 銅帽 등 다량의 北魏係 유물이 함께 출토되었다. 특히 漆棺의 뚜껑에 있는 그림(圖 19)은 고구려 벽화와 신라 기와에 보이는 Y 자형연봉문과 유사하여 서로의 관련성을 유추할 있는 자료가 된다. 이 무덤의 부장품 중에는 사산조 페르시아 왕조의 貨幣(457-483 년)가 출토되었다. 이로 미루어 연봉형 연화문은 북위시대부터 고구려, 신라지역에 유행하였던 연꽃으로 가정하여도 무리한 추정은 아닐 것이다. 만약 전술한 推論이 용인된다면, 신라의 연봉형 연화문(圖 4, 20)은 고구려 나아가 北魏 문양과의 관련 가능성을 제기할 수 있다. 특히 연봉형 연화문은 고구려 길림지역의 태왕릉 출토 연화문수막새(圖 21)와 전술한 고구려 고분벽화 및 固原의 北魏墓에서 상호 친연성을 보이고 있어서 주목된다.

회화와 달리 기와는 전래과정에서 장인집단이 직접 往來하여 기술을 전수하는 경향이 있다. 하지만 새로운 문화의 전파경로를 파악하는데 재질이 다른 요소라 할지라도 형식적인 특징을 통해 서로간의 상관성을 이해하는데 활용될 수 있다. 특히 연꽃은 국가나 시대별로 다양하고 특색 있게 변화하고 지속적으로 발전하므로 대외교섭의 실상을 이해하는데 매우 중요한 자료이다. 더욱이 한 국가의 문화발전은 주변 문화권과의 교류에 의한 문화수용뿐만 아니라, 이를 독자적인 문화로 발전, 繼承하였는지의 文化變容이 더욱 중요하다고 생각한다.

2) 연화문 수막새의 편년

신라 기와 연구자들은 신라의 막새 발생을 대체로 6 세기전반 경에 두는 것에 同意하며, 三國史記 新羅本紀 祗摩王 11年(122年)에 기와가 바람에 날린 기록을 그대로 믿는 사람은 그리 많지 않다. 하지만 이미 고대 한반도는 고구려가 4 세기 이전에 막새기와를 제작²⁴⁾하여 사용하였고, 백제도 한성기부터 본격적으로 기와를 사용했다는 사실, 5 세기에 이르러 토기가 비약적으로 발전하는 단계임을 잊어서는 안 될 것이다. 이러한 사실을 동의한다면 신라 기와의 발생시기는 당연히 올려보는 것이 합리적이라고 생각한다.

기존에 신라 기와의 발생시기를 늦게 보는 원인은 日本書紀에 보이는 불교의 전래와 기와기술이 함께 전해졌다는 기록을 중요시하였기 때문이라고 생각한다. 그렇지만 고구려, 백제가 4~5 세기경 건축물에 막새기와를 사용하였다는 연구결과를 정설로 받아들이는 현시점에서, 신라만 6 세기에 이르러 막새가 발생하였다고 보는 것은 불합리하다고 생각된다. 신라 기와 연구자들이 기와 혹은 막새 발생을 6 세기로 보는 견해는 막새기와의 출현을 불교사찰의 창건과 궤를 같이한다는 고정관념에 시각을 두었기 때문이다. 불교의

공인과정에서 유별히 사회적 마찰을 빚었던 신라는 불교건축물보다 궁궐과 관아 건물에 기와 혹은 막새를 먼저 사용하였다는 필자의 가설에는 변함이 없다. 기와의 사용이 불교건축물보다 궁궐건축물에 선행되었다는 견해를 수긍하기는 어렵지 않다. 기와 연구에서 객관적이고 합리적인 접근이 방향이 있음에도 불구하고 선입견을 가지고 몰입하는 자세는 止揚해야 할 것이다.

신라의 고구려계 기와는 월성해자와 황룡사지 출토품이 대표된다. 그 가운데 월성해자 출토 연화문수막새는 그 연원이 어디인지 명확히 말할 수 없지만, 꽃잎의 형태와 제작기법, 그리고 표면경도 등을 근거로 연구자들은 고구려계로 단정한다. 이러한 막새는 황룡사지 폐와무지에서도 출토되지 않았고, 현재까지 오직 월성해자에서만 출토되는 형식이다. 이러한 사실을 감안한다면 이 막새의 제작연대는 황룡사지 창건연대인 6세기 중엽 이전이 하한일 것이고, 상한연대는 6세기 전반에 두어도 무리는 없을 듯 하다. 필자는 이러한 형식을 월성해자에서 출토하는 연화문수막새 가운데 가장 초보적 단계의 수막새 범주에 두고 싶다. 왜냐하면 주연부의 미숙한 처리 수법, 고식의 연꽃잎, 그리고 다른 유적지에서 출토되고 있지 않은 점과, 양감 있게 처리한 꽃잎과 삼각형의 간잎 등이 일반 고식 기와들과 다르기 때문이다. 아울러 이러한 형식의 연화문수막새는 5세기 후반대의 토기들과 공반되고 있다는 사실도 시사하는 바가 크다.

한편 고구려계 막새는 황룡사 창건을 기점으로 크게 변화하는데, 꽃잎 형식이 기존의 삼각형 구도에서 꽃잎의 끝단이 급격히 축소하는 소위 스페이드 형태로 변화한다. 이 형식들은 廢瓦무지에서 출토되었으므로 황룡사 창건 혹은 그 이전 시기에 제작되었을 가능성²⁵⁾도 배제할 수 없다. 특히 Y자형 능선이 새겨진 막새편(圖 20)은 1점에 불과²⁶⁾하여 제작연대 설정에 신중을 기해야 한다. 이 편은 길림지역에서 유행한 Y자형 능선을 가진 연꽃잎 형태와 고구려 고분벽화의 연꽃 그리고 중국 고원의 북위묘 칠관에 보이는 형태와의 친연성이 주목된다.

전술한 고구려계 신라수막새는 瓠蘆古壘산성(圖 22)의 출토²⁷⁾에서 보이는 것처럼 연꽃과 간잎의 형태가 삼각형을 이루어 강인함을 드러내는 요소를 보인다. 하지만 이 형식의 기와들을 생산한 窯址가 드러나지 않아 연구에 어려움을 준다. 기와제작소는 당시 장인들이 사용하였던 토기를 비롯한 생활용기들과 가마생산품들은 대외교류의 확실한 물적 증거자료이기도 하다.

백제계 수막새의 제작기법은 두 가지 형식을 보이는데, 一本造와 끼워넣기식의 수법이 동시에 보인다. 전자는 제작기법에서 한성기와 관련되지만, 문양은 웅진기 연꽃과 관련이 있다. 앞서 지적하였다시피 웅진시기인 공산성, 정지산 유적, 서혈사지, 대통사지 등에서 출토되는 수막새²⁸⁾는 연꽃잎의 끝단이 신라의 백제계 수막새와 비교하여, 꽃잎 끝단의 주문이 약화되는 현상을 보임으로써 신라 수막새는 웅진기보다 선행단계일 가능성도 있어

보인다.(圖 23) 이와 함께 신라 기와 제작기법은 한성기의 막새와 관련성이 보이기 때문에 제작시기를 웅진기 중엽에 두는 견해는 수정되어야 할 것이다. 앞으로 웅진기의 전기 유적지 혹은 한성기의 말기 단계 유적지에서 막새들이 출토된다면 신라지역 수막새의 발생연대와 관련된 베일을 걷어낼 수 있을 것으로 기대된다.

비록 추론이기는 하지만 신라 막새의 출현 시기는 5 세기 후반에서 6 세기 초로 편년을 설정해 두어도 무리는 없다고 생각된다. 그리고 이러한 설정은 신라의 막새기와가 웅진기 유적지에서 출토되는 막새들보다 선행형식을 수용하여 제작되었을 가능성이 높다는 사실에 바탕을 둔다. 아울러 웅진기 기와는 문양이 안정되고 구상권이 정제되었을 뿐만 아니라 제작기법으로 보더라도 본격적인 발전단계에 접어들었던 점을 강조하고 싶다.

5. 마무리

필자는 신라와 주변제국의 기와를 검토하였다. 기술한 내용에는 정확한 증거를 제시하지 못한 부분도 있었음을 是認한다. 하지만 신라의 궁궐지에서 출토되는 막새는 웅진기의 기존 출토 막새보다 선행단계이므로 기존의 편년 안은 재고를 요한다. 더구나 최근에는 경주 인근 유적지가 발굴됨으로 백제의 선행와당이 출토되고 있어 신라 와당의 출현은 기존의 편년인 6 세기 전기보다 상회할 가능성에 무게를 더한다. 발표자는 구체적 물증보다 형식적 변천을 중시하여 신라의 백제계수막새는 웅진시기보다 이른 단계일 가능성을 제기하였다. 이 점은 향후 여러 비판이 제기될 가능성도 있지만 앞으로 백제의 고토인 서울과 공주지역의 유적발굴을 통해 보다 확실한 증거들이 보강되기를 기대한다.

지금까지 신라와 주변제국의 기와에 대해 검토한 내용을 간추려 요약하여 보자면 다음과 같이 정리된다.

1. 월성해자에서 출토된 고구려계, 백제계 막새의 출현은 6 세기 1/4 분기 혹은 5 세기 후반 경까지 상회할 가능성도 엿보인다.
2. 기록을 믿지 않는다 할지라도 연구자는 신라에서 일반기와의 사용이 6 세기 전반으로 보는 견해는 수정을 요한다. 또한 앞으로 평기와 발생은 특정 시기에 한정을 두지 말고 고고학적 발굴 성과에 기인하여 연대설정을 해야 할 것이다.
3. 기와의 제작과정에서 얻어진 一本造는 중국, 낙랑, 한국, 일본의 연구자들이 시급히 검토해야 할 것이며, 이러한 기법은 고대 한반도에서 낙랑, 한성기 백제, 신라 초기 기와에 함께 보인다는 점을 염두에 두어야 할 것이다.
4. 신라는 6 세기 초엽 이전에 고구려계, 백제계 기와기술을 수용하여 변화 발전을 도모하였고, 6 세기 중엽에는 고구려계의 신형식이 출현하였음을 알게 되었다. 또한 신라에서 유행하였던 고구려계 연화문은 북위까지도 유행하였던 모티브일 가능성도 제기하였다. 많은 叱正을 바란다.

註

- 1) 朱甫暎, 2002, 『金石文과 新羅史』, 知識産業社
- 2) 大橋一章, 2008, 「일본 고대 문화상의 관점에서 본 백제 금속공예」, 『고대 동아시아사의 금속공예』, 국립부여박물관 국제학술대회
- 3) 安輝濬, 1996, 「美術交渉史研究의 諸問題」, 『高句麗 美術의 對外交渉』, P.11
- 4) 崔孟植, 2001, 「평기와 研究의 最近動向」, 『百濟研究』 34
- 5) 盧重國, 1988, 『百濟 政治史 研究』, 一潮閣
- 6) 金誠龜, 1981, 「雁鴨池 出土 古式瓦當의 形式的 考察」, 『美術資料』 29
- 7) 金誠龜, 2000, 「新羅瓦當의 變遷과 그 特性」, 『古代 동아시아 三國의 對外交渉』 國立慶州博物館
- 8) ① 金誠龜, 1981, 「雁鴨池 出土 古式瓦當의 考察」, 『美術資料』 第 29 號, 國立中央博物館
② 朴洪國, 1988, 「月城郡 內南面 望星里 瓦窯址와 出土瓦窯에 대한 考察」, 『영남고고학』 5
- 9) 谷豊信, 1989, 「四、五世紀の高句麗の瓦に関する若干の考察」, 『東洋文化研究所紀要』 108
- 10) 申昌秀, 1985, 「皇龍寺址 廢瓦무지 出土 新羅瓦當」, 『文化財』 18, 文化財管理局,
- 11) 平松良雄, 2009, 2 「烏舎寺 I 期 수막새 제작기법의 검토」, 제 59 회 백제연구 공개강좌에서는 I 期수막새의 외당문양 표출, 제작기법, 접합방법 등 세밀한 분석을 실시하였다.
- 12) 필자는 연꽃잎이 삼각형이거나 스페이드형태 혹은 간잎의 형태가 삼각형으로 처리된 수막새를 고구려계 신라기와의 범주에 포함하고자 한다.
- 13) 『慶州蓀谷洞勿川里遺蹟 報告書』, 2004, 國立慶州文化財研究所
- 14) 金誠龜, 1992, 『옛기와』, 대원사
- 15) 金誠龜, 2004, 『백제의 외전예술』, 주류성
- 16) 한국과 일본의 一本造에 關한 事項은 여전히 문제로서 다음의 論考가 참고 된다.
田福涼, 2003, 「造瓦組織 復元을 위한 一試論」, 『文化史學』 20
- 17) 谷豊信, 1984, 「西晉以前の中國の造瓦技法について」, 『考古學雜誌』 69-3
- 18) ① 權五榮, 2001, 「百濟前期의 新智見」, 『百濟研究』 33
② 梁淙鉉, 2008, 「百濟漢城時代의 軒丸瓦」, 人文科學紀要 10, 帝塚山大學
- 19) 崔孟植, 1999, 『百濟 평기와 研究』
- 20) 龜田修一, 1984, 「百濟漢城時代의 瓦에 關한 覺書」 『尹武炳博士回甲紀念論叢』
- 21) 上原和, 1996, 「高句麗繪畫가 日本에 끼친 影響」, 『高句麗 美術의 對外交渉』, 4 회 韓國美術史學會
- 22) ① 金正基, 1996, 「高句麗 建築의 對日交渉」, 『高句麗 美術의 對外交渉』
② 金東賢, 1996, 「高句麗 建築의 對中交渉」, 『高句麗 美術의 對外交渉』
- 23) 『固原 北魏墓 漆棺畫』, 1988, 人民出版社
- 24) 白種伍, 2005, 『高句麗 기와 研究』, 檀國大學校 大學院 博士學位
- 25) 申昌秀, 1985, 「皇龍寺址 廢瓦무지 出土 新羅瓦當」, 『文化財』 18, 文化財管理局,
- 26) 강당 동북편 폐와무지에서 1 점은 황룡사 창건과 관련도 있겠지만, 6 세기 중엽 이전까지 가능성을 열어 두어야 한다.
- 27) 심광주, 정나리, 이형호, 2007, 『漣川瓠蘆古壘Ⅲ』, 한국토지박물관
- 28) 清水昭博, 2005, 「瓦의 傳來—백제와 일본의 초기 瓦 生産체제의 비교」, 『백제연구』 41

6 飛鳥の瓦と百済の瓦

花谷 浩
(出雲市文化企画部)

A はじめに

百済は飛鳥の瓦づくりの故地である。588年の飛鳥寺造営に際して、百済からやって来た多業種の工人たちには、瓦工人が含まれていた。このことは文献記録にあるとおりだし、仏像（飛鳥大仏など）と同様、瓦もまた百済様式のものであった。瓦の作り方も百済直伝だった。飛鳥寺創建時には二つの瓦工人集団、花組と星組があり、星組工人はその後、豊浦尼寺、斑鳩寺、難波寺（四天王寺）などの造営に参画した。

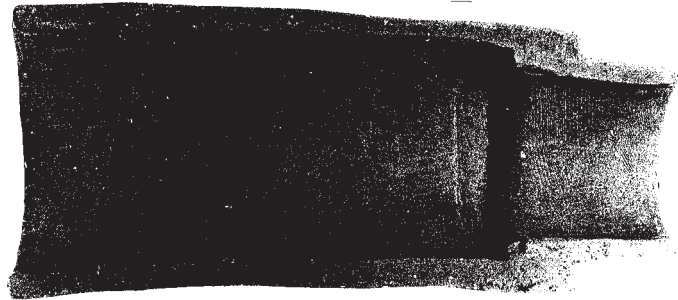
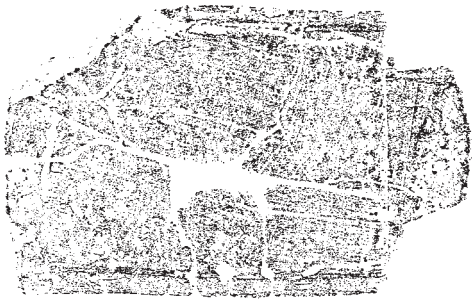
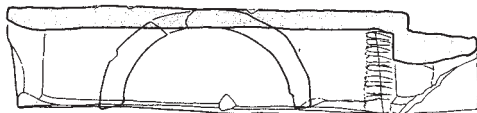
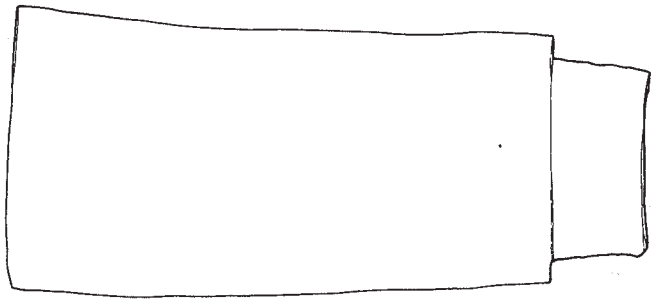
花組と星組つまり、桜花形型式と弁端点珠型式の蓮華紋の違いが、行基丸瓦（無段式）と玉縁丸瓦（有段式）という丸瓦型式、および丸瓦接合手法（とくに星組の片柄接合^{かたほぞ}）との差違に深く結びついているが、これは百済では必ずしも普遍的なものではない。桜花形蓮華紋の軒丸瓦に片柄接合手法がともなうものは益山・弥勒寺跡などにあり、行基丸瓦で片柄接合手法をとるものは扶余・亭岩里瓦窯跡などに存在する。飛鳥寺にきた花組と星組の瓦工人集団は、百済のどこかにあった技術セットがたまたま渡来した、と考えるほかない。

日韓の瓦作りの技法について、その当初の交流のあり方はかなり判明しつつある、と思う。しかし、その後、継続的に同じような交流はあったのだろうか。

B 玉縁丸瓦における二者

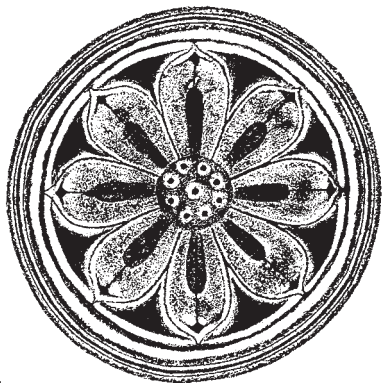
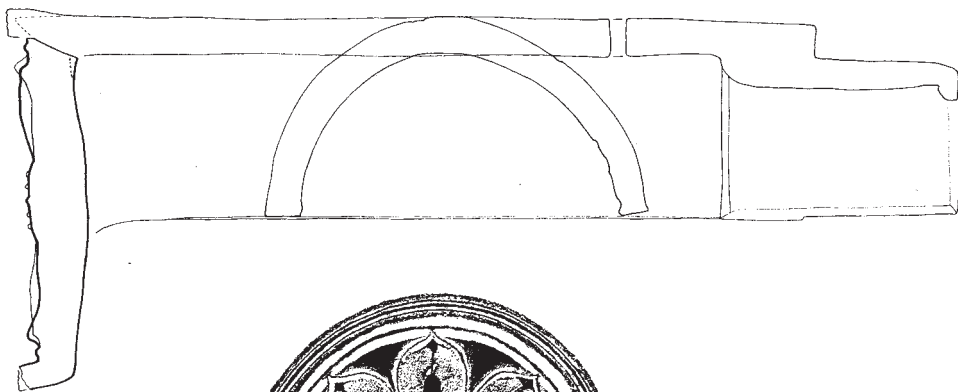
玉縁丸瓦の縦断面形とその作り方に一定の変化の方向性があることは、古くに浦林亮二が指摘している。法隆寺（斑鳩寺）の瓦を分析資料とした成果だ。飛鳥寺や斑鳩寺では当初、模骨は筒部だけのもので、玉縁部は模骨の上端に粘土紐や粘土板を積み上げて作成された。のちに、玉縁部までの模骨を使った玉縁丸瓦へと変化する。

飛鳥において、玉縁までの模骨で製作された丸瓦を全面的に採用したのは、吉備池廃寺（639年創建の百済大寺）と山田寺（641年創建）だ。ともに軒丸瓦は、蓮弁に子葉をおく単弁蓮華紋（山田寺式）の紋様をもつ。一方、二つの寺にほど近い安倍寺では、蓮華紋には同種のものを用いるが、丸瓦の型式は旧来のもの、つまり玉縁部内面に布圧痕がない型式だった。いずれにしろ、飛鳥での玉縁丸瓦の型式変化、製作法の変化が640年を前後する頃だったことは、ほぼ認めてよかろう。



1. 飛鳥寺の玉縁丸瓦

2. 吉備池廃寺の玉縁丸瓦



軒丸瓦 1A-軒平瓦 1A
3. 吉備池廃寺の軒瓦

図1 飛鳥の玉縁丸瓦

このような変化は、百済の影響なのか、飛鳥つまり日本列島での工夫なのか。

山田寺式単弁蓮華紋とまったく同じものは百済にはない。外縁の重圏紋もない。紋様とセットで瓦作りの技法が伝来した6世紀末のような状況ではないようだ。

百済において、玉縁丸瓦に2種類、つまり玉縁部内面に布圧痕のない玉縁部積み上げの丸瓦と、玉縁までの模骨を使う玉縁丸瓦との2種類がともに出土している遺跡に、陵山里廃寺（陵寺）がある。

陵山里廃寺は、扶余の東、羅城の東外郭に位置する。百済王陵の並ぶ陵山里古墳群に附属する寺院と考えられている。1992年から2002年にかけて中心伽藍が発掘調査され、金銅製大香炉や花崗岩製舍利龕などの発見があった。

陵山里廃寺の報告書では、出土した蓮華紋軒丸瓦をI類型からVIII類型に分類し、I類型についてはさらにa～dに細分した。一方、金鍾萬は16種類（ほかに蓮華紋以外2種類）に整理できるとした。以下、両者の対応関係を記す（かっこ内が金鍾萬分類）。

I類型a⁽¹⁾（IDb5ア形・イ形）、I類型b（IA形）、I類型d（IDb1形）、II類型（ICb4ア形）、III類型（ICb3ア形、ICb2ウ形）、IV類型（IEb3イ形）、V類型（ICb5ア形）、VI類型（ICa4イ形）、VII類型（IBb3イ形）、VIII類型（該当形式なし）。このうち、III類型は2種に細分できるので、かりにIII類型「a」とIII類型「b」とする。

また、金分類にあつて報告書で分類されていないものは、かりに型式名を付し、IDc2形を「IX類型」、IDa3形を「X類型」、IBa5ア形を「XI類型」とした。

陵山里廃寺で丸瓦部に玉縁丸瓦を接合し、その玉縁丸瓦が2種類あるのはI類型a。金鍾萬は、この型式が陵山里廃寺創建瓦とみて、その年代を「A.D.567年が下限となる」とした。出土量が最多というのを、創建軒丸瓦とみる理由としている。それ以外の軒丸瓦は、567年から百済滅亡の660年の間に位置づけられる、という。

報告書の軒丸瓦一覧表から算出すると⁽²⁾、木塔跡周辺から出土した軒丸瓦は、I類型aが12点、そのほかIII類型b・VI類型・VII類型が各1点。I類型aがもっとも多くある。

となると、玉縁丸瓦2種はすでに6世紀後半に併存しており、飛鳥に来たのはたまたま筒部のみの模骨を使う丸瓦作りの技法だったということになるのだろうか。

しかし、軒丸瓦I類型aを創建軒丸瓦とみることに疑問がないでもない。

木塔同様に、軒丸瓦一覧表から、金堂跡周辺で出土した軒丸瓦について型式別の数量を判別すると、次のような結果となった。

I類型a：3点、IV類型：2点、V類型：7点、I類型b・IX類型・X類型：各1点。

（合計15点。このほか、金堂・木塔跡中間からI類型aが2点、X類型1点が出土）

これをみると、弁端が比較的尖っているI類型b、IV類型とV類型が過半数を占めている。

また、中門跡では、I類型bとVII類型が2点ずつ出土している。VII類型も弁端が比較的尖る型式だ。南回廊跡でも、I類型aとX類型が2点と、I類型b・V類型・VIII類型が1点ずつあ

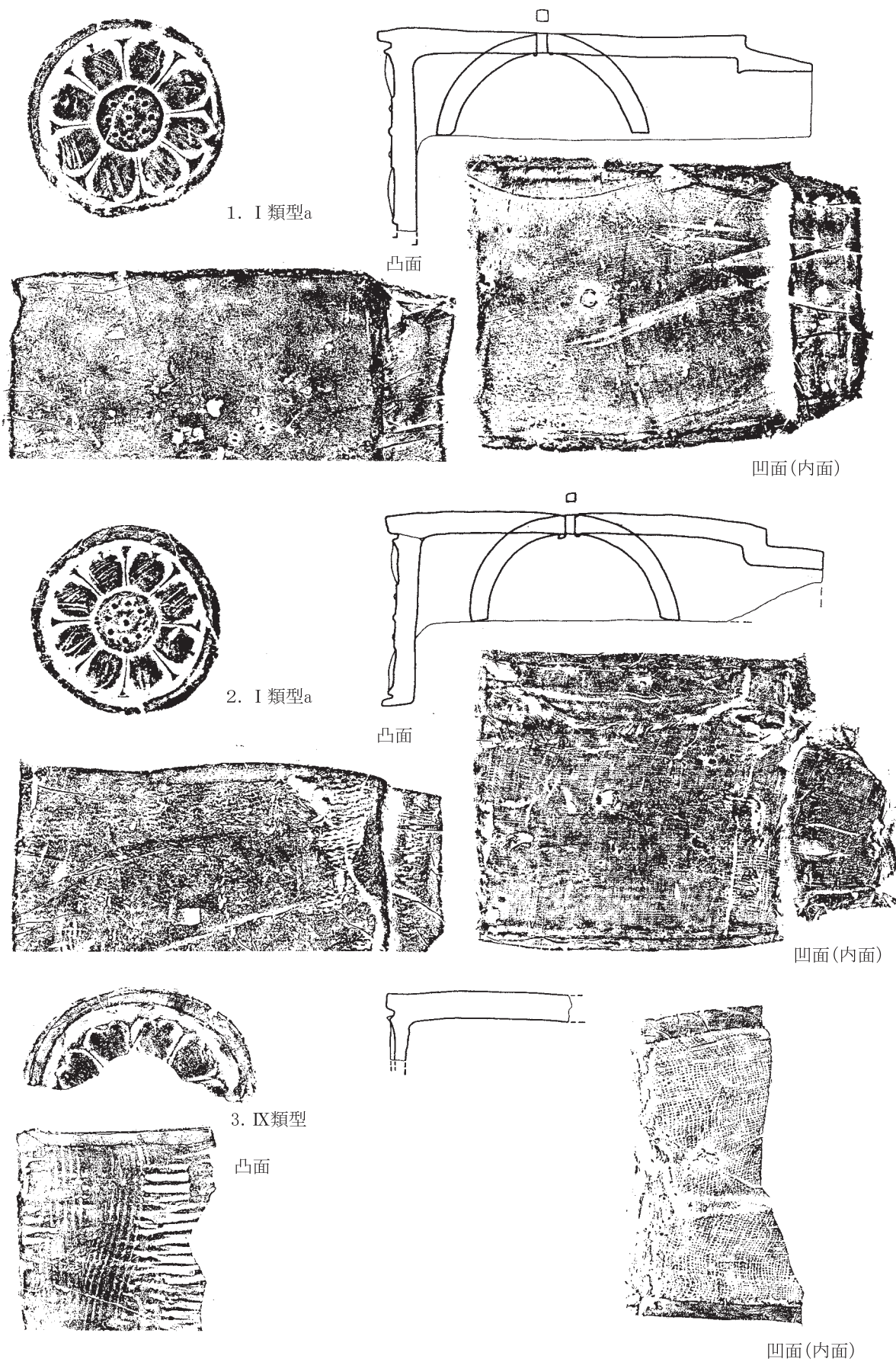
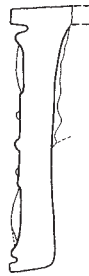
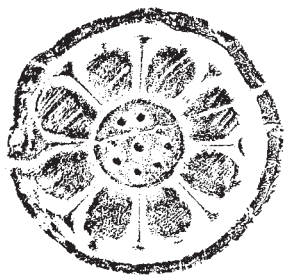
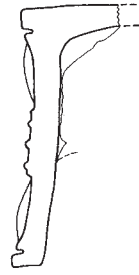
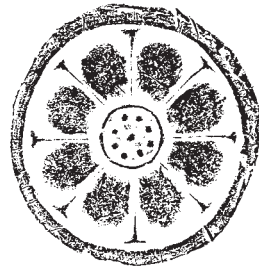


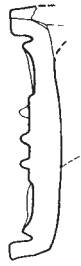
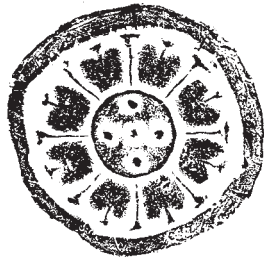
図2 陵山里廃寺の軒丸瓦(1)



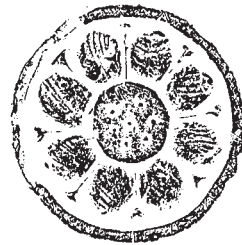
I 類型a



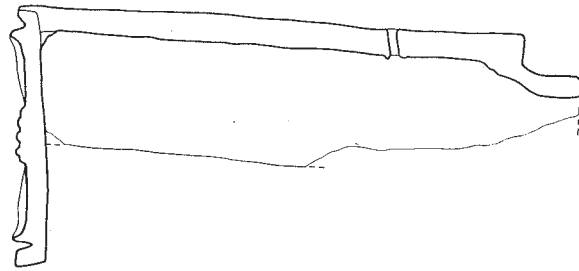
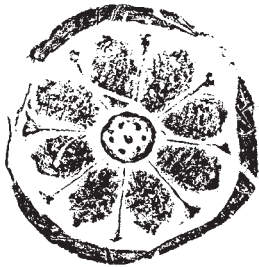
I 類型b



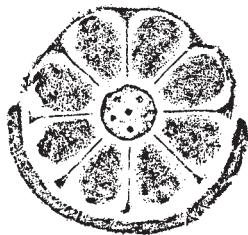
I 類型d



II 類型



III 類型a

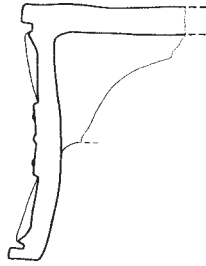
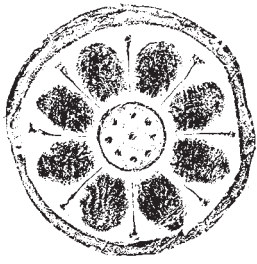


III 類型b

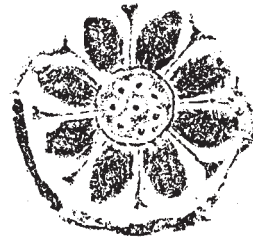


IV 類型

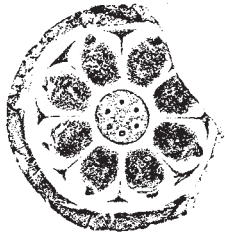
図3 陵山里廃寺の軒丸瓦(2)



V類型



VI類型



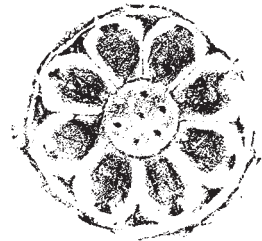
VII類型



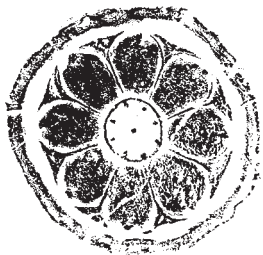
VIII類型



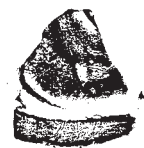
IX類型



X類型



XI類型



XII類型

図4 陵山里廃寺の軒丸瓦(3)

って、I 類型 a は卓越した出土数を示さない。

弁端が比較的尖る型式は、金鍾萬が類型化した「I 型」にあたる。金鍾萬も、これが陵山里廢寺中門跡附近から出土したことから、6 世紀中葉に近い年代とも述べている。陵山里廢寺の I 類型 b・IV 類型・V 類型・VII 類型などを、創建軒丸瓦とみる可能性は十分あるのではないかと考える⁽³⁾。

I 類型 a は、範傷のかなり大きいものがある、それらが新しい型式の丸瓦をとまなっている可能性もあり、陵山里廢寺での玉縁丸瓦の技法変化は 7 世紀以降のものとする。

さて、陵山里廢寺の玉縁部に布圧痕をもつ丸瓦には、布筒を模骨になじませるために段部に細い紐を巻き付けた痕跡がある。同様の手法は、飛鳥では川原寺にあり、そのほか法隆寺西院伽藍創建丸瓦にもある。時期的には 7 世紀後半の早い段階に確認できるわけだが⁽⁴⁾、吉備池廢寺や山田寺など 7 世紀前半の資料では未だ確認していない。この手法について日韓の関連性はあるのだろうか。

また、陵山里廢寺の玉縁部まで布圧痕がある丸瓦は、すべて凸面にタテ方向の縄叩き痕を残している。これに対して、玉縁部に布圧痕のない丸瓦は、格子叩き痕などを残していて、叩き板の違いが明瞭だ。この叩き板の変化の方向性は、飛鳥での状況と似た部分がある。

飛鳥寺の創建瓦には、花組の平瓦の一部にハナレ砂を使用する縄叩き締めのあるものがあるが、数は少なく、しかもその後が続かない。飛鳥寺や斑鳩寺をはじめ、吉備池廢寺、山田寺あたりまで、つまり 7 世紀前半の飛鳥の寺院跡では、縄叩きの丸瓦・平瓦をその創建瓦としない。

これが転換するのは、660 年代の造営と推測される川原寺。縄叩きの瓦が多数を占めるようになり、680 年代に造営された本薬師寺ではさらにその傾向が顕著となる。時期のずれはあるものの、叩き目の変遷が日韓で共通しているのではないかと。この点でも、百濟での状況が明らかになることが期待される。

C 接合手法の変化

6 世紀の末に飛鳥に伝来した瓦づくりの技術は、花組の場合、飛鳥寺でその造営期間を通じて継承された可能性がある。ただし、飛鳥寺 I 型式（桜花形蓮華紋）は、ある段階（I 型式 b 段階）で瓦陶兼業窯での生産にかわっている。当初、瓦当裏面上端に丸瓦をのせるだけだった接合手法は、丸瓦先端を瓦当に深くくい込ませる手法へと変化する。これは瓦当厚の増大とも関連するのだろう。この過程で、丸瓦に刻み目を入れるようになる。

星組の接合手法は、丸瓦先端を片柄形に加工するのが特徴だが、山田寺の場合は 640 年代まで残っている。だが、ほぼ同年代の吉備池廢寺にはそれはない。斑鳩寺でもそれ以前、おそらく 620 年代くらいには、凹面側を大きく削って楔形にする手法へと変化した。しかし、いずれも花組のように瓦当へ深くくい込ませる接合手法はとらず、側面に接合するという基本的な考え方は受け継がれるとみえる。

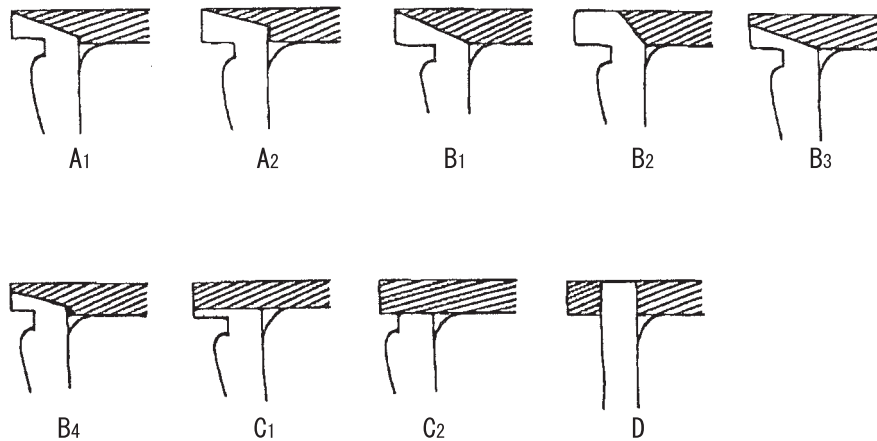


図5 陵山里廃寺の接手法(金2000)

陵山里廃寺の場合、I 類型 b と V 類型が片柄接合をしていて、そのほかは先端を楔形に加工した丸瓦を瓦当側面に接合したり、未加工の丸瓦をやはり瓦当側面に付けたりしているようだ。丸瓦の先端を瓦当に食い込ませる手法がまったくみあたらないのは、注目される。

次に、益山・弥勒寺跡の軒丸瓦についてみてみよう。弥勒寺は、武王代(600~641)に創建された百濟最大の寺院である。1980年代からの発掘調査により、中央に木塔をともなう伽藍、その左右に石塔をともなう伽藍を併置した巨大伽藍が判明した。また、最近、西石塔から多量の宝物が発見され、あらためて注目されている。

創建の百濟様式軒丸瓦には、素弁蓮華紋(報告「単弁A~D」)、忍冬弁蓮華紋(「単弁E」)、単弁蓮華紋(「単弁F・G・I」)、複弁蓮華紋(「複弁B」)がある。単弁E・F・Gは六弁の蓮華紋。

これらのうち、素弁蓮華紋の4種、忍冬弁蓮華紋の2種(「単弁E-1・E-2」)、単弁蓮華紋の3種(「単弁F-1・F-2・I」)と複弁蓮華紋の1種、以上はすべて丸瓦先端を片柄型に加工して裏面と側面に貼りつける接手法をとっている。八弁の弥勒寺Aの片柄は端面からの切り込みが短い、六弁忍冬弁の弥勒寺E-1は端面からの切り込みが長いので、丸瓦の先端が外縁にとどく。

六弁で単弁の弥勒寺G-1は、六弁忍冬弁が簡略化されたような単弁紋の軒丸瓦で、弁の照りむくりは弱い。丸瓦部は、広端の凹面側を深くへラケズリして断面楔形に加工した後、タテキザミ目を入れて瓦当の上端に接合されている。もう一つの単弁六弁のG-2は、G-1とは逆に、丸瓦広端の凸面側を深く削って断面楔形に加工し、瓦当の上端にのせてある。この2型式は、弥勒寺AやE-1に比べると瓦当が分厚い。側面には調整の痕跡がなく、木製枷型かせがたの圧痕と合わせ目が明瞭に観察できる⁽⁵⁾。

接手法が特異なのは、単弁のF-3。報告書では丸瓦の接手法は明記されず、周縁の脱落した瓦当の側面部分に布の圧痕がある、とされているのみだった。だが、資料をみると、布

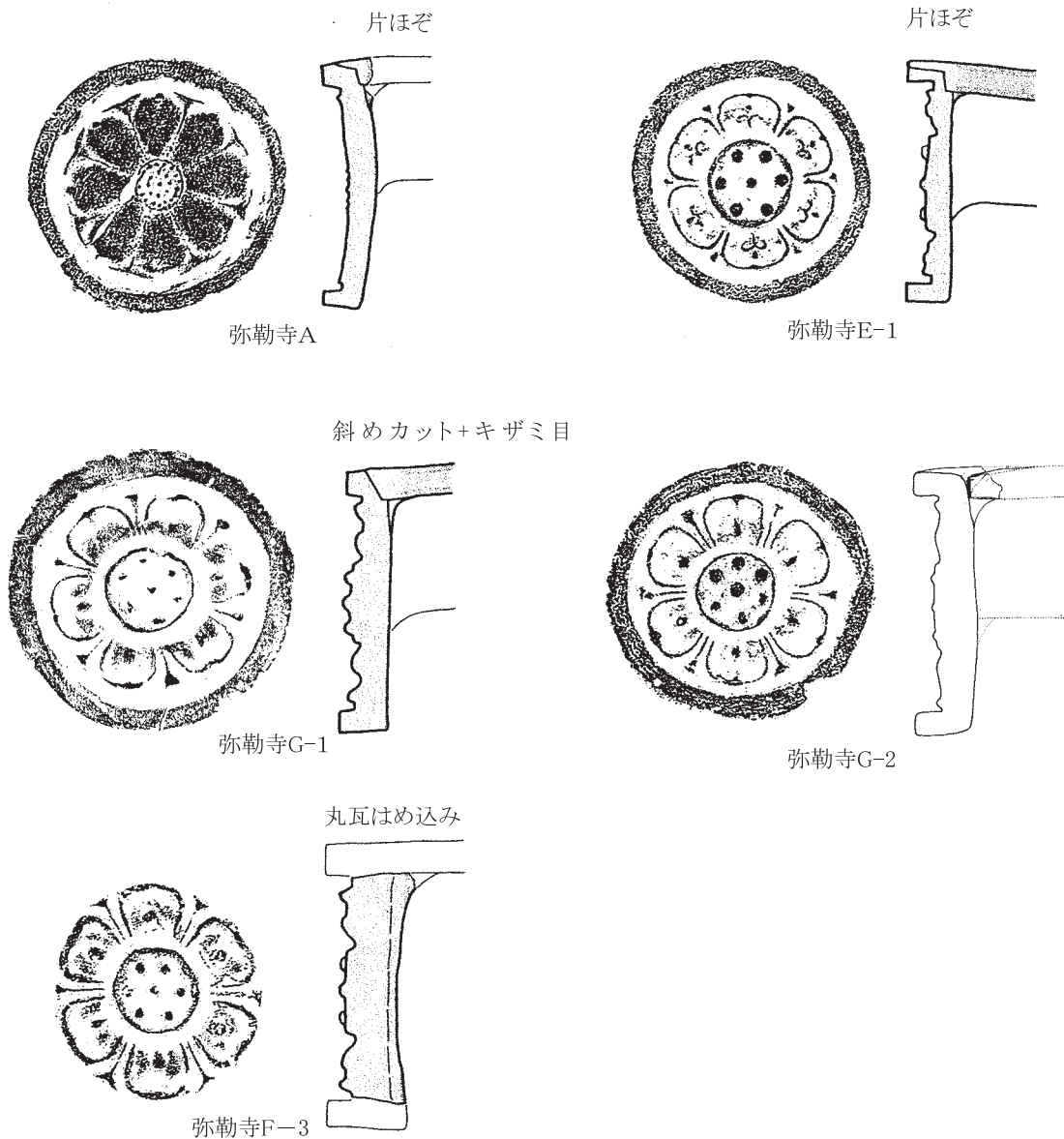


図6 彌勒寺跡の軒丸瓦

の圧痕は側面を全周している。これは「嵌め込み式」の成形手法の痕跡と判断される。

観察結果をもとにその工程を復元すると、まず、瓦範の内区部分にだけ粘土を詰め込む。次に、外縁となる部分へ、分割前の円筒状の丸瓦をかぶせるようにして嵌め込む。そののち、瓦当下半分にある丸瓦円筒の半分を切り取る。瓦当裏面全体に薄く粘土を貼り足し、この粘土を丸瓦部の凹面側にナデつけて丸瓦部を固定する。丸瓦の切り取りはほぼ瓦当裏面の高さでおこなわれ、瓦当裏面の下半分には土手状の突帯は残らないらしい。裏面の調整も丁寧におこなわれている。F-3の出土資料ほぼすべてで外縁が完全に脱落するのは、丸瓦円筒と瓦当部との接着が不十分だったことに起因するのだろう。

このように、弥勒寺跡の軒丸瓦接合手法は4種類に細分でき、瓦当文様をみると、片柄接合の一群は創建期にさかのぼるのだろう。先端の凹面側をヘラケズリして接合する手法と「嵌め込み式」とは、一応、瓦当の側面に丸瓦を接合するという特色を継承しているが、丸瓦の凸面側を削る手法では、瓦当裏面への接手法なので、やや趣を異にするといえる。

さて、公州・扶余の百濟軒丸瓦で、「嵌め込み式」の成形手法をとるものは、報告例を知らないし、ほかにみたことがない⁽⁶⁾。これが弥勒寺跡だけの特徴なのか、扶余地域などのほかの寺院跡にもあるのか、今後の研究に期待したい。また、陳内廃寺（熊本県城南町）など九州に点在する「嵌め込み式」も、畿内だけでなく韓半島との関連を考慮する必要があるだろう。

D 「竹状模骨丸瓦」のルーツ

九州と畿内に分布する「竹状模骨丸瓦」は、細い棒状の素材を簾のように細紐で綴じ合わせたものを模骨として製作された丸瓦を指す。この瓦については、その類似資料が韓半島になかったが、1994・1995年、月坪洞遺跡の調査でようやくその端緒がみつかった。月坪洞遺跡は、大田市街の西方、月坪洞山城の東南に位置する。

出土したのは丸瓦と平瓦だけで、軒瓦はない。報告書では、丸瓦を3種類、平瓦を6種類に分類している。一般的な粘土板模骨（桶）巻き技法の瓦は、丸瓦・平瓦ともⅠ類とされた1種類だけだが、出土量では他を圧倒している。少数だが、丸瓦2種類と平瓦5種類は、凹面に通常とは違った成形痕跡を残していた。

報告書によると、丸瓦Ⅱ類と平瓦Ⅳ類は、凹面に「葦の簾の痕跡」をもち、平瓦Ⅲ類はこれに布圧痕が加わる、という。「葦の簾の痕跡」と表現された圧痕は、葦のような細い棒状の素材を簾のように編んだものによることは間違いない。多いものでは10段に編んである。

平瓦Ⅲ類は、この簾状の圧痕に布圧痕が重なるので、簾状の模骨に布を巻いて粘土を巻きつけたと考えられる。これに対して、丸瓦Ⅱ類と平瓦Ⅳ類には、布圧痕がないので、布を巻きつけないのか、布の代わりに簾状のものを使ったのかだ。

また、丸瓦Ⅲ類と平瓦Ⅴ類は凹面に「縄蓆紋」がある瓦と報告されているが、佐川正敏によると、これは細い縄を編んでつくられた編布（あんぎん）だという。縄を模骨とすることは不可能なので、布筒に替えて編布を模骨に巻いて作られた瓦とみるほかない。同様の平瓦は、錦山・栢嶺山城からも出土しており、古代山城に特徴的な瓦製作技法と推測される。

月坪洞遺跡の瓦は、日本の「竹状模骨丸瓦」とまったく同じ技法のものというわけではないが、一木あるいは細い板を綴じ合わせた模骨以外のものを使った瓦作りの技術が百済に存在することは、確実となった。

しかし、解明すべき問題点も多々ある。畿内（大和）の「竹状模骨丸瓦」は、坂田寺例が古く、7世紀後半でも早い頃と推測される。出土量の多い飛鳥寺禅院（生産は飛鳥池瓦窯）は、7世紀後半の中頃あたりの年代であろう。これらと、九州の豊前（福岡県東部）を中心に分布

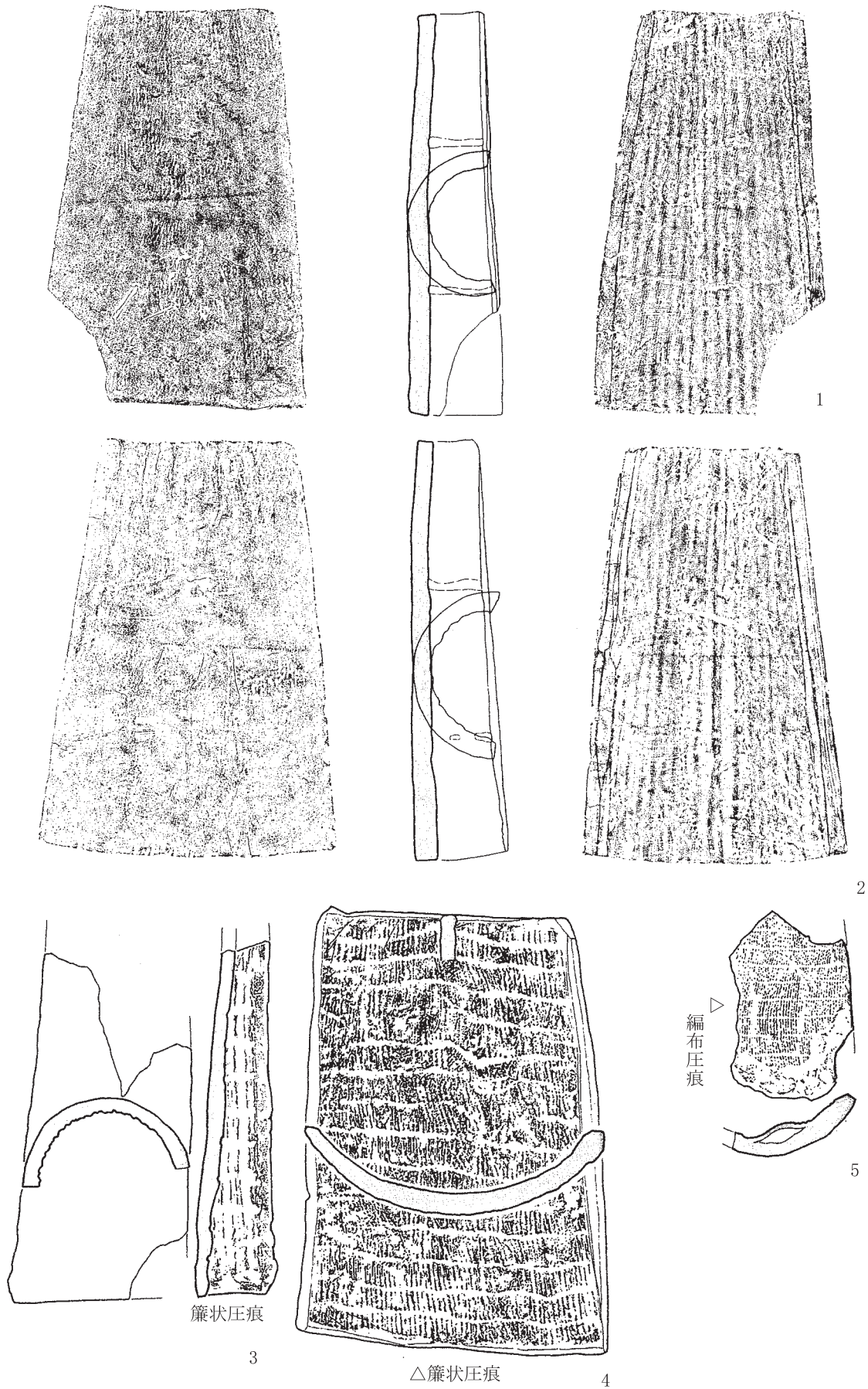


図7 飛鳥寺の「竹状模骨丸瓦」(1・2)と月坪洞遺跡の瓦(3~5)

する「百済系単弁軒丸瓦」にともなう「竹状模骨丸瓦」は関連性があると思われる。しかし、筑前（福岡県北部）の那珂遺跡などから出土する同種の瓦には、土器からみて7世紀の初めにさかのぼる例があり、これらの存在は現状では孤立的である。

百済では、「竹状模骨丸瓦」に類する瓦が、古代山城に限って出土するようだ。築城技術の一つとして瓦作りが存在したとみるほかないが、それがどのような経緯で日本列島に伝来し、寺院に導入されたのか。詳細は今後の検討が必要だが、畿内の「竹状模骨丸瓦」の年代からすると、それは西暦660年の百済滅亡に前後する頃のことだったのではないか。飛鳥寺禅院を建てた道昭の帰国は斉明7年（661）。あるいは、「竹状模骨丸瓦」は70年を超える百済とわが国との瓦技術交流の最後を飾るものだったのかもしれない。

E おわりに

以上、玉縁丸瓦の製作手法、接合手法の変化、「竹状模骨丸瓦」の3項目について、飛鳥と百済の瓦を比較検討した。西暦588年の瓦博士来日以来、彼我の瓦技術交流は連綿と続いていたであろうが、その具体相を検討することができるだけの資料がかなり蓄積されてきつつある、といえよう。

日本でもそうだが、韓国で大面積の発掘調査が実施され、古代寺院単位でそこに葺かれた瓦の様相が明らかになってきたことの意義はたいへん大きい。弥勒寺跡、陵山里廢寺（陵寺）、王宮里遺跡などに続き、官北里遺跡（王宮跡）、王興寺跡、軍守里廢寺、帝積寺跡などの調査が進展している。これらの調査によって、扶余地域の寺院ごとの瓦当文様の違いと共通性が解明され、さらには、扶余地域とそれ以外の地域に造営された寺院の瓦当文様と製作技法の違いが明らかになれば、日韓の瓦技術交流についてさらに興味深い歴史がわかってくるだろう。

今回は、対応する時期のわが国の瓦資料が存在しないこともあって、漢城期の瓦、風納土城跡や石村洞古墳群などの瓦はとりあげなかったが、その存在は東アジア全体をみたときにも重要なものがある。また、別の機会に考えてみたいと思う。

最後になりましたが、韓国での調査にご協力いただいた国立文化財研究所、国立博物館をはじめとする多くの機関と先生方に深く感謝いたします。

註

- (1) 報告書のI類型cはI類型aとの違いが不明瞭なので、I類型aに含める。ただし、I類型aと一括したものがすべて一つの瓦範と考えるわけではない。
- (2) 一覧表に掲載された資料が出土品のすべてではないだろうから、この作業結果はあくまで限界をかかえている。
- (3) 扶余・王興寺でも弁端がやや尖った素弁八弁蓮華紋軒丸瓦が出土している。王興寺は、近年の調査によって、その創建年代が577年と判明した。

- (4) ごく少数だが、藤原宮（694～710）の丸瓦にもある。これらの丸瓦の製作時期は680年代にさかのぼる可能性が考えられる。
- (5) 百済の軒丸瓦で枷型の使用が確認されたものは少ない。だが、垂木先瓦は側面に文様をもつ弥勒寺の緑釉垂木先瓦をはじめ、枷型使用が明瞭なので、広範に存在した技術だったと考える。
- (6) 漢城期には存在する。また、新羅の月城などからも、瓦当裏面に丸瓦円筒を接合して半分を切り取る手法の軒丸瓦が出土するが、「嵌め込み式」ではない。

参考文献

- 亀田修一 2006 『日韓古代瓦の研究』吉川弘文館
- 金鍾萬（鄭桂玉訳）2000 「扶余陵山里廢寺址出土瓦当文様の形式と年代観」『帝塚山考古学研究所研究報告』Ⅱ
- 金鍾萬 2002 「泗泚時代瓦にあらわれた社会相小考」『国立公州博物館紀要』第2輯
- 国立公州博物館 1999 『大田月坪洞遺蹟』国立公州博物館学術調査叢書第8冊
- 国立扶余文化財研究所 1996 『弥勒寺Ⅱ』国立扶余文化財研究所学術叢書16
- 国立扶余文化財研究所・扶余郡 2000 『陵寺』国立扶余博物館遺蹟調査報告書第8冊
- 国立扶余博物館・忠清南道歴史文化院 2007 『忠清南道歴史文化院新発掘百済文化展』
- 文化財管理局文化財研究所 1988 『弥勒寺Ⅰ』
- 梁淙鉉 2008 「百済の瓦—近年の出土品を中心として—」『考古学ジャーナル』No.576

7 朝鮮半島における造瓦技術の変遷

亀田 修一
(岡山理科大学)

A はじめに

朝鮮半島における瓦の使用は、楽浪郡などにおいて始まったと考えられている。当然のことながら、中国の漢の影響と考えられる。その後、漢の滅亡後も、中国の影響下、一部楽浪郡などにおける独自の展開(?)のなかで瓦が作られ、使用されているようである。

その一方、高句麗が国家としての体制を整えていく中で、4世紀前半のころから集安において瓦の使用が始まる。この瓦には東晋の年号があり、当然、その関わりのもとでの造瓦が推測されるのであるが、4世紀中ごろから、その後の高句麗瓦を代表する蓮蕾文軒丸瓦が作られ、使用されるようになる。その後の展開において中国からの新たな影響があるのか、それとも独自に展開したのかは詳しくわからないが、一部、中国との関わりはありそうである。そして、この高句麗における瓦作りは、朝鮮半島南部地域の百済や新羅に影響を与えている。

ただ、百済の漢城時代における初期の瓦作りは、高句麗や楽浪郡の瓦作りの影響だけでなく、中国本土からの影響もかなりありそうなことがわかってきている。そして、475年の熊津遷都以後の瓦は、漢城時代のものとは大きく異なり、新たな影響が中国南朝から入ってきたものと考えざるをえないようである。538年の泗沘遷都後もそうした百済瓦の流れは続くが、660年の百済滅亡まで、百済のなかでの展開とともに、新たな影響が入ってきていることも間違いないようである。

新羅は、朝鮮三国の中で最も遅れて瓦が使用されるようになるが、その地理的な位置からも高句麗・百済の瓦の影響下に始まったことがわかっている。そして、新羅独自の展開をするとともに、中国からの影響も認められそうなことが判明しつつある。さらに、7世紀後半には新たに唐の影響も入ってきているようであり、文様・技法面での検討が進みつつある。

小稿では、このような朝鮮半島における瓦、とくに造瓦技術の変遷に注目して述べていきたい。なお、基本的に、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦のみを対象とすることをお断りしておく。

B 楽浪郡の瓦

楽浪郡は、漢の元封3年(B.C.108)に武帝によって設置され、A.D.313年に高句麗によって滅ぼされるまで続く。その郡治跡が平壤の楽浪土城と考えられており、ここで扱う楽浪瓦はこの

土城を中心に出土したものであるが、帯方郡治跡と推測されている黄海北道の智塔里土城などで出土する瓦も含んでいる。

楽浪郡の瓦に関しては、井内潔（1976）、井内功（1977）、井内古文化研究室（1981）、谷豊信（1984）などの研究があり、以下、これらによりながら見ていこう。基礎資料は、朝鮮総督府（1925・1927）、井内古文化研究室（1976a）などによる。

まず、楽浪郡の瓦には軒平瓦はなく、軒丸瓦、丸瓦、平瓦がある。

軒丸瓦 瓦当文様は、蕨手文、文字、四葉文、三角形文などがあり、蕨手文が最も多い。文様構成としては、丸く半球形に盛り上がった中房から外に向かう1～2本の区画線によって4区に区画され、そのなかに蕨手文や文字を配したものが基本である。文字は「楽浪禮官」（図1-1）「楽浪富貴」「大晋元康」（図1-2）「千秋萬歳」「萬歳」「大吉宜官」などがあり、「千秋萬歳」が最も多いようである。

井内・谷は、楽浪の軒丸瓦の製作技法を次のように分けている。

1. 瓦当嵌め込み技法（谷 A2 技法）
2. 接着技法
 - └─ 粘土円筒接着技法（谷A1技法）
 - └─ 丸瓦接着技法（芋つけ技法）（谷B1技法）
3. 印籠つぎ技法（谷 B1 技法）
4. 一本造り技法（谷 A3 技法）

（*谷 B2 技法：瓦当上部に丸瓦を被せ、それが外縁になる。）

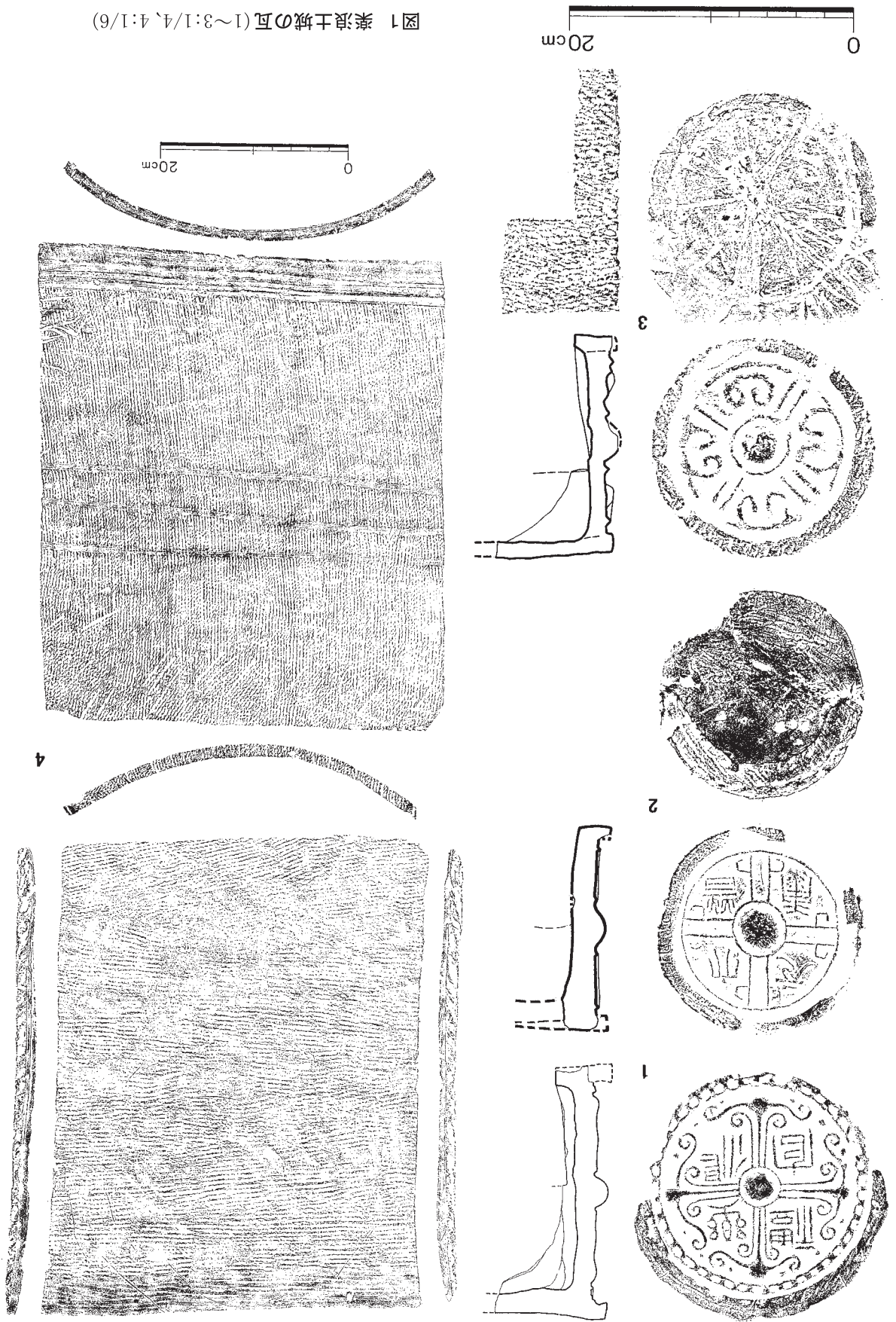
井内は、その主流は瓦当嵌め込み技法と粘土円筒接着技法であったと述べている。瓦当嵌め込み技法は「模骨からはずした粘土円筒に瓦当を嵌め込むようにして接合させ、しかるのちに円筒のほぼ半分にあたる不要部分を切り捨てて鐙瓦を造る方法」であり、粘土円筒接着技法は「粘土円筒を瓦当の裏面にあてがうようにして接合させ、のちに円筒の半分を切り捨てて鐙瓦を造る方法」であると述べている。

そして谷によれば、A1、A2 技法には泥条盤築技法を使用したものがあるようである。

これらの軒丸瓦の技法の時期について、谷は、まず泥条盤築技法による丸瓦を B2 技法で接合した「萬歳」銘軒丸瓦が後漢前半、桶巻作りによる丸瓦を接着（芋つけ）・印籠つぎ（B1）技法で接合した「千秋萬歳」「大晋元康」銘軒丸瓦が魏晋代のものとした。そして、後漢前半までは泥条盤築技法による瓦が主に使用され、桶巻作りの布目瓦は後漢半ば以降に普及したものと考えている。図1-2の「大晋元康」銘軒丸瓦の瓦当裏面上部には、丸瓦先端部につけた接合用のキズのスタンプが残っている。

また、いわゆる一本造り（A3）技法による瓦（図1-3）については、谷は胎土の多量の滑石粒と布目の特徴が木槨墓の土器と類似することから、前漢後半～後漢前半の可能性を考えながらも、模骨の使用の面では下がる可能性を考えている。一方、井内は、楽浪郡終末期に粘土円筒接着技法から派生したのと考えている。

図1 楽浪土城の瓦(1~3:1/4、4:1/6)



その他 丸瓦の形態では、玉縁式のもの確認したが、行基式は未確認である。

丸瓦・平瓦の製作技法には、内型を使用するものと、土器の甕作りのように粘土紐を巻き上げて作る、いわゆる泥条盤築技法によるものがともにある。前者の凸面は叩き文様やナデ、凹面は内型と布目の痕跡が残り、後者の凸面は叩き文様やナデ、凹面は当て具の痕跡やナデが残ることが一般的である（図1-4）。

叩き文様は基本的に縄目文で、凹面の当て具も縄目文が一般的なようである。ただ、一部凹面の当て具に格子目状の文様を残すものがある（井内1981、PL.8-27）。叩き板には、長さ10cmほどの短板と20cmほどの中板があるようだが、長板はよくわからない（崔允先1993）。

C 高句麗の瓦

高句麗は、『三国史記』によればB.C.37年に建国され、668年に唐・新羅連合軍に滅ぼされるまで続いた。その王都は、現在の中国の桓仁から集安、そして朝鮮民主主義人民共和国の平壤に移動したことが知られている。高句麗で瓦が最初に使用された場所は、現時点では集安と考えられており、4世紀前半頃には使用されていたものとみられている。

高句麗瓦に関しては、谷豊信（1989・1990）の研究がまとまっている。また、井内古文化研究室（1981）もよく整理されている。近年では、中国において『集安高句麗王陵』（吉林市文物考古研究所・集安市博物館2004）などが刊行され、基礎資料が蓄積されつつある。一方、韓国でも白種伍『高句麗瓦の成立と王権』（2006）が刊行されるなど、新たな展開が見られる。

ただ、残念ながら、筆者は高句麗瓦の実物をさほど見ていないため、ここでは上記の研究成果によりながら述べていきたい。

基礎資料は、朝鮮総督府（1929）、井内古文化研究室（1976b）、吉林市文物考古研究所・集安市博物館（2004）などによる。

高句麗瓦は、集安地域、平壤地域その他で、古墳、寺院、宮殿、山城などから出土している。瓦の種類としては、軒丸瓦、軒平瓦（と考えられるもの）、半瓦当、鳥衾瓦、丸瓦、平瓦、鷗尾、鬼瓦、面戸瓦などがある。

軒丸瓦 軒丸瓦の瓦当文様には、卷雲文（蕨手文）、蓮蕾文、蓮華文、忍冬文、鬼面文、重圈文などがある。

卷雲文（蕨手文）は集安地域に見られるものである。基本的な文様としては、中房はあまり高くはないが、半球形に盛り上がり、そこから区画線によって内区が4分割され、その中に卷雲文（蕨手文）が配されている。外区には鋸歯文を配したものがある。そして、その内区卷雲文と外区鋸歯文の間に文字が記されたものがある。文字は「太寧四年太歳□□閏月六日己巳造吉保子宜孫」（図2-1）、「太寧□年四月造作」、「己丑年□□于利作」（西大塚、図2-2）、「戊戌年造瓦故記歳」（禹山992号墓）、「□四時興詣□□□萬世太歳在丁巳五月廿日」などがあり、これらの年号に関しては、「太寧」は東晋の年号で3年までしかないという問題もあるが、基本

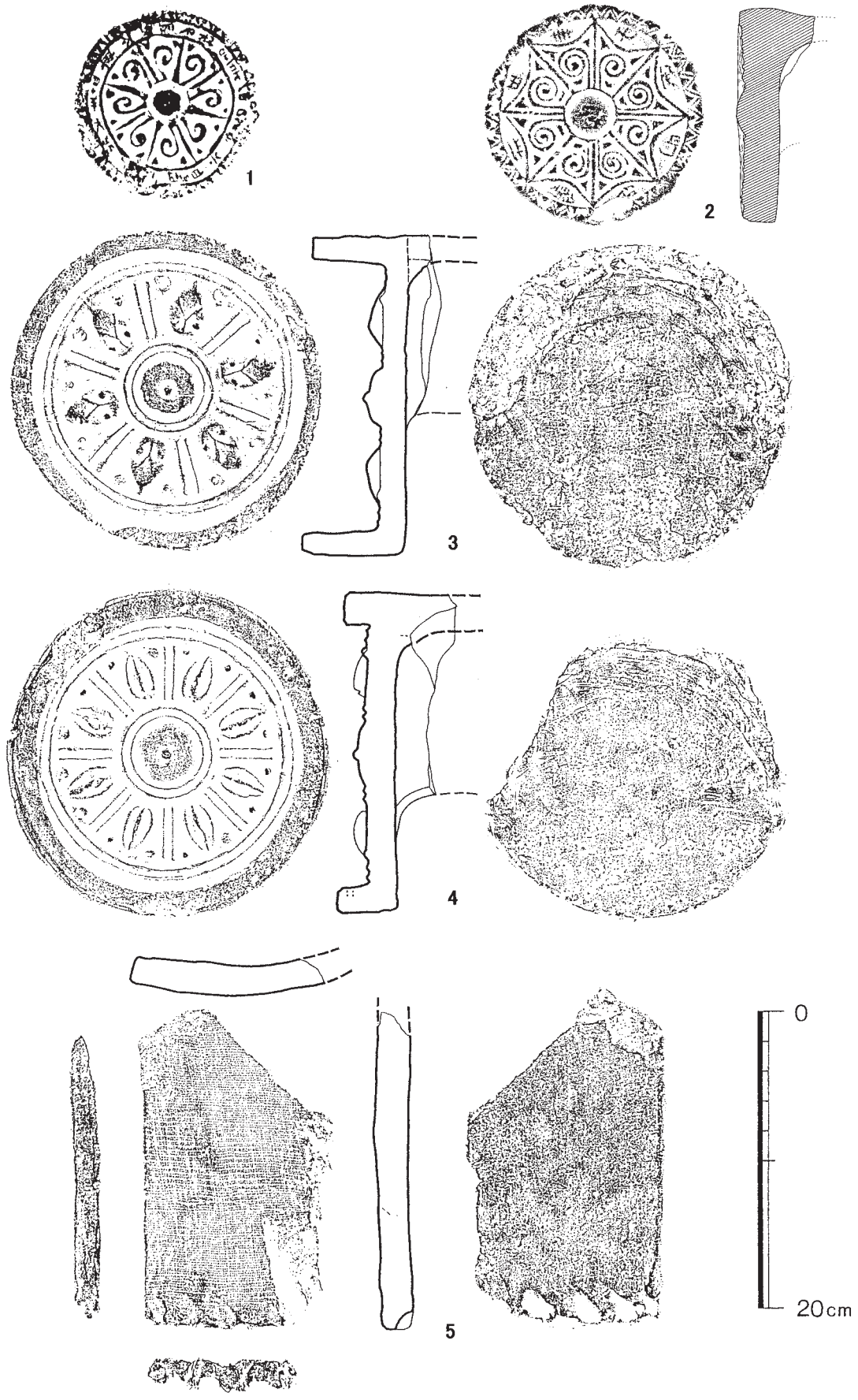


図2 高句麗の軒瓦(1/4) 1:集安县城浴池、2:西大塚、3:太王陵、4・5:將軍塚

的にこの時期、つまり太寧4年(326)、そして「己丑」は329年、「戊戌」は338年、「丁巳」は357年と考えられている(林・耿1985、吉林市・集安市2004)。

これらの製作技法に関してはよくわからないが、基本的には、瓦当裏面最上部に丸瓦をそのまま(?)接合しているようである。補強粘土は少ないようである。

「己丑年□□于利作」(329年)銘卷雲文軒丸瓦が出土した西大塚では、一部に蓮蕾文軒丸瓦もあるが、基本的に卷雲文軒丸瓦であり、ここでは端部に指頭圧痕などをもつ軒平瓦(?)や玉縁式丸瓦が出土する。「戊戌年造瓦故記歳」(338年)銘卷雲文軒丸瓦が出土した禹山992号墓では、卷雲文軒丸瓦が大多数で、一部、蓮蕾文軒丸瓦が出土し、ほかに玉縁式丸瓦と縄目文・格子目文の平瓦があるが、軒平瓦は出土していないようである。

卷雲文軒丸瓦のなかで、内区～外区に文字をもたないものが千秋墓(千秋塚古墳)で出土しているが、ここでは蓮蕾文軒丸瓦がまとまって出土している。ただ、この蓮蕾文は、集安王陵群で出土する蓮蕾文の中では最古のものではない可能性があり、卷雲文から蓮蕾文へ、いつどのようにかわっていくのかは、もう少し検討が必要なようである。

これらの年号を記した卷雲文軒丸瓦は、集安地域の宮殿や古墳などで使用されており、4世紀前半から中葉にかけて、このような漢や楽浪郡の瓦とつながるような瓦が、高句麗の初期の瓦として使用されていたことがわかる。そして、王陵群のあり方からも、4世紀後半に卷雲文軒丸瓦から蓮蕾文軒丸瓦へかわっていったようである。

蓮蕾文軒丸瓦の文様変遷については、谷豊信が検討しており、太王陵A型(4世紀中頃～後半中葉)(図2-3)→千秋塚A型(4世紀後半～末)→將軍塚型(5世紀初頭頃)(図2-4)と考えている(谷1989)。筆者も基本的にこの流れで問題ないと考えているが、集安王陵群における卷雲文軒丸瓦との関係はやや複雑である。墓の再利用や改築、のちの祭祀など、今後の検討が必要なようである。

この段階以降の高句麗瓦は、基本的に、前述の蓮蕾文を中心として、多様な文様が展開する。蓮華文には、複弁も少ないながら存在する。さらに、蓮蕾文、蓮華文、忍冬文などを交互に配するものもある。

また、輻線で区画するものが多く見られ、弁数は四弁、六弁、八弁がある。百済、新羅の瓦と比較すると、六弁が比較的多いようである。そして、弁間に珠文を配するものが多い。

中房は基本的に半球形に盛り上がり、その中央に蓮子を1個置くものが多い。また輻線で区画してそのなかに蓮子を入れるもの、中央の蓮子のまわりに圏線をめぐらし、その外側に蓮子を配するものなどもある。そして中房の外側に圏線をめぐらすものが多い。

外区外縁(周縁)は基本的に素文である。

筵型についてはよくわからないが、側面までかぶるものは確認できていない。また筵型自体は、木製のものの存在が筵キズなどから推測できるが、日本などで一般的な、直線的な木目痕跡だけではなく、同心円状の年輪(木目)が確認できる例があり、木取りが異なるものがある

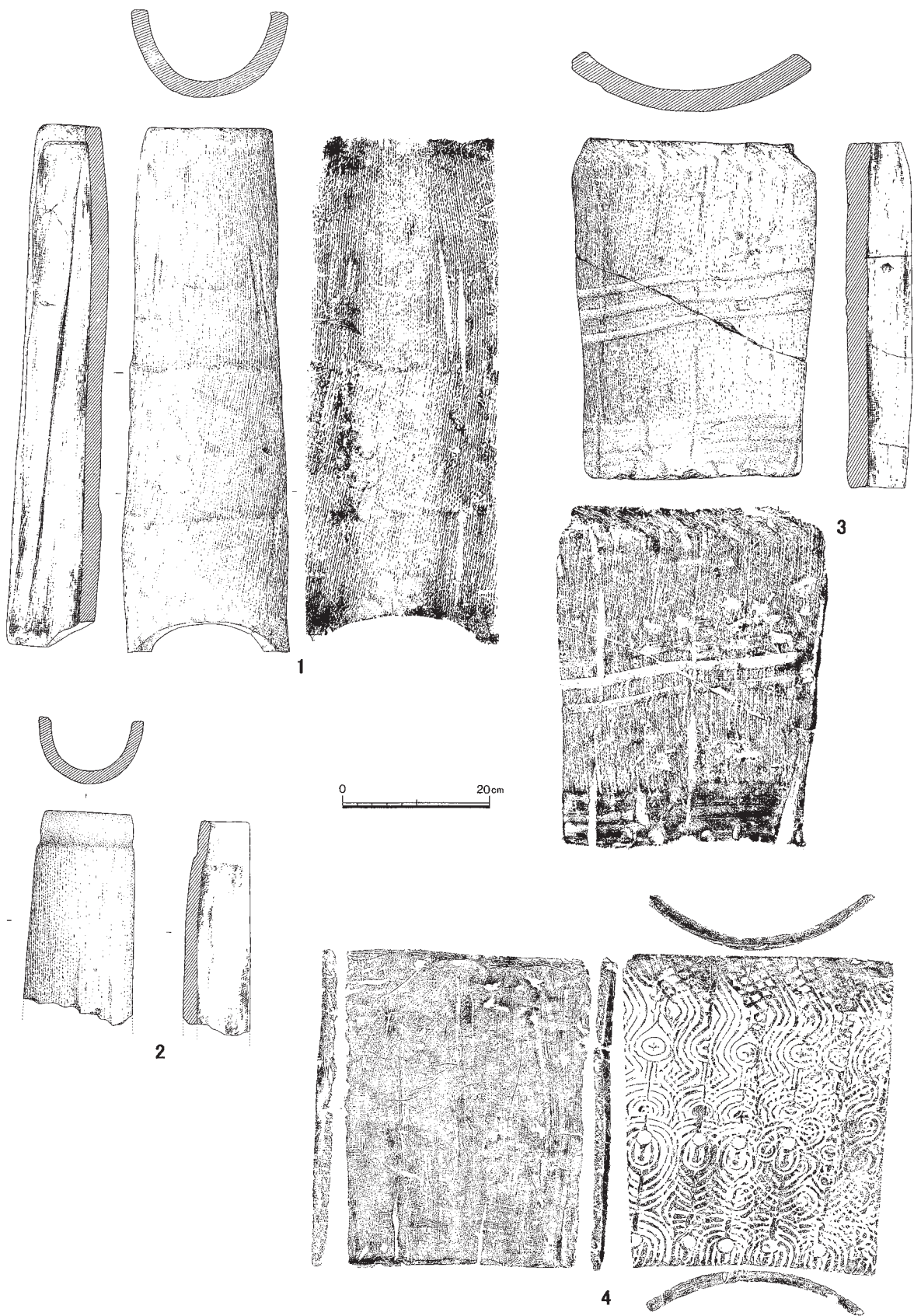


图3 高句麗の丸瓦・平瓦(1/8) 1~3:禹山2110号墓、4:平壤

ようである（井内古文化研究室 1976、PL.28-112、朝鮮総督府 1929、図 28・95 など）。

軒丸瓦の瓦当部と丸瓦の接合においては、板（櫛）状工具で数本単位、またはヘラ状工具で 1 本ずつ、瓦当裏面最上部や丸瓦先端部などにキズを入れたものが比較的多く見られる。丸瓦先端側凸面をヘラケズリしたものもある。また、接合用の段（溝もあるかもしれない）もある。丸瓦円筒を瓦当裏面に接合したのちに、丸瓦部を半截するものもあるようである。

軒平瓦 軒平瓦として明確なものは確認されていないが、集安の高句麗墳墓などでは、端部を指や工具で押した平瓦がある（図 2-5）。これが軒平瓦であるのか、単なる平瓦であるのかはよくわからない。これらと共伴するもので、端部になんの施文がない平瓦がどの程度あるのか、知りたいところである。もし軒平瓦であるならば、階段式の墓の段部に使用すると推測されることから、施文があるものとなないものの差はあまり大きくはないのかもしれない。型押し
の軒平瓦については、現時点で確実なものはわかっていない。

その他 また高句麗瓦の技法的な特徴の一つとして挙げられそうなものが、瓦当面や瓦当裏面、平瓦凸面などに施された離れ砂である。少なくとも、三国時代の百済や新羅の瓦については、離れ砂を筆者は確認していない。

瓦の色調は、灰色もあるが、赤褐色のものがほとんどである。集安など古式の瓦に灰色のものが多いうようである。

叩き文様は、縄目文、平行文、格子目文などのほか、花文などの特殊なものも比較的多く見ることができる（図 3）。集安の高句麗墳墓では、縄目文と格子目文が多いようである。叩き板には、平瓦の長さと同じくらいの長さをもつ長板もある（朝鮮総督府 1929、p.18-40）。丸瓦凸面はナデ消したものが多いうようである。

丸瓦は、行基式、玉縁式ともに見られる。集安の高句麗墳墓では行基式は少なく、玉縁式が多いようである。一方、平壤遷都後には行基式が多いようである。

丸瓦は、粘土紐巻きつけと粘土板巻きつけの両者がある。丸瓦の分割は、凸面側から下→上に行われ、破面はそのままのものと面取りを行うものがある。

平瓦は桶巻き作りで、粘土板巻きつけが多く、粘土紐巻きつけもあるようである。平瓦の分割は凸面からのものが多い。破面はそのままのものと、面取りを行うものがある。

D 百済の瓦

百済は、『三国史記』によれば B.C.18 年に建国され、660 年に唐・新羅連合軍に滅ぼされるまで続いた。ただ、一般的にはその建国は紀元前 1 世紀まで遡るとは考えられておらず、王城と考えられている風納土城や夢村土城の年代から、おおよそ 3 世紀中葉～後半頃に国家としての形が整い始めたと考えられている。そして、いわゆる百済瓦は、これらの王城などで初めて使用されたと考えられている。

百済瓦については、前期漢城時代（?～475 年）と中期熊津時代（475～538 年）・後期泗泚時

代（538～660年）で文様・技法などが大きく異なるため、二つに分けて説明する。

（i）漢城時代の瓦

漢城時代の瓦は、風納土城、夢村土城、石村洞4号墳のものが代表的で、その時期については未だはっきりしない部分が多いが、4世紀後半頃には使用されていたとみられている。ちなみに、風納土城・夢村土城自体の年代は3世紀後半頃からと考えられている。

以下の瓦に関する説明は、基本的に上記3遺跡の資料によっている（国立文化財研究所2001・2002・2005、韓神大校博物館2003～2005、權・韓2008、金元龍ほか1987・1988・1989、亀田1984など）。

軒丸瓦 軒丸瓦は、製作技法の面から大きく2グループに分けることができ、その中が文様などで細分される。Ⅰ類は、風納土城、夢村土城、石村洞4号墳などで出土しており、基本的に瓦当裏面下半に突帯をもつグループである。Ⅱ類は、夢村土城で出土している、蓮華文が変形したと考えられる文様を飾るものである。

Ⅰ類の文様は、大きく幾何学文系（A類）、樹木文系（B類）、蓮華文系（C類）、獣面文系（D類）、素文系（E類）に分けられる。

まず幾何学文系（A類）（図4-1）は、内区中央に円形または方形の凸線または突出による中房をもち、そこから四方に先端部が十字形や樹木のような三叉状になる凸線を配して4区画し、そのなかに円文（十字や小さな方形が入る）を配するもの、その4区画の中がないものなどがある。文様としては、漢や楽浪郡などの瓦の4区画文様の系譜を引くものと考えられるが、区画の先端部がY字状に表現される例は、楽浪瓦（東京大学文学部考古学研究室1965、図版9-6など）にある。

製作技法は、まず范型に粘土を詰め、おおよその瓦当部を作った後、粘土紐を瓦当裏面、縁よりやや内側に巻き上げて円筒状のものを作り、そののち不要な部分を切断しているようである。そのため、瓦当裏面下半の縁よりやや内側に突帯を残すものが多いが、突帯を残さないものもある。このように、丸瓦部は、内型を使用しない粘土紐巻き上げ技法（泥条盤築技法）によって作られている。瓦当部から丸瓦部にかけてよく残るものはほとんど見られなかったが、確認できたものでは、丸瓦部の内外面は基本的にナデ調整である。

樹木文系（B類）（図4-2）は、A類の幾何学文系の一部に枝状の表現や十字円文などを付加したようにも見え、基本的に同じグループに入れるべきものかもしれないが、ある程度具象的な表現を意識しているように思われるので、分けておく。また、外区外縁が突出していない。このグループの製作技法は、基本的にA類と同じと思われる。

蓮華文系（C類）は、夢村土城で以前出土したものと、風納土城の最近の発掘調査で出土したのものがある。両者は文様が全く異なり、ひとまず別グループと考えておく。

前者（図4-4）は単弁六葉蓮華文軒丸瓦である。中房は平坦で、中央に円文があり、その外側に圏線がめぐらされている。製作技法はこれまでのものと同じようで、瓦当裏面下半に突

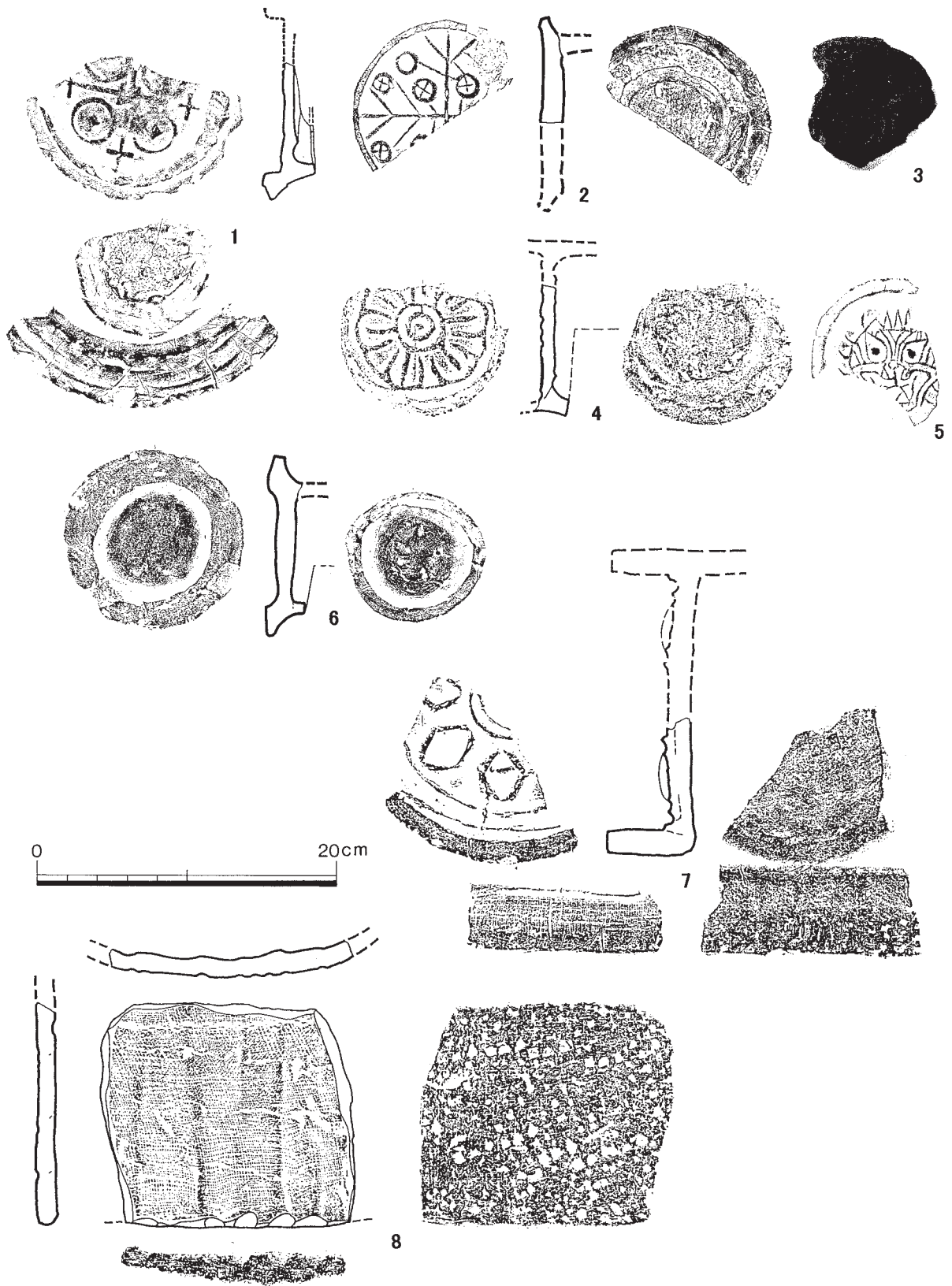


図4 百濟漢城時代の軒瓦(1/4) 1:石村洞4号墳、2・3・5・6:風納土城、4・7・8:夢村土城

帯が残っている。

後者(図4-3)は詳細が不明であるが、素弁六葉蓮華文軒丸瓦である。中房はやや丸く盛り上がり、2本の圈線で区画されている。蓮弁は線で縁取りされ、弁中央に凸線が入る。類似した文様は中国永寧寺などで出土しており、北魏の瓦とされている(程永建 2007、p.273 図版252)。製作技法は不明である。

獣面文系(D類)(図4-5)も最近の発掘調査で出土したもので、詳細は不明である。内区中央に、大きく口を開けた獣面文が線で表現されている。中国の南京市内で類例が出土しており、南朝系の瓦の可能性が考えられる。

確認できた一部の破片によると、製作技法は一見するとこれまでの例と同じように見えるが、丸瓦凹面に布目があり、これまでの泥条盤築技法によるものではなく、内型を使用して作った半截丸瓦を接合しているようである。

素文系(E類)(図4-6)は瓦当文様が無文のものである。基本的には、A~C類と同じように、泥条盤築技法によって丸瓦部を作っていると思われる。

以上、I類の軒丸瓦について述べてきたが、基本的に瓦当裏面下半に突帯をもつ点で形態的な類似が見られ、D類の獣面文系以外のものは、泥条盤築技法による粘土円筒の不必要な部分をあとで切り取っているようである。

丸瓦部は、後述するように直径10cmほどで、一般的な丸瓦より小さく、厚さも1cmほどと薄い。形態的には玉縁式であり、行基式は確認できていない。調整技法は、D類以外は泥条盤築技法によっており、内外面とも基本的にナデである。D類に関しては、凹面に布目が残っている。また瓦当部は残っていないが、丸瓦に円形の釘穴があるものがある。

以上述べてきたI類軒丸瓦の時期については明確な根拠はないものの、石村洞4号墳の相伴土器の年代が4世紀後半~5世紀初とみられており、4世紀後半を中心とする時期と考えている。また、D類の獣面文系軒丸瓦は、類例として中国南京の南朝の瓦がある。詳細は不明であるが、目や口や耳、そして髪表現が類似したものとしては、南京市建業路朝天宮南出土例がある(賀雲翱 2005、p.23 図14-3)。この瓦は東晋早期と考えられており、4世紀前半代の可能性が考えられる。そうすると、文様は異なるが、石村洞4号墳の瓦が4世紀後半を中心とする時期とみられることと矛盾はないようである。

II類軒丸瓦(図4-7)は夢村土城のみで出土しており、これまで述べてきたI類軒丸瓦とは製作技法や大きさなどが明らかに異なる。

中房は外側の圈線のみ残り、その中の様子はわからない。内区は菱形が線で表現され、かなり崩れているが、蓮華文が簡略化したもので、八葉のようである。この瓦の特徴は外区外縁にある。内側の高さが3.9cmときわめて高く、その内面に布目が残っている。そして、外面には一辺4~5mmの格子目文が残る。内区と外区外縁の接合状況がよくわからないので、不確実ではあるが、内区の瓦当文様部分のみの範型に粘土を詰め込み、そのあと内型と布を使用して作

った粘土円筒を嵌め、瓦当部と密着させたのち、瓦当裏面の高さに合わせて不必要な部分を切り取った可能性が推測される。さらに、この軒丸瓦のもう一つの特徴が、復元直径 20.0 cm という大きさである。

したがって、この軒丸瓦はⅠ類軒丸瓦とは明らかに製作技法、文様などにおいて大きく異なり、別系譜のものと考えられる。集安太王陵の蓮蕾文軒丸瓦の外区外縁が、同じように内側での高さ約 4 cm ときわめて高く、文様の菱形文が蓮蕾文の簡略化とみられることから、時期については、不確実ではあるが、5 世紀前半代のものではないかと考えている。

軒平瓦 夢村土城で 1 点、軒平瓦の可能性のあるものが出土している (図 4-8)。端面の上下を指で押さえたものである。オサエはやや弱い、漢城時代の平瓦にこのような例がないことから、集安高句麗墳墓に見られる軒平瓦 (?) と関わる可能性も考えておきたい。凹面には模骨の枰板痕跡と布目、凸面には格子目文の叩き文様が見られる。粘土紐作りである。時期についてはよくわからない。

その他 丸瓦は、泥条盤築技法によるものと、内型を使用したものがある。玉縁式はあるが、行基式は確認していない。玉縁式丸瓦は、ナデなどにより段をつけて玉縁状にしたもの、凸線で玉縁部を区分したもの、明確な段を作った玉縁部をもつものがある。日本で一般的に見られるような、明確な段をもつ玉縁式丸瓦は、風納土城では確認できたが、夢村土城や石村洞 4 号墳の資料の中には確認できなかった。

素材については、粘土紐と粘土板ともに確認した。粘土板の例は、合わせ目とともに、粘土板切り離し時の糸切り痕を確認している。ただ、体部は粘土板であるが、玉縁部のみ粘土紐を巻き上げたような痕跡をもつものもある。分割は、凸面側からなされたものを確認した。基本的に面取りを行っている。

丸瓦の直径は約 10 cm で、厚さは基本的に 1 cm ほどのものがほとんどである。これらは、前述のⅠ類軒丸瓦と組むもので、熊津・泗泚時代や日本の瓦に比べるとかなり小さく、薄手の感がある。

ただ、一部に、おそらく夢村土城出土のⅡ類軒丸瓦などに関わるものと推測される、直径がより大きな一群もある。これは直径が 17 cm ほどあり、凸面に縄目文を残すものとナデ消したものがある。凹面は布目である。厚さは 0.8~1.3 cm である。

丸瓦の叩き文様は、泥条盤築技法によるものは基本的にナデで確認できないが、凹面に布目を残すものでは縄目文と格子目文が見られる (図 5-5・6)。

平瓦は、泥条盤築技法によるものと枰板連結模骨を内型にしたものがあり、素材は枰板連結模骨を使用したものも粘土紐と粘土板の両方がある。粘土板のものでは、粘土板切り離し痕跡を残すものがある (図 5-10)。枰板の幅は、のちの熊津・泗泚時代のものにくらべて比較的広く、5~8 cm ほどのものが多く見られる。分割は、凹面側からのものと凸面側からのものを確認している。基本的に面取りをしているが、部分的に破面を残すものがある。端面はヘラケズ

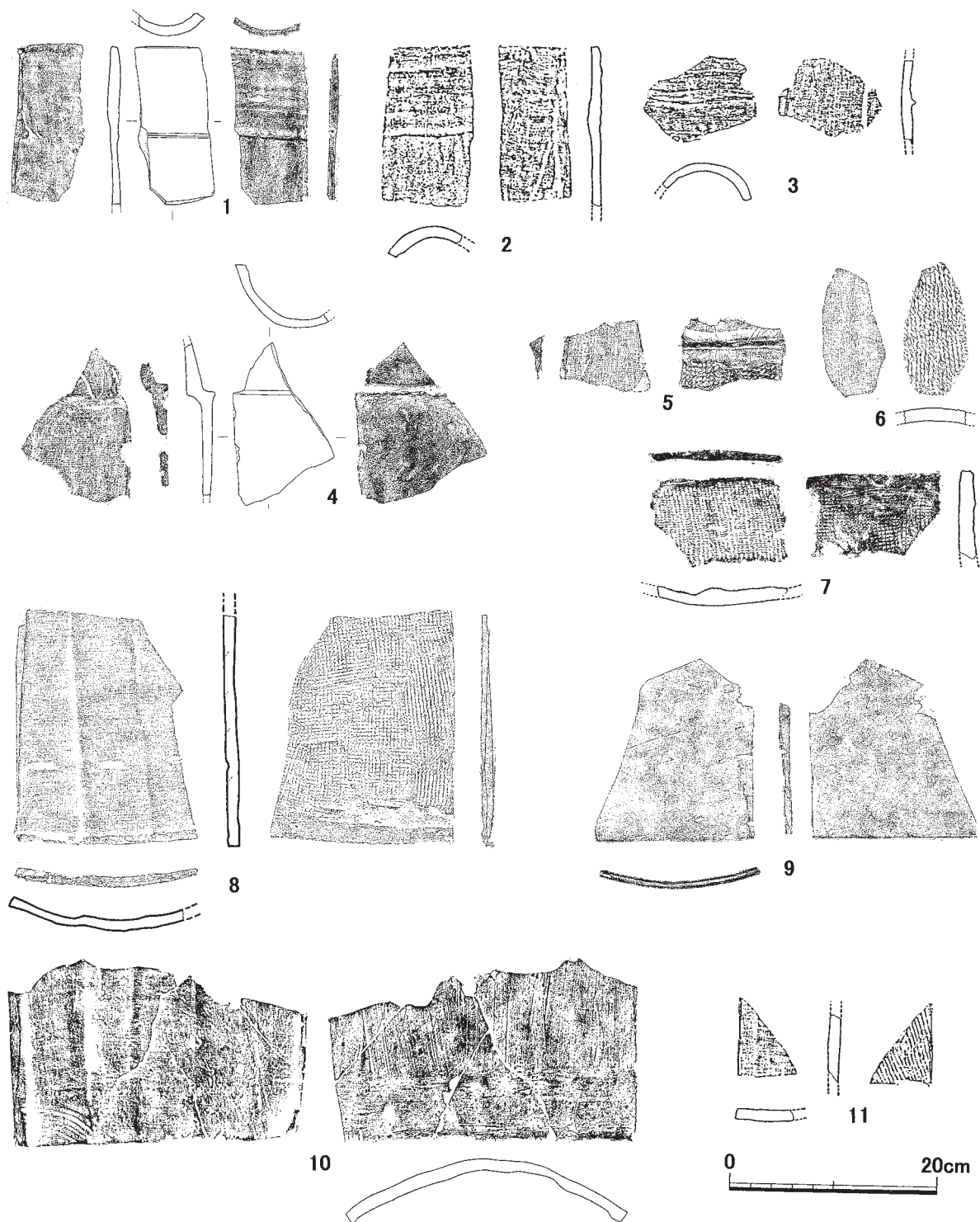


図5 百濟漢城時代の丸瓦・平瓦(1/6) 1・4~6・8~10:風納土城、2・3・7・11:石村洞4号墳

リを行わず、ナデのままのものが多く見られる。

叩き文様は大多数が格子文で、一部に平行文や縄目文がある。石村洞4号墳では縄目文は確認していない。格子文は正格子文、斜格子文があり、基本的に格子の大きさは小さく、その時代の土器の叩き文様と類似したものもある。なお、同じ瓦に格子文と縄目文が確認できるものがある。凹面の端部側に無文の当て具の痕跡を残すものもある。また、凹面側に縄目文を残すもの(図5-7)も一部見られる。これには、百濟南部地域の凹面縄蓆文瓦のようなヨコ方向の紐の痕跡が見られず、泥条盤築技法の時の内面の当て具(細長い板か棒状のものに縄を巻いたもの?)の痕跡かと思われる。

(ii) 熊津・泗泚時代の瓦

前述のように、瓦の様相は、前期漢城時代と中期熊津時代以降ではかなり異なる。ここでは中期熊津時代と後期泗泚時代のものをまとめたのべる。

この時期の瓦に関しては、朴容埴の一連の研究(1976ほか)が基礎となっており、その後、亀田(1981)、金誠龜(1992)などの研究があり、近年では清水昭博(2003など)が精力的に研究を進めている。基礎的な資料としては、忠南大学校百濟研究所編『百濟瓦埴図譜』(1972)、井内古文化研究室編『朝鮮瓦埴図譜 III 百濟・新羅1』(1978)、(財)百濟文化開発研究院『百濟瓦埴図録』(1983)があり、1980年代以降は各遺跡の報告書が刊行されている。

瓦は公州、扶余、益山などの王都の宮殿や寺院で出土するほか、地方の山城でも出土している。ただ、高句麗や前期漢城時代などのように古墳に葺かれたものは確認されていない。

瓦の種類としては、軒丸瓦、軒平瓦、鳥衾瓦、丸瓦、平瓦、鷗尾、蓮華文鬼板などがある。

軒丸瓦 軒丸瓦の瓦当文様は蓮華文が中心であり、ほかに卍字文、素文などがある。蓮華文は素弁(無子葉単弁)がほとんどで、単弁(単子葉単弁)、複弁、忍冬蓮華文などもある。素弁は全くの素弁がほとんどであるが、有稜もある。

素弁は6種に細分できる。A.尖形、B.反転突起形(点珠形を含む)、C.三角反転形、D.切り込み反転形、E.湾曲反転形、F.円端形である。これらが6~7世紀に展開するが、現時点では、公州大通寺跡で出土しているBの反転突起形の蓮華文軒丸瓦が6世紀前半まで遡る可能性が高く、最も古いと考えている。中房は凸形がほとんどであるが、圏線で囲むものもある。蓮子は1+4、1+6、1+8がほとんどだが、中央の1個のまわりに蓮子を二重にめぐらすもの(1+○+○)もある。外区外縁は基本的に素文であるが、珠文をめぐらすものもある。

製作技法に関しては、薛貞蓮の研究(1976)が初期の例で、亀田も1981年の論文で瓦当面と丸瓦の接合に関して簡単に整理し、丸瓦先端部に2回ケズリを行う手法(片柄状^{かたぼぞ}2回ケズリ)が日本へ伝えられたことを述べ、技法面での百濟瓦と日本の瓦の関係を指摘した(亀田1981)。近年では、戸田有二が精力的に研究を進めている(戸田2001、2004)。また、菱田哲郎が日本の飛鳥寺などの初期の瓦を整理し、その成果が逆に、百濟瓦を研究するうえで参考になっている(菱田1986)。

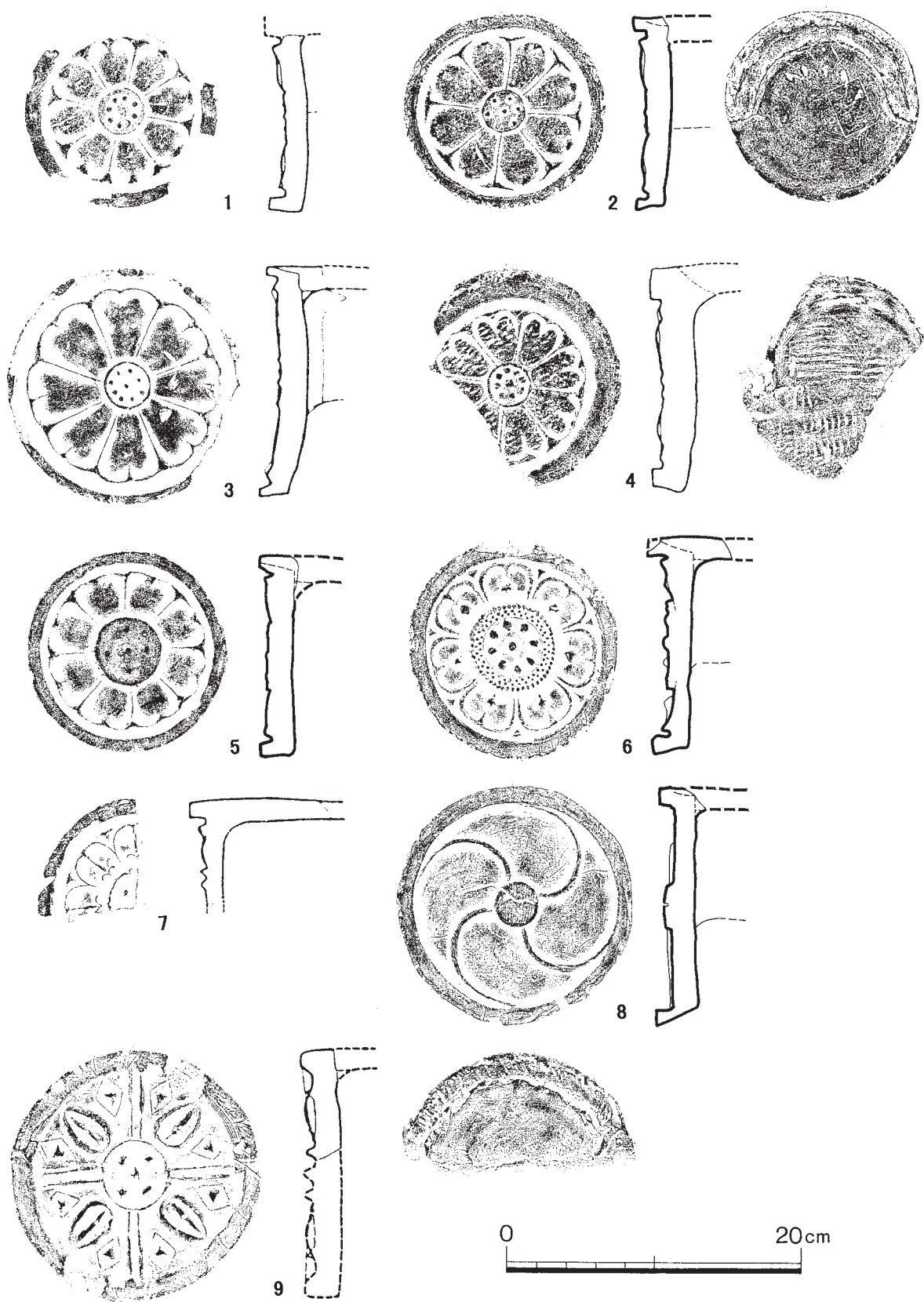


図6 百濟熊津・泗泚時代の軒丸瓦(1/4)

1・5:軍守里寺跡、2:大通寺跡、3:扶蘇山城、4:佳増里寺跡、6:県北里窰跡、7:帝積寺跡、
8:公山城、9:双北里寺跡

範型に関しては、基本的には瓦当側面にかぶらないものを使用している。ただ一部、側面にかぶるものを使用した可能性があるものが扶余龍井里寺跡例に存在するようだが、さらなる検討が必要である。

また、垂木先瓦ではあるが、顎面に鋸歯文と珠文を飾る益山弥勒寺跡の資料があるので、枷型の使用はあるようである。ただし、普通の軒丸瓦では未確認である。

丸瓦先端部の加工と先端無加工の丸瓦の接合位置については、丸瓦の凹面側を片柄状に段をつけて2回ケズリし、瓦当裏面最上部に接合するもの(図6-3)が最も多く、無加工、1回ケズリも比較的多く見られる。

飛鳥瓦で整理されているような瓦当文様と製作技法の関係は、百済瓦全体ではうまく対応していない。しかし、細かくみると、旧衙里寺跡では弁端点珠が多く、片柄状2回ケズリのものが比較的多い。飛鳥寺の星組の瓦工人が、旧衙里寺跡に関わる瓦工人グループの人たちであった可能性は考えられる。

また、片柄状2回ケズリの手法は、これまで筆者が確認した範囲では、高句麗にはないようである。一方、中国の瓦にも、筆者が確認した範囲では存在しないようである。百済で自生したのであろうか。しかし、熊津時代から泗泚時代の百済瓦埴の文様などをみると、中国に片柄状2回ケズリの手法がある可能性が高そうである。

この片柄状2回ケズリの手法は、丸瓦先端部加工の方法としては特異であり、技法面から百済瓦の影響を確認するときに有効である。日本の飛鳥瓦と同じように、新羅瓦にも見られる。7世紀末に造営された雁鴨池出土瓦には、百済軒丸瓦の文様とよく似たものがあり、そのなかに片柄状2回ケズリの丸瓦が接合された例を確認している。技法面からも、新羅瓦に百済瓦の影響が及んだことが判明するのである。

接合用のキズについては、瓦当上部や上面にキズをつけたものと、丸瓦広端面やその付近にキズをつけたものがあり、瓦当上部や丸瓦広端面にキズをいれるものは、扶余地域では龍井里寺跡、金剛寺跡などで比較的多くみられ、工人グループに特徴があるようである。キズはヘラでつけたものが多いが、金剛寺跡例には瓦当裏面上半部に三角形の大きな切り込みを多数入れたものもある。また、逆に丸瓦の先端部を歯車のようにギザギザに加工して、それを瓦当裏面上部に押しつけたものもある。

瓦当裏面の調整は、指などやわらかいものによるオサエとナデ、工具を利用したナデ、回転を利用した回転ナデ(図6-2)、そしてヘラケズリと叩きなどがある。

瓦当裏面の叩きは、百済ではあまり見られないが、佳増里寺跡(図6-4)や扶蘇山城に例がある。前者は裏面を平行叩きしているが、瓦当面にも縄目文が残っている。後者は平行叩きのあと、ナデている。一方、古新羅瓦にも瓦当裏面の叩きは比較的多く見られる。

当時の百済と新羅の関係を勘案すると、百済→新羅と考えられるが、瓦当裏面叩きの瓦は古新羅瓦では比較的多く見られるので、その逆に古新羅瓦→百済瓦も考えておいた方がよいかも

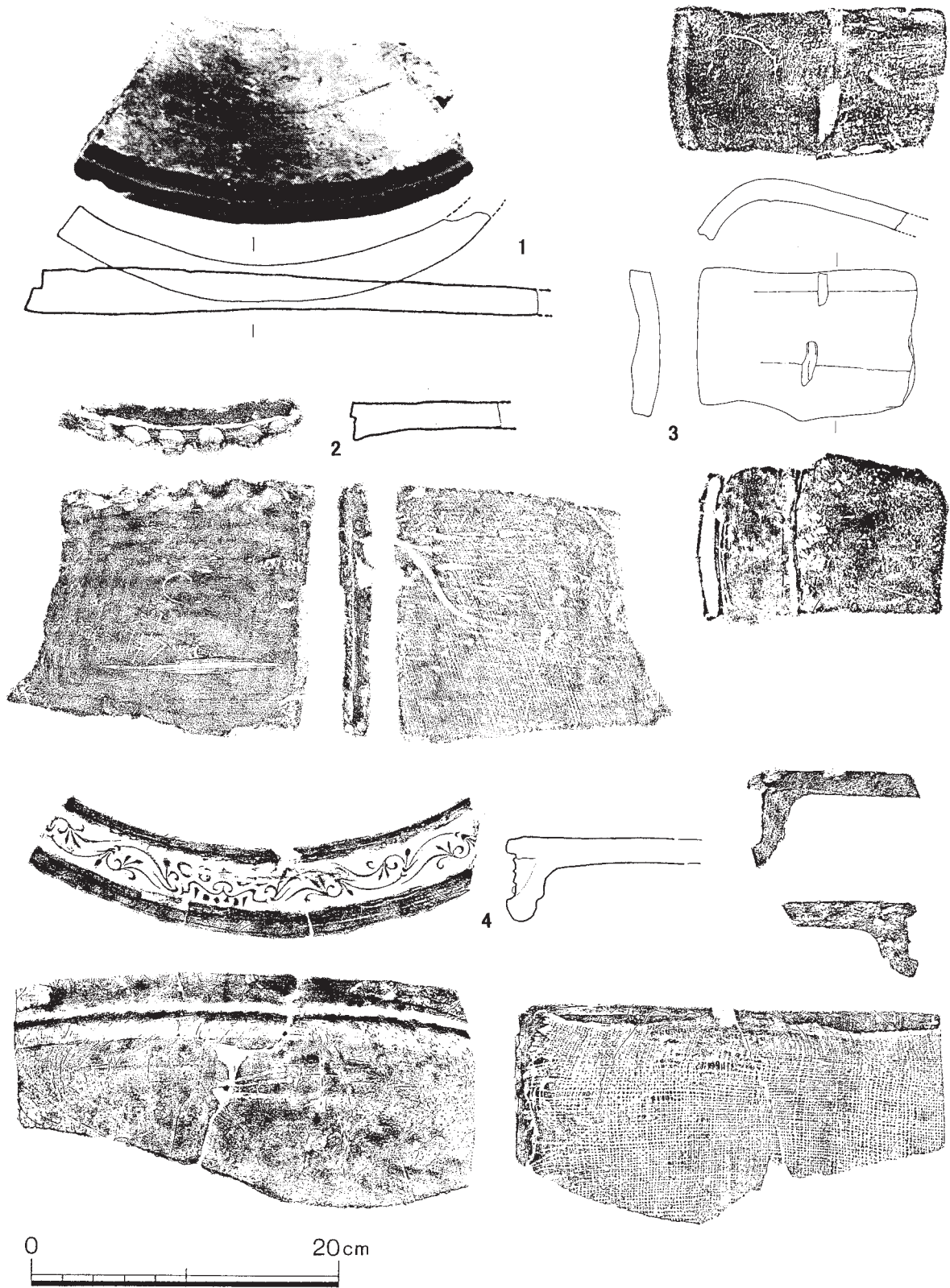


図7 百濟泗泚時代の軒平瓦 (1/4) 1:旧衙里寺跡、2:軍守里寺跡、3:扶蘇山城、4:帝釈寺跡

しれない。また、日本の瓦でもときどき見ることができるが、近江の軒丸瓦の瓦当裏面の叩きは、瓦当文様も考慮すると、新羅から伝えられた可能性も考えられる。

軒平瓦 百済では、軒平瓦はほとんど発見されていない。わずかにその例として挙げられるのは、旧衙里寺跡（図7-1）や陵寺（図8-2）で出土している、厚くなった瓦当面の上半分を1cmほど切り取って段差を作った有段軒平瓦、軍守里寺跡で出土している、下顎に指頭圧痕をもつ重弧文軒平瓦（押圧波状重弧文軒平瓦）（図7-2）、益山帝釈寺跡で出土している、箆型使用の中央に獣面文を飾る忍冬唐草文軒平瓦（図7-4）、そして扶蘇山城で出土している、土器の口縁部状の形態をした土器口縁状軒平瓦（図7-3）である。

旧衙里寺跡や陵寺例のような有段軒平瓦は、百済ではほかに確認していないが、新羅の皇龍寺跡（崔孟植 2006、pp.280・281 図面 75・76）、多慶窯跡群などに見られる。

軍守里寺跡例のような指頭圧痕をもつ重弧文軒平瓦も百済ではほかに類例がなく、顎部の指頭圧痕は高句麗の太王陵などのものと類似する。ただ、高句麗瓦には重弧文はないようである。一方、中国の北魏永寧寺で、基本的に同じ文様の重弧文軒平瓦が見られる（奈良国立文化財研究所 1998、p.129 図 91-1~5）。この重弧文軒平瓦の叩き文様は不明だが、一緒に報告されている平瓦の叩き文様は縄目文である。関係があるかどうかはわからないが、軍守里寺跡重弧文軒平瓦の叩き文様は、百済瓦では珍しい縄目文である。

益山帝釈寺跡例は箆型を使用した軒平瓦で、箆型の端は凹面側で8mmほどかぶっている。顎は薄く、丸くなっている。平瓦部は布目痕跡が瓦当面近くまで確認でき、その端面も含めて瓦当面となっていることから、箆型の凹面側にまだ軟らかめの平瓦を押しつけ、凸面側に瓦当面・顎部となる粘土を貼り付けて文様を写しているようである。

このような軒平瓦は百済にはなく、高句麗・新羅でも見ることはできない。また、統一新羅時代に一般的な、顎をもつ軒平瓦は、瓦当裏面の上部に段や溝などを彫って平瓦を接合しており、製作技法も異なる。ただ、平瓦の凹面には布目が残るものの、模骨の枠板痕跡はないようであり、後述する新羅の円筒桶による平瓦と共通する。

このような、中心飾りに獣面文状の文様を使用した均整唐草文軒平瓦はきわめて珍しく、その近似例はほとんど挙げるできない。ただ、近年、中国南朝の瓦の中に獣面文を飾るものが確認されており（賀雲鞠 2005）、これらとの関係も推測される。一方、日本の資料であるが、紀伊上野廃寺により近いものがある。その時期は、組み合う軒丸瓦も含めて、7世紀末ころと考えられている。この帝釈寺跡の軒平瓦とセットをなすと考えられる軒丸瓦は、素弁蓮華文軒丸瓦か忍冬蓮華文軒丸瓦（図6-7）であり、7世紀代の軒平瓦で、中国南朝から伝えられたものと考えておきたい。

そしてもう一つが、扶蘇山城で出土している、土器の口縁部の形をしたものである。一見すると土器の破片かと思われるものだが、凹面には模骨の枠板痕跡と布目が残っており、粘土板か粘土紐かは確認できていないが、模骨に粘土を貼り付け、模骨の外側にはみ出した部分を土

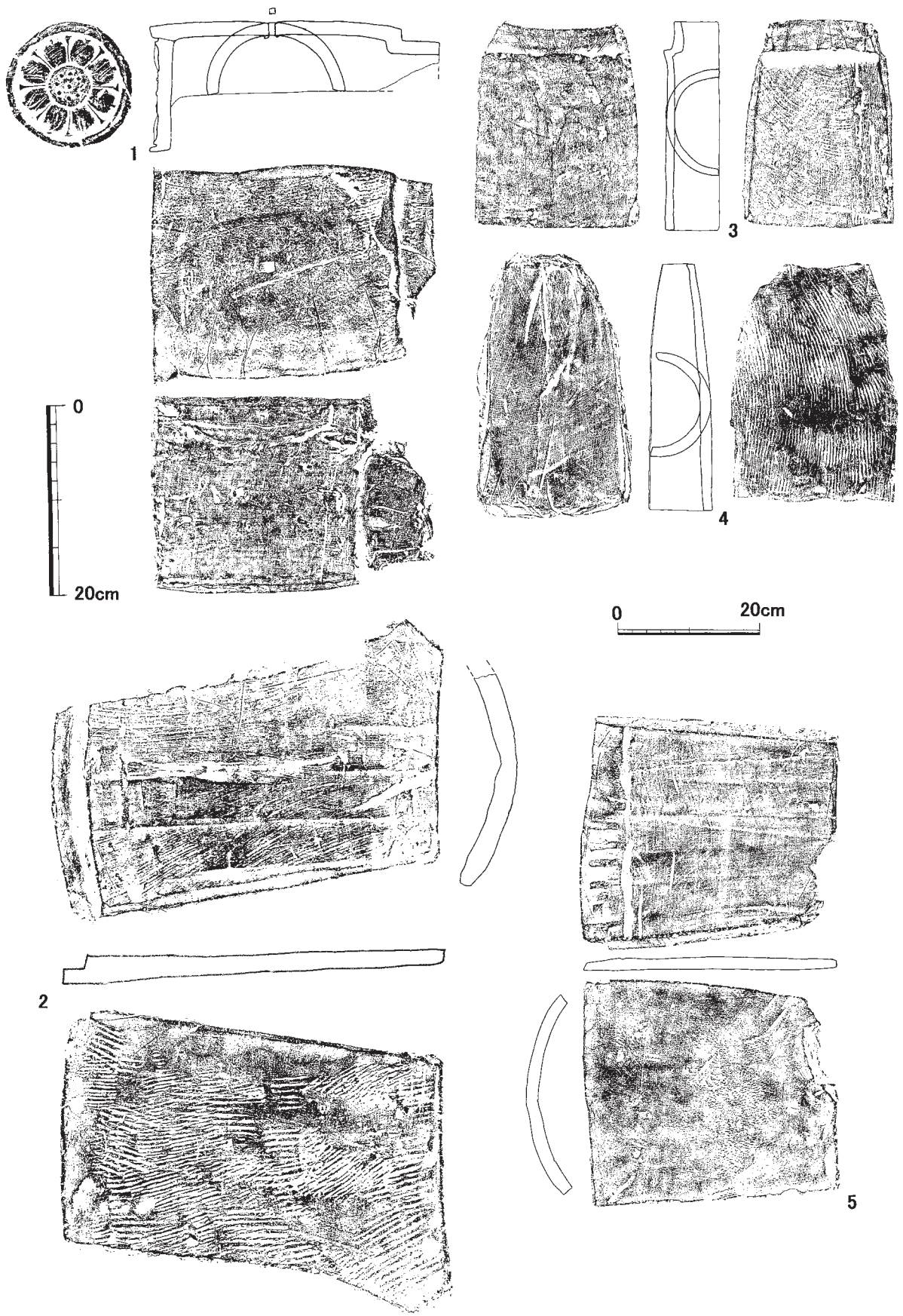


図8 百濟泗泚時代の軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦(1・2:1/6、3~5:1/8) 1~5:陵寺

器の口縁部状に外反させて作っているようである。このような土器口縁状軒平瓦は、百済ではこの扶蘇山城例以外に確認していないが、新羅の月城と勿川里 C-1-2-3 号窯跡でも出土しており、このような形の軒平瓦が百済と新羅にあることがわかる。ただ、新羅の例は凹面に布目や模骨の杵板痕跡は確認できない。

以上、百済の軒平瓦を概観したが、旧衙里寺跡と陵寺の有段軒平瓦は、重弧文軒平瓦と同様の意図で作られたものと考えられる。軍守里寺跡の指頭圧痕をもつ重弧文軒平瓦は、中国や高句麗などで類例を見ることができ、日本では7世紀後半に見られる。帝釈寺跡例は忍冬唐草文を飾っており、同じ帝釈寺跡で出土している忍冬蓮華文軒丸瓦とセットをなす可能性が高い。そして扶蘇山城の土器口縁状軒平瓦も含め、いずれも百済内ではほかの遺跡での確認例がない。今後の資料の増加を待ちたいが、おそらく7世紀に入り、これらの遺跡においてどこかからの影響を受け入れ、独自に軒平瓦が使用されたものと考えておきたい。また、そのほかに、平瓦の先端部を厚くしただけの素文の例もあるかもしれない。

その他 丸瓦・平瓦の叩き文様はすり消したものが多いが、平行文が多いようである。格子目文、縄目文もある。叩き板は、短板や中板はあるが、長板はないようである(図8)。

丸瓦は、行基式と玉縁式の両方とも見られる。丸瓦は、粘土板巻きつけ例はある。粘土紐巻きつけは不明。丸瓦の分割は凸面からで、破面はそのままのものもあるが、多くは面取りを行う。玉縁部凹面の布目は、あるものとなないもの両者がある。

平瓦は、粘土板桶巻き作りが見られる。粘土紐巻きつけは不明。平瓦の分割は凹面からで、破面はそのままのものと面取りを行ったものがある。

丸瓦・平瓦ともに、漢城時代に見られた泥条盤築技法のものは確認できていない。

(iii) 地方の瓦

百済の熊津・泗沘時代には、当時の都であった公州や扶余、そして都に準ずる地であった益山などでは基本的に見られない瓦が、かつての百済・新羅国境付近に存在する。

軒丸瓦としては、やや不確実であるが、大田広域市鶏足山城に図9-1のような素弁八葉蓮華文軒丸瓦が見られる(大田産業大学郷土文化研究所1994)。蓮華文自体は百済瓦とみることもできるが、百済滅亡後のソウル地域の清潭洞遺跡出土例と比較的類似している。ただ、瓦当裏面に布目が残り、これは布目押圧技法(毛利光1991)によるものと判断され、現時点では朝鮮半島では類例を捜しえていない。

次に、図9-3~5は大田広域市月坪洞遺跡出土の丸瓦・平瓦である(国立公州博物館1999)。これらの瓦は、杵板連結模骨などの内型に布を巻き、その上に粘土紐・板を巻きつけたものではなく、布の代わりに簾状のものを巻きつけて作った瓦である。内型が存在するのか、それとも内型がなく、簾状のもの内側に何らかの輪状のものをはめて固定したのかは現時点ではよくわからないが、いずれにせよ、一般的な布の代わりに、葦のようなものを横紐で綴じた簾状の模骨を使用しているのである。このような瓦を、筆者はスダレ(簾)状模骨瓦と呼んでいるが、

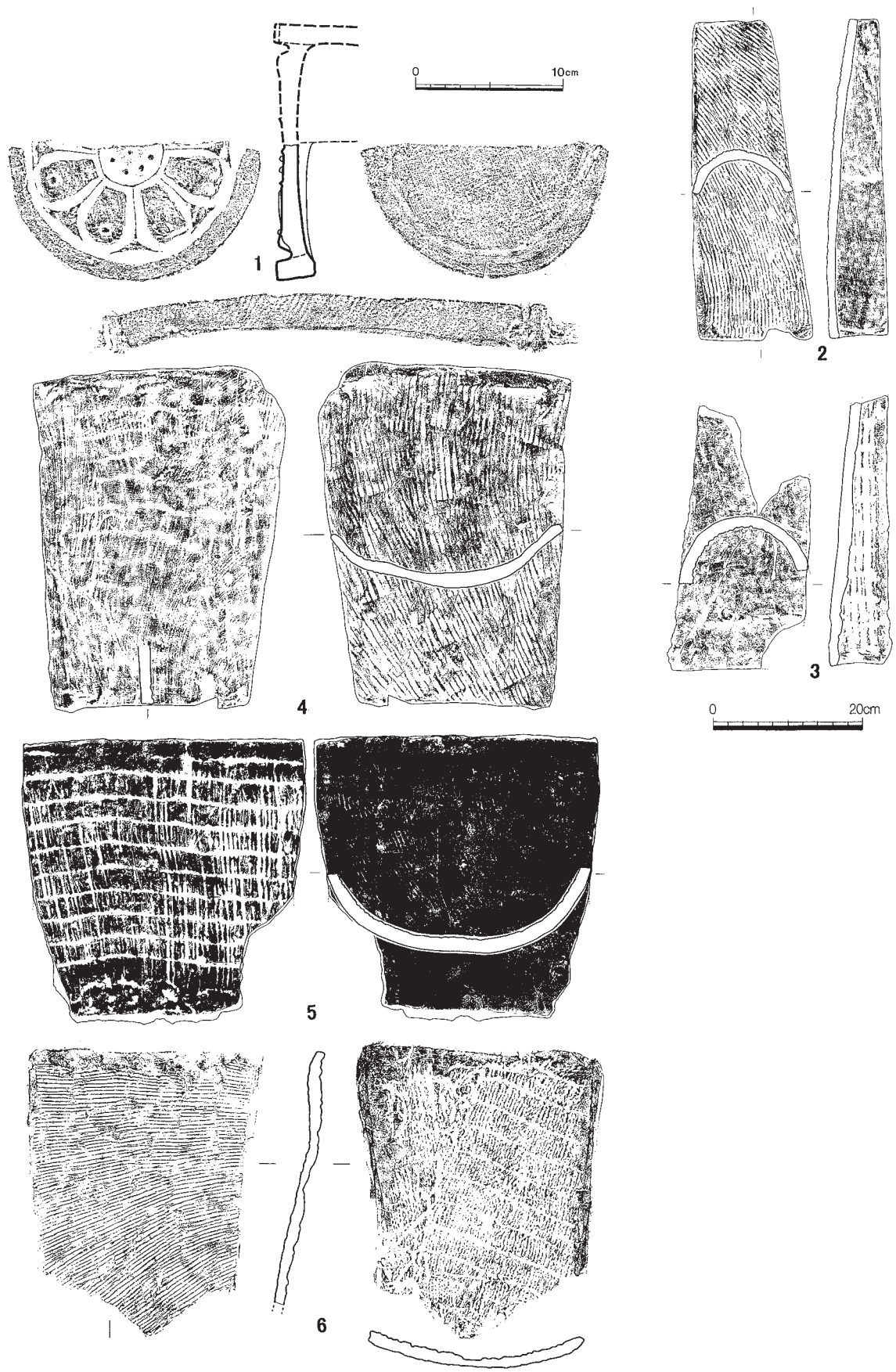


図9 百済の地方の瓦(1:1/4、2~6:1/8)

1:鶏足山城、2~5:月坪洞遺跡、6:光陽龍江里遺跡

これにはさらに布を併用したもの（図9-4）と、布を使用しないもの（図9-3・5）が、丸瓦・平瓦ともにある（亀田2002・2006）。

現時点では、このようなスダレ（簾）状模骨瓦は、百済と新羅の国境地域であった大田広域市の2遺跡でしか確認できていないため、ひとまず百済の地方の瓦と考えている。これらの年代に関してはよくわからないが、月坪洞遺跡では遺構の重複関係などから7世紀代のものと考えられており、鶏足山城の例は、共伴する可能性がある前述の瓦当裏面布目軒丸瓦が7世紀前半ころとみられることから、ひとまず7世紀前半ころにはこのようなスダレ（簾）状模骨瓦が作られていたと考えておきたい。

そして、このスダレ（簾）状模骨瓦の技法が日本へ伝えられ、竹状模骨瓦として近畿地方や北部九州などで展開した可能性を考えている。

次に、図9-6の凹面縄蓆文瓦である。この瓦については崔孟植がまとめており、都でも一部出土はするが、明らかに少なく、百済の国境地域の瓦であることを述べている（崔孟植1999a・2006）。いま述べたスダレ（簾）状模骨瓦と基本的には同様のものであるが、葦のような細い棒状のものではなく、縄を横紐で綴じたものを内型に巻いているようである。図示した例は、まさにその巻き付けて重なった部分が確認できるものである。縄の太さは2～7mmほどで、2～6cm間隔に綴じ紐（縄）で綴じている。平瓦が多いが、丸瓦もある。

なお、楽浪瓦や漢城時代の瓦に見られた凹面の縄目文は、綴じ紐が確認できず、この凹面縄蓆文瓦とは異なる。

この凹面縄蓆文瓦の時期もよくわからないが、前述の鶏足山城や月坪洞遺跡で出土しており、そのほかの出土遺跡も勘案して、6世紀後半まで遡る可能性を含めつつ、7世紀前半を中心とする年代を想定しておきたい。

凹面縄蓆文瓦の起源については、筆者は確認できていないが、高句麗の南部地域にあるようであり、その技術が百済・新羅の国境地域へ伝えられたらしい（沈光注ほか1999）。

E 新羅の瓦

新羅は、『三国史記』によればB.C.57年に建国され、668年に百済・高句麗を滅ぼして三国を統一したのち、935年まで続いた。都は移動せず、一貫して慶尚北道慶州市にあった。

新羅の瓦の始まりに関しては、よくわかっていない。新羅における仏教公認は法興王14年（527）で、その年に興輪寺が造り始められるが、崇仏廃仏をめぐる議論をへて、同22年（535）に工事が再開され、真興王5年（544）に完工したと考えられている。この興輪寺跡については本格的な発掘調査がなされていないため、創建時の瓦などはわかっていない。

一方、仏教公認以前にも新羅に仏教は伝えられていたことは『三国遺事』などに記されており、5世紀末の炤知王代に「内殿」に修行僧がいたことが見える（『三国遺事』巻1、射琴匣条）。ただし、このような施設に瓦が葺かれていたかどうかは不明で、当然その可能性も残るが、現

時点では、詳細は不明ながら、前述の興輪寺が最も古い瓦葺寺院であった可能性が高い。

記録にその名前があって所在が確認でき、かつ発掘調査がなされてその様子がわかる最古の寺院は、真興王 14 年 (553) に造営が始められた皇龍寺である。つまり、現時点で知られる確実な新羅瓦は 6 世紀中葉頃からである。ただ、6 世紀前半代には本格的な瓦葺建物が造営され始めたものと考えている。

そして、新羅瓦は寺院・宮殿・山城（一部古墳で再利用？）などで使用されるようになり、かなりの量が生産されるが、668 年の三国統一から 674 年の雁鴨池造営、679 年の四天王寺造営などを境に、文様・製作技法などが大きく変化する。

そのため、瓦自体の境界は必ずしも明確ではないが、以下、古新羅時代の瓦と統一新羅時代の瓦に分けて説明していきたい。

基礎的な資料としては、『朝鮮瓦塼図譜 III 百済・新羅 1』（井内古文化研究室編 1978）、『同 IV 新羅 2』（同 1977a）、『同 V 新羅 3』（同 1977b）、『新羅瓦塼』（国立慶州博物館 2000）などがあり、近年では報告書が刊行され、それらに詳細な図面や図版が掲載されている。

（i）古新羅時代の瓦

古新羅時代の瓦としては、軒丸瓦、軒平瓦、鴟尾、蓮華文鬼板、丸瓦、平瓦などがある。

軒丸瓦 軒丸瓦の瓦当文様は素弁蓮華文がほとんどであるが、複弁蓮華文もある。素弁蓮華文は、全くの素弁と有稜（有軸も含む）のものがある。

全くの素弁のものは、基本的に百済瓦の細分案にあてはめることができる。この中には、高句麗の蓮蕾文のようにボリュームがあり、弁端が尖ったものもある。百済系瓦、高句麗系瓦、そしてそれらを消化した古新羅瓦に分けられる。ただ、最近明らかになってきた中国南朝の瓦の影響を受けたものもありそうである（井内 2002、清水 2008）。

有稜のものは、闊弁と狭弁に大きく二分され、闊弁のものでは六弁が目立つ。中房は凸形が多く、蓮子は 1+〇が多い。外区外縁は素文がほとんどだが、珠文をめぐらすものもあるようである。

製作技法に関しては、尹根一の『統一新羅時代瓦当の製作技法に関する研究』（1978）が新羅瓦に関する初期のもので、その後は報告書などで分類案が示され、それぞれ説明される例が多いようである。

基本的には、半截した丸瓦を瓦当上部にのせるか、または瓦当裏面上部に接合するのであるが、泥条盤築技法によるもの、粘土円筒接着技法によるもの、瓦当嵌め込み技法によるもの、そして一見すると成形台一本造り技法のように、瓦当裏面から顎部にかけて一連の布目痕跡が見られるものがある。

泥条盤築技法のものは、勿川里窯跡群 C-1 地区出土の素弁八葉蓮華文軒丸瓦（図 10-4）である。弁端にやや大粒の珠文を飾るもので、百済瓦の影響下にこの文様が作られたのであれば、7 世紀代のものと推測される。ただ、共伴する新羅土器は、多少幅があるが、6 世紀後半

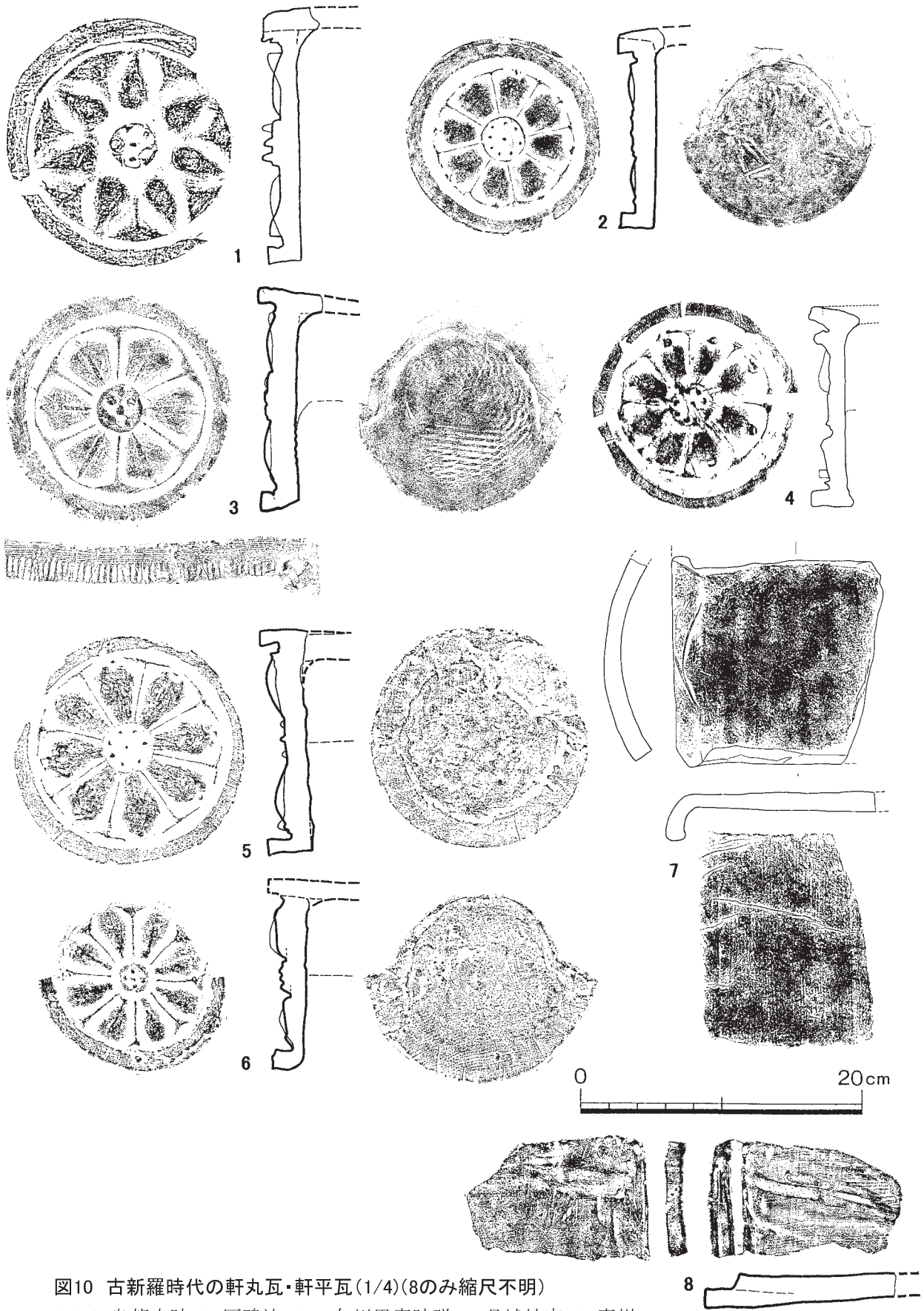


図10 古新羅時代の軒丸瓦・軒平瓦(1/4)(8のみ縮尺不明)

1・3・8: 皇龍寺跡、2: 雁鴨池、4・7: 勿川里窯跡群、5: 月城塚字、6: 慶州

～7世紀前半のものである。これに伴う丸瓦・平瓦は、基本的に凸面・凹面ともにナデである。この時期に、新羅においても泥条盤築技法の瓦が存在することがわかる。

粘土円筒接着技法のものは、月城塚宇出土の素弁八葉蓮華文軒丸瓦（図10-5）である。この瓦の瓦当裏面には、粘土円筒を半截したときに残る下半部の突帯が、わずかながら明瞭に残っており、この方法で作られたことがわかる。ただ、図示したものは、粘土円筒を接合する前に布で瓦当裏面が押さえられたらしく、布目痕跡が残っている。粘土円筒の切断はヘラでなされたようで、その痕跡が見られる。また、同じように粘土円筒を貼り付けたと考えられるものをもう1点確認しているが、それには布目が見られない。布を使うものと使わないものの両方があるようである。

瓦当嵌め込み技法によるものは、慶州の北約20kmの六通里窯跡で出土している素弁蓮華文軒丸瓦である。外区外縁がすべてはずれ、内区のみで、瓦当側面にところどころ布目痕跡を見ることができる。時期は6世紀後半頃と推測される。

瓦当裏面から顎部にかけて一連の布目痕跡が見られるもの（図10-6）は、出土地が慶州とされているだけで、詳細は不明である。ただ、比較的ボリュームのある素弁八葉蓮華文軒丸瓦は、古新羅時代の瓦として問題ないと思われる。このように瓦当裏面から顎面にかけて一連の布目が残る瓦は、これまで朝鮮半島の瓦では見たことがない。この瓦は上部が欠け、そこが石膏で復元されているため、詳細は不明だが、日本で見られる成形台一本造り技法ではなく、そのような型で作られた瓦当部に、半截された丸瓦を接合しているようである。いずれにせよ、きわめて珍しいものである。

これら4種の製作技法以外の、一般的な丸瓦を接合するものに関しては、基本的に百済瓦で述べた接合技法と同じ方法を使用している。樂浪郡や高句麗の瓦にはなく、百済瓦にのみ見られた、片柄状2回ケズリで丸瓦先端部を加工した丸瓦を接合する軒丸瓦は、雁鴨池例（図10-2）などのように、百済軒丸瓦と文様がきわめて類似しており、百済の工人が新羅に来て作ったか、指導したことがわかる。また、この文様・技法のものは、瓦当裏面を回転ナデしている例が多く、こうした点においても百済とのつながりがよくわかる。

この一般的な接合技法の軒丸瓦の文様は、先ほど述べたように、高句麗系、百済系、そしてそれらの影響下に成立した古新羅瓦に区分できると考えているが、初期の高句麗系瓦と考えられている皇龍寺跡例（図10-1）は、瓦当上部に丸瓦をかぶせるようにしており、平壤などで見られる高句麗瓦とは製作技法が異なるように思われる。高句麗にもこのような接合技法の軒丸瓦があるのであろうか。

また、古新羅瓦の特徴として、瓦当裏面を叩いているものが比較的多く見られる（図10-3）。その叩き文様は平行文が多いようだが、やや大きめの斜格子（菱形）文のものもある。

軒平瓦 古新羅時代の軒平瓦に関しては、これまであまりわかっていなかったが、近年の発掘調査などで多少確認されてきた。大きく2種に分けることができる。

一つは、百済の旧衙里寺跡・陵寺で出土しているような、瓦当部がやや厚くなり、その上部をヘラでカギの手状に削った有段軒平瓦である。皇龍寺跡（図 10-8）と多慶窯跡（国立慶州博物館 2000、p.190 図版 606）で出土している。多慶窯跡では古新羅時代から統一新羅時代初期の瓦が出土しており、これらの軒平瓦が確実に古新羅時代のものかはわからないが、その可能性はあると考えている。

皇龍寺跡例は、凹面に模骨の枠板と布目の痕跡を残している。多慶窯跡例は、凹面の布目は確認できるが、枠板痕跡は確認できない。凸面は基本的にナデ消されているが、一部、格子目の叩き文様が残っている。また、六通里窯跡に同様の段を有する平瓦があるが（国立慶州博物館 2000、p.186 図版 590-1）、段の部分が小さく、有段軒平瓦であるのか、平瓦で段を有するものなのか、よくわからない。

もう一つが、百済の扶蘇山城で出土しているものと類似した、土器口縁状軒平瓦である。ただ、扶蘇山城例は凹面に模骨と布目の痕跡が残るが、新羅の月城塚字（国立慶州博物館 2000、pp.32-33 図版 61-62）と勿川里 C-1-2-3 号窯跡（図 10-7）で出土しているものの凹面には模骨や布目の痕跡がなく、ナデである。なお、勿川里 C-1-2-3 号窯跡で共伴する土器（図 12-3～7）は 6 世紀後半～7 世紀前半のものである。

これら以外の、一般的な範型を使用した軒平瓦は、現時点では古新羅時代のものは確認されていない。また、高句麗太王陵や百済軍守里寺跡にみられるような、顎面に指押さえをしたものも確認されていない。

ただ、慶州から北西約 180km の忠清北道忠州塔坪里遺跡では、無文の顎部をもつ軒平瓦が出土している（金有植 2004）。また、その遺跡では、時期はよくわからないが、古式の唐草文軒平瓦も出土している（山崎 2007）。古新羅時代まで遡る可能性はあるように思われる。

以上のように、古新羅時代の軒平瓦については、百済と同じような有段軒平瓦、土器口縁状軒平瓦、そして都からかなり離れた地方に無文軒平瓦はあるが、現時点では範型を使用した軒平瓦は確認できていない。

（ii）統一新羅時代の瓦

軒丸瓦 統一新羅時代の軒丸瓦は、蓮華文を中心にして宝相華文、忍冬文などの植物系文様と鳥文、迦陵頻伽文などの動物系文様がある。文様構成としては、内区の内側と外側に蓮華文や宝相華文などをあわせ表現する、複合花文が多く見られる。また、軒丸瓦の外区に、密な珠文や唐草文をめぐらすものが見られ、外区外縁の珠文を線でつなぐものもある。

軒丸瓦の中房は、単に蓮子を 1 + ○ などのように配するもの以外に、その中を輻線や圏線で区切ったり、蓮子のかわりに蓮弁を配したりするものがある。輻線や圏線で区切るものは、高句麗瓦に類例がある。中房の周囲にしび薬をめぐらすものも多く見られるが、これは百済瓦博に類例がある。また、顎部に唐草文などの文様が飾られることがある。顎の幅は、基本的に瓦当部の厚さと同じであり、狭い。このような顎面に文様を飾る例は、百済の益山弥勒寺跡の緑釉垂

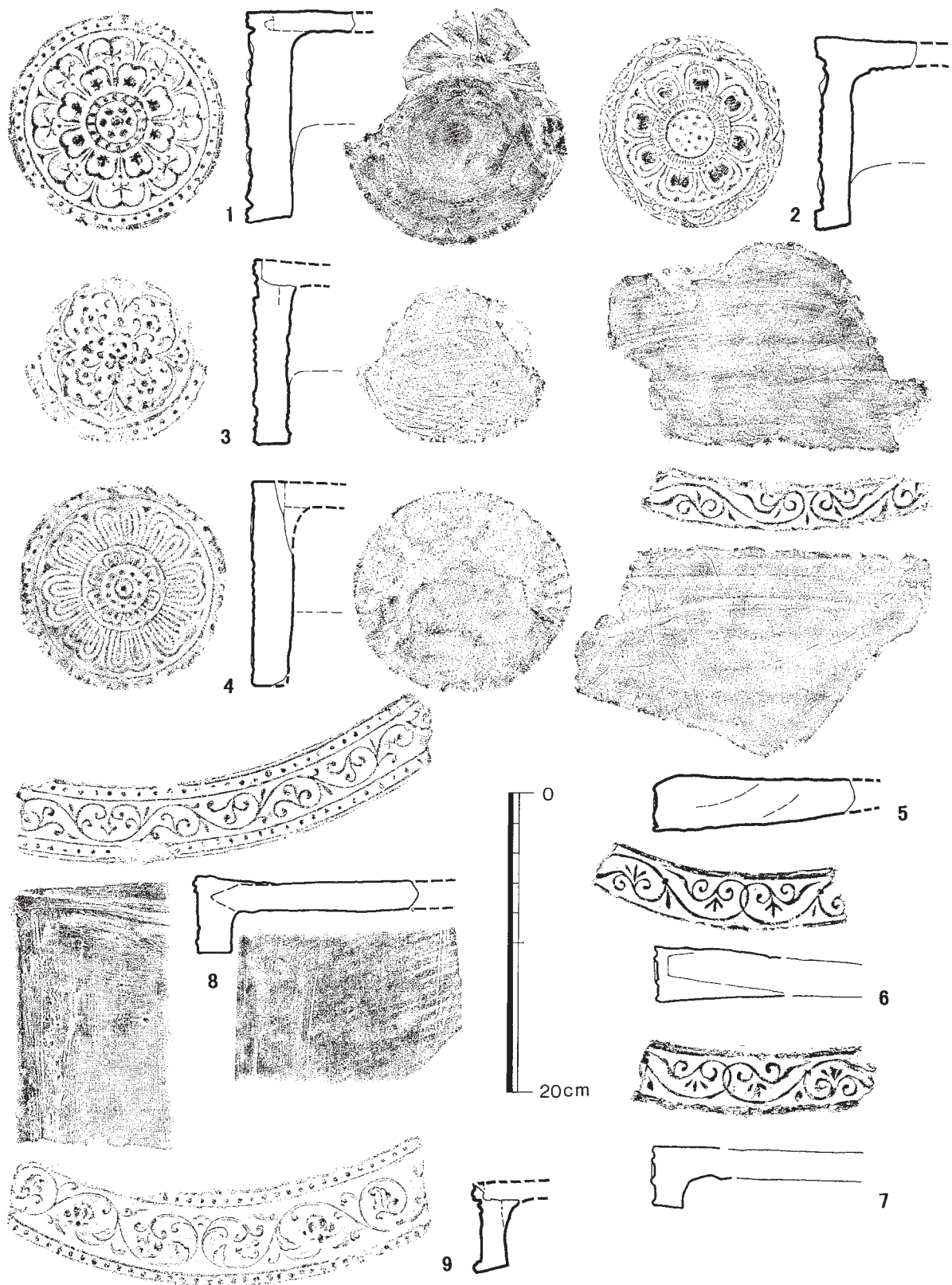


図11 統一新羅時代の軒丸瓦・軒平瓦(1/4)

1・3・5:雁鴨池、2:靈廟寺跡、4:鬼橋、6・7:新羅王京、8:皇龍寺跡、9:仁旺里寺跡

木先瓦に見られる。

製作技法に関しては、瓦当裏面上部に段や溝状のものを作り、そこに丸瓦を接合するのが基本である。このとき、丸瓦の先端部などにヘラなどによるキズを入れ、接合するものが比較的多い。また、統一新羅時代初期と考えられる軒丸瓦では、丸瓦先端部凸面をヘラ切りしたものもある。瓦当裏面には、古新羅時代と同様に叩き痕跡を残すものもあるが、手や布(?)などによるナデが多く、ハケ状工具によるものもある。

箆型は、箆キズの様子からみて、木製のものがあることは確実だが、土製の箆型も金丈里窯跡で出土している。これは、円形で瓦当側面にかぶらないタイプのものである。

軒平瓦 軒平瓦は、唐草文を中心として、並列花文、蓮華文、宝相華文などの植物系文様と飛鳥文、麒麟文、竜文などの動物系文様が見られる。唐草文は均整唐草文が多く、なかでも外から中央に向かうものが比較的多い。外区には密な珠文を飾るものが多い。

軒平瓦の顎部は、初期のものは無顎であるが、すぐに有顎のものが見られるようになり、無顎のものはなくなっていくようである。そして有顎のものは、顎部に唐草文などの文様を飾る例がある。顎の幅は2～3cmほどで、日本の軒平瓦に比べるとやや狭いようである。

製作技法に関しては、初期の無顎のものは、箆型にまず瓦当部の粘土を入れて、その上に平瓦を置き、その凹凸両面に補強粘土をつけて、無顎の軒平瓦を完成させている。このとき、接合する平瓦の先端部はそのままか、または接合用のヘラキズをつける。また、一部には、平瓦部を先に厚めに作り、その先端部にキズを入れて、瓦当裏面に接合するものもあるようである。そして、平瓦の側面まで包み込んだ、いわゆる包み込み技法のものがある。

有顎のものは、軒丸瓦と同じように、瓦当裏面上部に段や溝状のものを作り、そこに平瓦を接合するものと、箆型に瓦当部の粘土を入れて、上部に平瓦を置き、凸面側に顎部となる粘土を接合するものがあるようである。そのとき、平瓦の端部にヘラなどによるキズを入れ、接合するものが比較的多い。一方、瓦当裏面にキズをつけているものもある。また、接合する平瓦の先端部の凹面・凸面をヘラケズリしているものもある。そして、平瓦の側面まで包み込んだ包み込み技法のものがある。

箆型については、箆キズの様子から、木製のものがあることは確実と考えられるが、土製の箆型も金丈里窯跡で出土している。これは、瓦当側面にかぶらないタイプのものである。また、有顎のものには、前述のように唐草文などが型押しされた例があり、これらは専用の型が使用されたものと考えられる。

その他 丸瓦・平瓦については、古新羅時代か統一新羅時代かを区別できないものが多いため、一緒に説明する。

丸瓦は、行基式と玉縁式の両方ともある。玉縁式丸瓦は、凸面をナデ消すものが多い。丸瓦の分割は、両側縁とも凸面からのものと、凹面からのもの、そして一方を凸面から、他方を凹面から行ったものがある。破面はそのままのものが多いが、面取りするものも少なくない。

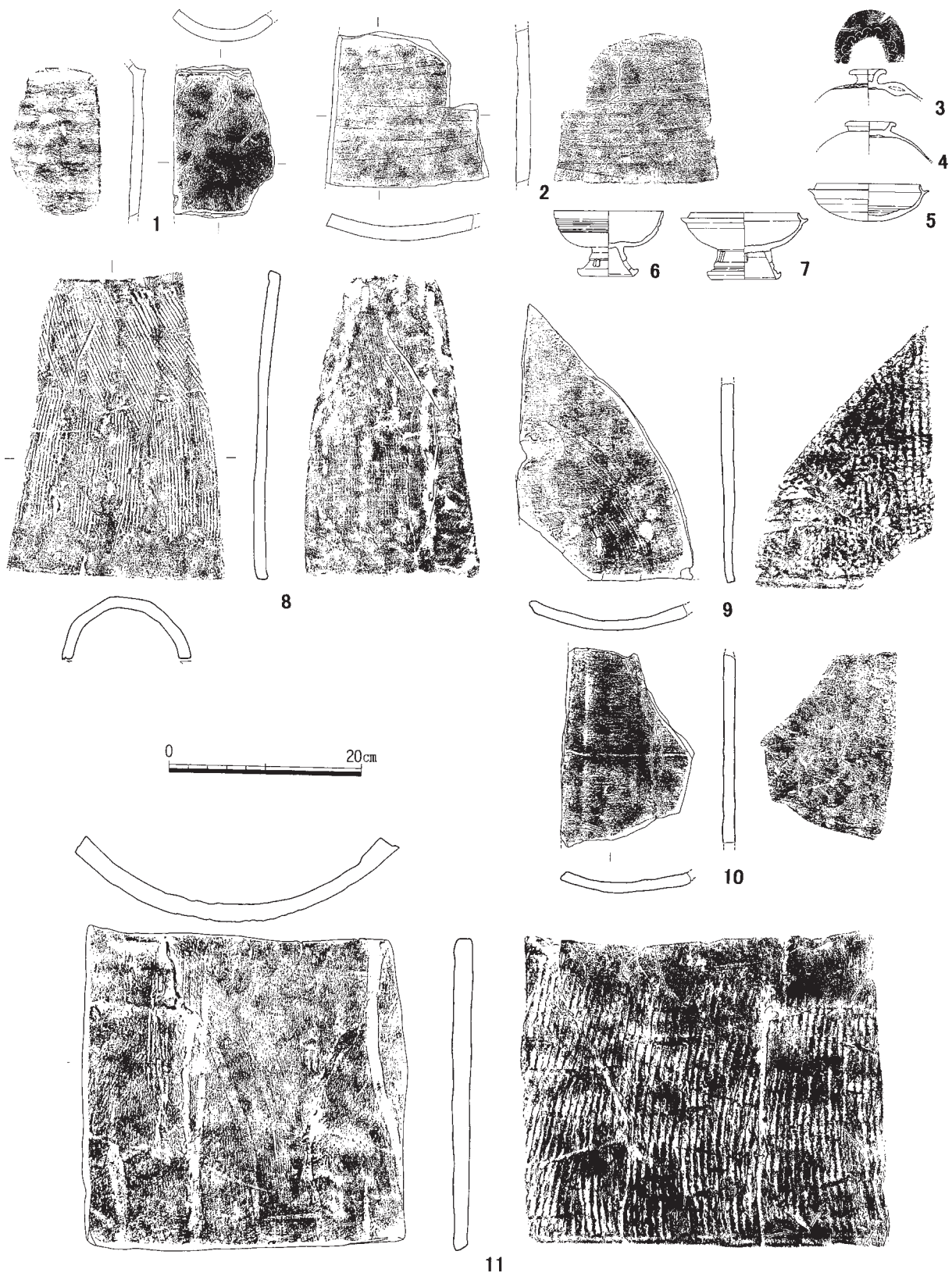


図12 古新羅時代(勿川里窯跡群)の丸瓦・平瓦・土器(1/6)
 1~7:C-1-2-3号窯跡灰原、8:A-VII-4竪穴遺構、9・10:C-1-3-25号竪穴遺構、
 11:C-1-3-35号竪穴遺構

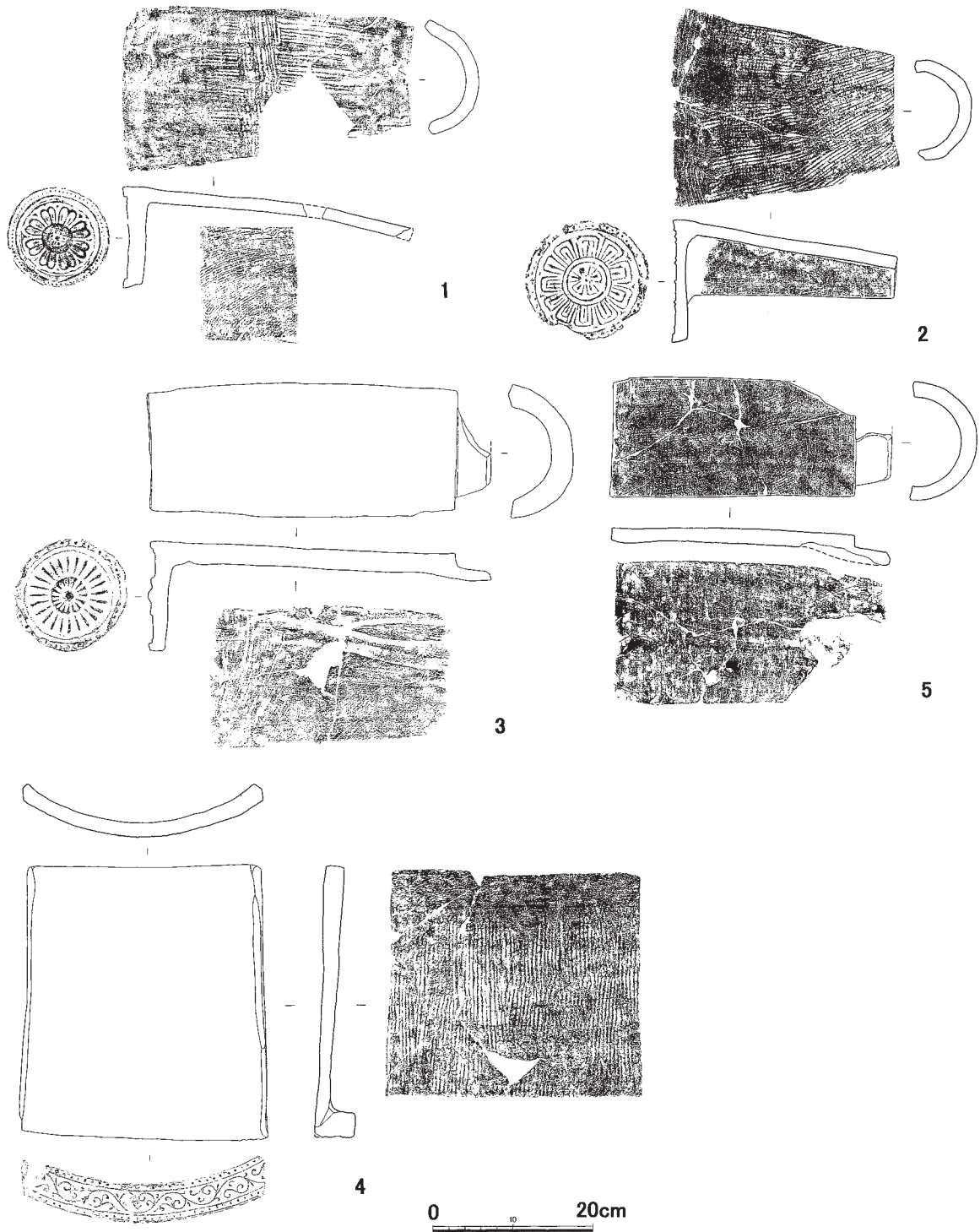


図13 統一新羅時代の軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦(1/8) 1~5:天官寺跡

丸瓦・平瓦ともに、古新羅時代には、泥条盤築技法によるものと、内型を使用したものがある。統一新羅時代に泥条盤築技法によるものがあるかどうかは確認できていない。

玉縁式丸瓦で内型を使用したものは、内型が玉縁部までおよばず、布目が筒部までで玉縁部はナデによるものと、内型が玉縁部までおよび、布目も筒部から玉縁部まで一連のものがある。両者の時間的な関係は、現時点ではよくわからない。

平瓦で内型を使って制作されたものは、凹面に模骨の枡板痕跡を残すものと、枡板痕跡を残さない円筒桶と呼ばれる内型を使用したものがある（崔兌先 1993）。枡板痕跡を残す平瓦は高句麗や百済で一般的に見られ、軒丸瓦のところでも述べたように、それらの系譜の瓦作りとともに入ってきたと考えられる。一方、枡板痕跡を残さない円筒桶を使用した平瓦は、高句麗や百済では知られていない。ほかのどこかから入ってきたのか、それとも新羅で独自に生み出されたのであろうか。現時点では、円筒桶を使用した平瓦は、少なくとも古新羅時代には存在するようである（趙成允 2000）。

丸瓦・平瓦ともに、泥条盤築技法によるもの以外は、粘土紐巻きつけは少なく、粘土板巻きつけが主流のようである。平瓦の分割は凹面側からなされ、破面はそのままのものが多い。一枚作りに関してはよくわからない。

叩き文様は平行文が多いようであるが、そのほかに縄目文、格子目文、特殊文がある。叩き板は、古新羅時代は短板と中板があり、長板は統一新羅時代に入ってから見られるようになるようである。

F おわりに

以上、朝鮮半島の瓦について、楽浪瓦、高句麗瓦、百済瓦、新羅瓦の順に概観してきた。

楽浪瓦は、当然のことながら中国との関わりが深く、中国瓦の詳細な検討が進めば、どの地域からの影響なのか、地元で変化したものなのかが明らかになると考えられる。

高句麗瓦は、初期のものは中国との関わりで出現したとみられるが、4世紀中葉ころからは独自の展開が推測される。ただ、細かくみると、途中で中国から影響が入っている可能性も考えられる。とくに、これまでほとんど明らかにされていない地方の瓦を検討すれば、より多様な高句麗瓦がわかってきそうである。

百済瓦は、漢城時代とそれ以降の瓦で大きく様相が異なる。ただ、どちらもまず、基本的には中国との関係が想定できそうである。その一方で、楽浪瓦や高句麗瓦との関係も当然推測され、単純ではない。また、熊津時代以降の瓦に関しても、初期の中国南朝からの影響から脱した百済瓦を作るとともに、新たな中国からの影響も受け入れ、展開したようである。

古新羅瓦は、高句麗や百済の瓦の影響下に始まり、展開したと考えられるが、その間に中国の影響もありそうである。統一新羅時代の瓦については、逆に、唐との関係が注目されている

が、百濟滅亡時の瓦工人の移動や高句麗からの影響もありそうである。

このように、朝鮮半島の瓦作りに関しては、中国との頻繁な交流とともに、朝鮮半島内部での影響、それぞれの内部における展開が絡み合っ、複雑に展開したものと推測される。

そして、こうした複雑なあり方が、日本にも入ってきている。百濟、高句麗、古新羅、統一新羅、さらにそれらの国境地域の地方からも、多様な瓦作りが、人の移動とともに日本へ伝えられたようである。

小稿をなすにあたり、以下の多くの方々や機関のお世話になった。末筆ながら記して、謝意を表したい。失礼ながら、敬称は省略させていただいた。また、ここに明示できなかった方も多い。御容赦を乞う次第である。

尹根一、金誠龜、金鍾萬、金有植、李鮮馥、李南圭、權五榮、申鍾國、朱岩石、賀雲翱、毛利光俊彦、山崎信二、佐川正敏、花谷浩、小澤毅、今井晃樹、林正憲、高田貫太、井内潔、早乙女雅博、谷豊信、白井克也、小田富士雄、武末純一、国立文化財研究所、国立扶余文化財研究所、国立慶州文化財研究所、国立慶州博物館、国立扶余博物館、韓神大学校博物館、東京国立博物館、井内古文化研究室

表1 朝鮮半島の丸瓦・平瓦の製作技法（作成途中）

		楽浪郡	高句麗	百濟		新羅	
				漢城時代	熊津・泗沘時代	古新羅時代	統一新羅時代
形態	行基式	なし?	○	なし?	○	○	○
	玉縁式	○	○	○	○	○	○
泥条盤築技法		○		○		○	
素材	粘土板		丸:○,平:○	丸:○,平:○	丸:○,平:○	丸:○,平:○	丸:○,平:○
	粘土紐		丸:○,平:○	丸:○,平:○	丸:?,平:?	丸:△,平:△	丸:△,平:△
分割方向	丸瓦	凸	凸	凸	凸	凸,凸+凹	凸,凸+凹,凹
	平瓦	凹	凸(凹)	凸,凹	凹	凹	凹
面取り	丸瓦	無:○	無:○,面:○	無:△,面:◎	無:○,面:◎	無:○,面:○	無:◎,面:○
	平瓦	無:○	無:○,面:○	無:△,面:◎	無:○,面:○	無:○,面:○	無:○,面:△
叩き文様		縄目◎	縄目○,格子○, 平行△,特殊	縄目△,格子◎, 平行△	縄目△,平行◎	平行,格子,特殊	格子,平行,特殊

*○:ある、◎:多い、△:少しある、?:不明

*凹、凸:凹面、凸面どちらの面から分割のためのヘラ切りを行っているかを示す。

凹+凸:一側面を凹、もう一側面を凸面から切ったもの。

参考文献

- 井内 功 1977 「楽浪郡時代の造瓦に関する覚書」『井内古文化研究室報』18
- 井内 潔 1976 「楽浪郡時代の標識的造瓦技法」『井内古文化研究室報』16
- 井内 潔 2002 「中国南朝屋瓦の変遷」『藤澤一夫先生卒寿記念論文集』
- 井内古文化研究室編 1976a 『朝鮮瓦埴図譜 I 楽浪・帯方』
- 井内古文化研究室編 1976b 『朝鮮瓦埴図譜 II 高句麗』
- 井内古文化研究室編 1977a 『朝鮮瓦埴図譜 IV 新羅2』
- 井内古文化研究室編 1977b 『朝鮮瓦埴図譜 V 新羅3』
- 井内古文化研究室編 1978 『朝鮮瓦埴図譜 III 百済・新羅1』
- 井内古文化研究室編 1981 『朝鮮瓦埴図譜 VII 総説』
- 井内古文化研究室編 1993 『朝鮮瓦埴百粹』
- 尹根一 1978 『統一新羅時代瓦当の製作技法に関する研究』檀国大学大学院硕士学位請求論文（韓国）
- 大脇 潔 1991 「研究ノート丸瓦の製作技術」『研究論集』IX、奈良国立文化財研究所
- 大脇 潔 2005 「老北京胡同薈紀行—東アジアにおける軒平瓦の変遷—」『古代摂河泉寺院論叢集』2、摂河泉古代寺院研究会
- 賀雲翱 2005 『六朝瓦当与六朝都城』文物出版社（中国）
- 亀田修一 1981 「百済古瓦考」『百済研究』12、忠南大学校百済研究所（韓国）
- 亀田修一 1984 「百済漢城時代の瓦に関する覚書」『尹武炳博士回甲記念論叢』（韓国）
- 亀田修一 1996 「韓半島南部地域の瓦当裏面布目軒丸瓦」『碩晤尹容鎮教授停年退任記念論叢』（韓国）
- 亀田修一 2002 「韓半島から日本への瓦の伝播—竹状模骨瓦について—」『清溪史学』16・17 合輯（『悠山姜仁求教授停年記念東北亜古文化論叢』（韓国）
- 亀田修一 2006 『日韓古代瓦の研究』吉川弘文館
- 韓国文化財保護財団 1999 『慶州競馬場予定敷地 C— I 地区発掘調査報告書』（韓国）
- 韓神大学校博物館 2003・2004・2005 『風納土城』III、IV、VI、VII（韓国）
- 吉林市文物考古研究所・集安市博物館 2004 『集安高句麗王陵』文物出版社（中国）
- 金元龍・任孝宰・林永珍 1987 『夢村土城東北地区発掘報告』ソウル大学校博物館（韓国）
- 金元龍・任孝宰・朴淳發 1988 『夢村土城東南地区発掘報告』ソウル大学校博物館（韓国）
- 金元龍・任孝宰・朴淳發・崔鍾澤 1989 『夢村土城西南地区発掘報告』ソウル大学校博物館（韓国）
- 金誠亀 1992 「百済の瓦埴」『百済の彫刻と美術』公州大学博物館（韓国）
- 金誠亀・申光燮ほか 1988 『扶余亭岩里窰跡（I）』国立扶余博物館（韓国）
- 金誠亀 1990 「扶余の百済窰跡と出土遺物に対して」『百済研究』21、忠南大学校百済研究所（亀田修一訳 1991『古文化談叢』26）
- 金有植（田福涼訳） 2004 「三国時代軒平瓦の発生に関する小考」『鹿園雑集』6、奈良国立博物館
- 慶熙大学校中央博物館 2005 『高句麗瓦当』（韓国）
- 權五榮・韓志仙 2008 「ペールを脱ぐ百済王城の文化相—最近の風納土城慶堂地区発掘成果—」『季刊韓国の考古学』9、周留城出版社（韓国）
- 国立慶州博物館 2000 『新羅瓦埴』（韓国）
- 国立慶州文化財研究所 2004a 『慶州菘谷洞・勿川里遺跡—慶州競馬場予定地 A 地区—』（韓国）
- 国立慶州文化財研究所 2004b 『慶州天官寺址』（韓国）
- 国立慶州文化財研究所 2006 『月城垓字発掘調査報告書II』（韓国）
- 国立公州博物館 1999 『大田月坪洞遺跡』（韓国）
- 国立扶余博物館 2000 『陵寺』（韓国）
- 国立文化財研究所 2001・2002・2005 『風納土城』I、II、V、VIII（韓国）

- 崔允先 1993 『平瓦製作法の変遷に対する研究』慶北大学校文学碩士学位論文（韓国）
- 崔孟植 1999a 「百濟平瓦の一類型に関する小考—瓦内面繩席文に関して—」『史学研究』58・59 合集号（韓国）
- 崔孟植 1999b 『百濟平瓦の新研究』学研文化社（韓国）
- 崔孟植 2004 「三国軒平瓦の始原に関する小考」『文化史学』21、韓国文化史学会（韓国）
- 崔孟植 2006 『三国時代平瓦研究』周留城出版社（韓国）
- （財）百濟文化開發研究院 1983 『百濟瓦磚図録』（韓国）
- 清水昭博 2003 「百濟『大通寺式』軒丸瓦の成立と展開」『百濟研究』38（韓国）（清水昭博 2004 『日本考古学』17）
- 清水昭博 2008 「古新羅瓦の遡源に関する検討—有軸素弁蓮華文軒丸瓦を中心として—」菅谷文則編『王権と武器と信仰』同成社
- 順天大学校博物館 2002 『光陽龍江里遺跡 I』（韓国）
- 順天大学校博物館 2005 『光陽馬老山城 I』（韓国）
- 申光燮・金鐘萬 1992 『扶余亭岩里窯跡（II）』国立扶余博物館（韓国）
- 徐五善 1985 『韓国平瓦文様の時代的変遷に関する研究』忠南大学校碩士学位請求論文（韓国）
- 薛貞蓮 1976 「百濟蓮華文瓦当編年に関する研究」『月刊文化財』1976—6（韓国）（関口広次訳 1978 『古文化談叢』4）
- 大田産業大学郷土文化研究所 1994 『鷄足山城西門址調査概報』（韓国）
- 谷 豊信 1984 『西晋以前の中国の造瓦技法について』『考古学雑誌』69—3
- 谷 豊信 1989 「四、五世紀の高句麗の瓦に関する若干の考察—墳墓発見の瓦を中心として—」『東洋文化研究所紀要』108
- 谷 豊信 1990 「平壤土城里発見の古式の高句麗瓦当について」『東洋文化研究所紀要』112
- 忠南大学校百濟研究所編 1972 『百濟瓦磚図譜』（韓国）（同訳 1976 『百濟の古瓦』学生社）
- 忠南大学校百濟研究所 2005 『大田鷄足山城』（韓国）
- 趙成允 2000 『慶州出土新羅平瓦の編年試案』慶州大学校碩士学位論文（韓国）
- 朝鮮総督府 1925 『樂浪郡時代ノ遺跡』図版上下 2 冊
- 朝鮮総督府 1927 『樂浪郡時代の遺跡』本文
- 朝鮮総督府 1929 『高句麗時代之遺跡』図版上册
- 沈光注・キムジュホン・ジョンナリ 1999 『漣川瓠蘆古壘精密地表調査報告書』韓国土地博物館（韓国）
- 程永建 2007 『洛陽出土瓦当』科学出版社（中国）
- 東京大学文学部考古学研究室 1965 『樂浪郡治跡』
- 東国大学校慶州キャンパス博物館 2002 『慶州孫谷洞・勿川里遺跡（III）—競馬場予定敷地（史跡 430 号）B 地区—』（韓国）
- 戸田有二 2001 「百濟鎧瓦製作技法について（I）」—特に漢城時代と熊津時代を中心として—『百濟文化』30（韓国）
- 戸田有二 2004 「百濟鎧瓦製作技法について（II）」—熊津・泗水時代における公山城技法・西穴寺技法・千房技法の鎧瓦—『百濟研究』40（韓国）
- 奈良国立文化財研究所 1998 『北魏洛陽永寧寺』
- 白種伍 2006 『高句麗瓦の成立と王権』周留城出版社（韓国）
- 朴容埴 1976 「百濟瓦当の体系的分類—軒丸瓦を中心として—」『百濟文化』9、公州師範大学百濟文化研究所（韓国）（泊勝美訳 1978、田村圓澄・黄壽永編『百濟文化と飛鳥文化』吉川弘文館）
- 菱田哲郎 1986 「畿内の初期瓦生産と工人の動向」『史林』69—3
- 扶余文化財研究所 1995 『扶蘇山城発掘調査中間報告』（韓国）

夢村土城発掘調査団 1985 『夢村土城発掘調査報告書』(韓国)

毛利光俊彦 1990 「軒丸瓦の製作技術に関する一考察—范型と枷型—」『畿内と東国の瓦』京都国立博物館

毛利光俊彦 1991 「布目押圧技法の展開」『平城宮発掘調査報告XIII』奈良国立文化財研究所

山崎信二 2007 「7世紀後半の瓦からみた朝鮮三国と日本の関係」『日韓文化財論集I』奈良文化財研究所

林至徳・耿鉄華 1985 「集安出土高句麗瓦当及其年代」『考古』1985-7(中国)(緒方泉訳 1988「集安出土の高句麗瓦当とその年代」『古代文化』40-3)

挿図出典 (いずれも一部改変引用)

図1-1・4、図3-4：井内古文化研究室 1993、図2-1：林・耿 1985、図2-2、図3-1～3：吉林市・集安市 2004、図4-3・5：權五榮・韓志仙 2008、図5-4・6・10：国立文化財研究所 2001、図7-3：扶余文化財研究所 1995、図7-4、図11-6・7：山崎 2007、図8-1～5：国立扶余博物館 2000、図9-2～5：国立公州博物館 1999、図9-6：順天大学校博物館 2002、図10-4・7、図12-1～7、9～11：韓国文化財保護財団 1999、図10-8：崔孟植 2006、図12-8：国立慶州文化財研究所 2004a、図13：国立慶州文化財研究所 2004b

以下の資料は古く採拓・実測させていただいた資料であり、今回初めて提示させていただいた。末筆ながら記して謝意を表したい。

図1-2：井内古文化研究室所蔵。資料調査にあたっては井内潔氏にお世話になった。

図11-1～3・4：東京国立博物館所蔵。資料調査にあたっては早乙女雅博氏、谷豊信氏、白井克也氏にお世話になった。

8 総合討議

山崎信二 討議に先立ち、最初に、191 頁以下に掲載されている瓦について補足説明をいたします。というのは、これらの拓本や実測図は、すべて日本人の研究者が作成したものであるため、中国の研究者の文章と図面とが十分噛み合っていない、あるいは十分表現されていない部分があります。つまり、日本の研究者が観察した結果が、文章の中にまったく表現されていないこともあるわけです。ですから、まずそれを補うために、中国で作成した瓦の図面について、これから説明したいと思えます。

ただ、私も1年目の大同（平城）とか鄴城の瓦は見えておりませんし、2年目の南京、揚州の瓦は見ましたけれども、3年目は洛陽の瓦だけで、西安等の瓦は見えておりません。したがって、全体とすれば、調査したうちの6割程度しか、私も実物を見ていないのですが、見ていないものについては、おのおのの研究者が写真とか実測図、調書をとっておりますので、それをもとに説明したいと思えます。

なお、「石田メモによれば…」という表現が出てきますが、これは、写真などから判断して、「石田メモが正しいと私は思う」という意味で使っております。ですから、決して批判的に言っているわけではなく、基本的にそう認めてよいということです。時間の関係でちょっと早口になりますが、全体の流れだけ理解していただければと思います。

それから、今回は、文字瓦・ヘラ書き瓦・刻印瓦については触れないということをあらかじめお断りしておきます。

まず、北魏の大同（平城）の瓦です。203 頁をご覧ください。5世紀の瓦ですね。1番は、上下とも指の圧痕が見られます。指紋が明瞭に残っています。凹面はタテミガキです。2番は爪形のような圧痕があり、凹面はタテミガキです。3番は、端面下端の断面形態から見て、指で捻っているのではなく、工具の押圧によるものです。凹面はタテミガキです。204 頁をご覧ください。1・2番瓦は下端に爪形のような圧痕があります。3番は獣面文の軒丸瓦です。205 頁の1番は、林メモによると、瓦当面はたんに爪形を施すだけで、それ以外に特別なことはしていないと書いています。

3番は、林メモでは、まず広端面に1条の沈線を施し、次に端面下端を押圧する。そのため、押圧によって盛り上がった粘土が何かで押しつぶされて、半円形になったとしています。4・5番はヘラ書きの文字が平瓦凸面にあります。206 頁をご覧ください。2番は六弁の蓮華文軒丸瓦で、中房蓮子は1+5です。外区外縁に珠文ふうのものがありません。3番は出土地が「方山」とのみあります。ミガキ・ナデをおこなっていますが、粘土紐と杵板痕が観察できます。朱岩石さんの論文では、24 頁の上段の1番に写真が載っているものがそうです。207 頁のものは出土地が不明なので、省略します。

次は、北魏洛陽城の瓦であります。222 頁をご覧ください。1番の獣面文の軒丸瓦の瓦当裏面には、キザミが見えます。3番は平瓦端面中央にヘラで沈線を入れて、下端を指で押して、最後に瓦当全体にヨコナデをおこなっています。223 頁を

ご覧ください。2番の丸瓦には凹面に粘土紐の痕跡があり、布目は玉縁部凹面にまで続いています。224頁の丸瓦も同様です。225頁は軒丸瓦・軒平瓦であります。1・3・4番の軒丸瓦は、瓦当裏面にキザミを入れています。5番の軒平瓦の作り方は、次のようになります。第1段階は、中央部を切り込んで二重弧を作り出します。第2段階は、上の段の中央を工具で爪形に突き、さらに下の段の中央を工具で爪形に突きます。第3段階は、上の段の下側を工具で擬波状にします。また、下の段を工具で擬波状にします。第4段階は、瓦当面にミガキを入れて仕上げます。これも、朱さんの論文の25頁中段に写真があります。次に226頁です。平瓦部凹面のみミガキがかかり、瓦当面にはミガキがありません。227頁の1番では中央部に切り込み、ちょっと見にくいですが、切り込みがあります。それから、指による押し付け。これは指紋が残っています。そして3番は、瓦当部を磨いて波状文のはみ出し部分の切り取りをおこないます。

次に、鄴城の瓦であります。238頁をご覧ください。1番は波状文の平瓦で、凹面の波状文寄りに格子状の当て具痕があります。凸面に平行叩き痕が見えます。2・3番については、調書および実測図がありません。5番の瓦当裏面には、丸瓦部端面のキザミの転写が見えます。朱さんの論文の26頁上段3に瓦当裏面の写真が載ります。6・7番は瓦当裏面にキザミがあります。9番は、丸瓦部端面と瓦当裏面の両方にキザミがあるようです。239頁をご覧ください。1番は、丸瓦部先端に施したキザミの転写が見えます。格子状の凸線となっています。これは、朱さんの論文の26頁上段の2に写真があります。4番は、平瓦部凹面に布目を完全に残しています。粘土紐と梓板の痕跡

が見えます。瓦当は、工具によるキザミで施文しています。朱さんの論文の25頁の下段の右に写真があります。5番の波状文は、指による押圧で作られています。朱さんの論文の25頁中段の4に写真があります。240頁をご覧ください。5番には丸瓦部先端のキザミの転写があります。6番は、瓦当裏面のキザミと丸瓦部先端のキザミの両方の転写があります。241頁では、1～4・6・8番に瓦当裏面のキザミがあります。5番には、丸瓦部端面のキザミの転写があります。9・10番は、指による押圧で波状文を作っています。242頁は、1～5番に瓦当裏面のキザミがあります。4・5番に丸瓦部端面のキザミの転写があります。

次が、南京の瓦です。これは、大きく頁が戻りまして、賀雲朝先生の論文です。56頁で瓦当の文様の弁中央に稜線があるものは、1・5・7番。それ以外の2～4・6・8番は、弁中央に稜線はありません。57頁では、1番にも玉縁部凹面に布目はありません。2番は粘土板の合わせ目があります。3番の平瓦には、凹面に梓板痕と糸切り痕が残ります。58頁では、1番の外区に范型による波状文が残されています。瓦当裏面、丸瓦接合部に指押さえの痕があります。指押さえの痕というのは、丸瓦接合時にその部分を指で押し付けているものです。58頁の1番の瓦当裏面には、同心円状のナデがあります。2～5番は弁中央に稜線があるものです。59頁では1～4番に弁中央の稜線があります。それらの瓦当裏面は、周縁に沿ってナデが非常に強く残されています。一方、5・6番は弁中央の稜線がなくなり、瓦当裏面には渦巻き状の回転ナデが残っています。また、60頁では、1・2番は弁中央に稜線がなく、瓦当裏面に渦巻き状の回転ナデが残っています。次に、61頁では、5番の平瓦は梓板痕と綴じ紐痕があつて、糸切り

痕は見えません。はっきりとはわかりませんが、粘土紐ではないかと思えます。6番は弁中央に稜線があります。玉縁部凹面はヨコナデで、布目はありません。62頁では、3番は弁中央に稜線があります。4番は弁中央に稜線があって、瓦当下半には周縁に沿うナデがあります。63頁は、1～4番とも弁中央に稜線があり、1・3番は瓦当裏面を見ますと、丸瓦部先端にも瓦当裏面にも、接合のためのキザミは見られません。

まとめとしては、南京大学所蔵例では、弁中央に稜線をもつ軒丸瓦が圧倒的に多いということ。また、軒丸瓦では瓦当裏面にキザミ、または丸瓦部先端にキザミをもつものは1例もないということです。それから、瓦当の外区に珠文をもつ軒丸瓦では、瓦当裏面が渦巻き状の回転ナデとなっています。

次に、揚州の瓦に移ります。揚州では、古いグループの軒丸瓦と新しいグループの軒丸瓦で、特徴がはっきり二つに分かれます。

260頁の1番、262頁の1～5番、263頁の1～3・5番、264頁の1・2番というのは、古いグループの軒丸瓦です。この古いグループの軒丸瓦の特徴は、筥の文様がシャープなことでありまして、私は木製の筥型を用いていると考えます。それから2番目の特徴として、瓦当裏面は渦巻き状の回転ナデとなっています。3番目の特徴として、瓦当裏面の丸瓦接合部に、いずれも指押さえの痕が残っています。4番目の特徴として、瓦当裏面および丸瓦部先端にキザミをまったく施していません。

一方、新しいグループの軒丸瓦は、260頁の2～4番、261頁の1・2番、263頁の4番です。その特徴は、まず見た感じでも筥の文様があまい。それから、先ほど問題になっていましたが、外縁

も広くなります。筥の文様があまいというのは、私はおそらく陶製の筥型に変わっていくからだと考えています。また、瓦当面中央が非常に高く盛り上がった断面形となります。ですから、断面を見ていただくと、まったく違うことにお気づきになるとと思います。3番目の特徴は、瓦当裏面にキザミ、すなわちカキヤブリをもつということで、260頁の2・4番にあります。つまり、この段階になって瓦当裏面にキザミをもつようになるわけです。そして、瓦当裏面に指を突っ込むものが、260頁の2・3番、それから、261頁の2番にあります。

つまり、揚州の瓦は、7世紀代には南京、南朝の影響下にあつて、8世紀以降のある時点から、唐および北朝の流れ、つまり中国全土的な流れと言ってもいいと思いますが、その影響下に入る。7世紀以降の揚州の瓦は、そういう状況にあつたようであります。

なお、265頁の丸瓦は、玉縁部凹面に布目がなく、ヨコナデであります。266頁と267頁の平瓦は、凹面の梓板痕が明瞭で、糸切り痕も観察できます。268・269頁については省略します。

丸・平瓦については、基本的に、揚州の研究所で出していただいたものを見ただけです。新しいグループの軒丸瓦にともなう丸・平瓦がどのようなものであるのかということは、実はまだわかりません。

つまり、それ以降の軒丸瓦と丸・平瓦が選別できないので、おそらく出していただけなかったんだと思うんですが、そういう意味で、どのように丸・平瓦が変わったかということは、はっきりしないというのが正確なところだと思います。

次に、唐長安城、西安の瓦であります。284頁の1～4番の軒丸瓦は、瓦当裏面にキザミがあり

ます。285 頁の2番の平瓦は、凹面に桢板痕があります。また、四隅に分割突起があります。286 頁の1番の軒丸瓦は、石田メモによれば、丸瓦を接合するために瓦当裏面にキザミを入れています。2番の凹面はヨコ方向のナデ、3番の凹面はミガキです。287 頁の丸瓦は、凹面に粘土紐接合痕、玉縁部凹面には布目が残ります。288 頁の軒丸瓦では、1～4番は瓦当裏面にキザミを入れていることが明らかです。1・2番は丸瓦部先端のキザミが残り、2番はまず間違いなく丸瓦部先端にもキザミがあります。289 頁では、1番の軒丸瓦はおそらく陶製の范型だと思いますが、瓦当裏面のキザミと丸瓦部端面のキザミの転写があります。2・3番の軒平瓦の波状文は指押さえによるもので、平瓦部凹面はヨコ方向のミガキで仕上げられています。290～292 頁は省略します。293 頁の軒丸瓦では、1～3番は瓦当裏面にキザミがあります。3番は、丸瓦部先端にもキザミがあるようです。294・295 頁の九成宮の軒平瓦では、平瓦部凸面に縄叩き痕を残すものがあります。296～299 頁は省略します。

最後に、隋唐洛陽城の瓦であります。317 頁の軒丸瓦をご覧ください。丸瓦部先端のキザミは1・2・6番にあつて、瓦当裏面のキザミは2・5・6番にあります。318 頁の軒丸瓦では、丸瓦部先端のキザミが1・3番にあつて、瓦当裏面のキザミが2・3・5番にあります。321 頁の1番の平瓦部は、凹面の桢板痕の幅が2.5 cmで、これ以外はつるんとしていて明瞭ではありません。分割突起は四隅に残っています。322 頁の3番の軒平瓦は、まず重弧を作り、次に中央を革状のものではさんで上へ押さえる。そして、下端を革状のものでつかんで上方へ押さえています。323 頁の2番は軒丸瓦の丸瓦部でありまして、丸瓦部の端

面にキザミを入れています。324 頁の平瓦は、凹面に桢板痕が明瞭に残っています。そして、四隅に分割突起があります。325 頁の軒丸瓦では、瓦当裏面にキザミのあるものは、1～4番であります。326 頁の軒丸瓦では、2番に丸瓦部先端に歯車形の切り込みを入れた痕が残ります。3番には瓦当裏面にキザミがあります。

昨日、私は、中国の北朝・南朝の瓦を区別するとき、平瓦における5種の型を識別しなければならないということを申しました。以上の説明をつうじて、私が言いたかったのは、それ以外に、丸瓦接合部のキザミ、とりわけ瓦当裏面のキザミを注意して見る必要があるということです。もちろん、瓦当文様の類似性を考慮することも必要ですが、ということで、私からの図面の補足説明は終わらせていただきます。では、佐川さん、討論のほうをよろしくお願いします。

司会 (佐川正敏) 討論の前半の司会をいたします佐川でございます。

司会 (亀田修一) 後半は亀田が担当させていただきます。

司会 (佐川) 時間が限られておりますので、前半の中国・朝鮮半島の関係という部分につきましては、2時半ぐらいには終わるということにしたいと思います。

昨日、朱岩石さんから、鄴城を中心とするお話がありました。鄴城は、五胡十六国の段階で三つの国の首都になっているわけですが、そこで、漢城時代、漢城期の百済の風納土城との関連を想起させる樹木文、あるいは、私の文章の中では揺銭樹文という表現を使いましたが、こういった瓦が相互に出て、何らかの関連性を想起させるわけで

あります。まず、このあたりから順々に、中国の南と北のいろいろな差や特色などの問題を絡めて、韓国とも比較しながら進めていく、というかたちをとりたいと思います。

それでは、最初に朱さん、この鄴城の五胡十六国時代の段階の瓦なんですけど、この作り方というのは、基本的にはいわゆる「接合式」、瓦当の裏側に半分に分けた丸瓦を付けるという、そういう作り方であるということによろしいでしょうか。

朱岩石 そうですね。五胡十六国時代の都でもある鄴城では、いろいろな遺物が出ますが、とくに瓦は相当の出土量がありますが、作り方を確認できる瓦というのはたいへん少ないです。丸瓦との接合方法についても、実例がないわけではありませんが、南北朝時代のものと同じかどうか、はっきり言えません。瓦当と丸瓦の接合技法という点では、やはり後漢時代と近いかもしれないです。よろしいでしょうか。

司会（佐川） 今日、午前中、亀田さんから風納土城の瓦についてお話があったわけですが、いま映しているこの瓦の技術的な問題がかなり重要になってくると思います。今のところ、中国の鄴城では、たとえば一本作りだとか、あるいは接合式だとかいうように明確に断定できないんですけども、この点については何かありますかでしょうか。

朱 丸瓦の部分が残っていませんが、この瓦は、破片から判断して、一本作りだと思います。

司会（佐川） 実は、この瓦を観察した際に、私の記憶では、朱さんが遼寧省の朝陽で何か類似した文様の瓦をご覧になったようなことを伺ったのですが、それについて、文様あるいは作り方の点でも、何か特色に関するご記憶がありますでしょうか。

朱 そうですね。遼寧省の朝陽には、もともと五

胡十六国時代の前燕の都城、龍城という都城がありまして、5年ぐらい前から緊急発掘調査がおこなわれています。瓦は、鄴城のものとはちょっと違うかもしれませんが、韓国から出土した樹木文と似ているかなと思います。また、資料は未発表ですけれども、中国の北方、東北地方、それから朝鮮半島という範囲が、瓦の製造技術という面では関連性があると考えております。

司会（佐川） この鄴城よりもさらに北の遼寧省一帯でも、同じような文様をもった瓦の製作技法は、今後、注目していかなければならない部分だと思います。そこで亀田さん、午前中のお話で、風納土城の瓦に製作技法の上での多様性があるということでしたが、そのあたりについて簡単にまとめていただけますか。

亀田 今、映っています下の瓦、文化財研究所に置いてあるものですが、これ以外のものは、先ほど図面も出ていましたけれども、瓦当裏面の、ちょっと狭めたぐらいのところで突帯を持ったりすることがあります。そういう点から、基本的に粘土紐を巻き上げて、後で半截するグループだと思います。

それに対して、私の資料でいきますと、143頁図4の3番と5番はよくわからなかったのですが、1・2・4・6番、これらは基本的にちょっと瓦当径が小さく、粘土紐を巻き上げた直径が大体10cmぐらい。実際に出土している丸瓦と直径がほぼ同じになりますので、おそらく組み合うんだろうということがわかりますけれども、その中で基本的に粘土紐を巻き上げているものと、布目を持つものも当然あったわけです。5番の獣面文のものに、先ほどご覧いただいたように、接合式の粘土円筒を押し付けていると思われるものがありますので、少なくとも粘土紐巻き上げのグループの中

に、二つのグループはどうもありそうです。

今のお話から言うと、たとえば2番、○に十の字の入ったものが出土しています。中国にこのグループがありますので、これが中国の北、朝陽等にあるのであれば、北からのルートで入ってきていると。ただ、問題なのは、作り方がどうかということでしょう。もともと百済にこういうものはないわけですから、文様も一緒に入ってくるのか、別にあつたものが入ってくるのか、普通に考えれば、どこからか文様と技術が一緒に入ってくるとみたほうが説明しやすいと思いますけどね。

ただ、それと別に、この瓦ですね、今のところ洛陽とかにあるようなので、そうすると、そのあたりとの絡みというのもまた考えなければなりません。そういう意味では、作り方も含めて、当然ですが、これらの中でもグループが最低二つはあるということなんでしょうか。

司会（佐川） どうもありがとうございました。

昨日の山崎さんの報告の中でも、平瓦の作り自体、風納土城には多様性があり、粘土紐模骨桶の粘土紐巻き作りをある程度メインにしつつも多様性がある、そういった指摘がありました。瓦当の成形技法も含めて、多様性の背景ということについては、山崎さん、どのようにお考えになっていますか。

山崎信二 背景といますか、そうですね。向井佑介さんが観察したメモによると、4世紀代でも、たとえば大同の瓦の接合状態と鄴城の泥条盤築かというものと、2種類がある。もちろん、4世紀代には何種類もあるのですが、いろいろな接合方法があるわけです。大同というのは雲崗石窟がある場所で、かなり北方地域ですよ。一方、鄴城は洛陽の東側でかなり離れていますけれども、そういう中でいろいろな多様性から考えると、鄴

城がやはり風納土城のメインの技法に近いかなと思います。そして、大同と同じ接合の方法が高句麗の太王陵あたりの瓦と近いかなというのが、接合方法からですが、現時点での私のイメージです。

司会（佐川） 昨日からの発表をふまえて、基本的に北朝の成形技法の中では、粘土紐巻き作りが主流であるということ、それに対して、南朝の場合には、おそらく南朝のどこかの段階で、粘土紐巻き作りから模骨をもった桶を使う粘土板巻き作りに代わっていきだろうと。これはまだ見通しといえ見通しなんですけれども、そういうことがかなり明らかになりつつあると思うわけです。

それに対して、瓦当の成形については、とくに北朝以降、非常に単純化するといえますか、接合式がメインになっていくという状況もあわせて確認できます。それについて、先ほどの風納土城をふまえて考えると、これから中国の東北部ですね、今回、瓦の調査では対象とすることができなかったわけですが、この地域の調査を、今後も引き続いて誰かがやらなければならないということだろうと思います。

この五胡十六国時代あるいは風納土城等との関係について、壇上に座っておられる皆さんの中で、コメントや付け加えることはありませんか。

毛利光俊彦 なければちょっと。

司会（佐川） はい、どうぞ。

毛利光 毛利光です。中国の鄴城の瓦の作り方について、山崎さんがコメントされた時に、朱さんの論文の29頁の一番下に、瓦の断面が斜めになるものがあります。これは、おそらく一本作りの痕跡ではないかというようなことをおっしゃったのではないかと思うのですが、その点を確認させてください。

山崎 見ていないものについていろいろ言うのは

よくないのですが、向井メモには未調整と書いてあるんですね。実測図には割れたように描かれています。おそらく間違いだろうと思います。要するに、毛利光さんたちがそれ以前に秦・漢時代の瓦調査に行かれた後、私も同じような資料を見ましたが、瓦当裏面が未調整という瓦は割に多い。また、瓦当裏面がくぼんでいるものも結構ありますので、未調整というメモから見て、おそらく割れたのではないだろうということです。朱さんの資料の丸瓦の凹面には布目がなく、出土場所は違いますけど、それと結びつけてもいいんじゃないかと思ったわけです。実際にご覧になった方が「これは違う」と明言していただければ、それで結構です。

司会（佐川） 私も観察した一人ですけれども、少なくとも私は、そこに一本作りだとか、丸瓦が当たったとかという痕跡を認めておりません。したがって、この三者とも、丸瓦の当たりがないものもありますけれども、基本的には接合式と考えたらよいと思います。しかし、昨日、朱さんから報告がありましたように、南水北調の工事にもなって、北朝のお墓の下から窯が出てきたということですから、今後、そうした資料も充分検討していただいて、結論を出せばよろしいんじゃないかと思います。

毛利光 しつこいようですが、もう1点。作り方ということで皆さんの説明を聞いておると、韓国に戻りますけど、亀田さんが風納土城の資料について、おそらく瓦当裏面に粘土紐を巻き上げたということで、瓦範を下に置いて瓦当裏面を作る。その上に粘土紐を巻き上げていくという作り方をおっしゃっているわけですね。

山崎さんは中国の瓦の製作技法について、いろいろなパターンがあるとおっしゃいました。それ

によれば、瓦当裏面に直接粘土紐を巻き上げていくものと、それから別途、泥条盤築というか粘土紐を巻き上げて完成した丸瓦を持ってきて、瓦当裏面に接合するものがあり、一見すると非常によく似ていますが、丸瓦の完成をどこでするかという点では、大きな差があるわけです。

私は、風納土城の資料を観察したときに、おそらく瓦当裏面の上に巻き上げたのだらうと考えました。山崎さんが中国で観察されたように、泥条盤築で作った丸瓦を持ってきて接合した可能性があるのかなのか、もしおわかりでしたら、風納土城の資料についてコメントをいただけますか。

山崎 秦漢代の軒丸瓦は、基本的には泥条盤築といえますか、筒（模骨）がないものは下から巻き上げる。当たり前のことですが。一方、丸瓦部の凹面に布目があるものは、筒があつて、その筒をどのように抜くかということですが、これについては風納土城にはありません。今は、秦漢代の軒丸瓦の変遷を議論するつもりはございません。

司会（佐川） よろしいでしょうか。

毛利光 はい。

司会（佐川） 少し話を先に進めて参りたいと思います。昨日、中国のいろいろな瓦に関して、いわゆる南北差というようなものも明らかになってきたところがあります。北魏の段階で複弁のものもあるわけですが、やはり全体的には、とくに朱さんのフィールドである東魏・北斉の段階というのは、複弁よりも単弁が主流と考えていいようですね。それが、隋・唐の段階になると複弁が主流になってくるということですね。

朱 そうですね。主流という言い方がいいと思います。鄴南城、おもに東魏・北斉の建物の瓦は、ほとんどが単弁のものです。複弁のものの中にはありますが、鄴城から出土する複弁の瓦当は、い

ちばん後の段階のものと考えています。

ただ今の写真は、鄴北城の銅雀台など三台のあたりから出土したものです。表面もピカピカで、技術レベルが高い複弁のものです。鄴城で黒い色の光沢のあるものは、時代が一番後れると考えています。

司会（佐川） 今、矢印を向けています洛陽の永寧寺で出土しましたこの蓮華化生文の軒丸瓦の中には、珠文を周りにめぐらすものがあつたと思うんですけども、やはり鄴北城の場合は、外区内縁に珠文が安定してめぐり出すというのは、やはり東魏・北齊の段階からと見てよいのでしょうか。
朱 そうですね。鄴城でも今の段階では、まだはっきりと東魏の瓦と北齊の瓦を分けることが難しいのですが、珠文をもつものは一番後の段階だろうと思います。

司会（佐川） これに対して南朝の場合は、賀先生、隋・唐の前半ぐらいの段階まで単弁の伝統がかなり長く残っていくということで、中国の北方とは蓮華文の変化においても違いがあるのでしょうか。

珠文の問題については、おそらく隋・唐の段階で珠文が現れるということ、先ほど山崎さんが説明の中でも触れられましたが、単弁の伝統については、それでよろしいでしょうか。

賀雲鞠 まず、蓮華文の起源についてお答えしたいと思います。蓮華文は、中国で最も古い例が秦代にすでにありますが、その時代の蓮華文というのは、非常に少ないと思います。

一方、今、我々が討論している蓮華文というのは、仏教との関係から出てきたものです。それらの蓮華文で一番古いものがどれぐらいの時代かが問題になりますが、この蓮華文も南京周辺以外でもいくつか出土しております。一つは、東北地方

で比較的早い時期の蓮華文があります。それから、南の広州の方にも、蓮華文の瓦当が、紀元後の、比較的早い時期に出てきます。そして、私が研究している南京周辺にも、そういった蓮華文がある、ということになります。南京のあたりの蓮華文の系統で一番早い例というのは、今のところ、東晋時代ぐらいまで遡るだろうと言われてます。

もう一つ、珠文を配することに関する質問ですが、南朝でも遅い時期、後半ぐらいの時期になりますと、外周に珠文をめぐらす瓦当が出てくると考えています。時代でいうと、梁代にはそうした珠文があつて、その次の陳の時代にもあるということです。これらの珠文を有する蓮華文の瓦当の出現は、おそらく北朝の影響を受けているのだろうと考えています。

司会（佐川） さて、我々も賀先生のところで、この南朝の蓮華文の瓦を拝見したのですが、その時は金誠龜先生も亀田さんも一緒にご覧になりました。ただ、私の記憶だと「うわあ、よく似ているなあ」という驚きの声を聞いた記憶はございません。南朝系ということで、もちろん、南朝との接点の中で蓮華文を積極的に採用したというようなことは言えるんでしょうけど。そのあたり、金先生、いかがでしょうか。

金誠龜 私も南京の瓦調査に参加させていただいたのですが、韓国の瓦と比較するうえでたいへん勉強になりました。

これまで、新羅の蓮華文の軒丸瓦については、高句麗系とか百済系を受け継いで、早ければ5世紀後半にはそういう関係が始まったのだろうと言われてきましたが、南京での調査を通じて、6世紀後半から7世紀になっても、そのような関連性があるのではないかと考えるようになりました。

新羅の蓮華文の軒丸瓦の特徴の一つに、弁端が

反転するというものがありますが、そういうものは、百済の熊津期ですとか泗泚期とは少し時期を別にしながらも、それでも連動性をもって展開しているのだらうと思います。その一方で、高句麗系の蓮華文軒丸瓦がありますが、それらについては6世紀の中頃に入ってきて、6世紀後半ぐらいから新羅独自の展開を見せると考えています。6世紀中葉から後半、そして7世紀のそのような軒丸瓦の中には、蓮弁の中央に稜線を入れたり、今日、金有植さんの発表にありましたように、Y字形の装飾を入れたりするものがあります。それらは、やはり高句麗との関係で押さえていくべきだろうと判断しています。

今回、調査に参加させていただいて気づいたことは、蓮弁の中央に稜がつくものが、南朝の瓦に非常に多く見られるという点です。これは、何らかのかたちで新羅の瓦とつながっていくのではないかと考えています。とくに、7世紀中葉以降、後半にかけての新羅の軒丸瓦の文様などを見ますと、蓮弁が狭くなるような感じですとか、文様の面から高句麗系と言われていたものが、高句麗だけではなく、南朝とも文様の変化はある程度連動していく可能性があるのではないかと考えるようになりました。7世紀中葉から後半は、新羅の軒丸瓦が活発に展開していく時期ですけれども、そのことと関係があるかもしれません。

また、南朝というように呼んでいますが、7世紀には隋・唐に代わってしまいますから、そういうものを南朝系の瓦と言っていいのか、それとも隋・唐と言った方がいいのか、雁鴨池などでもそのような特徴をもつ瓦がたくさん出てきておりますので、整理が必要だろうと思っております。

7世紀中葉から後半というのは、新羅が三国を統一して文化を非常に発展させる過程です。瓦以

外でも、外国人の有名な彫刻家などが来たりしていますので、高句麗とか百済との関連性だけではなく、この時期に新羅が瓦製作も含めて発展していく段階に、南朝のそういう技術が直接入ってきているのではないかと考えました。以上です。

亀田 新羅などで7世紀代に出てくる瓦には、縁のある稜でボリュームのあるものがあります。高句麗にも見られますが、そういうものは、隋になったら文様が変わってしまうのでしょうか。いかがでしょう。

賀 先ほど見せていただいた写真のような瓦が、7世紀後半の新羅で出ているということですが、7世紀後半ですと、もちろん南朝は終わって唐に代わっています。南京や揚州を含めた南の地方の7世紀後半の瓦は、先ほども申し上げましたように、単弁の蓮華文で、周りに珠文がめぐるものになっています。ただ、私個人の考えですが、新羅でそういった南朝の瓦と非常によく似たものが出ているということは、すでに南朝は終わっていますが、新羅が南朝の影響を非常に強く受けたため、中国が唐に代わっても、その影響を受けた瓦をずっと作っていたと考えても不思議ではないと思います。

司会（佐川） それでは、南京の方面に足繁く通われ、南朝の瓦を研究されている井内先生、いかがでしょうか。このあたりの問題について何かご見解があればお願いします。

井内 潔 突然で何も用意していませんが、南朝の瓦を取り上げる場合、今の段階では常に前もって断りを入れて話をしないといけない。明日になると、たちまち変わってしまう。そんな恐ろしさを、何回か向こうに行くうちに感じております。

今回、賀先生にお話しいただいた健康の都城の中心部では、発掘すれば、何百という瓦当が出て

きていますが、賀先生ご自身が担当された鐘山の祭壇とか寺廟についての資料を私もじっくりと腰を据えて見てはおりません。ただ、基本的に、南朝の瓦は蓮弁が高く、稜あるいは軸線をもっている。それから、鋸歯文をもつものはまありますが、基本的に、外回りの珠文は、南朝の瓦ではめぐらないのではないかと。洛陽などで出ている後漢代の珠文の縁にめぐる線鋸歯文、そういうものの影響で、蓮華文の周りに線鋸歯文がめぐるのは僅かながらありますが、南朝の瓦では、珠文がめぐるのはないのではないかと思います。

それに対して、今、説明されましたけれども、揚州の隋唐の瓦は、珠文をめぐらすことを原則としています。では、そういう蓮華文がいつ頃から南朝にあったのか。現に、賀先生が掘られた鐘山の寺廟遺跡からも出ています。文様だけを取り上げてどうこうと言うのはよろしくないということでしたら、南朝の遺跡から出た蓮華文軒丸瓦の出土状況その他が、『江南文化』とか『文物』『考古』に載ってます。そのあたりが、将来、少し長いスパンで見れば、しだいにはっきりして、それらの時期が遺構のほうでも確認されるのではないかと思います。

司会（佐川） ありがとうございます。このあたり、賀先生のお仕事にさらに期待するところ大であります。

ここで一つ、ただ今、井内先生からもご指摘があったように、首都では出ていないけれども、その周辺やどこかでそういうものが出てくる可能性もまだ充分にあるということでもあります。あるいは、この写真の下に載せてありますように、仏像の台座が下敷きになったというような可能性も考えつつ、実は、南京の調査では、誰が見てもこれは瓜二つだなというようなものが、今のところな

いということは、非常に重要な部分であろうと思うわけであります。

また、外縁等の問題については、昨日すでに確認したところです。それから、先ほど山崎さんからも、箆型の違い、つまり木箆か陶箆かという指摘もありましたが、唐の時代のおそらく後半に見られる外縁の幅の広がり、あるいは内区の突出、そういう部分について箆との関係で理解していくという可能性が提示されました。同時に、瓦当裏面にキザミがあるということが北方の特色であり、一方、南朝の場合には、瓦当裏面の丸瓦接合にあたってキザミを施さないということですが、このへんについて朱さん、山崎さんの言われたことについて、何かご意見はありますか。

朱 そうですね。今、私は鄴城を発掘調査しています。文化層は後漢の後期からずっと北朝まで続きますが、鄴城では、後漢時代以来、一本作りの瓦の出土例はまだありません。漢長安城のほうはかなり多く、やはり前漢と後漢の間、あるいは後漢の前期か中期に、造瓦技術上、大きな変化があったのかもしれませんが。残念ながら、後漢の都、つまり漢魏洛陽城の上層には、三国西晋時代の遺跡や、もちろん北魏の都城も重複しているため、後漢時代の建物や文化層の発掘調査のチャンスがなかなかない、というのが現実です。けれども、やはり造瓦技術の面では、後漢時代がもっと注目されなければならないと思います。

司会（佐川） この南朝の、丸瓦接合にあたってキザミをもたないという部分と百済との関連性は、当然、注目されなければならない部分ですが、清水さん、この点についていかがですか。

清水昭博 南朝の瓦は、私も直接見た数はそれほどありませんが、瓦当裏面の上端に意外と深く差し込むようなものが多いですね。

丸瓦先端の加工につきましては、観察できる例は少ないのですが、凹面をカットしたものは確認しております。私が、南朝の瓦の一番の特色かなと思っておりますのは、瓦当裏面の回転ナデの痕跡、あるいは丸瓦を接合した痕です。瓦当裏面と丸瓦の端面のところをグッと指で押さえるというものだと思います。そして、そういった技法を百済のほうで求めると、弁端点珠型式、日本で言うと星組のタイプですけれども、その中に確認できるわけです。

弁端点珠の祖型につきましては、熊津時代の大通寺、527年に創建された百済で最初の本格的な寺院ですが、そこで採用されています。この瓦から、南朝と百済との関係が技術的に窺えるのではないかと思います。

また、大通寺についてはいろいろ議論がありますが、「大通」というのは中国の梁代の年号（527～529年）ですので、記録のうえでも百済と梁との深い関係が理解できるのではないかと思います。

司会（佐川） これとあわせて考えるべき基本的な問題として、昨日も報告がありましたように、南朝の丸瓦の玉縁の内側に布目がないことから、模骨の形状が北朝と大きく異なっているということがあります。それから、成形・製作の仕方にも大きな差があるということですが、賀先生、南朝のこういった丸瓦の筒の部分に玉縁をのせていくという作り方は、南朝よりさらに遡るのでしょうか。

賀 先に筒部を作って、それから玉縁を付けるというやり方は、最も古いところでは東晋時代まで遡ると考えています。東晋の前に三国時代の呉という時代がありますが、この呉と東晋の間で瓦の作り方が大きく変わるということがわかっていますが、丸瓦の作り方でそこに画期があります。

司会（佐川） こうした丸瓦の製作技法について

は、南朝の特色であると同時に、当然、百済との関連も考えられるわけです。先ほどより、たとえばキザミとか、玉縁の作り方の部分的な類似性であるとか、そういった点について改めて考える必要があるというご意見が出ています。また、瓦当文様については、直接、瓦からまねたかどうかは断言できないというのが現状ですが、技術的な面から見た部分的な共通性について、金誠龜先生からご意見を承りたいと思います。南朝と熊津期以降の百済の技術的な共通点と申しますか、要するに漢城期からの伝統のほか、南朝との関係で理解される要素について、どのようにお考えでしょうか。

金誠龜 少し考えて、後ほどお答えしたいと思います。

亀田 先ほど花谷さんからお話があったと思いますが、扶餘の時代（泗泚期）に入って、玉縁の内側に布目のないものから布目をもつものにいつ変わるのかが難しいところです。ただ、亭岩里の窯に布目をもつ瓦があったと思います。この窯の年代に関しては異論もありますが、実際に掘られた金誠龜先生は6世紀の後半代と考えておいでです。そうすると、少なくとも6世紀の後半代には布目ありというものがありそうです。いつそれらが入ってくるのか、ちょっと見えない部分があるんですが。

それから、キザミを持つものに関して、金剛寺の瓦ではわりとキザミを使っているものも多く、少なくとも寺院ごとの差はあるようなんですが、金剛寺に関しては6世紀末ぐらいからかと思えます。また、軍守里廢寺の瓦の中に、斜めにカットした片柄の部分の瓦当裏面の上部にキザミをつけているものもあり、亭岩里の例と比較しますと6世紀後半に入ります。それから、益山のほうにも

多少ありますので、百済ではやはり6世紀の後半のどこかで出てくる可能性があるのかな、と現時点では考えています。

司会（佐川） さて、丸瓦の技法的な問題ということで、大脇先生、お待たせいたしました。実は昨日、大脇先生から中国の王湾、新石器時代の有名な遺跡ですが、ここにこういう資料があるんだということをお示しいただきました。昨日、賀先生が報告の中で、瓦当の外縁の上半がはずれたような例が結構目立つということで、半截した丸瓦をはめ込んでいる可能性があるのではないかとおっしゃったわけですが、大脇先生、このあたりの問題について、少しご見解をお聞かせいただけませんか。

大脇 潔（浦上泰造） はい、浦上泰造と申します。今のお話は、花谷さんの資料の128頁の図5、陵山里廃寺の接合技法のC-2に似ていると言いますか、軒丸瓦の上半部分が丸瓦そのものでできているという作り方で、私は勝手に「SR技法」と名づけております。一部の方には賛同して使っていただいておりますけど。

昨日、先生方のお話を伺って、南朝の瓦にもこういうものがあるのかなあとと思います。しかし、図や拓本、写真を見るかぎりでは、ちょっと違うかなという感じもしていました。中国の南朝の瓦が百済へどのようにして入っていったのかについては、確かに丸瓦の玉縁の内面に布目がないとかの共通点がある。また、平瓦の桶の綴じ紐が外に出るタイプと出ないタイプがありますが、南朝には出るタイプがあって、それが百済にもある。そして、日本の新堂廃寺などにも来ている。ですから、南朝のいろいろな技術が、総体としてはありませんが、部分的に百済に入り、日本にも来ていると言えます。

さらに、大通寺などの百済の熊津期の古い軒丸瓦の中には、確実に、このC-2のような断面をもつものがあります。私が「SR技法」と呼んでいるこうした軒丸瓦が南朝にあれば、南朝の技術の一つということができ、この技法が南朝まで遡るということになるでしょう。そのあたりを賀先生にもう一度確認したいと思います。

それから、洛陽の王湾遺跡では、新石器時代の遺跡だと思って、報告書をあまり詳しく見ていなかったんですけども、後ろのほうに隋代の瓦がちょっと出ています。軒丸瓦の側面に何本か縦の突起が付いており、丸瓦の先端のところには、それに対応するように溝が付いています。そこに瓦当部の粘土を押し込んで、結果的に外縁の上半部は丸瓦の先端部が出ているということになります。これについては、実物を見ないと確認できませんので、北京大学にあると思いますが、いずれ行って見せていただきたいと思っています。「SR技法」かもしれません。今まで、中国で「SR技法」の確実な例を知りませんが、すぐには結論が出ないと思いますけど、とりあえず賀先生には、南京にC-2のような瓦があるのかないかをお教えいただきたいと思います。

賀 128頁図5のC-2という接合の仕方は、南朝にもあります。まず瓦当を作って、瓦の上半部に丸瓦をのせ、この丸瓦の広端部が瓦当の上半部の外縁にもなるというような作り方です。ただし、丸瓦と瓦当を接合するさいに、丸瓦の先端部の凹面にキザミを付けてから丸瓦を接合するというような方法は、今のところ南京周辺にはありません。

司会（佐川） ありがとうございます。

亀田 大脇さん、これは、キザミのところ段差があるんですか。

大脇 実物を見ていないので、ちょっとわからな

いのですが、たぶん、接合粘土が段のように残っているのではないのでしょうか。接合粘土がはずれているのだと思います。

亀田 つまり、無加工だということですか。

大脇 はい、そうですね。それから、もう一つ賀先生にお聞きします。C-2技法が南朝にあるということでしたが、瓦当文様で言いますと、今回の資料集の中ではどのタイプになるのでしょうか。

賀 要は外縁の上半部がはずれているものですが、56頁附図1の1、58頁附図3の4、59頁附図4の3、これなどがC-2の技法で接合している例です。

司会（佐川） 大脇さん、よろしいでしょうか。

大脇 はい、ありがとうございました。たしかに、58頁附図3の4の断面図などは、図からだけでもそういう作り方の瓦なんだということがよくわかる、いい資料ですね。これに近いものが日本にもありますので、たいへん面白くなってきたなと思います。どうもありがとうございました。

司会（佐川） お二人の話に水を差すようですが、今回の瓦調査で写真を撮ったのはすべて私です。撮った立場、観察した立場から言いますと、少なくとも私どもが見た資料に関しては、今の賀先生の見解には同意できないというのが私の考えであります。ですから、実物を見ながら検討するということが必要になりますが、一応、そういう部分の写真などについて、現地でかなり注意をして撮影し、これはと思う資料は当然記録をとっていましたので、そのとき、もしもC-2技法と認められる資料があれば、どこかで話題になったはずですが。しかし、われわれの中では、そういう議論にはならなかったということだけを申し上げておきたいと思います。

朱さん、北の方の事例についてですが、鄴城も

含めまして、このような技法の存在を裏づける確実な資料というものはあるのでしょうか。

朱 これまで4年間、漢魏洛陽城や隋唐洛陽城、隋唐長安城をはじめ、鄴城でも図面や拓本をとったり観察したりしましたが、こういった技法のものは見たことがありません。それが特別なものなのか、あるいはかなり広い範囲でこの技法があったのか、今の段階では何とも言えません。

司会（佐川） この資料も含めて、南朝などとの関係を考えたときに、当然、こういう要素も中国側にあってもいいんじゃないか。そういう想定もあるわけですから、そういった視点も放棄せずに、引き続き北朝も南朝も含めて、検討の材料の中に入れていくということが重要だと思います。

それから、もう一つ。昨日の南京で発見されたという軒平瓦が、南朝のものではないかということなんですけれども、賀先生、今のところまだ1点だけですが、年代的には南朝の時期のものと考えてよいということでしょうか。

賀 今ご覧いただいているこの軒平瓦ですが、南京市の台城遺跡という、宮城部分から出土したもので、南京市博物館にあります。地層から見ても南朝の時期のものということになります。

司会（佐川） 今後、関連するものが増えることを期待したいと思います。それでは、先ほどの軒平瓦の話で前半部分は締めくくりますが、亀田さんの報告の中で、帝釈寺の隣りにオープンした展示館に行くが一番いい資料が展示してあるということでした。このような瓦当文様をもつものが、今後、南京でもたくさん発見されることを亀田さんも期待しているとのことでした。

金誠龜先生、この帝釈寺の軒平瓦について先生のお考えをお聞かせいただけますか。

金誠龜 基本的な考えとしては、この帝釈寺の軒

平瓦は統一新羅、そうでなければ高麗まで下ると考えています。帝釈寺は、百済の後期、640年くらいに創建され、統一新羅の前半ぐらいまで続きますが、その後はほとんど廃寺状態になり、高麗になって新たに再建と言いますか、大きく復興するという状況です。その再建時期、復興時期に作られた「帝釈寺」と書かれた文字瓦が出土しています。やはり、韓国の軒平瓦の初現は、統一新羅の初頭くらいの、土器口縁に類似する軒平瓦ではないかと考えています。

帝釈寺の瓦当文様で申しますと、獣面文、鬼面文を中心にして、両側に唐草文を配しています。こういう文様は仏国寺の石窟庵でも出ていますので、8世紀後半から9世紀代でもあります。高麗の初頭まで時期を下げて考えても、たとえば扶餘の金剛寺でも獣面文、鬼面文を中心として、左右に唐草文を配する瓦当文様を見ることができます。

平瓦の製作技法についても、百済では模骨痕が一般的に見られるわけですが、帝釈寺のこれは、円筒形の模骨は全くないというものですので、技術的にも違いがあります。ですから、そういうものが百済の地方で突如として現れる背景は考えたいと思います。

最近、益山で、たとえば王宮里遺跡とか帝釈寺とか、別の側面で注目を浴びているところがあります。それは、統一新羅の滅亡直前に後三国時代があり、その時の後百済の王、甄萱（キョンフォン）の動きと関連づけて遺跡を評価していこうという方向です。たとえば、先ほど言いました王宮里遺跡は、造られた当時は百済の武王の時代の都城でした。その後、新羅によって百済が滅亡させられた後に、今、石塔が建っていますが、また寺として復活するわけです。その時期を、王宮里遺跡を発掘調査している方々は、陶磁器が出てこな

いことから、統一新羅でも少し早い段階に遡らせて考えておられますが、王宮里遺跡から出土する瓦の文様などを見ますと、帝釈寺とよく似ています。これから解決しなくてはいけない問題もありますけれども、私は、王宮里遺跡はやはり後三国もしくは高麗まで下げて考える必要があるんだろうと思います。そして、帝釈寺の瓦についても同じように考える必要があると思います。胎土や焼成を見ても、百済の瓦とはまるで異なりますので、そのような所に重点を置きたいと思っています。

司会（佐川） ありがとうございます。中国の場合は、隋・唐の段階、おそらく宋の段階くらいまで、箆型を使った滴水の軒平瓦というものは今のところないわけです。したがって、こういった精巧な文様をもった、箆で文様を作るというような軒平瓦の実現というのは、非常に重要な問題であろうかと思います。

それでは、ここで休憩をとりたいと思います。

司会（亀田） では、再開いたしますが、韓国の話の続きをさせていただきます。帝釈寺の軒平瓦については、確実に浮いている資料で、先ほど金誠龜先生がおっしゃいましたような理解のしかたもあります。それに対して、金有植先生は、ずっと新羅について研究されていますが、そういった目でご覧になると、あの瓦はどういうふうに理解されますか。

金有植 私は、三国時代に軒平瓦があったかどうかについて論文にまとめたことがありますが、結論としては、「ある」と考えていますので、金誠龜先生とは反対の見解をもっています。ただ、私は、まだ百済の瓦というものをきちんと見ておりませんので、帝釈寺の瓦を百済だと断言するのは、ちょっと難しいところがありますけれども。

皆さんご承知だと思いますが、最近、益山の弥勒寺の西塔から舍利容器と舍利が出土して、大きな話題となりました。その舍利容器には、舍利奉安記という銘文をもった舍利容器がともなっていたわけですが、その銘文がなかったら、この舍利容器は今までの金属工芸的な研究では、おそらく統一新羅まで時期が下げられてしまったらと思うと思います。先ほどもお話に登場した王宮里遺跡でも、昔、舍利容器が出土していますが、それは、従来、統一新羅まで下ると考えられていました。ところが、弥勒寺の舍利容器の出現により、やはり百済まで上げてよいのではないかという議論が出てきています。

帝釈寺の瓦に戻りますけれども、正しく評価できるかどうかわかりませんが、統一新羅の軒平瓦の瓦当と平瓦の連結角度を見ますと、統一新羅の初期のものは、直角に近い角度で付けられています。それに対して、帝釈寺の軒平瓦は、亀田先生の資料の150頁にありますように、少し鈍角についておりまして、かつ瓦当の下端部を丸く処理しています。このようなものは、基本的に統一新羅の初期の段階には認められないと考えます。

また、統一新羅の瓦当文様としての唐草文の変化を大きく見ると、統一新羅の中期・後期、そして高麗となるにしたがって、徐々に、たとえば茎ですとか唐草自体が太くなっていく、瓦当の中で占める割合が大きくなっていくことに注意する必要があります。ですから、ここで断言するのは避けたいのですが、そのような面から見ると、やはりこの唐草文というのは、非常に細くて洗練されており、統一新羅まで下るとしても非常に早い段階、もしかすると…、というところでとどめたいと思います。きちんと断言できなくて申し訳ありません。

司会（亀田） どうもありがとうございました。本当にまだ答えが出せないのだとは思いますが、いろいろな特徴をもっていますので、文様論のほかに顎の形や、生産と供給の関係など、さまざまな面から今後検討されればと思います。

資料の150頁には、百済の有段の軒平瓦、指で押さえたもの、そして土器口縁状のものをまとめて載せております。そこで大脇先生、中国やアジア全体の瓦をずっと研究されておいでですが、新羅にもこのような有段のもの、土器口縁状のものがあります。今のところ、高句麗についてはわかりませんが、百済・新羅での位置づけとしては、中国との関係も含めて、どのようにお考えでしょうか。

大脇 どこでもそうだと思いますけど、瓦作りの最初というのは、土器工人が絡んできますよね。飛鳥寺では、瓦博士が4人来ていますが、これはプロがやってくるわけですよ。だから、技術が総体として入ってくるんですけど、それでも飛鳥寺の場合は、土器工人が関与していた可能性を示すものとして、補足の叩き締め同心円文がついている平瓦などがあるわけです。

漢城期の百済の瓦などを見ていると、全部、土器工人が絡んでいるなと思います。瓦の文様は朝鮮半島、あるいは大陸の南朝、北朝からもかなり崩れたものが入ってきているけれども、作っているのは土器工人。だから、土器と同じような作り方をしている。今、ご質問にありましたように、百済とか新羅には、大甕の口縁のように反ったもの、中には全く土器と同じで、凹面に布目がつかないものがあります。それから、ここに出ているような、私は「梓板」とは言わず、「側板」と言っていますが、側板の痕跡とか桶を閉じた痕跡ははっきり出ているものもありますけれども、やは

り基本的には土器工人が絡んでいるのではないかと思います。統一新羅の土器と軒平瓦の関係はわりと希薄ですが、その希薄な中で軒平瓦を作ろうとしたときに、土器工人は日頃作っている土器を意識してこれを作ったというようなものではないかなと思います。

司会（亀田） どうもありがとうございました。私も基本的にそうだと思いますが、そうすると、先ほどの軍守里廢寺の瓦に関してはいかがでしょうか。

大脇 軍守里廢寺については、私は、北魏の永寧寺あたりからストレートに入ってきていると思っています。塑像もとてもよく似ていると思います。

司会（亀田） そうですね。そういう意味で、中国から百済へは、何度も言っていますように、入り方は一つではなくて、いろいろな流れで入ってきていると思われれます。大脇さんが言われたように、私も本文に書いていますが、基本的に中国との関係の中で理解できると考えています。ですから、縄叩きについても、もしかしたらそうかもしれません。つまり、このような中国からのグループと、地元の土器工人が関わっているグループがあると思います。

それでは金有植先生、百済と新羅で同じようなものが出るということで、そうした初期の段階の軒平瓦と土器作りの工人の関わりについてはいかがでしょうか。

金有植 慶州の勿川里の窯跡から、当時は用途が不明でしたが、土器口縁を切断したような製品が出土しています。また、その後、新羅の月城塚字からも同じようなものが出土しています。断言はできないのですが、百済のほうの初期の蓮華文軒丸瓦と土器口縁状の軒平瓦は、セットになるのではないかという見解も、韓国では提示されていま

す。結論的には、勿川里の資料もそうですし、また粘土帯を用いておりますので、やはり土器工人が深く関わっていたのだらうと判断しています。

たとえば、忠州の塔坪里などでは、統一前の新羅の蓮華文軒丸瓦と一緒に、顎をもった無文の軒平瓦が出土したりもしています。軒丸瓦には2種類あり、どちらからその軒平瓦と組み合うのだと思いますか、一つは明らかに統一新羅まで下るもの、もう一つは三国時代のものです。この三国時代に遡ると考えている軒丸瓦の凸面には叩きが残っていますが、その叩きと顎をもつ無文の軒平瓦の叩きが類似しますので、その点から見て、顎をもつ無文の軒平瓦は、三国時代の軒丸瓦とセットになるのだらうと思います。

勿川里の軒平瓦に戻りますけれども、土器口縁状のものをどのように使ったのかというと、雨水が滴り落ちるといふか、滴り落とすようにしているとしか考えられないので、やはりこれは軒平瓦でいいのだらうと今でも判断しています。

司会（亀田） ありがとうございます。今の金有植先生、それから大脇先生のお話もそうでしたが、瓦作りの最初の段階に土器工人が関与したということですね。それが、部分的な関与であった場合もあれば、かなり主体的に関わった場合もある。皆さんご存じのように、日本でも福岡の牛頭窯跡群で、齋部さんが報告されていましたが（齋部麻矢「九州における初現期の瓦」『古代瓦研究Ⅰ』奈良国立文化財研究所、2000年）、初期の瓦の中に「泥条盤築」のものがあります。日本では大体7世紀の前半ぐらいからと考えていますが、同様な技法によるものが朝鮮半島にもあるということです。ただ、漢城時代の「泥条盤築」についてはデータがあまり出ていないので、百済の瓦に関してよくもめるところです。

先ほど清水さんもおっしゃっていましたが、大通寺の瓦が熊津期の初期の段階のものとして出てきます。しかし、少し漢城期の瓦とはギャップがあります。その後、本格的な瓦作りが展開し、花谷さんのお話にありましたように、その流れに乗るものが、瓦当文様や作り方も含めて、セットで飛鳥寺に入ってくるということです。ただし、どうも特定のきちんとしたセットではなさそうだと思います。そのあたりのことを清水さんが以前お書きになっていたと思います。清水さん、朝鮮半島、百済から日本へというお話を少しお願いできますか。

清水 先ほどの中国の南朝と百済の関係とも関連するのですが、まず、回転ナデですね。私は、瓦当裏面の回転ナデ成形を一つのポイントと考えています。先ほど申しましたように、百済では大通寺式、弁端点珠式ですが、その系統で回転ナデ技法が確認できます。また、丸瓦の接合については、大通寺に関して、私は凹面カットと判断しましたが、その次の段階の資料が、ちょうど熊津期から泗泚期にかけて展開するんですね。金德里窯という瓦窯で確認された資料につきましては、丸瓦の接合技法が片柄式で、かつ、瓦当裏面に回転ナデ成形の痕跡が認められます。そういったものが、泗泚期の中では旧衙里の寺跡などを中心に確認でき、同じようなものが日本で最初に造営された寺である飛鳥寺に入ってくる。そして、そのうちの一派が星組になっていく、というような流れが、簡単に見ますと確認できるという状況です。

ただ、飛鳥寺の花組のほうですが、弁端切り込み式ですけれども、こちらについては文様的には扶余、あるいは益山地域で見られる弁端と非常に近いので、ストレートな導入というものが窺えます。花組の丸瓦の接合技法の特徴であります丸瓦

の端部上面をカットするという技法がセットで組み合うという事例は、今のところ見つかっていません。ただし、益山の弥勒寺に、若干、凸面側を斜めにカットするようなものがありますので、そういったあたりに飛鳥寺の花組の系譜があるのではないかというような予測はできます。

司会（亀田） ありがとうございます。花谷さんは何度も韓国に行かれて、百済の瓦、それから飛鳥の瓦に最も詳しいお一人ですが、飛鳥寺から山田寺ぐらいまでの間に、何度も入ってくるよんだという先ほどのお話の中で、百済の、たとえばどのへんだろうとか、どのグループだとか、そういったことはお考えでしょうか。

花谷 百済の中で、寺院単位でそれぞれの特徴を把握するところまでは見切っていませんので、ちょっとそこまでの予測というものは立てていない状況です。

司会（亀田） ただ、この中にもお書きのように、弥勒寺にこういうものがあつたよとか、清水さんも書いておられますが、日本の飛鳥寺以外の瓦も含めて、何かつながりそうかなとか、たとえば弥勒寺の瓦が九州のあの瓦につながるのではないかなとか、そのあたりはいかがでしょうか。

花谷 九州では、惣利西遺跡というところで、玉縁部の凹面に布目のない玉縁丸瓦が出ています。これは飛鳥寺とは雰囲気が違うなという感じがしまして、そういったものは、必ずしも百済から畿内をへて九州へというルートを考えなくてもいいのかなという気がしています。

司会（亀田） そういう意味では、直接、百済から九州という可能性があるということですね。そうしますと、百済中枢部は、飛鳥の都だけでなく、一方では九州と関係があつた可能性が考えられますね。それから、先ほどの竹状模骨、簾状模骨瓦

についてみますと、本流にはなりえませんでした
が、坂田寺に入っています。今のところ、百済の
中枢部ではあまり見つかっていませんが、そうす
ると、これは別ルートで、周辺部からということ
でしょうか。

花谷 今のところ、周辺部しか資料が見つかって
いないので、それがそういったかたちで入ってき
たのかということについては、いくつかクリアし
なければならない問題があります。

坂田寺の竹状模骨は、重弁蓮華文軒丸瓦に伴う
可能性を想定して、飛鳥の中では一番古い竹状模
骨と考えています。先ほど話を聞いていますと、
石神遺跡で竹状模骨丸瓦が最近出土しており、7
世紀前半代の瓦を伴っているということです。そ
のあたりは今後、慎重に検討されるということだ
ですが。

論文（花谷浩「丸瓦作りの一工夫」『文化財論叢
Ⅱ』同朋舎出版、1995年）を書いたときには、主流
は飛鳥寺禅院の7世紀の第3四半期から第4四半
期にかけて入ってきたものが、近畿地方と九州に
も広がっていくというように考えていました。そ
うすると、ちょうど百済滅亡の時期に重なってき
ますので、山城づくりのような技術導入を絡めな
がら竹状模骨を考えられないか、というイメージ
を持っていました。

ですから、飛鳥の中で7世紀前半代にもいくつ
か竹状模骨があるということになると、それとは
いったん切り離して、また別の話を考えなくては
いけないと思っております。問題は、事実が増え
れば増えるだけ、複雑になってまとまりがなくな
ることです。

司会（亀田） ありがとうございます。基本的
に、私も花谷さんと同じように考えていますが、
いろいろな所から何度も入ってきて、複雑に絡み

合うから、そう簡単に割り切れませんよというこ
とですね。最近でも竹状模骨をもつ例がまた飛鳥
で見つかるという具合に、データが増えれば増え
るほど複雑化するという状況です。

技法的な問題については、崔兌先先生に円筒の
桶や、叩き板の大きさ・形などいろいろなお話を
していただきましたが、日本でもそれらは受け入
れられ、大宰府のほうには入っているんじゃない
かということもあります。韓国の中で、そういう
桶ですね、模骨の痕跡や枳板の痕跡のあるものと
ないもの、先生が論文を書かれてからだいぶ時間
もたっておりますから、いろいろ資料も出ている
かと思いますが、そういう新しい成果もふまえて、
桶や叩き板、それから竹状、簾状の模骨に関して
も、何かおわかりの部分がありましたら、教えて
いただければと思います。

ちょっと補足しておきますと、新羅の瓦に、先
ほどの帝釈寺の瓦もそうなのですが、桶の痕跡が
ないというのは、皆さんも気にされていたんです
が、それをきちんと取り上げた方はおられなくて、
それを崔先生が最初に取り上げられたわけです。
そこで、桶の痕跡がないものを注意して見ていき
ますと、これまでは新羅の特徴と言われていたの
ですが、中国にもあるということが、山崎さんのお
話の中にありました。そうなってくると、新たに
中国から来たのか、高句麗とか百済から来たの
かが問題になりつつあるわけですが、その点につ
いてはいかがでしょうか。

崔兌先 崔兌先と申します。私にはちょっと難し
い質問が並べられてしまったような感じがいたし
ます。韓国に帰ってもう一度勉強をしたいと思っ
ていますが、私が論文（崔兌先『平瓦製作法の変遷
に対する研究』慶北大学校文学碩士学位論文、1993
年）を書いたときは、まず最初に、新羅の平瓦の